

# 虚無のレイズと異世界の魔王さま

乙丸

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

『ゼロのルイズ』が召喚したのは、異世界の魔王さまだった！

傲岸不遜に振るまい、人を威圧する姿はまさに魔王。それでいて、百合の花のように可憐。

悪魔の瞳に魅入られたルイズ、毎夜ベッドで行われる秘め事。

しかし、蓋を開けてみれば……。

「ガールズラブ」「独自解釈」「吸血」要素を多分に含みますので、苦手な方はご容赦ください。

完結済み。

# 目次

プロローグ『魔王さま召喚の儀』

1

1話『魔王さまのお食事』

12

2話『ほんとうは……』

28

3話『はじめての魔法』

40

4話『ふたりの秘め事Ⅰ』

58

5話『ふたりの秘め事Ⅱ』

71

6話『ふたりの秘め事Ⅲ』

88

7話『浮気男』

103

in deep darkness

”

Leviathan

117

8話『黒い悪魔と黒魔術』

122

9話『伝説の……』

140

10話『虚無の魔法使いⅠ』

161

11話『虚無の魔法使いⅡ』

173

12話『虚無の魔法使いⅢ』

189

13話『虚無の魔法使いⅣ』

204

14話『ほんとうに欲しいものⅠ』

217

15話『ほんとうに欲しいものⅡ』

235

16話『花より乙女、色気より食い気』

246

17話『伝説の剣(?)Ⅰ』

261

18話『伝説の剣(?)Ⅱ』

277

19話『親友』	292
20話『籠の鳥』	306
21話『てのひら』	323
22話『賢者の娘Ⅰ』	340
23話『賢者の娘Ⅱ』	353
24話『ラ・ロシエール』	365
25話『再会』	379
26話『女神の杵Ⅰ』	393
27話『女神の杵Ⅱ』	408
28話『戦場と脱出』	422
29話『天秤』	436
30話『皇太子』	448
31話『暖かな黎明Ⅰ』	460

32話『暖かな黎明Ⅱ』	473
33話『暖かな黎明Ⅲ』	487
34話『始祖と魔王』	501
in deep darkness	”
Shaytan”	518
35話『魔王』	533

# プロローグ 『魔王さま召喚の儀』

ここはハルケギニアという異世界。

大気は澄み切っていて、葉はみずみずしく、燦爛と照らす太陽の光は湖の透明な水を貫いて水底を照らす。精霊はあまねくところに揺蕩い、双子の月が人々の営みを優しく見守る。

そんな、穏やかな場所。

人々の欲望がひしめき、歪み、愚かな狼煙をあげようと、この世界は変わらず美しいままだった。

## プロローグ 『魔王さま召喚の儀』

トリステイン王国、トリステイン魔法学院。伝統あるその学院に、ヴァリエール家の息女であるルイズ・フランソワーズは通っている。それは将来、貴族のみが扱える魔法という奇跡を会得し、民草を導く公爵の名を継ぐためだった。

しかし、そこには致命的な問題があった。ルイズは魔法の才にまるで恵まれなかった

のだ。

そうして付いた二つ名が『ゼロのルイズ』。

ルイズは血筋に恵まれていたし、だからといって努力を怠ることもなかった。だとい  
うのに、ルイズの魔法の才は一向に開花する兆しがなかった。

同年代の貴族の子どもが次々と魔法の力に目覚めていくのに、ルイズはひとり魔法を  
扱えないまま置いてけぼりにされてしまった。その苦悩はいかんともしがたいもので、  
親族と屋敷の使用人たちは泣いてばかりのルイズの扱いに困った。

孤独を抱えていたのは、想像するまでもないことだった。それでもルイズは努力を止  
めなかった。

そうして迎えた魔法学院二年次の進級試験。

それは使い魔召喚の儀と呼ばれ、召喚魔法を用いて生涯を共にする使い魔を召喚する  
一大行事だった。ただ、召喚魔法は決して高度なものではなく、試験と言っても生徒た  
ちに気負う様子はない。

一般の生徒からすれば、ただの通過儀礼。

しかし一度も魔法を成功させたことがないルイズにとって、何よりも大きな壁だっ  
た。通過儀礼をこなせない生徒は、当然ながら進級させてはもらえない。

並々ならぬ緊張を抱え、ルイズは上ずった声で呪文を紡ぐ。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル、ルブレあ、あ……っ」

緊張のあまり、ルイズは舌を噛んで詠唱を中断させる。

くすくすと嘲笑が湧いた。顔をりんごのように紅潮させたルイズは、咳払いをして呼吸を落ち着かせる。

「こほん。我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド……ラ・ヴァリエール！  
い、いつ、五つの力を司る、ペンダゴン！」

周囲を取り巻く生徒たちは、失敗魔法しか起こさないルイズがまさか魔法を成功させるとは思っておらず、その光景にまるで興味を持たずに隣の生徒と談笑したり、召喚したばかりの使い魔と戯れたりしていた。

この使い魔の義の監督役であるジャン・コルベールと、雪風と呼ばれるメイジのタバサだけが、眉をひそめてその光景を見守っていた。

「我のさだめっ、サダメに従いし使い魔を——」

そのとき、コルベールとタバサは杖の柄を握っていた。

「召喚せよ——!!」

杖を高々と掲げ、ほとんど裏返つたような声で、肺から空気を絞りだすように叫んだ。声は、高らかに空へと吸い込まれていく。

暖かな陽気と、めいっばい葉を伸ばして陽光を浴びる緑。遠くからは木のささめきと

鳥のさえずりが聴こえる。

ある日の穏やかな午後だった。

ミシミシ、ミシミシ、と何かが裂ける音がした。

理解を超えた現象を前に、周囲を取り巻く生徒たちの声が止んだ。

そして、この場に居るすべての人間が、その空間に視線を釘付けにされた。

コルベールの寂しい額に脂汗がにじむ。『炎蛇』と呼ばれていた頃の記憶が蘇るようだった。

「頭が高いぞ」

空間が裂けたその向こう側は、昏くどろどろとした闇が広がっていた。その奥から、鈴を転がしたような少女の声が聴こえてきた。

「その中でも、殊更語るに耐えぬ蒙昧な輩がおるようだな」

黒いリボンのローファーが緑を踏む。声の主があざやかに大地へ降り立った。

ドレスのフリルと、胸元に飾られた真紅のリボンがふわりと舞う。

その姿は少女であり、やんごとなき令嬢のようでもあった。

ルイズは困惑していた。はじめこそ、魔法が成功したことに歓喜で全身の血が湧き上がるような感覚に浸っていたものの、召喚した使い魔は自分と変わらぬ背丈の少女だったのだ。



そしてなにより、その少女がやんごとなき身分であろうこと。フリルと金の刺繍がふんだんにあしらわれた真紅と漆黒のドレス、腰まで伸びた真珠のようにつややかなブロードと、切り揃えられた前髪の下に覗くアメジストをそのまま埋め込んだような双眸。さらには、まさしく王女のような立ち居振る舞い。

容姿、服装、所作のひとつひとつ、どれをとつても貴族の女として敗北感を覚えてしまふほどだった。

「お、女の子?」

コルベールの気が抜けたような声は、がやがやと騒ぐ生徒たちの声に埋もれていた。

『ゼロのルイズ』が魔法に成功したと思えば、見たこともない現象を引き起こし、現れたのが貴族の少女。騒ぎたい盛りの生徒たちにとって、これ以上ないネタだった。

「ああ、あなた!」

ルイズは、半ば自棄になったようにずんずんと少女へ近づいていった。

本当は怒鳴りつけない気分だったが、少女の持つ気品に負けて肩がこわばっていた。

「だ、誰よ!?! どうしてサモン・サーヴァントで人が呼ばれるの!?!」

「余に名を尋ねるか」

少女はそれが当然であるかのように、貴族であるルイズを下に見る態度をとる。

背丈は変わらないのに、まるで見下ろすような目で無表情に言う。

「そうよ！ わたしが召喚したんだもの」

「なるほど、おまえか。余の召喚者は」

「……な、なによ」

少女はつま先から頭の天辺まで、まるで美術品を鑑賞するような目でルイズをじつと観察する。

そして、無表情の面貌が口角を上げた。

「良かろう。名を告げよ」

せっかく魔法が成功したというのに、まるで水を差すようなこの少女の存在。人間がまさか使い魔の代わりになるはずもない。加えて、その見下すような傲岸不遜な態度に、ルイズの堪忍袋の緒は切れかけていた。

「どうしてあんたは上から目線なのよ！ わたしが訊いてるの！」

「良かろう、と。王に名を尋ねる非礼を許すと言ったのだ。それが気に食わぬというのか？」

「お、王……？ 何ふざけたこと言ってるのよ、あんたみたいな子どもが」

生徒たちはそのやり取りこそ見守っているものの、会話の内容は騒がしさに埋もれてほとんど把握していない。

突如現れた貴族の少女が『ゼロのルイズ』と言い争っているのが面白い、といった程度だ。

しかし、純粋な興味を抱いていたコルベールとタバサは、風の魔法で会話の内容を逃さずに聴いていた。

そして、『王』という言葉にコルベールは表情を強ばらせて、少女の元へ近寄っていた。

「ミスタ・コルベール！ 召喚をやり直させて下さい！」

「失礼、ミス。私はジャン・コルベールと申します、この子たちの監督を任されている者です」

コルベールはルイズを申し訳無さそうな表情で一瞥してから、腰を低くして少女と向き合った。

「非礼を承知でござんを伺いたく」

「先ほど余に杖を向けた、語るに耐えぬ輩か」

「……御身はさぞ秀抜な魔法の才をお持ちなのでしょう。思わず身構えてしまい……いや、申し訳なかつた」

苦笑しながらこめかみを搔くコルベールに、少女は神妙そうに頷いた。

「確かに……致し方なかつたな。監督者なのだろう。そうか、そうか」

少女は納得の入った様子で、小さな頭をこくり、こくりとうなずかせる。

コルベールもルイズも、まさかこうもあっさり理解が得られるとは思っておらず、拍子抜けしていた。それ以前の傲岸不遜な態度を見ていたら、対話するだけでも苦勞するだろうと考えていた。

「それで、余の名前だったな」

少女は勿体つけて、瞼を閉じつつ胸を張る。

「アルレット・ド・ゲヘナ——ゲヘナの魔王だ」

少女はそう誇らしげに名乗った。

「ゲヘナ——とは？」

「知らぬか、そうだな。不服であるが、それでいい。ゲヘナはここからはずっと遠くの世界にあるのだから」

「……それはもしかや、東方から？」

演技がかかった仕草で首を横に振る。

コルベールが困ったように首を傾げると、アルレットは細腕を天へ掲げる。コルベールとルイズの視線が空を見る。ルイズの眉間にしわが寄った。

「それはどういふ……」

「二度言わせるな」

「……なるほど……しかし、召喚の魔法はハルケギニア内の生物を呼び出すものなので  
す」

「それは余の言葉が信用できぬと？」

あくまで無表情に睨みつけるアルレットに、コルベールは動揺する。一つの世界で生きてきた人間にとつて別の世界の話など簡単に納得できるものではないのだから、当然  
といえは当然だった。

「余が召喚の魔法に干渉したからだ。しかし、その娘が呪文を歪めるから、苦労したぞ  
？」

ルイズは召喚の際、声が上がっていたことに加えて、言葉を囁んでしまったことを思  
い出していた。

赤くなつて震えるルイズを、アルレットは不思議そうな目で見つめる。

「御身は理解の上で召喚に応じたと」

「うむ。あの扉は、使い魔の契約だな。さて、続けよ娘」

「え、え……？ 契約しろつてこと？」

「ミス・ヴァリエール。さあ」

コルベールは一歩下がって、ルイズに契約を行うよう促す。

進級という結果と念願だった魔法を前に、ルイズは目の前の少女を使い魔にすること

にしぶしぶ納得した。

「わたしが、初めて成功した魔法なんだから……恥をかかせないでよね」

睨みつけるように言い放つルイズに、アルレットは不遜に笑みを作る。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、私の使い魔となせ」

タクトを振る。声が上がらないように、言葉を囁まないように、慎重に契約の呪文を唱える。ルイズは顔を赤くしながら、アルレットに大股で近づき、ぐつと顔を寄せた。

……そして。

アルレットはルイズの首に手を回し、唇を奪った。

アルレットの白い手の甲に使い魔のルーンが浮かび上がる。その間も、彼女はルイズの首から腕を離さずに行方を止めない。

周囲を同級生で囲まれての行為に、ルイズの顔はこれ以上にならないほど赤面して、今にも卒倒しそうな表情で成すがままにされていた。

さあ次の授業がある、早く教室へ行きたまえとコルベールが生徒を遠ざけようとするも、まるで無意味な行動だった。生徒たちは沸き立ち、ルイズに向かってからかうような声をいくつも浴びせた。

やがてふたりの唇が離れる。アルレットは恍惚とした表情で口元の唾液を拭いた。

「余の審美眼に狂いはなかった。極上の精気だったぞ」

ふらり、と倒れかかったルイズの薄い肩を、アルレットは優しく支える。ルイズは熱に浮かされたような表情で、自分を支える少女の瞳を見つめていた。

## 1話『魔王さまのお食事』

ふらふらとおぼつかない足取りでなんとか自分の部屋にたどり着くと、ルイズはそのままベッドに突っ伏した。

窓から差す日は明るく、普段なら授業を受けているような平日の昼。コルベールに体が優れないことを話すと、自室で休むよう勧められたのだった。

魔法が成功した。そして大恥をかいた。

どちらも無視できない出来事なのに、そんなことはどうでもいいと思ってしまう自分が居た。

あのキスを介して、なにか大切なものを奪われてしまった気がする。

それはきつと、アルレットの言った「精気」なのだろう。

意識がぼーっとして、ものを考えることができない。熱っぽくなった額を手の甲で冷やしながら、ルイズはまどろみのような心地よさに浸っていた。

### 1話『魔王さまのお食事』



アルレットは空腹だった。ルイズという極上の食事を味わった後でも、胃の中は空っぽだった。それは文字通りの別腹だった。

足取りの頼りないルイズを部屋まで送り届け、コックが居るといふ厨房へ足を向ける。送り届けたと言つても、部屋の位置がわからないのでなんとなく後をついていくだけだった。後ろ髪の間から時おり覗かせる白いうなじを鑑賞して、なるほどこれは良いものだと思つた。精神的に満たされたものの、やはり胃がくうくうとさえずるのを止められなかった。

食べ物を入れないといけない。飲み込んで、胃を満たさないといけない。

アルレットは空腹にあえいでいた。

こつ、こつ、という音を響かせながら、黒いリボンのローファーで石畳の廊下を進んでいく。

気を抜けば幽鬼のようにはしたなく歩いているところをなんとか堪え、あくまで優雅に、流麗な所作で歩を進めていく。顎を引いて背筋をぴん伸ばし、肩を引いて胸を張る。エネルギー切れを起こしている身体にとって大きすぎる仕事だった。

アルレットがやつとの思いで中庭に辿り着いた時、その影と出会った。

「メイド」

シエスタという、この学院の使用人だった。エプロンとカチューシャ、黒と白のコン

トラスト。誰がなんと言おうと、その姿はメイドだった。

シエスタはアルレットの姿を認めると、ぎよつとした表情で一步後退った。

「(ぎよ)貴族様。どうされたんですか」

授業時間にあるこの真つ昼間に、どういうわけか制服も着けずドレスを身にまとった見慣れぬ貴族の姿を認めれば、その驚きは当然だった。

まして、人の出入りなどほとんどない片田舎の学院である。平民であるシエスタにとつて、得体の知れない貴族は恐怖の対象でしかない。

「よかった。余は空腹だ、メイド」

「は、はい？ ええと……」

「空腹だ、メイド」

無表情に言う貴族から言い知れぬ圧力を掛けられたシエスタは、さらに困惑した。

「余の言葉が通じていないのか？」

「あ、えと、あの……あの」

シエスタは慌てふためき、額に汗を浮かべる。

相手は正体の分からない貴族。機嫌を損ねればどうなるかわかったものではないという恐れから、混乱したシエスタは意図が汲み取れないままだった。

アルレットはしびれを切らしたように、無言で歩み寄った。

触れ合える距離まで近づくと、身長差のあるシエスタの瞳を見上げるような形で覗きこむ。シエスタが喉を鳴らす音がアルレットの耳にまで届いた。

シエスタは、まるでアルレットのアメジストのような瞳に魅入られたように固まって動かなくなる。

そうして数秒も経たぬ後、シエスタは呆然とした様子で口を開いた。

「ええと……食事を用意しますね」

アルレットは首肯した。そして、ふわりとステップを踏み、シエスタの横に華奢な肩を並べる。

シエスタがアルレットの瞳の奥を覗いてから、二人の間に言葉のないコミュニケーションが生まれていた。その様はまるで、「目を見れば分かる」を体現するようだった。「厨房はこちらです」

厨房でアルレットに出された食事は、使用人が口にする賄い料理だった。これは彼女自身が無理を通したからで、コックたちが賄いなんかを出して難癖をつけられてはたまらないと強く拒んでいたものである。

コックたちは普段自分たちの食べているものが貴族の少女の胃に収まっていくのを、奇妙な感覚で眺めていた。自分たちには決して真似できない気品のにじみ出た食事の

取り方であるから、違和感はおおさらかもしれない。

アルレットがナイフとフォークを置いて、テーブルナプキンで口元を拭い、「ごちそうさま」とつぶやくまで、コックたちは職分を忘れてその一挙手一投足から目を離せなかつた。

「賄い、というのは良いな。城では口にさせてもらえなかつたが、また頼んでみるのもいい」

「へ、へえ……」

コック長のマルトーは曖昧に返事をするしかなかつた。

テーブルの賄い料理を味見したのはマルトーであり、それが貴族の眼鏡に適うものだとはつゆほども考えていなかった。貴族に出す料理と比べ見た目が劣っていることはもちろん、食材はごった煮の様相で味が整っているとは言いがたく、間違いなく文句をつけられるだろうと覚悟しているところだつた。

「マルトーと他の者たち。良い腕だつた。今日から余の食事を作れ」

「いい、いいえご貴族様、言われずともこの学院の生徒たちが食う三食を作っているのは、俺たちでさあ」

「余は生徒などではない。対価ならばジャン・コルベールカルイズ・フランソワズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールのいずれかに要求するがいい」

「……はあ」

「それと、余をご貴族様などと呼ぶな」

「で、では、なんとお呼びすれば……」

「余はアルレットだ。誤った呼称でなければなんとも呼べ」

「はあ。ではアルレットさまと」

その呼び名に関心などないように、アルレットは無言で立ち上がる。

機嫌を損ねてしまったかとコックたちはお互いを見るも、アルレットの表情からは何も読み取れない。厨房を後にする彼女を、ただ呆然と見送った。

「おい、シエスタ」

「はい」

「なんでえ、ありや」

「アルレットさまのことですか？」

「それ以外に何かあるってんだ」

アルレットをもてなしている間、シエスタはお気に入りの紅茶を飲んでくつろいでいた。

コックたちが職分を忘れてしまったから同じくサボってやろうという、拗ねた気持ちから取った行動だった。まさか一介のメイドがこの広い厨房でひとり働こうなど

とは思わない。

「何と言われても……魔王さま、といえばいいのしょうか」

「魔王？ はあ……シエスタまでおかしくなっちゃった」

おかしいのは職務を放棄しているコックたちの方だ、とシエスタの口から出かかったが、自分が紅茶を堪能している猪であることを思い出し、踏みとどまった。そして、夕食の調理の作業がだいたい滞っていることにいつ気付いてくれるのだろう、と投げやりに考えてるのだった。

その後、厨房がかつてないほど忙しくなったのは言うまでもない。



学生寮である塔のてっぺん。この日、尖った屋根の上に立つ小さな人影があった。

全天快晴、とまではいかずとも、空はずつと向こうまで見渡せるくらいに晴れ渡っている。ちぎれたような綿雲がゆったりと風に運ばれて行く様はなんとも牧歌的だった。

「来て、らびたん」

アルレットは呟いて、静かにアメジストの双眸を上空へ向けた。髪が風に攫われるのを右手で抑えて、左手を上空へ掲げる。

すると、その向こうから黒いモヤのようなものがするすると降りてきて、アルレットの左腕へまとわり付いた。くるくる、くるくるとその腕の周りを回り続ける。

「魔王さま、魔王さま」

そのモヤが、喉もないのに声を発した。甲高い少女の声だった。

「この場所は、どう？」

「とってもいいところ！ 大好き、魔王さま」

モヤは腕の周りをくるくると回るのを止め、空中に踊りだした。青空を背景に、黒色のモヤが渦巻いて滞留する。

「やっぱり魔王さまはすごいわ！ 異世界までひとつとびー」

「うん。でもね、ルイズのおかげ」

不定形なモヤがだんだんと形を作っていく。やがて現れたのは、薄い翼の生えた赤い瞳の黒猫だった。モヤがそうであったように、黒猫は翼を羽ばたかせることなく宙に浮いていた。

アルレットは黒猫へ両手を伸ばして抱きかかえる。黒猫は、アルレットの腕に収まりきってしまうほど小柄だった。

「ルイズって、あのちんちくりん?」

黒猫は小首を傾げて、アルレットの方を見た。

「ルイズを悪く言わないで。わたしにとって、必要な人だから」

「ふうん……」

黒猫はアルレットの懐に顔をうずめて、不機嫌そうに鳴く。

「嫉妬、しないで。わたし、らびたんのことはずっと好きよ」

アルレットは優しい手つきで黒猫の毛並みを撫でた。黒猫は気持ちよさそうに目を細めて、ごろごろと鳴き声をあげる。そのたびに、黒猫の姿形が曖昧になっていく。

やがて黒猫は輪郭を失って、溶けるように元のモヤへと還っていった。

「ここは綺麗な世界だから、すぐに良くなる」

「うん、魔王さま。ほら、わたし、とても気分がいいの。魔王さま」

アルレットが再び左手を上空へ掲げる。

モヤとなった黒猫は、上空から降りてきたときの逆回しのように、左腕の周りを回つてするすると天へ登っていく。

そして、黒色ごと青空の向こう側へ消えていった。

アルレットはモヤの行方を見届けた後、ルイズの部屋に舞い戻っていた。



ベッドの上ですっかり寝入っているルイズの横へするりと潜り込み、白いうなじへと手を伸ばす。深い眠りに落ちているルイズはまるで起きる気配がなかった。アルレットはルイズのうなじの表面を指で何度もなぞると、そこへ向かってゆつくりと顔を近づける。荒い呼吸がルイズの肌を撫でた。

口元に鋭い犬歯を覗かせたアルレットは、幼い顔に似合わぬ恍惚とした表情で指でなぞった場所へとかぶりついた。

犬歯がぶつりと白肌を貫き、舌の上に赤い雫が転がる。その甘美な味に狂喜を覚え、アルレットは身を震わせた。

そうしてルイズにほとんど抱きついて、一心不乱に行為を続けた。やがてルイズの方がぴくりと動き、アルレットの耳にか細い声が届く。

「痛い……痛いって」

ルイズが目を覚ました。しかし、明瞭な痛みに襲われながらもどうしてか目覚めのまどろみから抜けだせず、アルレットの身体を力なく押し返すのが精一杯だった。

「あなた……まさか吸血鬼だったの？ お願いだからやめて……」

アルレットは答えない。それどころかいつそう行為に没頭し、何度も何度もうなじに犬歯を突き刺した。こぼれた血液がぼたぼたとシーツに落ちる音がした。

何も言う気が起きなくなったルイズは、しばらくアルレットの行為に身を任せてい

た。やがて満足したのか、アルレットの口が自身のうなじから離れると、意識が明瞭になつていくのを感じた。

急いで身体を起こして、ベッドに座り込むアルレットへ問いただす。

「何をしていたの……？ あなた」

アルレットは子どもが食事をした後のように口元を汚していた。その汚れが自分の血であることに、ルイズはぞつとして身震いを抑えられない。うなじの痛みも忘れていた。

「余を従える対価だ」

楽器の音色のような美しい声が、ルイズの耳朶を撫でつける。

「神は救われぬものに無償の愛を施すが、悪魔は愛など知らぬ」

「な……何がいいたいのよ」

「だから、救われぬものにこう言うのだ。『お前の魂と引き換えに、どんな願いも叶えてやろう』」

アルレットは立ち上がり、アメジストの双眸でルイズを見下ろした。

窓から漏れた夕焼け色の陽が、アルレットの血で汚れた口元を照らす。さながら悪魔じみた光景だった。

ルイズは「ひつ……」と声を漏らしてアルレットから後退る。

「言ったであろう。余は魔族の大陸、ゲヘナの魔王」

「な、な、なら、わた、わたしは」

「——ふふ」

赤い笑みを作る。

「お前の魂と引き換えに、どんな願いも叶えてやる。ルイズ・フランソワーズ」

笑っているようにも無表情のようにも見えるアルレットの目元、眼窩に埋め込まれたアメジストのような瞳に、ルイズは魅入られた。

透明な紫。瞳の奥に隠された、彼女の中身まで見通せそうな澄んだ宝石。無機物の究極的な美が、水気を帯びて生きている。

そしてルイズは、文字通りその向こう側を見た。

「あ……魔王さま」

熱に浮かされたような声でアルレットを呼ぶ。ルイズは彼女の特別な瞳を通して、彼女の中身を見ていた。それは思考であり、記憶であり、魂でもある。こと勉強において優秀な成績を残してきたルイズでも、まったく知らない異世界の魔法だった。

ルイズはアルレットを理解する。隅々まで、とはいかないものの、ルイズはその瞳の奥に見た。彼女がどこから来たのか、その身がどのような存在なのか。そして、自分が置かれている立場も。

悪魔の瞳が、すべてを覚えてくれた。

アルレットはベッドの上に膝をつき、座り込むルイズにぐつと顔を近づけた。

切り揃えられた自身の前髪を右手でかき上げると、白い額を同じくルイズの額にぴたりと付ける。発熱しているルイズにとって、それは死人のものよりずっと冷たいように感じた。

「わからない？ この目を見ればわかるでしょう？」

「なにが……魔王さま」

「違う」

「……はい。アルレット」

「そう、それでいい」

「わたしの使い魔……わたしのアルレット」

「そう、ルイズの使い魔」

『使い魔』。人ならざるものを従えることは、魔法使いの証である。

ルイズはこの時、ようやく魔法が成功したことに実感を得て、歓喜した。十年來の苦悩が溶けてなくなつてゆくような心地だった。

目の前の少女が自分のものであることに、狂喜せずにはいらなかった。これが嘘でないなら、魂など差し出してやる。そう、本気で思った。

「わたしの、わたしのアルレット……」

「うん……」

アルレットは額を離して、両手をルイズの頬に添えた。

そうして再び、顔と顔を近づけていく。アルレットの瞳は、ルイズの桃色をした薄い唇をじつと見つめていた。

その唇が触れる前に、ルイズはアルレットがなにをしようとしているのかを察知していた。

「……待って。今日はもうさんさん吸ったでしょう？」

ルイズの両手がアルレットの両手首をつかむ。

召喚の儀でキスをされたのも、ベッドの上で血を吸われていたのも、彼女の言う対価なのだろう、とルイズは思う。その際になにか、体力や精神力のようなものをアルレットに吸われていくのがわかった。

供物は捧げなければいけない。しかし、ルイズは既にへとへとだった。

このペースで吸われたら寝たきりの生活になってしまう。明確な危機感から、ルイズの手が動いていた。

「唇からのほうが精気を吸いやすいから」

「精気ってどういうの？ でも、嘘。だってあなたが寝ている時、迷わず血を吸った

でしょう。それに、昼間……あんな公衆の面前で、呆れるほどもらっていったじゃない」  
「……ルイズ、好き。だからわたしは口づけがしたい」

アルレットの口調から尊大な態度が消え去る。無表情を崩し、沈痛な面持ちでルイズに迫る。

「ダメ。そんなこといってもダメ。そんな顔しても、ダメ」

「余は王だぞ。おまえのような小娘に断る権利はない」

「……もつとダメ。威圧なんてマイナスもマイナスに決まってるじゃない。わたしはあなたにかしずくような家来じゃないわ」

「……威圧しないから、ダメ？」

「ダメ、ダメ。だいたい——」

ルイズはアルレットを退けて立ち上がった。驚いたアルレットがたたらを踏むのを、ルイズが手を掴んでぐつと引き寄せる。

肩が触れ合って、息遣いも聴こえる距離。期待の籠った視線がルイズに向けられる。

「ルイズ……もしかして、いいの？」

「違うー！」

ルイズは怒鳴りつけるように言うと、机からハンカチを取り出して、アルレットの顔に強く押し付けた。

「ぶぐつ」と可愛らしく鳴くも、ルイズは苛立たしげに言い放つ。

「口元が汚い！ 洗ってきなさい！」

「……ひどく」

極上の食事をおあずけされたアルレットは、とぼとぼと捨てられた猫のように部屋を去っていく。

扉が閉められて一人の空間になると大きなため息が漏れた。貧血で頼りない身体を、ベッドに横たえて休ませる。ああ、本当にギリギリまで吸われたんだ。ルイズは熱の引いた頭でそう思った。

眠ってしまおう。アルレットの言う「精気」も回復するかもしれない。また起きた時に吸われてないといいけど。

ぼんやりと思つて瞼を閉じたとき、部屋のドアが開いた。

「ルイズ……」

薄目を開けてドアの方を見ると、口元が汚れたままのアルレットがいた。

「どこで洗えばいいの？」

「……はいはい、連れて行ってあげるから」

ルイズはやつれた顔でベッドから起き上がり、使い魔の手を取った。

## 2話『ほんとうは……』

使い魔召喚の儀が終わってからその日、ルイズはほとんどの時間をベッドに突っ伏して過ごすことになった。

「精気を吸う」——その精気とは、メイジにとつての精神力と同義であるらしい。精神力がなくなればメイジは強い倦怠感に襲われ、その度合いによって丸一日眠り続けることもあるという。『ゼロのルイズ』にとつてはまったく新しい体験だった。

しかし、人の上に立つ者として育ったルイズはタダ飯喰らいを許さない。

意地やプライドに生きる彼女はその底力で、魔王たるもの給仕のような真似は出来ないとゴネるアルレットに夕食を部屋まで運ばせたのだった。

2話『ほんとうは……』

朝の日差し、小鳥のさえずり。朝露をきらきらと反射する中庭の芝。空は高く、雲は綿菓子のように。

鳥の骨が昏い策謀と戦っていようが、遠くで異種族間の紛争が起こっていようが……



そこに、億の魔族を束ねる魔王の姿があるとも。

ハルケギニアは今日も平和であり、ともすれば牧歌的であった。

「アルレット、そんなに眠い？」

文机の椅子に座るルイズは、後ろ髪を櫛で梳かしながら鏡越しにアルレットへ声をかける。今朝はしくしくと痛むうなじの噛み跡を気遣って、ゆっくりと髪を梳いていた。

話しかけられたアルレットはといえば、テーブルの椅子に座ってぼーつとしたまま答ええない。ルイズは制服に着替え終わっているというのに、アルレットはルイズから借りたネグリジエのままだった。

ルイズは、アルレットは夜行性なのでは、と考えた。彼女とは同じベッドで夜を過ごしたものの、精気を吸われてぐったりしていたルイズはすぐに寝入ってしまった。

日が昇ってすぐの時間帯、幼い容貌に歳相応の可愛らしい寝顔が張り付いていたのを見たが、彼女がいつごろ寝入ったのかは分からない。もしかすると、深夜中起きていた可能性だってある。

「寝ていてもいいわよ？　これから朝食の時間だし、授業まではまだあるわ」

アルレットは寝ぼけた顔のまま首を横に振る。

「じゃあ早く着替えて」

またも首を横に振る。一体どうしたらいいんだ、とルイズはため息をつく。

途方に暮れていると、アルレットがぼそつと呟いた。

「……メイド」

「メイド？」

「早く着替えを出さんか」

「……………誰がメイドだつて？ 寝ぼけてんじやないわよ」

ルイズはその場で振り返って、アルレットの方を見る。

アルレットはぼーつとした様子でなにも答えず、かわりに小さなあくびをしていた。

「わたしはあんたの召使いなんかじゃないわ」

「ん……ルイズ」

「……………なに？」

「メイドはどこ……う？」

「……はあ。わかった、メイドがほしいのね」

彼女はやつぱりやんごとなき人だ、とルイズは思った。アルレットはルイズをメイドと間違えたのではなく、この部屋に当たり前のように居るはずのメイドに対して呼びかけていたのだった。

ルイズは嘆息して席を立つ。

「呼んでくるから待つてなさい」

「シエスタ」

「なに？」

「メイドは、シエスタがいい」

「注文が多いわね。まったく」

シエスタは今日もまた困惑していた。朝の洗濯をしているところを、突然、小さくて偉そうな貴族の女子生徒に話しかけられたのだ。慌てふためくシエスタに、女子生徒はこう言った。

『あんだ、今日からわたしの使い魔の世話をしなさい。ひとまず朝の着替えをしなければいけないから、急いで』

何が悲しくて朝から使い魔の着替えなんてものをしなければならぬのか。中庭でモグラや蛇の使い魔の姿を見かけていたシエスタは思った。

彼女の使い魔がせて犬や猫の類でありますようにと願って部屋までついていくと、余計に困惑することになった。

「アルレットさま？」

「メイド。着替えを」

「は、はあ……」

アルレットにしぶしぶ赤と黒のドレスを着せてやりながら、シエスタの視線は部屋の中をさまよっていた。

「それで、使い魔というのはどこに……」

「この子のことよ」

ルイズが端的に告げる。

シエスタの表情が驚愕に染まったが、貴族の手前で余計な口を開くことはなかった。

ドレスを身につけ終わると、シエスタはテーブルに転がっている櫛を手にとつて、アルレットの髪を溶かし始めた。

金の糸を束ねたようなブロンドに櫛が通るたび、アルレットの無表情が少しだけ柔らかくなるのをルイズは眺めていた。彼女の後ろにまわったシエスタからは伺えない光景だった。

「お綺麗です、アルレットさま」

そう言つてシエスタが傍に控えるように一歩下がりに、ルイズに櫛を手渡した。

これでようやくアルレットの朝の支度が済んだらしい。ルイズは櫛を引き出しにしまつと、文机の椅子から立ち上がり声をかけた。

「早く行くわよ」

「うむ。余のメイド、明日も頼むぞ」

『自分のもの』宣言されたシエスタは、それにつこりと笑って応えた。

ルイズがアルレットとシエスタを伴って廊下に出ると、その人物に出会った。アルレットは一步前に出て、シエスタはルイズとアルレットの影に隠れるよう一步後退した。

道を遮るその人物と巨大なトカゲを一瞥して、ルイズは今朝何度目か知れない嘆息をする。

「そこ、邪魔、なんだけど。ツエルプストー」

「いけすかないわね。昨日あれから姿を見せなかったから、心配して見に来てあげたのに」

「疲れているの。わたしの身を心配するなら、さつきとどいてくれないかしら。もう、体がだるくて……」

「それよりも！ あたしのサラマンダー、どう思う？」

「それよりもって、あんたね……」

心配して見に来たと言った矢先になんだ、と突っ込みたくなる気持ちを抑え、とつと場の收拾に務めて食堂へ向かったほうがいいと判断したルイズは、投げやりに言った。

「サラマンダーなんてすごいじゃない。よかったわねキュルケ、すごいわ」

「そう？　そうかしら！　人間の使い魔なんかよりずっとすごいわよねえ。ああ、可愛いフレイムちゃん」

「人間……まあそうね。人間の使い魔よりはね」

ルイズにははたしてアルレットが人間なのかは分からなかった。人間の枠に収まりきらないことに違いはないので、キュルケの言うことには当てはまらないことにする。

「行くわよ、アルレット。ただでさえ遅れてるんだから——」

そう言つて隣に話しかけるも、そこにアルレットの姿はなかった。

前方から、きゆるきゆるという鳴き声が聴こえる。キュルケの使い魔だ、と思つて視線をやると、そこには膝をついてフレイムの顎を撫でるアルレットがいた。

フレイムの気持ちよさそうに目を細めてアルレットに頬ずりしているさまは、さながら主従関係にあるようだった。前日にアルレットの瞳を覗いたルイズとシエスタはその様子に納得してたが、フレイムの主であるキュルケはまったくそうではなかった。

主の不満な表情を察して、アルレットはフレイムをキュルケの方へ促す。ちろちろと舌を巻きながらキュルケの腕に抱かれるのを見てから、満足気に立ち上がった。

「もう、行くわよ」

「うむ。よく遊んだから余は空腹だ」

「……撫でてただけじゃない」

そんな様子を、キュルケは呆然と見送った。

「シート、ダメにしちゃったから新しいもの用意してくれる？」

ベッドシートの赤い染みのことを思い出したルイズは、メイドにそう言いつけた。この後、シエスタという何の変哲もない学院の使用人は、アルレットが召喚された日から都合これで三度目の困惑を覚えることとなる。

「承知しました。それでは、わたしは給仕の仕事がありますので」

シエスタと別れてから、ルイズは料理の並んだテーブルに座った。座席は自由席というわけではなく、生徒によって決められている。この学院に在籍していないアルレットはその事実も知らず、ルイズの隣の席へ座った。ルイズはその行き違いに気付いていながらも、疲労に負けて怠惰を選択した。

アルレットだから勝手にどうにかするだろう。そう思っていた。

「お、おい。なんだね、キミー！ どうして僕の席に座っているんだ」

小太りの少年が放った声に、食堂の生徒たちの注目が集まる。

もとより、制服も身につけず派手なドレスで着飾ったアルレットは大いに目立っていた。あまりにも堂々としているから学院の客人ではないか。関わって失礼でも働いた

ら面倒を被るばかりだろうと、生徒たちは彼女を居ないものとして扱っていた。使い魔召喚の儀で彼女の姿を見た者たちも、似たような理由で自分から遠ざけようとしていた。

しかし、少年の一言で、不躰な視線を向けるものが大勢現れた。失礼を働いているのが少女の方であり、学院の客人ではないことが明るみになったからだだった。

また面倒ごとが降りかかってきた。思慮足らずだったとルイズは頭を抱えた。

そして、その面倒事を何とかしようと思えるほどの気力がルイズには残っていなかった。勝手にやっていてくれとアルレットに任せきってしまったのだった。

「な、なんとかわいい給え、キミー！」

「……王に向かつて、高いところからものを言う不埒。同じく、命令する不埒。身の程をわきまえず怒鳴りつける不埒。」

二度。一度は許してやるが、二度はない。余は仏などではない」

そうよね、仏じゃなくて魔王よね。アルレットに任せては事態の收拾など望めないことにルイズはようやく気づいた。

『王』という言葉に少年は訝しげに眉間にしわを作る。

アルレットが席を立った。その威圧的な物言いと振る舞いに、少年が一度びくりと震える。しかし、啖呵を切った手前、情けない顔は出来ぬとぎりぎり奥歯を噛んでアル



レットに睨みつけた。

「失礼なのは、キミのほうじゃないか！」

まったくもってその通りだったが、アルレットは事情を知らない。シエスタに対してそうしたように、小柄なアルレットは見上げるような形で少年の両目を覗きこんだ。

無表情の口角が上がる。アメジストの双眸が、少年の中身を貫いていた。

「な、なんだよ……いきなり」

「わかった、わかったぞ。今朝はポークソテーが食べたくてたまらないんだな？」

あわよくば他の者からポークソテーを譲ってもらいたい。ならば、慣れない席へ移動することは避けたい」

「な、何言ってるんだよ、おい！」

「何を言っているか？ それは、おまえが席を譲りながらぬ理由だ」

凶星を突かれた少年は顔を真っ赤にして憤り、アルレットの肩を突き飛ばした。よろめいたアルレットは、背後の椅子の背にもたれかかる。その衝撃を受けて、ルイズが小さく悲鳴を上げた。

「なんだ、女相手に手を上げて！ 凶星なんじゃないか！」

生徒の誰かが野次を飛ばした。面白い見世物だと、にわかには生徒たちが騒ぎ出す。

「もう……いい加減にしてよね……」

ルイズは自分の座った椅子にもたれてくるアルレットに恨みがましく文句を言うと、席を立てて振り返った。

「アルレット、もういいから……」

そう言つて自分の使い魔を見ると、なんとも信じがたいことに、目に涙を浮かべて俯いていた。

困惑していたのはルイズだけではなかった。突き飛ばした少年本人も、まさか手加減した行動で泣かれてしまうとは思ひもしなかった。少年は突き飛ばす手にも大して力を入れず、抗議の意味での行為だった。

まるでひとつの騒ぎのようにがやがやと食堂が沸き立つ。

遠くのほうで教師が「静まれ」と叫んでいても、ルイズたちには聴こえなかった。生徒同士の諍いならここまで騒がしくならなかったものを、ひとえにアルレットが生徒たちの興味を引いていたために起きたことだった。

ルイズはポケットから白いレースのハンカチを取り出して、アルレットの涙を拭う。切り揃えられた前髪を撫でながら、優しい声音で尋ねた。

「どうしたの？ 泣いちゃって。魔王なんでしょう？」

こくり、こくりと二度頷くと、ルイズが拭ったアルレットの目元に、また涙の雫が溜まっていた。やがて雫はあふれるようにこぼれてドレスにしみを作っていく。

こういった状況では多くの場合、『泣かせた方』に野次が飛ぶ。

例に漏れず、非難轟々だった。少年はあわててアルレットに近寄って、「ごめん」と頭を下げた。

アルレットから「ポークソテー、あげるって言おうと思ってたのに」と泣き声で言われた時、少年は自分が思い違いをしていたことに気付いたのだった。

ルイズは思った。魔王って、人と接するのが下手なんだな、と。

## 3話『はじめての魔法』

少年とアルレットの話し合いが済んだ後は、コルベールが場を収めた。コルベールはアルレットの料理が教師席に運ばれていたらしいのを伝えるに来たところだった。

幸いにも食堂のテーブルの席には余裕があり、アルレットがルイズの隣で食事することは公認されたが、今後ルイズはアルレットの監視を怠らないようにと心に決めたのだった。

## 3話『はじめての魔法』

朝食が終われば一日が始まる。授業へ向かう道すがら、ルイズは思い切ってアルレットに切り出していた。

「ねえ。ここはその、ゲヘナってところじゃないんだし、それ、やめたらどう？」

「それとはいったいなんのことだ」

「それよ、それ。その無愛想な顔と、挑発するみたいなえらそーな口調。可愛げもないし、良い印象ないわよ。わざわざ作る必要ないと思うんだけど」

「作ってなどいない。余は魔王だからな」

言葉や態度によって、意識を塗り替える。

それは魔王であるために必要なことであると、アルレットは考えていた。見かけや示しの問題ではなく、心の在り方の問題だった。

「いや、嘘。絶対に嘘。作ってるでしょ、その態度。昨日、自分のこと『わたし』とか言ってきたし。食堂でも素が出てわたしに泣きついてたし」

「あれは、演技だ」

ぼろぼろ泣いて瞼を腫れぼったくして、何が演技だとルイズは思う。

ただアルレットは、あくまでも認めようとしなかった。

「ここには人間しかいないの。そんな態度、苦労するだけよ。演技だか素だかもうどうでもいいけど、直しなさい」

「……うむ、わかった」

「うむ、じゃないわよ」

「う……うー……うん……」

しづしづ頷くアルレットを見て、ルイズは期待できそうもないと肩を落とした。

「あと……さつき、あいつに何したの?」

「この目で欲望を覗いたにすぎない。相手の望むことがわかれば、制御もしやすい」

その割にはダメダメだったけど、とルイズは思う。結果的に少年は激高して、アルレットに手をあげていた。

魔族には有効でも、人間相手にあんなことをすれば状況がもつれるのは当然だった。アルレットにはその辺りの機微が致命的なまで見えていない。

「なんとというか、王というより、魔王なのね」

「当然であろう」

「……褒めてないんだけど」

アルレットは目を凝らさなければ見逃してしまうくらい小さな笑みで、誇らしげに胸を張っていた。

辿り着いた階段教室は、生徒たちの使い魔で溢れていた。興味を惹かれたアルレットはルイズを追い越して教室の奥へ進んでいく。中には魔族かと思紛うような異形も居たが、概ねアルレットの知っている動物に似た生物ばかりだった。

教卓の手前で立ち止まって使い魔の観察をしていたアルレットだが、その行為に満足したあとは中央最前列の席に腰を下ろしてふんぞり返った。普段は周囲から目立たない席を選ぶ傾向のあったルイズは、嫌々仕方なくその隣に座った。

前の方に座るのね、と口にしようとしたルイズは、分かりきった答えが返ってくるの

を想像して踏みとどまった。代わりに、皮肉を込めた軽口を飛ばすことにした。

「あなたなら教卓に座ると思っただのに」

「どうして教卓に座らなければならぬ」

「……いや、なんでもないわ」

アルレットが教室の最前列に座ったのは、最も近くで教師の言葉を聞くことができるからという、ごくまっとうな考えからだった。ルイズの想像していた「わたしは偉いから一番前！」という浅い考えからではない。

ほどなくして恰幅のいい中年女性が姿を現した。土のトライアングルメイジである教師のシユヴルーズだった。

教壇に上がり、教卓の前に立ち、咳払いをしてこちらを振り返るのを、アルレットは姿勢を正してじっと見つめていた。

「あら？」

シユヴルーズがルイズの学年の授業を受け持つのは初めてだった。

アルレットの姿を見て首を傾げる。この教室でただ一人だけ、学院の制服ではなく、金色の刺繍があしらわれた派手なドレスで着飾っている。魔法の授業を受けに来ているのに、マントも身につけていないのはどういうことか。

「あなた、どうしたの？　もしかして、制服をダメにしまったの？」

「いえ……その、ミセス・シユヴルーズ。彼女はわたしの使い魔です」

アルレットが余計なことを言う前にと、ルイズがすぐさまフオローを入れた。

くすくすと生徒たちが嘲笑する。「魔法が使えないからって、その辺の平民を連れてきたんじゃないか」と誰かがささやくも、ルイズは一向に気にしなかった。ルイズはアルレットが本物であることを知っていたからだだった。

「……まあ。話に聞いてはいたけど、あなたがそうなのね」

「そうだ。今日は宜しく頼むぞ」

「あら、わかりましたわ。それではさっそく授業をはじめましょうね」

偉そうな物言いにも、シユヴルーズはやんちゃな孫でも見るような優しげな笑みで答えた。

子どもに見られているわ、と内心面白がるルイズだったが、容姿の幼さで言えば自身もアルレットとほとんど変わらないことに気づいていない。貧相な体かつ童顔はなによりも一致した共通点である。真実は無情で、ルイズは学年によって色分けされたマントにかろうじて助けられているだけであつた。

授業が始まれば、アルレットは熱心にシユヴルーズの言葉を聞いた。アルレットにとつて退屈なのではないかとルイズは考えていたが、どうやらこちらの世界の魔法については素人らしい。時おり、小声でアルレットの質問に答えていた。教師の前で話をす



るのは抵抗があつたが、アルレットの熱心な姿に心を打たれたシュヴルーズがにっこりと笑つて暗に許可を下した。

授業も中盤になると、座学から演習形式へ移つていく。シュヴルーズが小石を真鍮に変えると、アルレットは無表情ながらも声を漏らして感嘆した。

「あなたもやつてみますか？」

「よいのか？」

「ええ。失敗しても構いませんから」

アルレットは立ち上がると、見られることを意識した流麗な振る舞いで教壇に立った。生徒たちの多くが、目を奪われたようにその姿を追つていた。

「呪文は、イル・アース・デルだつたな」

「ええ、よく覚えていらつしやいました……それよりあなた、杖は？」

シュヴルーズはアルレットを当然のように貴族だと認識しており、マントは羽織つていないものの杖だけは持っているものと思つていた。しかし、アルレットは首を横に振る。

メイジは必ず、己の契約した杖を持つて奇跡を成す。なにも、傍に落ちている樹の枝でそれが出来れば苦はないのだ。

「必要ない」

アルレットは右の人差し指を立てて、教卓の上の小石へかざした。

「イル・アース・デル」

そこには、起こるはずのない変化が起こっていた。

ごつごつとした無骨な小石は、つやのある真鍮へと姿を変えたのだった。教壇のシュールズは開いた口を手のひらで隠し、生徒たちはざわめいた。

「おい、インチキするなよ、ルイズ！」

ルイズの後方から、男子生徒が言った。シュールズはそれを咎めようとしたものの、彼の言葉を否定すれば目の前で起きた現象を認めてしまうことになる。と気付いたあと、口をつぐんで当惑した。

「インチキって……どうやってインチキするのよ、こんなの」

「わからないからインチキなんだろ！ その辺で捕まえてきた平民だってバレるのが怖いんだ」

教師のシュールズと生徒全員が見守る中、アルレットは指一本振れることなく小石を真鍮にしてみせたのだ。最前列とはいえ、席に着いたままインチキでそれをどうこうできたのなら、今ごろ手品師にでもなっているだろう。ルイズは嘆息した。

一方で、シュールズや生徒にとってはそれをインチキと決めつけるほかになかった。そこに一片の悪意もなく、もっと単純に、彼らにそうさせてしまう常識外の現象

だった。

「インチキなどではないぞ。そうだ、坊主。おまえの好きな宝石を言ってみよ」

「宝石？　僕は……そうだな。母なる大地の色をしたトパーズさ。なんと言ったって僕は土のメイジだからね」

このあとアルレットがなんと言おうとしているのかをルイズは察した。そして、素早く立ち上がった。ルイズは学習していた。

「ほう。では、おまえをその大好きなトパーズへ変えてやろう。余が新しく覚えた魔法……黒魔術でな」

「や、め、な、さいー！」

ルイズはアルレットの手を引いて教壇から降りさせる。恥ずかしい思いを抱え込みながら、いそいそと元の席へ戻った。

どうしてこの使い魔は自分と違って学習しないのだろう。黒魔術ってわざわざ言い直すな。いつそのこと、決闘をけしかけられてゴーレムに痛い目に合わせられてしまえばいいのかわ。そう思った。

「お騒がせしました。授業を続けて下さい、ミセス・シュヴルーズ」

「ええ……でも……」

「ほら、彼女は耳も尖ってないし、翼も生えていないでしょう。何かの間違いです」

耳の尖っているエルフや翼の生えた翼人らは杖も無しに魔法を扱えるが、それ以外に人間とまったく同じ姿をした吸血鬼も同じく杖を用いずに魔法を扱う。もしや、とシユヴルーズは考えたが、それこそまさかだとその考えを振り払った。

ルイズの言うとおり、これは『何かの間違い』に違いない。

あるいはインチキ。この少女による手品か何かなのだ。シユヴルーズはそう自分に言い聞かせた。

「余の魔法が嘘だというのか？」

「黙ってなさい。ご飯抜きにするわよ」

アルレットの三食は厨房のマルトーらが用意する手筈である。ルイズの言うご飯とは、彼女のうなじに噛み跡をつけたアレだった。昨晩は眠れずにアレのことで頭をいっぱいにしていたアルレットはすぐに察した。

アルレットは不満げに顔をそらすも、授業が終わればこれをネタにすぐにでも食事を迫ってやろうと計画して溜飲を下げた。隣に座ったルイズが身震いするのを、追い詰められたうさぎを見る猛獣の気分で見つめた。

「ごほん……ええー……では、仕切りなおして……」

シユヴルーズは立ち直った様子だった。そして、続く演習の実演にルイズを指名した。

「ミス・ヴァリエールに、やってもらいましよう」

立ち直ったように立ち直ってないなとルイズは思った。先ほどのことを忘れて仕切りなおしたいなら、アルレットの主人であるルイズを指名するのは違うのではないか。まったく無関係の生徒を指名すべきなのだと、恨みがましい気持ちで杖を手にとった。

爆発して教卓の破片でも飛んだら、アルレットはまた泣き出すだろう。それでも他の生徒と同じように避難しろとは言えず、ルイズはどうとう教壇を登り、教卓の小石を見下ろした。

「先生ー ルイズに魔法を使わせるのは危険ですー」

「錬金の魔法が危険なものですか。さあ、気にせず、思い切りやってごらんなさい。失敗しても私は笑いません」

ごめんなさい、ミセス・シユヴルーズ。わたしの錬金は危険かもしれません。

心の中で謝りながら、ええいままよとルイズは杖を振った。

「イル・アース・デル」



トリステイン魔法学院の敷地内にある雑木林の、ある拓けた場所に二人は居た。

そこはルイズの秘密の特訓場だった。彼女の失敗魔法は当然ながら場所を選ぶ。普段は、破裂音も爆発の衝撃も問題にならないこの場所でルイズは杖を振っていた。

ルイズにとっては苦い思いが染み付いた場所であったが、正午を過ぎた今現在、自身の使い魔によってさらなる苦い思いの上塗りが行われていた。

アルレットは背後からルイズの肩を掴んで、そのまま傍の大木まで距離を詰めていった。ルイズが大木の表面に両手を付けたところで、アルレットの歩みが止まる。大木の表面の硬い凹凸が、ルイズの手のひらを白くしていた。

ルイズの嫌がる顔も、アルレットからは伺えない。もとより、アルレットの視線は一点を見つめて動かなかった。その視線の先にあるのは、ルイズの桃色がかったブロンドに覆われた首元だった。やがてアルレットの細い手によってブロンドがかきあげられ、痛々しく残るうなじの赤い傷跡が外気にさらされた。

ルイズはこれから行われるであろう行為で、うなじのものがとうとう消えない傷跡として身体に残ってしまうだろうことを覚悟した。それは仕方のないことだと思った。彼女は悪魔を使い魔にしてしまったのだから、アルレットが自身の骨まで喰らおうと逆らえないのだった。

「ルイズ、好き……」

息のかかる距離で、そんなことを言う。アルレットの目にはルイズのうなじ以外は映っていないかった。彼女の暖かく柔らかな舌が傷跡をなぞるのを、ルイズは身震いしながら耐える。

やがてアルレットの言葉の意味を理解したルイズは、気分を害したように唇をとがらせる。

「……わたしの血のことしか、見えてないくせに。好きなんで」

「拗ねた……?」

恍惚な表情の口元が、いたずらっぽいなほ笑みを浮かべた。

「……早くしてよ」

「ルイズ、してほしいんだ?」

「違うって……早くすませちゃってほしいの」

ルイズの苛立たしげな声に、アルレットは表情を歪める。

「ルイズは、して欲しくないの?」

「当たり前でしょう? あんなこと、して欲しいわけじゃない……」

「ひどい、ひどいよ、ルイズ」

泣きそうな声で訴えながら、アルレットはルイズの肩を掴む力を強めた。けれどルイ

ズは、その訴えを軽くはねのける。

「泣いたって無駄なんだからね。わたしは人間なんだから、思い通りになると思ったら大間違い」

「……わかった。わかった、もう」

「分かってくれた？」

「うん……」

一度は安堵したルイズの表情が、一刹那の間に苦悶へと変わった。それは、首筋に走る激痛によるものだった。

苦しげに喘いで、焼けるような痛みから逃げようとするルイズを、アルレットは肩に爪を立ててその場に釘付けにする。まるで、猛禽類が小動物を捕食するような光景だった。

アルレットは頬を染めながら、ルイズの首筋に歯を突き刺した。

首の血管が小さく裂け、白い肌から血が溢れ出る。アルレットはそれに舌を這わせ、口元から顎にかけて真っ赤な筋を垂らしながら、ごくり、ごくりと、グラスのワインを飲み干すように喉を鳴らした。ルイズの制服は、徐々に赤黒く染まっていった。

やがてアルレットの口がルイズのうなじから離れると、支えを失ったルイズがその場にくずおれた。



昨日よりも、ずっと多い量の血を吸われた。ともすれば、出血だけで意識を奪われる寸前まで。こんな日が続いては体が持つはずがない。はつきりと抗議をしようと、そう考えた時だった。

「ルイズ、ごめんね。これでもう、終わりにするから」

ふと弱々しい声を聞いて、ルイズはアルレットの方を振り返る。

先ほどまでの熱に浮かされたような態度は、どこかへ消えていた。後ろめたさに居心地を悪くしたような様子で、アルレットはルイズから顔をそらしていた。

「もうしないから。ルイズが嫌なら、もう、わたしは」

「アルレット……?」

「ごめん、なさい」

徐々に意識が判然として、なにが起こっているかを理解する。胸の底から、激しい後悔の念が湧き上がってくる。

ルイズは貧血でおぼつかない足元を気にしながら立ち上がり、うつむいたままのアルレットのそばに寄った。

「謝るのはわたしの方だから、そんな顔しないで」

「ルイズ……」

アルレットの肩を抱いて、今にも失いそうな意識を保ちながら言葉を続けた。

「あんな態度取って、ごめんなさい」

「……でも」

「あなたは、わたしの願いを叶えてくれた。なら、わたしもあなたの願いを叶えてあげなきゃいけない」

魔法を使えるようになること。それが、ルイズの希求していたもの。

シユヴルーズの授業で、ルイズは錬金の魔法を爆発させなかつた。失敗魔法が爆発しなかつたのは、初めてのことだった。

それを進歩と見たルイズは、昼食の時間を返上して魔法の訓練を始めた。結果は、系統魔法こそ扱えなかつたものの、様々なコモンマジックを正確にマスターしたのだった。

ルイズはそれについて、今でも夢心地に近いような、信じられない気持ちでいた。

「アルレット。あなたのおかげで、魔法も爆発しなかつた。コモンマジックだって成功するようになった」

それは違う、とアルレットは首を横に振る。

アルレットから有り余った精力を奪われたために、魔法の力加減を覚え、結果的に失敗魔法の爆発がなくなつたにすぎない。コモンマジックはそもそも、アルレットが召喚された際にサモン・サーヴァントとコントラクト・サーヴァントの2つを成功させてい

る。

それでもと、ルイズはなだめるようにアルレットの背中を撫でる。

「分かってる。でもね、もう、嫌なんて言わないから……あなたのこと、拒絶しないから。だって、こうしないと生きていけないんだものね。ごめんね」

アルレットはルイズの肩に顔を埋めた。ルイズはそれを嫌がることなく、やさしく受け止めた。

アルレットが精気を求める理由は、それが不足しているから。

彼女にとってその行為を非難されることは、呼吸を咎められるようなものだった。そうしなければ生きていけないこと。彼女のそばにいるなら、肯定しなければいけないことだった。

不足している理由はわからない。けれど、それを認めてやらなければ、生きている命を否定することにつながってしまう。

ルイズはアルレットを一度でも拒んでしまったことを、後悔した。

「ありがとう、ルイズ。わたしも……ルイズが望むこと、叶えてあげるから」

「わたしが、望むこと？」

「魔法をあげる。ルイズが、本来使うべき魔法。わたしと同じもの」

アルレットはルイズの両目を右手で覆って、瞼を閉ざすように促した。

それから、目をつむったルイズの唇にそつとくちづけをした。触れ合った唇は離れることなく、アルレットはそのまま血で汚れた口元をゆっくりと押し付けていく。ルイズの身体がのけぞろうとするのを大木が妨げた。

アルレットの口内は、血の味がした。それと同時に、ルイズは身体の芯の部分に暖かいものが降りてくるのを感じていた。

血と精力を奪われて消えかけていた活力のようなものが、戻ってくる。貧血の症状もみるみる解消されていった。

まるで水の魔法のようだった。しかしアルレットは杖を持っていない。いったいどんな奇跡なのだろう、と考えずにはいられない。

唇が離れると、アルレットは唾液でべたべたになった赤い口元を手の甲で拭いた。

「ルイズはかならず、すごい魔法使いになる。約束する」

アルレットがルイズの手を引く。

「授業、遅れちゃう。早く行こ？」

「待ちなさい」

そう言つて、ルイズはアルレットの手をほどいた。

「こんな格好で、出られるわけないでしょ」

ルイズはポケットから白いハンカチを取り出して、唾液にまみれた口元を拭いた。生

地の白色に赤がべつたりと付いた。アルレットの口内から移った自分の血液だった。真っ赤に染まった自分の制服を見下ろして、ルイズは頭を抱えた。

## 4話『ふたりの秘め事Ⅰ』

タバサは自身の使い魔を誇りに思っていた。彼女が召喚したのは、すでに絶滅したと言われている太古の幻種、韻竜である。使い魔でも最高位の生物とされる火竜や風竜をも凌ぐ力と知能を兼ね備え、果てには先住魔法まで操ってみせる。並のメイジよりはるかに強力な、まさに規格外の使い魔だった。

しかし、それを見せびらかせて騒がれては困る理由がタバサにはあった。故に、学院内では言葉と先住魔法を封印し、ただの風竜と偽って過ごしていた。

その使い魔が、昼食の時間になっても現れない。自由奔放なのはいつものことであったが、食い意地の張ったあのやんちゃな使い魔が食事をすっぱかしてどこかへ行ってしまうなんて尋常ではない。

学院の裏庭で、タバサはやきもきしながら空を見つめていた。

## 4話『ふたりの秘め事Ⅰ』

ごまかしようのない、血に濡れた制服。

苦肉の策は、シエスタに知らせることだった。アルレットの瞳を覗いた人物は、この学院でルイズとシエスタの二人である。であれば、頼れる人物は限られていた。

「ねえアルレット。どうしてシエスタに目を見せたの？」と尋ねたら「お腹が減っていた」という理解し難い答えを返されたルイズは、わずかに芽生え始めていた独占欲やら嫉妬心やらの気持ちに雑木林の土にまとめて捨てた。

やがてシエスタを呼びに行っていたアルレットが帰ってきた。身を隠していた木の影から出ると、アルレットの手に引かれてやってきたシエスタが、小さく悲鳴を上げた。ハンカチで汚れを丁寧に拭いていったアルレットと違い、口元を少しばかり拭いただけのルイズは、さながら大怪我を負って血まみれになった人間だった。今にも卒倒しそうなシエスタに、ルイズは心の中で平謝りした。

「は、はやく着替えて下さい！」

「まるでわたしがおかしだから格好をしているみたいと言いたい草はやめて……」

ルイズは怯えるシエスタから替えの制服を受け取って、再び木の影に隠れた。

「あれ？ わたし、部屋に鍵をかけたわよね？」

「うん。さっそく、覚えた魔法を使って開けたの」

「……覚えた魔法って？ まさか錬金なんて言うんじゃないでしょうね？」

「まったく失礼な」

ルイズがサモン・サーヴァントとコントラクト・サーヴァントの次に成功させた魔法が、今日の特訓に出かける際に唱えたロックとアンロックだった。傍でそれを見ていたアルレットは、さつそく覺えたとおりにルイズの部屋の扉を解錠したのだった。

決して彼女の考えていた非常識な行動ではない。アルレットは非常識な言動こそするが、考えは真つ当なものがある。ルイズはその非常識な言動に振り回されて、ひどく臆病になっていた。

「わたし、濡らしたタオル持ってきたから、使つて?」

アルレットがそう言つて、ルイズの隠れた木の影に近寄つていく。

「シエスタが、でしよ」

「わたしが持ってきた」

「……そ」

ルイズは木の影から手を伸ばして、濡れたタオルを受け取つた。そのタオルの感触から、アルレットの言葉が本当だとわかつた。メイドがこんなものを持つてくるはずがない。

「なによ、ぜんぜん絞れてないじゃないの」

アルレットの渡したタオルはたつぷり水を吸つていて、ただ持つているだけでもぼたぼたと雫が落ちるほどだった。これでは、廊下の床まで濡らしてしまったに違いない。



そのまま拭いては水浸しになってしまったため、タオルをもう一度絞ってから汚れを吹くことにした。横1メートルほどのそれを四回に折って、冷たい手を我慢しながらぎゅつとひねると、じわりと水が溢れてきた。ワイングラスいっぱいに入りそうな水の量を見て、同じ体格だというのにこうも力に差があるのか、と思う。

汚れを落とすのと、替えの制服に着替えるのを終えて、ルイズはようやく一呼吸つくことができた。

「シエスタ。ちゃんとアルレットに手を貸してあげなさいよね。タオル、びしょびしょだったわよ」

「……申し訳ありません。頑張っているアルレットさまに、水を差したくなかったといえますか」

「これじゃあ水を差すまでもなく水浸しよ」



タバサは読みかけのページに葉を挟んで、読んでいた本を閉じた。持たれていた煉瓦

の壁から身を起こすと、大きく伸びをする。

そろそろ授業が始まってしまふ。主をほっぽり出してどこかへ行つてしまつたのだから、ご飯を抜かれても仕方ないだらう。壁に立てかけた身の丈ほどある杖を手に取ると、タバサはズレたメガネを直して芝を歩き始めた。

そして建物の角を曲がろうという時だった。

女性の小さな悲鳴が聞こえたかと思うと、やわらかくあたたかなものに弾かれて、タバサは数歩後退つた。曲がり角で何かと衝突したのだった。

「なんだ、タバサじゃないの。こんなところに居たのね」

ふたたびズレたメガネを直して、声の主を確認する。

「キュルケ」

弾かれたのはそれか、とタバサは複雑な気持ちでキュルケの胸を見つめる。

「どこ行つてたのよ、心配したじゃないの」

そう言つて、キュルケはタバサの頭を抱きしめた。タバサは今しがた見つめていたそれに圧迫され、苦しさを覚えながらも、認めたくない心地良さに目を細める。一人でいることの多いタバサにとつて、キュルケの温度は微熱のように心地いい暖かさをしてい。ただ、香水やシャンプーのにおいが混じつた独特の女臭さはどうにかして欲しい、と思つた。

「探したのよ。部屋にも図書館にも居なかったから」

タバサは時々学院から居なくなる。親友であるキュルケにも告げず、唐突にふつと姿を消すのだ。それが、キュルケには心配でたまらなかつた。今日もまたどこかへ行つてしまったのかと諦めがちに裏庭を歩いていたところで、偶然にも出会うことができた。

犬みたいに直情的な彼女のスキンシップから開放されて、タバサはふたたびズレたメガネを直した。

「メガネ、合つてないんじゃないの？」

「あなたのせいでズレただけ」

タバサがキュルケのそれを見た。

「あら、ごめんなさい」

そうして二人並んで歩き出す。タバサは己の使い魔のことをすっかり忘れ、自分の顔を圧迫したキュルケのそれについて思い巡らせ、キュルケは無表情のタバサを姉のような眼差しで見守つた。同い年のキュルケとどうしてここまで差があるのか。もう一方は、この子はこんな無表情でどんな小難しいことを考えているのだろうか、と。何かの決まりがあるかのように、決して考えを口に出さない二人だつた。

そんな風に、二人はまったく別の世界に行つていた。こんな出来事が起こるだろうとは、つゆほども思つていなかった。

「お〜ねえ〜さまあ〜！」

その声を聞いて、タバサが固まった。

「あつ！ 間違えたのね！」

二人の背後に降り立った己の使い魔、シルフィードに向かって、タバサは背後を振り向かないまま杖を振り上げた。タバサの身の丈ほどあるそれは、シルフィードの頭にごつんとミートした。

「ぎゅい〜！ ひどいのね！」

そのタバサと同じく、キュルケもまた固まっていた。声のした方を振り向けば、タバサの使い魔である風竜がいた。そして、その風竜が言葉を発していたのだ。

「……………シルフィードって、喋れるの？ もしかして韻竜ってやつ？」

タバサは無言で頷いた。無表情ながらも、キュルケにはわかっていった。これは苦虫を噛み潰した顔だと。

あのタバサをしてそうさせるのだから、シルフィードが韻竜であることは、露呈してはいけないことなのだと察した。

「誰にも言わないわ。ね？ 許してあげて」

「……………わかった」

「ぎゅい〜！ お姉さまのお友だち、やさしいのね！」

「キュルケでいいわよ。シルフィードちゃん」

「イルククウのことは、イルククウって呼んでほしいのね！」

「イルククウ？ わかったわ」

シルフィードはしつぽを振って喜んだ。この学院には主人のタバサ以外に口をきる人物がおらず、日々退屈な思いをしているのが、ようやく解消されようというのだ。

タバサはキュルケの友人思いの硬い口を信じて、シルフィードの失敗を受け入れることにした。

「それで、どうしたの？」

タバサはシルフィードを睨みつけた。どんな重要な要件があつてこんな失敗をしたのか、と責める目だった。

「そ、そうだったのね！ 大変、お姉さま！」

「……なにが大変なの？」

「ううう……怖いのね、お姉さま……」

「そうよー。こんなに可愛いのに」

怯えるシルフィードを、キュルケが頭をなでて慰める。キュルケも竜と言葉をかわすことが新鮮で面白いのか、シルフィードの肩を持つていた。

「キュルケはやさしいのね。お姉さまも見習ってほしいのね」

「……いいから早く」

これだから喋らせたくないのだ、とタバサは苛立ちを覚えながら問いたです。

「そう、大変なのね！ 見ちゃったのね！」

「なにを？」

「さつき、ここでお昼寝してたら、森の方から血の匂いがしたから飛び起きたのね！」

キュルケが驚いた顔をする。対照的に、タバサはその報告を淡々と聞いていた。

「もちろん人間の血！ 怖かったから、空からこっさり覗いたの」

「それで、何だった？」

「あれは吸血鬼なのね！ お姉さまとおんなじ服のちびがやられてたのね！ 今ごろあ

のおちび、死体なのね！」

「案内して」

「きゅいきゅい！」

タバサは杖を握りしめ、雑木林へ向かって歩き始めた。後を追うように、シルフィードが翼を羽ばたかせる。

吸血鬼を放っておけば危ないのは自分の身である。外見上人間と区別の付かない彼らは、気付かぬ間に人の群に紛れ込み、コミュニティを支配する。吸血鬼を退けるなら早いうちに手を打つべきだというのを、百戦錬磨のタバサは経験で知っていた。

「ちよつと、タバサ！ 危ないんじゃないの!？」

「問題ない」

「も、問題ないって、ちよつと!」

死体、という単語に顔を青くしたキュルケは、それでも唇を噛み締めてタバサの後を追った。

そんなキュルケを、タバサは意外そうな目で見つめた。

「付いて行つてあげるわよ。これでも火のトライアングルなんだから」

「危ない」

「それはタバサの方でしょう？ 心配しないの」

「……ありがとう」

タバサはその言葉を聞いて、何があつてもキュルケだけは守ろうと心に決めた。

空のシルフィードを追つて雑木林を進んでいくと、やがて拓けた場所へとたどり着いた。シルフィードが地上に降りて、あたりを見渡す。

「きゅいきゅい？ たしかにこの場所……においもする」

「……いっつち」

タバサがひとつの大きな木の幹に足を向けた。

目を凝らしてみれば、幹の直ぐ側にある土の部分が赤黒く染まっていた。キュルケが息を呑む。タバサは動じた様子もなく、その場でしゃがみこんで変色した土を指で摘んだ。

土を指で擦ると、だまになってぼろぼろとこぼれ落ちた。それが水気を含んでいることはキュルケとシルフィードにもはつきりと感じられた。

「かなりの量。まともに動けるとは思えない」

「それじゃあ……どこに行ったのよ」

「きゅい……遅かったのね」

シルフィードの無駄話が余計だった、とタバサは嘆息した。

「今日中に見つけ出す」

相手はいわば、絶好の餌場を見つけたハイエナだ。ひとつ獲物を得たくらいで消えたりはしない。

この学院にひとり、生徒でも教師でも、使用人でもない人の形をした吸血鬼がいる。そして、閉鎖されたコミュニティの中で異物を見つけ出すのは難しくない。隠蔽もしない相手なのだから、ずっと前から潜伏しているとは考え難い。見当たらなければ聞きこみをして、新顔をあぶり出すだけだ。

タバサは考えを纏め、意を決して立ち上がった。そんな様子を見ていたキュルケは、



小柄で人形じみた容姿のタバサがなんだかかつこ良く見えてくるのだった。

「それで、吸血鬼の背格好は？」

「お姉さまとおんなじくらいのおちびなのね！」

暗に自分をおちび呼ばわりされ、タバサは眉間にしわを寄せた。

けれど、文句を言えばまたシルフィードが騒がしくして場を遅らせることになる。話を進めるため、タバサは耐えた。

「……ということは、制服？」

年の近い使用人、というのは少ない。人の群に紛れるなら、それは生徒の姿をしている可能性が高い。

「なんか、派手なドレス？」

タバサとキュルケはお互いを見合った。

「……それは」

「……そうね」

二人はその派手なドレスを、今朝の食堂で見ていた。

「あれ、演技だと思おう？」

「思えない」

「じゃあ捕まえるのも簡単なのかしら？」

「おそらく」

吸血行為も、場所を雑木林に選んだだけで隠蔽もできていない。先住魔法は脅威だが、押せば泣くような細い少女。頭も力も無いなら組み伏せてそのまま縛ってしまえばいい。

タバサとキュルケは、シルフィードの証言だけで肩から重荷が降りたような気分だった。

それでも表情は明るくない。今度は、主であるルイズの身が心配になるのだった。

「演技ってなんの話！ 二人だけずるいのね！」

シルフィードがしつぽを縦に振った。どうやらのけ者にされているのが気に食わないらしい。

「ルイズが召喚した使い魔がそんな格好してたのよ。しかしまあ、あのルイズが吸血鬼なんてものをねえ……」

「手綱を握れないなら持ち腐れ」

「そのルイズって誰なのよ！ きゅい〜！」

自分はシルフィードの手綱を握れているだろうか。もしかすれば、人のことを言えないかもしれない。タバサは思った。

## 5話 『ふたりの秘め事Ⅱ』

女子というのはどうにも群れたがる生き物だ。買い物をするにもトイレへ行くにも誰かと行動する。仲間外れ、という言葉葉を蛇よりも恐れるのだ。

しかし、貴族としての誇りを胸に育った淑女は違う。ここトリスティン魔法学院は紳士淑女を教育する場であり、例えばキュルケやタバサのように一人でずんずん自分の道を進んでいく人間に対して、周囲の人間は仲間外れなどと蔑んだりはいしない。それは仲間外れなのではなく、人とは違う特別な道であると尊重し、誇るのだ。

では幻の古代種、韻竜としての誇りを胸に育った彼女はどうか。

「仲間外れなんて許さない！ わたしも連れていくのね！」

人間の姿に変身し、キュルケの制服を借りたシルフィード——イルククウは、主人の頭を大いに悩ませるのだった。

### 5話 『ふたりの秘め事Ⅱ』

教室では授業が行われているころ、捜査隊は人のいない廊下を歩いていった。

「それで、被害者の背格好は？」

「うくん。吸血鬼のおちびと同じくらいおちびだったのね」

「分かることは、それだけ？」

「おちびがおちびに覆いかぶさってておちびが見えなかったのね。たぶん」

おちび、おちびと言葉を繰り返すイルククウの主、『雪風のタバサ』の眼差しは凍てついていた。

人間の姿になったイルククウのスタイルは抜群であり、キュルケとイルククウに挟まれて歩くタバサはまるで分厚い両壁に囲まれた気分だった。

「たぶんって？」

タバサの問いにイルククウは目を閉じ、うんうん唸って考える。覆いかぶさって見えなかったとは言いが、実のところイルククウはその被害者の姿をぼつちりと見ていた。その姿を忘れてしまったから、ていのいいように覆いかぶさって見えなかったことにしたのだった。

結局、イルククウは考えても思い出せなかったの、開き直すことにした。

「たぶんはたぶんなのね！ きゅいきゅい！」

「わかった。あなたはもう当てにしないから」

ふい、とイルククウからそつぽを向く。キュルケはタバサらしからぬその仕草を疑問

に思った。

「待つのねお姉さま！　すぐに思い出すのね！」

「なんだ、見てたんじゃないの」

キュルケの指摘にイルククウはうぐ、と声を上げて口元を両手で覆った。

「思い出して、被害者の姿。大事なこと」

「うう……お姉さまは当てにしないって言った。騙したのね……」

「嘘をつくのが悪い」

なるほど演技か、とキュルケは納得する。

知能レベルの差でいいように遊ばれているようにも見えるが、元はといえばイルククウが捜査を遅らせるのが悪いのである。彼女自身もそのことに気付いていたが、どうしても素直になることが出来ないのは、彼女が寂しいのとお説教が嫌いな甘えたがりだからだった。

「あの場所、あの時間、あの出血量……加害者も被害者も、人の多い方へは行けない。

つまり……授業のある教室付近と、使用人のいる場所へは近づけないことになる」

タバサはメガネをくい、と持ち上げる。

「空き教室を風潰しに回って、血痕一つ見当たらなかった。この棟に潜伏している可能性は限りなく、ゼロ。

つまり……残るは、学生寮」

「……タバサ、楽しんでない？」

ふい、と顔をそらす。

「そんなことない」

頬がわずかに朱に染まった。今度は演技ではないのだろう。キュルケは、そんな親友の姿を見て嬉しくなるのだった。

学院を回りに回ってから、ようやく訪れた寮。授業で生徒が出払っているため、建物内はしんと静まり返っている。この真つ昼間に身を隠すなら、この場所以外にありえない。タバサはへとへとになった足をかばいつつ、いよいよ確信した。

「怖いよ、お姉さま……」

イルククウがタバサの腕を取って、身を縮こませた。

昼の静まりかえった寮の姿を知っているイルククウも、そこに吸血鬼が隠れ潜んでいるとなれば、この静けさが恐ろしいものに感じてくるのだった。

しかし、タバサは顔色を変えず、堂々と廊下の真ん中を歩いて行く。

「妥当に考えるなら、ルイズの部屋」

「……そうよね。あの子の死体が転がっていなきやいいけど」

本人が聞いたら怒り出しそうな言い草で、キュルケが不安げにつぶやいた。

何事もなく目的の地まで辿り着く。キュルケの自室の隣、ルイズの部屋の前で立ち止まった。

「ハハハ。」

「しずかに」

首を傾げるイルククウに、キュルケが人差し指を唇に添えた。

タバサが扉の前に膝をつき、目を閉じて耳を澄ませる。魔法には、遠くの音を拾うことができるものがある。しかし、タバサはその魔法を用いず、音に敏感と言われる風のメイジの優秀な聴覚に頼った。

「……わからない。少なくとも、動いているものはない」

「魔法を使えばはつきり分かるんですよ？」

扉を離れ、捜査隊は小声で話し合う。

「気付かれるかもしれない。もしかしたらトラップがあるかも」

「……あるわけないじゃない、そんなの」

「先住魔法をなめちゃダメ」

キュルケの聞きかじった先住魔法にそんなものはなかった。さらに言えば、先住魔法を扱えるイルククウも同様だったが、彼女は必要以上に怯えていた。

「お、お姉さまの言うとおりなのね、油断は大敵なのね」

「じゃあなにタバサ。不意打ちとかしてみるのは？」

「……なるほど名案」

「これって名案……なのかしら」

キュルケは苦笑する。そもそも、音がしないのなら中に誰も居ないのでは、と思っていた。

珍しく活き活きとしている親友に付きやってやる程度の心持ちで、作戦を提案する。

「まあいいわ。タバサがエアハンマーで扉を飛ばした後、わたしが影から躍り出てフレイム・ボールを突きつけるわ。」

そこから、怯んだ相手をイルククウが取り押さえて身動きできないようにする。これでいいかしら？」

タバサは無表情で、イルククウは覚悟を決めた顔で頷いた。

拍子抜け、というほど期待していなかったキュルケも、気が抜けたように肩を落とした。扉の修理に疲れた、というのもあるかもしれない。

ルイズの部屋が外れなら、一体どこへ行ったというのだろう。捜査は行き詰まって、やがて日が傾き夕暮れどきになってしまった。



教室のある棟から生徒たちがぞろぞろと出てきて、寮へ向かっているのが見える。

中庭の芝にぐったりと座り込むイルククウと、難しい顔で考え続けているタバサに、キユルケは掛ける言葉が見当たらなかつた。仕方ないので、通りがかつた仕事中のメイドに聞きこみをすることにした。

「ねえあなた」

「わ、わたしですか？」

「ええ。この辺りで、不自然な血痕とか見かけなかつた？　それか、怪しい人物」

「ええっ!？」

そのメイド——シエスタは、手に持っていた木箱を取り落として驚いた。それはもう、天地がひっくり返つたような驚きようだつた。

木箱に入っていたりんごたちがごろごろと転がっていく。その一つが座り込むイルククウの手にあつた。りんごに気付いたイルククウは、それを呑気に食べ始めた。とても幸せそうな笑顔だつた。

シエスタは額に汗を浮かべた笑顔でりんごを拾い集め、木箱に戻した。

「さあ？　存じ上げませんが」

「そ、そうかしら。突然変なことを聞いて、ごめんなさいね？」

「いいえ、それではわたし、失礼しますね？」

「え、ええ、どうぞ?..」

メイドはいかにも重そうな木箱を持って、すたすたと素早く去っていく。

あれは触れちゃいけない笑顔だった。触れてしまうのは可哀想だった。キュルケは引き止めることができずに、メイドの後ろ姿を見送る。

「怪しい」

「え、ええ。そうね」

「問い詰めないと」

「……いいのかしら」

「わたしがやる」

「あ、そう。助かるわ」

タバサとキュルケはメイドが向かった方角にある、学院の厨房へ向かった。イルククウはタバサらが移動しているのに気づかず、いつのまにやら懐にたくわえたりんごをその場で頬張っていた。

「ええ、黒髪のメイドですかい?」

「そう。どい?」

「シエスタのことなら、ヴァリエール嬢の使い魔の世話があるってんで、寮の方へ行っちゃいましたか」

マルトーの話の聞くと、二人は駆け足にUターンして中庭へ戻った。立ち上がったオロオロと辺りを見渡していたイルククウが、二人の姿を認めると腰に手を当てて鼻息荒く怒りだした。マシンガンのように放たれる文句の言葉を無視し、手を引いて寮へと足を向ける。

シエスタの行く先に、ルイズの使い魔がいる。今がチャンスだ、とタバサは張り切っていた。



シヤク、シヤクとりんごを咀嚼しながら、アルレットはチェスを打っていた。相対するのはルイズの白の駒。長いまつげを揺らしながら、真剣な眼差しで的確な一手を積み重ねていく。

「ところであなた、魔王なのになんかこんなところで大丈夫なの？」

ルイズが素朴な疑問を投げかける。王を名乗るならば、玉座にいるべきではないのか。魔王というのも平穩な学生寮には似合わない名前だと思う。

「この局面を見るがいい。勝利に、キングは必要ない」

盤面はアルレットの圧倒的優勢だった。黒の駒が、白の駒を食いつぶしている。

最後に白のビショップを盤上から追い出し、アルレットは高らかに宣言した。

「チェックメイト」

「あーあ、つまらない。わたしの負け」

そう言つてルイズはテーブルに置かれたワイングラスにフォークを伸ばし、四角くサイコロ状にカットされたりんごを突き刺す。

二人分の紅茶と、りんごの盛りつけられたワイングラスを持ってきたのは、傍に控えるシエスタだった。ほとんどアルレットの専属のメイドになつたと言つてもいい扱である。

アルレットもルイズと同じように、りんごを口にした。十分に咀嚼して飲み込んでから、口を開く。

「ゲヘナの大陸でも、同じこと」

フォークをグラスの中にあずけ、チエス道具を収納する黒いケースに盤上の白い駒をしまい始める。

チエスの盤上に残つたのは、黒の駒だけ。そしてアルレットは、黒のキングをつまみ上げた。

「黒と白は、はっきりと分かたれた。ゲヘナには魔族しかないし、別の大陸には人間しかない」

アルレットはさらにケースに入った白のキングをつまみ上げて、テーブルの上に黒のキングと共に並べ立てる。

チェスの盤上には黒い駒、収納ケースには白い駒だけが並んでいる。キングが盤上、ケースのいずれからもしき出されていようと、そこに支障は生じない。黒と白は決して交わることはない。

「もう全部、終わったこと。ひとつの大陸を犠牲にして、人間は魔族から逃げ延びた。魔族もまた、安寧の地を手に入れた」

「ふうん」

ハルケギニアにも始祖ブリミルの複雑な歴史があるように、アルレットの居たゲヘナという地にも同様に歴史があつたのだろう。

「まあ、よく分からないけど」

アルレットは人間だろうか、魔族だろうか。どちらとも言えないアルレットの居場所はどこだろう。ルイズの中には、そんな考えが浮かんだ。

けれど、アルレットは「終わったこと」と言った。なら蒸し返す必要もない。

アルレットはワイングラスのフォークに手をのばして、サイコロ状のりんごを口に入

れる。その様子を眺めながら、ルイズが呟いた。

「お夕飯、食べられなくなるわよ？ そんなにりんご食べてたら」

「わたし、すぐにお腹が減るもの」

「あなたの食べ残しなんて食べてあげないから」

「……キスはいいのに？」

「そういう話じゃない」

ルイズはアルレットの食べ残しに手を付けることに対して抵抗はなかった。もつと単純に、胃の大きさの問題がある。ルイズと同じく胃の小さいアルレットは、つまらなさそうな表情でしぶしぶフォークを置いた。

ルイズがちらりとアルレットの側仕えへ視線を移す。ハルケギニアでは珍しい黒髪を肩口まで伸ばした、そばかすの愛らしいメイド。柔らかな表情で二人のやりとりを見守っているが、そのやりとりの内容にルイズは気恥ずかしさを覚えていた。

このメイドは、どう思っているのだろう。キスだとか魔王だとか普通じゃない言動の一つ一つと、それを受け入れている自分について。せめて、使用人の間に妙な噂を作るのだけはやめて欲しい。

ルイズからそんな風に見られていたシエスタは、まったく別のことを考えていた。それはアルレットの態度についてだった。

ルイズと会話するときだけ、素のアルレットが現れる。シエスタにあるのは、嫉妬と羨望だった。アルレットの主観には貴族と平民に違いはないことを理解しており、それは彼女の瞳を通して得た事実である。だからこそ、対等な一人の人間として湧き上がる感情があつた。

「アルレットさま。ものたりないのでしたら、甘いアップルティーを用意いたしましたしよ  
うか？ それならお腹にたまることもありません」

アルレットの表情が明るくなる。シエスタはそれより何倍も明るい表情になった。

「早く」

「承知しました。わたし、急ぎますね」

言葉通りに、テーブルのティーセットを抱えて忙しく部屋を後にする。

「シエスタって、あなたのこと好きなのね。一体彼女になにをしたの？」

「……うーん、厨房に案内してもらった？」

「その話はもう聞いた。お腹へってたんでしょう」

「そうそう」

「そういうのじゃなくて……好きになるにも理由があるでしょ」

うーん、とアルレットは考える。

「わたしはシエスタの、純朴で優しいところと、水仕事で荒れてる手が好きかな」

「別に、あなたのことは聞いてないけどね」

しかしルイズは、なるほどと思った。あの瞳の奥を覗いて、覗かれた。過ぎた時間や行動ではなく、その人の中身を好きになったのだと、シエスタと同じ経験をしたルイズには分かった。

「そんなことよりルイズ。わたしが勝ったから、約束は守って？」

「はいはい。それで、どうしたらいい？」

チエスで勝ったほうがひとつ言うことをきく。

それが暇を持て余していたアルレットの発案だった。使い魔の手綱を握りやすくするチャンスだとルイズは勝負を受けて立ったが、結果は惨敗に終わってしまった。魔王をやっていたただけあってアルレットの指揮は相当に手ごわかった。

アルレットは席を立てルイズへ歩み寄り、その手を取る。

「こっち」

ルイズを立ち上がらせると、そのままベッドへ押し倒した。黒いリボンのローファーを無造作に脱ぎ捨てたアルレットが、ルイズへ覆いかぶさる。

「ちよつと……まっつてよ」

「シエスタが戻るまで口きみしいから」

昼間、あんなに吸われたのに。これ以上はきつと耐えられない。心臓が血液を送れな



くなってしまう。

ルイズは怯えた目でアルレットを見た。アルレットの白くて小さい手が、ルイズの前髪を撫でる。潤んだ瞳にキスをした。

「大丈夫」

「それって——」

今度は、唇へキスをした。アルレットは舌を伸ばして、口内の薄い粘膜からルイズの命を奪っていく。

命と言っても、回復するもの。今失っても問題ないものだった。ルイズは安堵して、アルレットの行為に身を任せた。

ルイズは徐々に意識が遠のくのを感じていた。心地の良いまどろみに身を任せて、アルレットの体温に包まれる。

それから、何かがルイズの中に何かが降りてきた。心地よくて暖かいものだった。雑木林でされたことと、ほとんど同じだった。

ルイズの意識が、またはつきりしてこようかという時。

——部屋の扉が、暴風によって勢い良く開いた。

部屋に轟音が響いて、アルレットのドレスがばたばたとたたく。風がルイズの首筋を強く叩いた。これは、風の魔法に違いない。

しかし、アルレットは行為をやめない。アルレットに覆い被されたルイズには、何かなんだか分からなかった。赤と黒のドレスの向こう側には、三つの人影が見える。

「そこまでよー！」

聞き覚えのある声と、ぼうぼうと炎が燃える音がする。あれは火の魔法に違いない。それでもアルレットは行為をやめない。

「その子から離れ——」

ごう、と再び暴風が吹いた。今度は逆方向の風だった。

風圧によって三つの人影が部屋の外へ吹き飛ばされ、そよ風とともにぱたんと扉がしまる。そして最後に、ガチャリ、と鍵が施錠される音がした。

今度ははっきりと分かった。アルレットが風の魔法を使ったらしい。

部屋がとたんに静まり返る。

ルイズは思った。ああ、終わった、と。

行為をやめようとしないうアルレットを引き剥がして、ルイズは身を起こした。

「今……誰か、来たわよね」

「そう？　気のせいだと思う」

アルレットは怪訝そうな顔で首を傾げる。

「絶対来たわ。来た」

「来てないって」

「じゃあどうしてワイングラスが倒れてるの？」

テーブルの上を見ると、そこには倒れたワイングラスからりんごがこぼれていた。チエスの駒も横倒しになっている。

「さあ……元からじゃない？ それより続けよう？」

「とぼけんじゃないわよ！」

「いだっ」

ルイズの手刀がアルレットの額にヒットした。アルレットはその箇所をさすると、不満そうにベッドへ寝転がる。シーツにプロンドの金色が広がった。

ルイズはベッドに腰掛けて大きくため息を付く。それから、見られた、見られた、見られたと何度もつぶやき、両手で顔を覆ってうめきだした。

騒いでいたわけでもないし、鍵もかけてあった。バレる要素なんて、どこにもなかった。

どうしてこんな目ばかりに遭うのだろう。不満気なアルレットを見て、こつちがふてくされたいわ、と思った。

## 6話『ふたりの秘め事Ⅲ』

歴史は繰り返す。過ちを繰り返す。連綿と続く血が、遺伝子へと刻むのだ。もちろんのこと、ヴァリエールの遺伝子にもそれは刻まれていた。

## 6話『ふたりの秘め事Ⅲ』

「あ、あのー、ルイズ……？ さっきは、お邪魔だったかしら？」

ルイズがベッドの上で呻いていると、再び扉が開いた。キュルケとタバサと、もう一人、ルイズの知らない学生服の少女が、影から恐る恐る顔を出す。アルレットの風の魔法で吹き飛ばされたためか、三人とも髪が乱れていた。

「きゅい！ このおちびなのね、雑木林で食べられてたのはー！」

「誰がおちびよ、失礼ね」

見知らぬ少女の放った雑木林という言葉に、ルイズはぎくりとした。そして、おちびという単語も聞き逃していなかった。

「それでルイズ、身体は大丈夫なの？」

「まあ、うん」

「……で、なにやってたの？」

答えに窮して、ふて寝する使い魔を見やった。まるで役に立ちそうにないことを察したルイズは、仕方ないと嘆息した。

「この子が、ちよつと節操なくてね」

誤魔化すように、答えになっていない答えだった。ルイズはそうする以外になかった。

タバサとキュルケはイルククウの証言とあの場の血液の量からルイズの身を案じたものの、今の様子は血色もよく健康そのものだった。秘薬を湯水のように使い、水のスクエアメイジが治療したのだろうと強引に納得する。

「彼女、吸血鬼なの？」

「……えーと、違うんだけど似たようなもの？　そうよねアルレット」

「違う。余はまお——」

ルイズは急いでアルレットの口をふさいだ。もごもごと抗議するも、彼女の細腕ではルイズの手は解けなかった。

「なんでもないわ。吸血鬼と似たようなものよ」

「そ、そう……人を襲ったりはしてないわよね？」

「わたし以外にはね。そこは安心して」

「ならいいんだけど……よくないんだけど、気をつけなさいね？ ルイズ」

「あはは……そうね」

哀れみのこもった眼差しに、ルイズは乾いた笑いで返すしかなかったのだった。

そして、ようやく戻つたらしいシエスタが三人の影からひよつこりと顔を出す。

「あら？ ミス・ヴァリエール、ご学友ですか？」

「あら、あなたはさつき」

「あ——」

キュルケとシエスタが見つめ合う。シエスタは苦笑して、何事もなかったように部屋へ入っていった。

カップに注がれる液体へ吸い寄せられるように、アルレットがテーブルの席へ着いた。目の前に用意されたアップルティーを優雅な仕草で飲む。なんとも微妙な空気の中でほっと息をつくくと、部外者の三人へ向かって言い放った。

「そこへ直るがいい」

有無を言わせぬ無表情の貫禄に三人は従い、アルレットの席の向かいに並び立つ。単に、この空気の中になにもせず立ち尽くしているのが気まずいというのもあった。

アルレットは動揺する三人の顔を泰然と眺める。

「そののは、以前余に杖を向けようとした愚か者だな」

アルレットがタバサへ視線を送る。

タバサは目をそらした。召喚の儀で、ただならぬ気配に思わず杖の柄を握ったのが知られていた。

間髪入れずに、アルレットの視線が右へ移る。

「その隣は、雑木林で覗き見をしていた竜ではないか。なんたる無礼」

三人の表情が驚愕に染まり、ルイズとシエスタは耳を疑った。

さらに視線が右へ移り、キュルケが息を呑む。

「おまえ、今日はサラマンダーを連れておらんか。気を利かせよ」

「……え、ええ。そうね」

キュルケはひとりほっとした。

「それと、先ほどの会話について弁明しておこう。余は理性なき獣ではない」

ルイズがアルレットのことを「節操がない」といった件だった。アルレットがティールカップをソーサーに置いて、ふんぞりかえる。

うそをつけ。ルイズは間髪をいれずに心のなかで突っ込んだ。弁明にしてはまるで根拠にかけている。

「度重なる非礼を不問にしてやろう。そのかわり——」

「……そのかわり?」

勿体ぶるアルレットに、イルククウは目を泳がせながら恐る恐る尋ねる。

「余にかしづくがいい」

三人は呆然と顔を見合わせた。

アルレットの魔法によつて一度は部屋を追い出され、髪をボサボサにしている彼女たちである。彼女に対しては、強力な先住魔法を扱う巫人、という認識だった。威圧感もあれば、下手に刺激しては身が危ないとの考えがあつた。

しかし、貴族や韻竜のプライドは、時に命の危険よりも先立つ。どうしたものか、と沈黙する。

やめさせよう、とルイズがため息混じりに立ち上がろうとするも、その前に空気を讀まないメイドがいた。

「アルレットさま。美しい髪が乱れてしまつています」

シエスタが機の引き出しから無断でルイズの櫛を取り出して、アルレットのブロンドを梳かしはじめた。ベッドに寝転んだ際に、わずかに絡まつてしまつた後ろ髪を直していく。

学院の使用者が、生徒である自分たちよりも目の前でふんぞりかえるアルレットを優先した。タバサとキュルケは啞然とする。しかし、使い魔であるイルククウはぼーっと



それを眺めているだけだった。

「うむ。ありがとう」

「いいえ。いつでもお美しい魔王さままでいて欲しいのです」

タバサが「魔王」という言葉に反応する。それは、シエスタが意図して選んだ言葉だった。

そして、アルレットが召喚された際に、タバサとコルベールの耳にだけ届いた言葉でもあった。

「魔王、というのは？」

「あのね、ちよつと痛い子なの。この子。気にしないで」

ルイズがベッドの上から投げやりに答えた。

「そんなこと。アルレットさまは、異国の王さまなのですよ」

「……シエスタ」

学院に入ってから使用人に意見されたのは、ルイズも初めてのことだった。このメイドはこんなに粗相ばかりして左遷されたりしないのか、と不安になる。

シエスタといえば、髪を梳くのも、ルイズの言葉を正すのも、アルレットが軽視されるのが我慢ならないと行動した結果だった。

「ま、魔王って、本当？ お姉さま……やつぱり、従わないと食べられるのね……言うと

おりにかしずくのね……」

「吸血鬼とか魔王とかもそうだけど、主人に向かつてかしずけと言う使い魔もそうそう居ないわよねえ」

タバサの腕にイルククウがすがりつく。

タバサは身体を揺らされながらも無表情に、同じく無表情で佇むアルレットへと相對していた。かたや感情をうまく表現できない故の無表情と、かたや相手を威圧するためにある無表情だった。

もちろん、タバサが表現できていないのはイルククウへの苛立ちだった。

「それで、異国って？」

「ハルケギニアではない場所だ」

「そこで魔王だった？」

「そう。ただ一人、魔族の地を統べる者が呼ばれる、栄誉ある名だ」

「……そんなの、信じろって言われて、かしずけなんてねえ……」

「待って」

キュルケが不満を漏らすのを、タバサが制した。

「韻童を使い魔にしても、あんな先住魔法は知らない」

「童とはまた違うんじゃないの？」

「お姉さま、あれは系統魔法なのね！」

三人の中で唯一、魔王という言葉を受けていたイルククウが、凶らずも二人の認識を改めさせた。イルククウをそうさせるのだから、ことはエルフを相手にする事態にも匹敵するかもしれない。

「それでも、かしくなくてごめんよ！」

キュルケは貴族だった。そんな様子を見て、タバサも頷く。

「お姉さま〜！ お願い、かしくいて！ キュルケも〜！」

「無理」

「酷いわね、イルククウ」

タバサはさすがのイルククウを冷酷に引き離す。イルククウは涙目になっていた。

「ならば仕方ない。力で服従させるしかないようだ」

タバサとキュルケは手汗をかきながら杖を握りしめた。

ベッドに腰掛けて無気力に事態を傍観していたルイズが、いよいよ立ち上がってアルレットに歩み寄る。

「ど、う、し、て！ そうなるの！」

席に座るアルレットの後ろから、両頬をつねった。なんと恐れ知らずな、と震えるイルククウと対照的に、ルイズは引きつった笑みで青筋を立てている。

「いふあい！ いふあい！」

「痛い？ 痛いわよね？ じゃあもうやめなさい。いい？」

「わふあつた〜！」

三人は何が起こつたのかわからない様子で、呆然とその光景を眺めていた。

ルイズの手が離れると、シエスタは急いでハンカチを取り出し、涙目になったアルレットの瞳を優しく拭つた。その姿は妹を心配する年の離れた姉のようでもあった。

「それとあんたたち、さっきのことは黙ってなさい！ いいわね！」

「ベッドでしてたこと？」

「そこ、言葉にしなくていい！」

タバサに向かってびしつと指をさす。にやにやと笑っているキュルケに関してはなんとか怒りをこらえて踏みとどまった。事態の收拾が目的であることをルイズは忘れていない。同じ過ちを繰り返したルイズは、痛烈にそれをかみしめていた。

「それでアルレット。本当はどうしたいの？ あなたの言葉で聞かせて」

「……部下がほしい」

「部下、ね」

元の世界では、アルレットと対等な立場にある存在がなかったことを、ルイズとシエスタは知っていた。部下という言葉も、本来の意味で使われたのではないことを理解し

ていた。

「アルレットさま。そういう時は、お友達になってください、と言うんですよ」

アルレットの脇に控えたシエスタがにっこりと微笑む。

ひとりでこの場所を訪れたアルレットには、ルイズ以外に親しくできる人間がない。まるでこの学院に雇われたばかりの頃の自分だと、シエスタは思った。

ルイズにつねられたからか消沈した様子 of アルレットだったが、シエスタがその場で身をかがめてアルレットの手を取ると、見るからに表情が柔らかくなった。

「わたしがついてます」

「うん……わかった」

シエスタが三人の方を見た。その時、シエスタは「うむ」ではなく「うん」というアルレットの返事に歓喜していた。だから、どうか断らないで、というような鬼気迫る懇願の眼差しを送っていた。

「お友達になって……ください？」

疑問符の付いたような言葉だったが、それもかしげ、なんてものよりずっと伝わる言葉。しかし、状況がわからず首を傾げるタバサ、まだ引け腰のイルククウ。

アルレットの言葉に答えたのは、キュルケだった。

「そうね。うちのフレイムちゃんと遊んでくれる？」

「言われなくても遊ぶ」

「じゃあ、部下ではないけど、いつでも遊びに来ていいわよ」

「うむ」

「ほら、タバサ。イルククウも」

タバサはどうしたらいいかわからない様子だった。どうすれば友人として接することができるか、どう応えてやればいいのか。生真面目な性格から、無責任に頷くことに抵抗があつた。

ルイズが、アルレットの表情が曇り始めていることに気付く。

「ねえ。割り込んで悪いんだけど、その子ってシルフィードなの？」

タバサを慕っている少女に対して、アルレットが竜と呼んだ時、三人が一緒に動揺した。先住魔法には姿を変えるものもあるという。であれば、彼女はタバサの使い魔であるシルフィードなのでないかと予測を立てた。ルイズの言葉に、三人がまた一緒に揃って視線をそらした。

案の定の反応にしめた、とほくそ笑む。切実な目的のために頭をフル回転させているルイズだった。

「黙っててあげるから、頷いてあげて。ね？」

「……ルイズ。黙っててあげるのは、こっちも同じじゃない？ ベッドのこと」

「勝手に言えればいいじゃない。もうさんざん恥ずかしい思いしたものだ。この子は隠す気さらさらないし。覗き見されてたのに気付いてて言ってくれないし。知らないわ、勝手にしなさい」

キュルケは何を言うのにも無駄だと悟り、諦めて引き下がった。

機微に疎いタバサもルイズの放つ黒いオーラに気付いたのか、どうすればいいかわからなくてもとにかくやるしかないと言った。シルフィードの正体は、普段からちよつとやそつとじゃ動じないタバサにとつても致命的な弱みだった。

「期待に添えるか分からないけど、分かった」

「よし、次」

強引だけど、まあいいかとルイズは頷く。キュルケのように、ゆつくりと関係を築いてもらえればいい。

今度はイルククウに対して視線を向ける。

「きゅい……お姉さま」

「ダメ」

「でも、でも、魔王」

「あなたなら平気」

「無理なのね〜！」

イルククウは幻の古代種、韻竜である。それ故にプライドも高く、召喚されたばかりの頃は主人であるタバサにすら見下した態度を取っていた。理由は、おちびだから。タバサとそう変わらないアルレットも見下すかとおもいきや、野生で育った生き物というのは力の脅威に敏感だった。

「キュルケの使い魔とも仲良くしてたじゃない。どうしてできないの?」

「……ルイズが嫌がるから」

「わたしが?」

「人間の目を見るのを」

「……もう」

フレイムとの意思疎通は、瞳を通して行った。けれど、イルククウは人の姿をしていない。アルレットの瞳を覗いたシエスタに嫉妬するルイズの表情を、彼女はきちんと覚えていた。

言葉は少なくとも、ルイズはアルレットの話す意味をきちんと汲み取ってた。それと同じように、ルイズのことならばアルレットも汲み取れる。それは、アルレットの瞳を通してお互いを知っているからだ。

もつと別のところに敏感になってほしい、とルイズは思う。例えば、盗み見されていたらなら場所を変える、とか、もつと人目を気にしてほしいとか。我が強くて、欲望に素



直なアルレットに求められることではないけれども。

ルイズはアルレットを立ち上がらせ、肩を押してイルククウの前へ押し出す。

ちようど、向き合う形になった。アルレットは身長差のあるイルククウの顔を見上げる。怯えた萌木色の瞳が揺らいだ。それを、アメジストを埋め込んだような双眸がとらえる。

言葉を紹介すとも、互いを覗き見ることが出来る悪魔の瞳。それが人であろうと、魔族であろうと、竜であろうとかわらない。

徐々にイルククウの表情が柔らかくなるのを、その場にいる全員が見守っていた。

「アルレットさま、よかったですね」

「さ、これで満足したでしょ？」

シエスタとルイズの言葉に、アルレットは頷く。そんなやりとりを、明るい顔でイルククウがじつと見つめる。

これで事態は収拾した。目的は果たされたと、ルイズは再びベッドへ腰掛けて、大きく息を付いた。

しかし、ルイズは過ちを犯したことに気付かない。

「きゅいきゅい！　これから魔王さまとたくさんおしゃべりするのね！」

身体を倒してぐったりとしたルイズに、タバサとキュルケは気の毒そうな視線を向け

ていた。

「あー……ルイズ」

「なによ」

「どうしてか使い魔同士通じ合ったみたいだけど、その子、おしゃべりだから気をつけてね」

「知らないわよ、わたしが話すんじゃないから」

「……二次被害」

タバサとキュルケは不穏な言葉を残してさっさと部屋を出てしまった。残されたのは、ルイズとシエスタ、それから使い魔の二人。

それから、ルイズが怒鳴りつけて首根っこを掴むまでイルククウは部屋に居座り、おしゃべりというなの騒音を鳴らしつづけた。怒鳴られた理由は言うまでもない。

## 7 話 『浮気男』

不倫。三角関係。痴情のもつれ。

多くの場合、部外者にとつて面白い見世物として扱われる。人間という生き物は野次馬根性を備えて生まれてきたようなものだ。人間模様の描いた小説が好かれるように、他人の恋愛が面白おかしくもつれるのを楽しみながら眺める。

しかし、その裏にあるのは泣いて苦しむ一方の親と、両親の仲違いと離別を見せつけられる子どもだ。特に、幼い子どもにとつての両親は世界のすべてである。夫婦が愛しあうよりもずっと深い感情が向けられていることは間違いない。

モンモランシー・マルガリタは同級生のギーシュと交際をしている。そして、彼の女性に対してのみ発揮される気立ての良さもよく知っていた。将来貴族として成功したならば、相当な好色家になるだろうというのも想像がついていた。

それでもモンモランシーはギーシュを好いて、いずれは将来を約束する仲になりたいと考えていた。

真つ青な空の下。暖かな春風が心地よい中庭で、生徒たちの茶会が行われていた。

なんでも、紳士淑女を育成する授業の一環らしいが、監督者が居なければ意味がない。例えば、彼女なんかがいい例だった。

「きゅいきゅい！ シエスタのクッキーは美味しいのね！」

円状の白いテーブルに食べかすをぼろぼろとこぼしながらイルククウは言った。

クッキーの入ったバスケットを、「アルレットさまのために焼きました」という言葉と共に残していったシエスタは、現在生徒たちの給仕に追われている。それ故に、そのクッキーの半数がイルククウの胃の中に収められてしまったことを知らない。

それもそのはず、体裁を気にしたアルレットは王室もびつくりするほど行儀がいい。行儀が良ければ、イルククウのクッキーを食べるスピードについていけない。このままではアルレットの食べる分がなくなってしまうので、同じテーブルを囲むルイズ、キュルケ、タバサは遠慮してほとんど手を付けていなかった。

「静かにしないとご飯抜き」

「ふふん。魔王さまにもらうからヘーキなのね」

タバサは頭を悩ませていた。自分のために焼かれたクッキーが横取りされようとも、アルレットは怒りもしない。有り体にいえば、アルレットはイルククウを甘やかしてい

た。

「……ごめんなさい」

タバサが気まずそうにつぶやいた。その言葉は、必ずしもクツキーを横取りされたアルレットに対してのものではない。

イルククウの騒がしさが、このテーブルの注目を集めていた。

「まあ……この子のわがままでもあるから」

「あんたたち、大変な使い魔を持ったわね」

イルククウの同席は、アルレットの頼みでもあった。正確には、イルククウのわがままをアルレットが勝手に許した、というところではあるが、最終的に判断を下したのはルイズとタバサである。

ヴァリエールであるルイズがツエルプストーのキュルケと同席しているのもそのためだった。

「もういつそ、バラしたら？」

「それは無理」

「でも、見ない顔があるんじゃないか嗅ぎつけられるわよ」

キュルケの言葉はもつともで、イルククウがすでに学院の生徒ではないことに気付いてあれこれと推測を立てている生徒もいた。

「……二度目はない。大丈夫」

「同じ轍は踏まぬ、か。ルイズも見習うといい」

「つねるわよ」

「……なんで」

「そのくらいわかりなさいよ、まったく」

つねられるのがよほど嫌なのか、アルレットは口を閉じる。それを見たルイズは勝ち誇った表情で紅茶を口に含んだ。

「行儀よくしないとつねる」

「お姉さまの細腕じゃ痛くもなんともないのね」

「……そう」

タバサとイルククウのやりとりにも、キュルケがくすくすと笑った。

ご飯抜き、の脅しが通用しなくなった今、タバサに切れる手札はなかった。

「後ろめたいことがないのは知っている。なら、堂々としていい」

アルレットは堂々という言葉を体現するような、流麗な所作で紅茶を口に含む。

彼女が言うからには、タバサがイルククウの正体を隠すことに後ろめたい理由はないのだろう。それよりもルイズは、雑木林や自室で覗き見されたことを彼女がつゆほども気にしてなかったことを思い出していた。あれこそ後ろめたいことではないのか、と思

う。

「アルレット。誰も、あなたみたいに堂々とできないわよ」

「ルイズが言うのと説得力あるわね」

キュルケが指すのは、まさにあの後ろめたいことだった。

「……黙ってるって約束はどこへいったのかしら」

「あら、わたし何も言っていないわよ」

「おんなじことよ、このバカキュルケ。頭に栄養が行ってないんじゃないの」

「全体的に栄養が足りてないおちびに言われたくないわね」

また言い争いが始まった、とタバサは嘆息する。それにしても、おちびという単語を口にするのはやめて欲しい。

その言い争いも、席を立て取っ組み合いを始めないだけ以前より柔らかいものになったと感じた。それがアルレットの言った、「お友だちになる」という言葉の意味なのかもしれない。いまだアルレットとの距離をはかりかねていたタバサは、そう考えた。

その時、タバサは自分のマントの裾を引っ張られているのに気付いた。隣を見れば、困った表情のイルククウがある場所を指さしていた。

そこには、男子生徒から叱責を受けるシエスタの姿があった。その男子生徒の名前を、タバサは知っていた。

ギーシュ・ド・グラモン。氣障つたらしい女好きで有名だが、それでも女生徒からの人氣が絶えないのは端正な容姿と女性を尊重する振る舞いがあるからだ。そんな彼が、使用人の平民とはいえ女性に対して厳しい顔で折檻しているのは何故か。

アルレットが音も立てずに立ち上がる。姫君が赤い絨毯を歩くように、ゆつくりとその場所へ向かっていった。

傍まで近づくと、アルレットの姿に気付いたシエスタは俯いた顔を上げた。アルレットは右手を伸ばし、脇にあるテーブルの上から小瓶をつまみ上げる。

「これは、どうやら香水のようだな」

アルレットに声にギーシュが振り向いた。同時に、その瞳を射抜かれる。わずかにたじろぐが、相手が背丈のない女性だと気付き、すぐに氣障な笑みを浮かべて余裕を取り戻した。

その香水はモンモランシーからの贈り物だった。つい先ほど、それをポケットから落としてしまい、給仕をしていたシエスタが拾い上げたところを、ケティというギーシュのいわゆる浮気相手に見咎められてしまったのだった。ケティはモンモランシーの香水を見て、ギーシュが二股をかけていたことを理解し、別れを告げて泣きながら去ってしまった。

女性の目を気にするギーシュは「女を傷つけた酷い男」にはなりたくない、その小



さな騒ぎをメイドの失態にして場を収めようとしたのだった。

「女の贈り物か？」

「ああ、そうさ。その香水はとても大切なものなんだ。それがどうかしたかい？」

「余のメイドが折檻されねばならぬ理由が見たらなくてな。小瓶に傷が入った様子もない」

小瓶を日の明かりにかざして、隅々まで観察する。平静を装うギーシュの額に汗がにじむのをアルレットは見逃さなかった。

「すると、このメイドはキミの召使いなのかい？」

「そうだ」

「いや、このメイドに少々失礼があつてね。ただ、もう済んだことだから何も言うつもりはないよ」

「そうか。ならいい」

しかしアルレットは、小瓶を掲げた右手はそのままに、早口になつたギーシュを無表情で見つめるだけだった。

「……それで、その香水を早く返してもらえるとありがたいんだが」

「いや、その前に、さっきおまえの元から泣いて去つていった女がいたな」

「ああ、見ていたのか……しかし、キミには関係のないことだろう」

ギーシュは手を差し出して、小瓶を返すように促す。しかし、アルレットの腕は動かない。

シエスタは不安げな目でその様子を眺めていたが、やがてアルレットの背後から現れた影に視線をやった。

「こら、アルレット。何やってるのよ」

また騒ぎを起こすのではないか、とルイズがアルレットを引き戻しにやってきたのだった。ギーシュとの間に身体を割り込ませ、アルレットの左手首をつかむ。

腕を引いて席へ戻ろうとしたところで、その人が現れた。ルイズは一足遅かった。

「ギーシュ。わたしの香水が見えたのだけど、どうかしたのかしら？」

「あ、ああ。モンモランシーじゃないか。これは、いや……ポケットから落としてしまったのを、このメイドが拾ってくれたのだよ。大切なものだからね、本当に助かった」

「あら……そうなの。それで、どうして彼女がそれを持つているの？」

モンモランシーは怪訝な表情でアルレットを見る。アルレットはギーシュの瞳を睨んだまま無表情で右手を降ろし、モンモランシーに小瓶を手渡しながら言った。その様子は、さながら部下を相手取るように不遜な振る舞いだった。

「なるほどな。おまえは余のメイドを折檻していたのではなく、お礼をしてたのか」

「そうなんだ。キミが勘違いしてくれただけさ」

ルイズは、アルレットがこの場を引く気になつたのかと、掴んでいた左手首を離した。その時、ギーシュもアルレットが話を合わせてくれたのだと誤解し、ほつと息をついていた。

しかし予想に反して、彼女は挑発的だった。一步前へ踏み出し、ギーシュの前にぐつと体を寄せ、身長差のある顔を覗きこむ。

「何を勘違いしている」

「は？」

「余はその娘に嘘をついたな、と言つたのだ」

「何を言う。嘘なものか」

「拾つた礼をしていたことが、真実であるか？」

「そうだ」

その言葉を聞いて、アルレットは無表情の口元を釣り上げた。

「そうか。ならば、僕の不倫を止めてくれてありがとう。そうお礼をしていたことになるな」

ギーシュは一步後ずさり、当惑を取り繕うように髪をかきあげた。

「か、彼女はいつたい何を言い出すのかね。ただ、拾つてくれたことに感謝してただけだ。そうだろう、メイド？」

シエスタは嘘を吐くことに抵抗を感じたのか、目をそらして黙った。ギーシュは、先ほどまでの怯えていた彼女であつたら、当然のように頷いてくれると考えていた。ギーシュはいよいよ動揺を表に出して表情を歪めた。

「アルレット、もう止めなさいって。シエスタも持ち場に戻らなきゃいけないでしょう」「まってルイズ。わたしにちゃんと話を聞かせて」

「……ああ、モンモランシー。もうダメみたいね」

今回ばかりは自分が恥ずかしい思いをするだけではすまないとルイズは悟った。

なにせ、公衆の面前でギーシュの浮気を暴いてしまったのだ。大事はすでに決まったようなものである。

「モンモランシーとやら。この男のためにその香水を調合したのなら、そんなものは池に沈めてしまえ」

「それって、ギーシュが浮気をしていたってこと?」

アルレットは首を横に振ってギーシュを見る。本人に聞け、と言っているようだった。モンモランシーは、目に涙を浮かべてギーシュへ詰め寄った。

「どうなのよ、ギーシュ」

「違う、違うんだよモンモランシー。彼女とはただ一度、ラ・ロシエールに森の遠乗りしただけなんだ」

「それってケティという一年生？」

「何故それを」

「噂を聞いたの。わたし、知っているんだから、このうそつき！」

そう言つて、モンモランシーは香水を地面に叩きつけ、ぼろぼろと涙を流しながらその場を去つていった。

「あーあ」

緊張した空気の中、ルイズが気の抜けた声で言う。周囲にいた生徒も、ギーシュをからかうように騒ぎ始めた。

「キミのせいだ……キミのせいで、傷付かなくてもいい彼女まで傷付いてしまったではないか……」

ギーシュが憤慨した様子でアルレットを睨みつける。

アルレットにはギーシュが立てようとする女性性というものがなかった。悪気がなければ失敗も笑つて許す。拗ねたように文句を言えばおだてて機嫌を取る。自分は味方だと、女性の弱い部分を認めてやる。そういった立ち回りがギーシュを女性に恨まれず、好かれる男にしていた。しかし、無表情に威圧するアルレットからは、まったく隙を見出すことが出来なかった。取り繕いが出来ないとすれば、ギーシュはありのままに振る舞うしかなかった。

「確かに、あの娘を傷付けたのはこちらだったな」

「ならば早く、僕に謝罪したまえ」

「不倫者にか？ おかしいな」

ギーシュがうろたえる。モンモランシーを傷付けたのが自分であると認めても、アルレットにはギーシュに対して謝罪する理由はなかった。

ルイズといえば、先ほどのように口を出す気は失せていた。予想外なことに、今度ばかりはアルレットの言い分が正しいと感じたからだ。ルイズが泣いて去っていったモンモランシーと同じ女性というのもあるかもしれない。

「黙れ。彼女の名誉が傷付けば、僕も憤慨する！」

「憤慨したから、どうした」

「君も貴族なのだろう。名誉をかけるとなれば、一つに決まっている」

ギーシュは薔薇の花を象った杖を懐から取り出し、アルレットへ突きつけた。

「ちよつと、貴族同士の決闘は禁止よ」

「ルイズ。この地では、王とは貴族か？」

ルイズは答えなかった。答えてしまえば、その先の行為を認めてしまうことになるからだった。

「ルイズ……？」

「アルレットさま、王族は特別です。アルレットさまは特別です」

放っておけないという眼差しでシエスタが代わって答える。

普段は貴族に怯えているシエスタも、アルレットが傍に居ると落ち着いて振る舞うことができた。

「……シエスタ、ギーシュがどうなってもいいの」

「あ……いえ、そんなつもりでは」

「あーあ……どうするんだか」

貴族に怯えず堂々と振る舞うのはいいけど、通り越して蔑ろになるのはどうにかならぬのか、とルイズは思った。

「そういうことだ。余は異国の王であり、ここハルケギニアで爵位など持っておらぬ」

「何を言っている。そうか、着せ替え人形の平民か。どうなっても shouldn't ぞ」

「茶会の場で剣を取る気はない」

「ヴェストリの広場だ。僕は先に行っているよ。十分に覚悟をしてから来るんだね」

ギーシュはマントを翻して、その場を去っていく。その際、周囲の生徒たちがギーシュに向かって囁すように声をかけた。大人げないという声もあれば、一部には歓声そのものもあつた。

名誉をかける、ということとは、敗北したほうが名誉を損なうということ。それでも譲

れないと杖を掲げたギーシユの勇ましさを称えてのことだった。

アルレットはその姿を見送ることもなく、芝の上で膝を折って屈み、泥の付着した小瓶を拾い上げた。立ち上がったから白い指で泥を払い落とすと、日にかざして傷が無いかを確かめる。幸いにも、それは見当たらなかった。

小瓶には、ギーシユの手によって大切に固定化が掛けられていたのだった。

「ルイズ」

「はいはい、場所わからないんでしょ。連れてってあげるから、あんまり大事にしないでよね」

「知らない」

「いいや、知りなさい」

そんなやりとりを、シエスタは淋しげに見ていた。騒ぎが収まったのなら仕事に戻らなければならず、アルレットの姿を伺うことができない。そう思って周囲を見渡せば、多くの生徒が席を立ててヴェストリの広場へ向かっていた。

シエスタはメイド仲間に打診して、ヴェストリの広場へ向かう生徒たちの列にひっそりと加わるのだった。



in deep darkness ” Lev i a t h  
a n ”

その村は病に侵蝕されていた。

地域一帯に灰色の曇天が覆い被さつて三年が経つ。その三年、一度たりとも地上へ陽が降りてくることはなかった。史実にも前例のないその災厄は、悪魔の仕業だと囁かれた。

やがて村の人々は太陽を忘れた。作物を育んだ農地は荒野と化し、やせ細つた大地からはあらゆる生物が姿を消した。稜線の向こうに太陽が登らなくとも、人々は金銭があれば生活できる。

その地域には、巨大な鉱山があつた。鉱山を独占することで外部の地域からは多額の金銭が舞い込んでくる。その多額の金銭で大量の家畜を入手し、同じく金銭で手に入れた飼料で飼育する。小麦などの作物は一つの備蓄庫に集められた。太陽が登らず荒廃しきつた地で、人々は手を取り合つて食糧問題を解決した。

しかし、その困窮した事情を図つた外部の人間が、それが当然の権利であるかのように家畜や作物の値段を釣り上げた。どれだけ値段を釣り上げようと、村人たちは生きる

ために金銭を家畜や作物に変える。やがて村から飢餓死する者が現れるまでに生活は困窮した。鉾山の独占状態を疎まれ、村人たちは食料という命の手綱を握られたのだ。た。

村の人々は、青白くやせ細った不健康な身体に鞭打つて炭鉾を掘り進める他になかった。家畜はカビの生えた飼料を口にしていた。外部の人間は労働力を殺すつもりはなく、すぐに過度な搾取を取り止めたが、病魔はすでに蔓延していた。

身体の弱い年寄りと子どもの多くは病に耐えられず先立ち、村は若者ばかりになつてしまふ。

そんな中で、母親を失つた娘がいた。母親は娘の弟となるべき赤子を産んだばかりだった。その弟も、母親の後を追うように亡くなつた。

病魔が蔓延してから人口も半分以下に減り、墓地は畑のあつた土地にまで広がつていた。墓標が立ち並ぶその一面に掘り返された穴の中、母親と弟は二人が折り重なるように埋められた。

死体がその場所へ運ばれる際、五歳になる娘は不思議そうな表情で母親の顔に触れようとしたが、分厚い軍手をした男に止められた。人の死を理解できなかった娘は、母親が穴に放り込まれた時によくやくその意味に気付いて、泣き喚いて暴れたのだつた。

それから、娘は些細なことたびたび癩癩を起こしては泣き喚くようになり、二人暮

らしの父の手を煩わせた。妻を失つてからずいぶんと頬の痩せこけた父は、炭鉱での重労働の疲労を押し娘をあやし、娘もそんな愛情を感じ取つたのか、やがて癩癩を起こさなくなった。聞き分けもよく、自ら家事を手伝うようにもなり、父の目にはそれが良いことのように映つた。

父が仕事で出払つている間、娘は昼間の薄暗い曇天の元で年の離れた子供とよく遊んだ。夕方に差し掛かると辺りが暗くなり、夜になれば前が見えないほどの暗闇が広がる。遊び相手の子供は皆、日が傾く前が家の門限だつた。一人遊びに辛さを覚えた娘は、隙間風の吹く部屋で震えながら父の帰りを待つようになった。何時間も、何時間も待つてようやく、やつれた顔の父が帰つてくるほどだつた。目元を真つ赤に腫らした娘が父を出迎えるのは、毎晩の事だつた。

娘が六歳になる頃にはますます村の人口も減り、幸か不幸か村の食料に余裕が生まれなくなる。そのため村へあれだけ蔓延した病も静まりかけていた。しかし、すでに娘と年の近い子供は一人として生きておらず、遊び相手もいなくなつていた。

娘はそのことを気に留めるわけでもなく、なによりも父の血色も良くなつたことを泣いて喜んだ。しかしそれでも父の帰りは早まることはなく、それどころか遅れて帰ることが増えたのだつた。時おり妙な口臭をして帰るので、娘は余計に心配した。

やがて父は、ある一つのことを除いて家事のすべてを娘一人に任せようになつた。

父を待つ時間を費やすことができるからと、娘はそれを厭わず、むしろ歓迎した。ただ唯一、家畜の屠殺と解体だけは父が自らの手で行った。父は娘に屠殺の現場を見せることを避けた。娘はそれを愛情と受け取り、ますます聞き分け良くなって、決して家畜小屋の隣にある屠殺場へ足を向けることはなかった。

ある日、父は娘に一人の女性を紹介する。父は娘に、自分の新しいパートナーになる人だと告げた。その女性と同じ炭鉱で働く同僚らしく、その日から父は女性を伴って帰宅するようになった。普段より遅れて帰ることも、妙な口臭をして帰ることも増えた。加えて父は、娘と別の部屋でその女性と寝るようになってしまった。

娘は隙間風の吹く部屋で、震えながら父の帰りを待つ。深夜に夕食を振る舞うと父と女性が消え、今度は震えながら朝の訪れを待った。その家の夕食と朝食は、日を増すにつれて手の込んだものになっていった。

冬が訪れると、食料の値段が跳ね上がる。日を遮る曇天と吹き荒ぶ寒風は人々から容赦なく体温を奪い、病はまた爆発的に蔓延した。遊び仲間の子どもは誰もいない。娘はいよいよ、昼間の内も部屋の隅で震えて父の帰りを待つようになった。

目を真っ赤に腫らして父を出迎えることもなくなった代わりに、全身に引つかき傷や打撲痕を残していた。その自傷痕に、父は気づかなかつた。

手が空いてしまえば孤独に苛まれる。娘はもう、ほとんどその暗闇から逃れるために

生きていた。とうとう手を出したのが鶏を屠殺するための包丁だった。娘は父の言葉を無視し、屠殺場へ赴くことにした。

暗闇の中、娘は乾いた咳をしながら橙のランプが灯った屠殺場へ辿り着く。屠殺場の横にある倉庫の窓からは光がこぼれていた。扉の向こうを覗くと、娘はしばらく茫然自失とした様子でその場に立ちすくみ、不愉快な嬌声に耳をふさいだ。

そして足元の酒瓶を蹴り飛ばし、ふと何かを追いかけるようにそこへ飛び込んでいった。娘は父に覆いかぶさる女性に向かって、手に持った包丁をまっすぐに振りかざした。

そこには、痲癩を起こし泣き喚く娘と、女性の亡骸を見下ろす父の姿があった。

i n d e e p d a r k n e s s " L e v i a t h a n " E N D

## 8話『黒い悪魔と黒魔術』

学長室の中央に備えられた背の高い椅子に座るのは、オスマンと呼ばれる白ひげの老翁である。年齢は百歳とも三百歳とも囁かれ、トリステインではたいそう高名なメイジであった。

趣味はセクハラ。使い魔はネズミ。

学長室を訪れたスカートの女性秘書に対して、することは一つである。

ピギイ！ と小動物が鳴く声でした。秘書であるロングビルのすぐ足元からだった。

「おお……かわいいそうなモートソグニル……何も蹴らんでも」

「申し訳ありません。足元が見えなかつたもので、靴があたつてしまいました。」

それよりも、ヴェストリの広場にて決闘をすると生徒たちが集まっています。眠りの

鐘の使用許可を」

「……ふむ。決闘をしようというのは、どの生徒かね」

「ミスタ・グラモンと……もう一人は、ミス・ヴァリエールの使い魔のようです」

「使い魔、というのは噂にある貴族の娘かね」

制服とマントを身に纏っていない貴族の子ども、といえは噂が立つのも当然だった。

「それで、いかが致しましょう」

「子どもの喧嘩じや。危ないと判断してからで良い。そもそも、その使い魔がメイジかどうかも分からぬでな」

「承知しました」

## 8話 『黒い悪魔と黒魔術』

澄みきった平和な青空のもと、生徒たちの囁し立てる声が響く。ギーシュとアルレットの決闘を観戦しようとして、中庭にいた生徒のほとんどがヴェストリの広場に集まった。

片や高名な軍人であるグラモンの息子、片やミステリアスな貴族の娘。

暇を持て余した貴族の生徒たちにとって、その組み合わせはこれ以上にならない興味の的だった。

ギーシュとアルレットの距離は約二十メートルほど。戦士の剣や槍が届く前に相手を打倒できるメイジの距離である。ギーシュは薔薇の花を象った杖を右手に構えているが、アルレットの両手には何も握られていなかった。

「早く杖を出したまえ」

「余に棒っ切れなど必要ない」

「は、ここであのイカサマをやるうというのか」

ギーシユが指したのは、シユヴルーズの授業でアルレットが見せた錬金のことだった。杖を用いずに小石を真鍮に変えてみせたことを、ギーシユを含むその場にいた生徒たちはインチキか何かの間違いだと考えていた。

「僕は『青銅のギーシユ』。僕の青銅は、真鍮の粒をひとつ錬金するだけの兎戯とはわけが違う」

ギーシユが杖を振った。すると、杖にあしらわれた花びらのひとつがはらはらと地面に落ち、そこから青銅のゴーレムが現れた。ゴーレムは長剣を携えた甲冑の女騎士を象つていて、アルレットの背丈よりもずっと大きい。彼女ほどの年の娘であれば、魔法を扱えようが恐怖に身をすくめる代物だった。

観衆が沸いて騒ぐ。ギーシユはドットクラスのメイジではあるが、錬金においてその能力はずば抜けていた。

「これが僕のワルキューレさ。まだ偉そうな口を叩いてられるかい？」

「まさに着せ替え人形だな、素晴らしいぞ。そうだ、余が勝てばおまえからその魔法を教わってもいい」

「万が一、僕が負けることがあれば考えてやろう」

「おまえが勝つことは万にひとつもない。常勝無敗であることは、魔王の持つ公明なる



権利である」

アルレットは右腕を天に掲げた。それに応えるように、大気が薄暗く淀んでいく。ギーシユの表情から余裕が消え、観衆からは悲鳴が上がった。

現れたのは、黒い霧だった。遠くの空は濁ったようにくすみ、足元の青い芝は沈んだ霧に覆われて見えなくなった。

視認できる範囲は、彼我の距離である約二十メートルが限界だった。

そうした混乱の中で、どこからか荘厳な鐘の音が響く。

ギーシユはそれを知っていた。『眠りの鐘』と呼ばれるマジックアイテムの音である。得体の知れない魔法に恐怖を覚えていたギーシユは、どこかホツとした気持ちでその音を聴いていたが、もたらされるはずの眠りは一向に訪れない。

二十メートル先のアルレットの表情は揺らがない。ギーシユはそこでようやく、辺りに充満する黒い霧の意味に気付いた。目の前の彼女が、この場にいる者の退路を断ったのだった。

事実、学長室の遠見の水晶球は機能せず、黒い霧を目撃して駆けつけた教員は何かに阻まれてヴェストリの広場へ辿り着けずにいる。それは、アルレットだけが把握していることだった。

「……いいじゃないか。これで、邪魔は入らないということだな？」

ギーシュは恐怖心を押し殺し、不敵に笑ってみせた。

「そうだ。何者にも阻まれぬこともまた、魔王の公明なる権利である。昏い闇の向こう側には、天の裁きであろうと届かない」

「おお……なんだ、格好いいじゃないか」

一周回つて、ギーシュの恐怖心は憧憬に変わっていた。

「当然だ、魔王なのだから」

「魔王……実に勇ましい称号だな。『魔王のアルレット』よ」

「ふはははは！」

そんな笑い方があるか、とルイズとキュルケは思わず吹き出ししていた。観衆の最前列を陣取るシエスタとイルククウは、とろけきつた表情で黄色い歓声を上げていた。タバサはといえば、理解できないことは考えない主義である。キュルケの背後で読書をしながら聞き流していた。

「しかし、決闘は決闘だ。僕は負けない。彼女たちの名誉のためにも！」

ギーシュが再び杖を振る。杖にあしらわれた花びらがすべて散り、六体の新たなゴレムが現れる。

黒い霧の魔法を見て、ギーシュは覚悟して全力で挑むことを決めた。

「霧だけじゃ、僕のワルキューレ部隊は倒せない。さあ！」

別の魔法を見せてみる、とギーシユは威勢よく声を上げた。  
青銅の女騎士に囲まれたアルレットは、再び右腕を掲げる。

「らびたん」

「ふん。なんだ、その間の抜けた詠唱は」

呟いた言葉に、身構えていたギーシユは拍子抜けをした。それでも油断することなく、ギーシユは青銅の女騎士の指揮を取ってアルレットを打ち倒そうとする。

視界不良の黒い霧の中、その黒色に紛れて何かがアルレットの右腕へ降りてくる。それにギーシユは気付かず、彼女を打ち取る確信の笑みを浮かべていた。

その時、何かが青銅の塊をまるごと喰らった。

それは一頭の巨大な黒い獣だった。白いつららのような犬歯と高雅な鬣、黒い針を束ねたような毛並み。何よりも目を引くのが、悪魔じみた鮮血色の瞳と、宙へと広げられた黒い翼だった。

「間の抜けた、なんて言わないで欲しい。それは、名前を持たぬ彼女が望んだものだ」  
全長六メートルもある巨体の動きは、鋭利だった。決して遅くはない女騎士が剣を振り下ろす動作の間に、獣はアルレットを背に乗せて包囲されたその場を離脱する。

アルレットは両手に掴んでいた獣の体毛を手放し、二メートル下の地面に降り立つ。赤と黒のドレスがふわりと舞った。

その黒い毛並みを撫でながら、観衆の一人に向かって語りかける。

「ルイズ。これが余の従えていた魔族だ。美しいだろう」

「え、ええ……しつぽを振って嬉しそうね？」

「ふふん」

引け腰になったルイズの言ったとおり、アルレットが毛並みを撫でると獣は一・五メートルもありそうなフサフサのしつぽをぶんぶんと振り回して喜びを表現する。乾燥した地面があれば土煙が立ちそうだった。

「……ねえルイズ。あの子って本当に魔王だったのね」

「まあねえ。さつきは転げないか心配だったけど、よく着地したわ」

「……魔王を従えるルイズって……すごい……」

タバサは既に読書をやめていて、ルイズへ尊敬の眼差しを送っていた。自分の使い魔を御しきれないタバサである。その眼差しの理由には、自身の使い魔への苦勞も含まれていた。

「らびたん。あれはおまえが望むものだ。それで満たされるのなら、喰らってしまえ」

ギーシュが情けなく悲鳴を上げた。獣がギーシュの前で立ち尽くす女騎士へ音もなく跳びかかり、二十メートルほどの距離をたった一步で縮め、青銅の腹をばらばらに噛み砕いたのだった。

鍊金したすべての青銅が獣の牙で噛み砕かれるのを、ギーシユは尻餅について眺めているしかなかった。あまりの早さと凶悪さに動揺して、指揮一つまともに取り替えることができなかった。

獣の狩りは、ほんのわずかな時間で終わった。

青銅の破片が散らばる中を、獣はゆつくりと歩く。やがて震えるギーシユの鼻先まで迫り着いた。おぞましい獣の息遣いがギーシユの耳朶を震わせる。

もし悪魔というものがいるのなら、この赤い瞳の怪物を言うのだろう。ギーシユは思った。

「訂正をするんだな」

「……な、なにをだ」

震えた喉から、ギーシユは必死で声を絞り出す。そうしなければ、あの散らばる青銅のように骨ごと砕かれてしまう。

「間の抜けた、なんて言ったことだ」

「……は？」

「訂正しなければ、彼女はおまえの憎い喉まで喰らうだろう」

「だ、だから、何をだ！ 何を訂正すればいい！」

ギーシユの気付かない内に、アルレットは獣の隣に寄り添っていた。尻餅をつくギー

シユを、赤と紫の瞳が見下ろす。黒い霧を背後に置いたその光景は、まるで死の気配に満ちた魔界のようだった。

「その孤独な瞳を見て、理解できぬか」

「分かるわけ無いだろう！」

なにか孤独な瞳だ、これは今にも喉首を食いちぎろうとする獣の目以外の何物でもない。ギーシユは思った。

「……レヴィアタン。他者へ向けられた愛情を喰らつくす、すべての悪魔の名前だ」

その名前は、ギーシユにも聞き覚えがあった。どの世界にもあらゆる分類の悪魔や怪物が存在する。ここハルケギニアにおいても、地獄や魔王といった架空の存在があれば、伝承としてレヴィアタンなる悪魔の存在もあった。

「彼らは愛情を渴欲している。愛情に敵対するすべてを拒絶する。それは時に嫉妬という形を取る。

そして、与えられた愛情に、自身の魂を委ねる。心に渦巻いた闇が風ぐまで、愛情を求めて永遠に寄り添う。それがレヴィアタンの悪魔」

アルレットが獣の毛並みを撫でる。焦燥に頭を支配されたギーシユには、ほとんど理解が及ばなかった。

「彼女は、愛情の証に名前を欲しがった。らびたんという名は余が与えたものだ。彼女

の名前……与えられた愛情を笑う者は、愛情を不確かに貶める、レヴィアタンの喰らうべき餌となる」

アルレットは憂いのこもった表情でギーシュを見た。

ここまで言っても結局のところ、この獯猛な獣にらびたんという名前をつけたアルレットが悪いのではないか、とルイズとキュルケは思った。もちろんのこと、シエスタとイルククウは愛らしい名前だと絶賛していた。

ところでタバサはいえ、自分の名づけたシルフィードという名前がイルククウの不義理な原因ではないかと考えていた。誰もイルククウをそう呼ぼうとしないし、イルククウ自身もそう名乗ったりしないところに愛情の薄さを感じさせてしまう。タバサは真面目に思索していた。

アルレットを知るが故に真剣になれないルイズ一行と違って、観衆はギーシュを喰らおうとする獣に対して緊張感を走らせている。

ギーシュは額にびっしりと脂汗を浮かべているが、ルイズとイルククウはシエスタからクツキーを受け取ってぼりぼりと頬張っていた。

「……わかった。取り消そう。らびたん、とても愛らしい名前だ。ああ、愛らしい」

目の前の獣は、どんな名で呼ぼうと凶暴な悪魔にしか思えなかった。

しかしギーシュは建前でつぶやくと、一度は鼻で笑った名前がみるみる愛らしいもの

に思えてきた。これで悪魔に心を覗かれようと問題ない。生存本能の成せる技だった。「そうか。でも、とつくに手遅れだ」

「……な、なぜだ！」

「なぜ決闘することになったのか。彼女を呼び出したのか。忘れてしまったか」

獣は残像のようなモヤをその場に残して、ギーシユの頭へ喰らいついた。

広場が観衆の悲鳴に包まれる。まさか、ギーシユが六マイルもある獣の牙に頭をちぎられて死んだ。たつた今、自分の目の前で死体が作られた。しかし、獣はギーシユに覆いかぶさったままで、そこにあるはずの悲劇を観衆へ晒すことはない。

騒然とした中でも、アルレットは無表情だった。

「言葉を訂正してくれたおかげで、彼女におまえを襲う明確な理由はなくなつた。しかし、餌があれば喰らいたくもなるだろう。単純に、おまえが旨そうだったのだ」

どこからか取り出したのか、アルレットには件の小瓶が握られていた。その小瓶を弄びながら、すでに聴こえないはずのギーシユへ言葉を続ける。

「畢竟するに、おまえが二股などという幸せなことをしてくれたから彼女の腹の虫が鳴つて、余が動かなければならなかつたし、おまえは喰われなければならなかつた。満たされた人間の脂ぎつた欲望なぞ覗き見たくなかつたが、これも余が彼女へ向ける愛情だ」



やがて、ギーシュへ覆いかぶさっていた獣が輪郭を失いはじめた。黒い霧へ溶けるようにモヤへと形を変えて、するするとアルレットの元へ帰っていく。

アルレットの腕には、翼の生えた赤い目の子猫が抱かれていた。その子猫が、口も開かず甲高い声を発した。

「魔王さま。わたしとても気分がいいの」

「うん。良かった」

「久しぶり。この欲望は、とつてもおいしかった」

子猫の話にアルレットはうなずいて、黒い毛並みを優しくなでた。子猫はしつぽを振りながらすりすりどレスに頬ずりして、心地よさそうに目を細めていた。

「それでおまえ。まだ決闘を続けるか」

ギーシュが身を起こした。血の赤色はどこにも見られず、彼の首には傷ひとつついていなかった。騒がしかった観衆が、さらに音量を上げた。

「……続いていたのか。まいったに決まっている」

そのかすれ声は、騒ぎ続ける観衆へは届かなかつた。

アルレットが右腕を掲げると、黒い霧が晴れて青空と瑞々しい芝が広がるヴェストリの広場が戻ってくる。それは決闘の決着を意味していた。

「香水を、返してくれないか」

「どうしてさつき、拾わなかった？」

「……見えていなかったんだ。余計なものに邪魔されて」

「ふん。見事に喰い尽くされたな。脂ぎっていないところは余にとつても好ましい」

「すまないが、僕には心に決めた人がいるのでね」

香水の小瓶を受け取ったギーシュは、やつれた顔で気障に笑ってみせる。

「それと、らびたん。君の名を笑ってしまったってすまなかった」

「わたしのこと悪魔みたいだって思ってたくせに」

「はは……人の心を覗く力でもあるのか、君は」

「そうよ。だって本物の悪魔だもの」

子猫は少女らしい声音でそう言ったあと、アルレットの腕から飛び出して宙へ浮いた。そのまま輪郭を失って、モヤとなって空へ帰っていく。

ギーシュは黒色の一片が消えるまでそれをずっと眺めていた。

「彼女は、どこへ行ってしまったのだ？」

「死者はどこへも行けない。どこでもないどこかで、心に渦巻く闇が風ぐのを待っている」

「……かつこいい。やはり君はかつこいい」

ギーシュが目を輝かせてアルレットの手をとった。ギーシュは生まれて初めて下心

を持たずに女性の手をとった。

「ま、待つて、ギーシュ」

ギーシュの手を避けきれなかったアルレットが動揺を露わにする。見る人が見れば、恋する乙女にでも見えたかもしれない。

遠くから、女性の声でした。

「この浮気男！ 泥棒猫！」

「モンモランシーじゃないか！」

「わ、わたしが、泥棒猫……」

あの様子はまずい。間違いなくアルレットとモンモランシーが言い争いを始める。ルイズは急いでアルレットの元へ駆け寄った。

しかし、途中でその必要がないことに気付く。

「ああ、モンモランシー！ 僕だけのモンモランシー！」

青筋を立てて駆け寄ってきたモンモランシーに、ギーシュが抱きついた。背中に手を回して、身体同士が密着した。抱擁とも言う。例に漏れず、生徒たちが注目する公衆の面前であった。

観衆のからかう声など気にせず、ギーシュは自分の気が済むようにモンモランシーを抱きしめた。抱きしめられたモンモランシーは顔を真っ赤にして何もいえず、先程まで

の怒りの形相などどこかへ消えてしまっていた。

こっそりとその場を離れたアルレットは、モンモランシーの様子をにやにやと眺めるルイズとキュルケの後ろで、シエスタに髪を梳いてもらいながらイルククウと共にクツキーを頬張っていた。

「いったい何をしたの？」

タバサが無表情を取り払って、真剣な眼差しでアルレットを見ていた。

「レヴィアタンは、他者へ向けられた愛情を喰らつくす悪魔」

「愛情を喰らう……」

「そう。ギーシュに向けられたあらゆる愛情、ギーシュが尽くしたあらゆる愛情を喰らい尽くした。モンモランシーにケティや、他の女、それから家の者たち」

「……でも、モンモランシーと抱き合っている」

「愛情は、昏い闇の底から絶えず湧き上がってくるものだ。火種が消えても、薪さえ残れば何度でも燃え上がる」

その言葉に、タバサは目を伏せた。

アルレットは遠くで生徒たちの騒ぐ声がだんだんと遠くのものに思えてきた。ここと向こう側は、確かに隔絶された場所だった。

「愛情が湧き上がってこない人もいる」

「そうだ。そうなってしまった末が、レヴィアタンの悪魔」

「彼らは愛情を渴欲している。心に渦巻いた闇が凪ぐまで、愛情を求めて永遠に寄り添う？」

タバサは先ほどアルレットが放った言葉を、聡明な頭で一字一句違わずに復唱した。アルレットは小さくうなずいた。

「そこに渦巻いた闇が、自他すべての愛情を飲み込んでしまう。ますます闇は渦巻いて、それでも愛情を渴欲し続ける」

「死ぬまで、ずっと？」

「死んだ後も、ずっと」

「……それは、どうしたら直る？」

タバサは眉を寄せて、縋るような眼差しで悪魔の瞳へ尋ねた。

「それは……んぐ」

「大事な話をしてるの。クッキー食べるのをやめて」

「……ごめん」

タバサはアルレットの手からクッキーを取り上げて、イルククウの口へ放り込んだ。ギーシユとモンモランシーが仲直りするのを領きながら眺めているイルククウは、そのことに気付いていなかった。

「らびたんのように、愛情に敵対するものを打ち倒さないといけない。ギーシュという浮気者を打ち倒したように。そうして器から苦しみを取り除いたあとに、愛情で満たしてあげる」

「わたしは、どうしたら」

「その闇が自ら屈折して渦巻いたのか、人の手によって乱されたのか、そんなものは関係ない。苦悩を取り除いて、代わりに愛情を与えること」

「……わかつてる」

「分かつてるなら訊く必要はないでしょ？ たぶん、あなたにしかできないことだから」

アルレットの言葉に、タバサは杖を握りしめて悪魔の瞳を見据えた。

「わたしが、どうにかする」

「……ルイズが契約者じゃなければ、力になれたのに」

「ありがとう。でも、わたしの使い魔はシルフィード。それで十分」

彼女はいったい何の悪魔なのだろうかと疑問を持ったが、タバサは一人でやると決めた以上、知る必要はないと踵を返した。足に封書を掴んだフクロウが一羽、寮の横を通り過ぎて消えていく。タバサは覚悟の目でそれを見送った。

その後、タバサは置いてけぼりにしたイルククウを探して学院の敷地を走り回っていた。ルイズの部屋でアルレットにひつついてるのを見つけると、双方の頭へ軽く拳をお

見舞いして懲らしめた。片方にはこれ以上甘やかすなど、もう片方には感覚の共有を遮断して逃げるなど、キツく言い聞かせたのだった。

## 9話『伝説の……』

学長室に呼び出しを受けたルイズとギーシュは、決闘の件で説教を受けた。ルイズが呼ばれたのは、使い魔の不始末は主の責任であるという理由であり、そこにアルレットの不在は関係ない。使い魔とは犬や猫と同じ扱いなのである。

そしてその頃、コルベールは困惑していた。トリスティン魔法学院の教師のみが立ち入りを許されるフェニアのライブラリーで調べ物をしていたところ、背後から誰かに話しかけられた。厳重なセキュリティに守られているはずのフェニアのライブラリーに、侵入者があるなど考えられない。同僚の誰かだろうか、と振り向くと、薄暗い通路にラ・ヴァリエール公爵家の三女が召喚した使い魔の姿があった。

赤と黒のドレスと、猫の瞳のように光るアメジスト。暗がりの闇にドレスの黒色が溶けて、その空間に鮮血が広がっているのではないかと錯覚する。

コルベールは、その場に悪魔が降り立ったのではないかと思った。

## 9話『伝説の……』



王都トリスタニアの城下町にて、一人の中年男性がドレスで着飾った貴族の娘を連れ歩いていた。彼女は貴族の娘ではなく王族の姫であったが、周囲の目にはそう映っていた。微笑ましい父と娘の外出、といったところかもしれない。

「どこへ行くの？」

「武器屋だよ。何も、ここまで来る必要はなかったんだがね」

「武器が欲しいの？」

「違う、違う。私は武器なんて持たないよ」

コルベールは疑問に思っていた。

フェニアのライブラリーで見つけた、虚無の担い手が従える伝説の使い魔についての記述。たった一人で四体の使い魔を使役したと言われ、そのうちガンダールヴと呼ばれる使い魔のルーンがルイズ・フランソワーズの召喚した貴族の娘に刻まれていた。

ガンダールヴという使い魔はあらゆる武器を使いこなす一騎当千の戦士だと記されている。しかし隣を歩く彼女はといえば、足場の不安定なトリスタニアの道に「つまずくし、腕を組んでいなければ人波に飲まれてしまうし、見た目通りの箱入り娘に違いない。まかり間違っても、戦士とは呼べない。

学院を騒がせた黒い霧を発生させたのと同じく、未知の魔法を用いてコルベールを伴い王都トリスタニアまで瞬時に移動してみせたが、それがどれだけトリステインの人間

を驚愕させるものであろうと、どこまでいっても魔法の産物でしかない。

これでは、虚無の担い手が従えるもう一人の使い魔、ミヨズニトニルンではないか。それよりももっと不可解なのが、どうして自分のような冴えない容姿の中年男性に懐いているのか、であった。コルベールは自分が若い娘からは煙たがれるような人物であると考えていたため、まるで予想外なことだった。まして人波を怖がって身を寄せられるなどと思ひもしなかったのである。

「さあ、いいだ」

「……おんぼろだけど、ここでいいの？」

「小売っていうのはたいいてい平民が営んでいるからね。そういうことを言えば怒る人もいるから気をつけなさい」

「怒る？」

「そうだ。誰だつて自分の店を悪く言つて欲しくない」

アルレットの消沈した表情に、コルベールは慌てて言葉を付け加えた。

「君はまだ子どもだ。そういうことはこれから知つていけばいい」

「わかつた」

「……すまないね。私は教師をやっているから、つい小言を口にしてしまう」

そう言いながら、辿り着いた武器屋へ入っていく。

外装と同じく、あまり綺麗とはいえない店内だった。埃の溜まった角に蜘蛛の巣が張っていて、木製のカウンターはささくれている。照明もつましやかだった。

奥から店の者らしき男が怪訝な顔をして現れた。

「貴族さま。うちはまつとうな商売をしてみせえ。咎められることなんざありません」  
「違う。客だ」

「ジャン。やつぱり武器が欲しいの?」

アルレットが不思議そうな表情で首を傾げた。

「いいや。この子の扱えそうなものを見繕ってくれ。軽ければ軽いだけいい」

「……はあ?」

素っ頓狂な声を上げる。アルレットもそうだが、店主はもっと不思議そうな顔をした。

「最近、土くれのフーケだかで物騒なのは知っているだろう。無いよりまし程度の、護身用だよ」

「はあ。危ないだけだと思いますけどねえ。そういうわけでしたら」

店主は一度奥へ引つ込んで、五十サントほどの短刀を手に戻ってきた。布生地で覆われた黒色の鞘には品のある花の刺繍があしらわれていて、貴族の女性が持つものだと分かる。厚みもなく素人でも扱いやすそうな代物だった。

「これでどうですかい。一番軽い剣を持つてきましたぜ」

コルベールが短刀を受け取り、鞘を引き抜く。よく磨かれた銀色の刃が現れた。それを見て、コルベールはひとり頷く。

「二度、これを振つてみてもらえるかい？」

「……わたしが？」

「そうだ。危ないから、軽くでいい」

刃を鞘に戻してから渡された短刀を、アルレットは流れるような洗練された動作で抜き、一度、二度と宙に向かって振り下ろす。甲高い風切り音がした。

そして再び、短刀の刃が鞘へ吸い込まれるように納刀される。

コルベールは納得のいった表情で、店主は信じられないものを見る表情でそれを眺めていた。

「……これ、重たい」

アルレットのつぶやきに、コルベールは苦笑した。その短刀は分厚い包丁と変わらないう程度の重さであり、達人のような剣の振りをする者が言うセリフではないと思っただけだった。

「へえ、しかしそれは店で一番に軽い剣でして……いや、ここまで見事に剣を振つて頂けるんなら、ちよいと値は張りますが、オーダーメイドなんてどうでしょう？」

「いや、結構だよ。これで重いというならナイフにしよう。最も軽いものを持ってきてくれ」

「……へえ。ではちよいとお待ちを……」

アルレットから短刀を受け取ると、再び奥へ引つ込んでいった。

「ところで、剣を振ったことはあるのかい？」

「ない。でも、ルーンのおかげで使えるみたい」

「おお、やはりルーンか！ これはいいよ……」

コルベールは紙を取り出してカウンターに乗せ、興奮した様子で何かを書き始めた。

することのないアルレットが適当に店の商品を眺めているとまもなく、コルベールでも店主でもない男の声が響いた。

「おう、こつちだよ娘っ子」

「……口があつたのか、おまえ」

「ありや、気付いてて無視されてたのか」

コルベールが顔を上げて、きよとんとした様子であたりを見渡す。しかし、そこには店の奥から戻ってきた店主とアルレットの姿以外に人の姿はなく、カチャカチャと金属が擦れる音がするのみだった。

「おまえさんにやチンケなナイフなんて似合わねえ。もつとでけえ獲物を振りやがれ

「！」

「こちらデール公！ また粗相をしやがって！」

アルレットと店主の視線の先を見ても、錆びついた大剣があるだけだった。コルベールは首を傾げながら、その大剣へ近づく。すると、大剣の鐔がひとりでに動き始めた。

「おい、いいから俺を買え！」

「……何かと思えば、インテリジエンスソードか。ふむ」

「ジャン、欲しいの？」

「いや、君ではないがさすがにこんな重いものは持ち歩けない。私はメイジだから杖があればいい」

「そう」

コルベールの言葉に、アルレットは大剣への興味をなくして店主の方を見た。

「そうそう、そいつはほつといて下せえ。ほら、こいつなんか、食事に使うナイフのように軽い。それでいてよく砥いでありますから護身用には十分使えます」

「では、それと革の鞆を付けて見繕つてくれ。彼女が持ち歩くものだから可愛らしいもので頼むよ」

そうして見繕われたのが、琥珀色の革に桃色の花の飾り物が付けられた、注文通りの

可愛らしい鞆だった。留め具の紐を解かなければ小物入れのようにも見える。

アルレットはそれを手で弄びつつ、隣を歩くコルベールの顔を見上げる。

「本当にくれるの？」

「頼みをきいてくれたお礼だ。ルーンの力があれば護身用には十分だろう」

「ありがとう。贈り物はうれしい」

「使う時が来なければいいんだがね」

コルベールは彼女がガンダールヴであることを確信していた。彼女は短刀を重たいと表現したが、その剣筋に短刀の重さを感じさせなかった。ルーンの力には武器を使いこなすことの他に、身体能力を向上させる効果があり、その二つが合わさってはじめて一騎当千の力を発揮する。ガンダールヴの力の正体が特殊なルーンそのものであるということに見当をつけていた。

伝説の使い魔が現れたとなれば大いに騒ぎたいところだったが、コルベールはこのことを内密に伏せていようと考えた。いくら一騎当千の力を誇っていたとして、無垢な彼女に命を奪う真似をしてほしくないというのが、かつて戦場で多くの死を見てきた彼の切実な願いだった。

やがて人が多い通りに出ると、アルレットはコルベールの腕を掴んで身体を寄せる。一つの大きな問題が解決したものの、やはり分からないのはこれだった。

幼い容姿の彼女に異性を意識することはなくとも、周囲の視線というものがある。冴えない男とこうして歩くのは恥ずかしいものではないか、とコルベールは忖度できぬ年頃の少女の感性を想像して気をもんでいた。

「それで、本当に私なんかを選んだ店でいいのかい？」

「だって、店がわからないんだもの」

「君にはミス・ヴァリエールがいるだろうに」

アルレットがコルベールに頼んだのは、洋服を見繕うことだった。

その見返りの先払いとして彼女を武器屋へ連れて行ったのだが、未だに意図を掴みかねている。どうしてわざわざ男性である自分の前に現れて、慣れているはずのない洋服選びに駆り出すのか。

アルレットに尋ねても欲しい答えは帰ってこない。言いづらい理由でもあるのか、とも思ったが、どちらかといえは質問の意味を理解できていないようだった。





「きゅいきゅい！ 魔王さまがわたしたちを置いてトリスタニアへ向かったのね！」

そうタバサの元へと泣きついたのはイルククウだった。しかし、サイレントの魔法で音を断っているタバサに声は届かない。週に一度の虚無の曜日、ひとりの空間を作り出して存分に読書を堪能していた。

しかし、肩を揺らされては視界がぶれて文字を読み進めることができない。サイレントを解除し、言葉に最大限のいらだちを込めてイルククウへ訊ねた。

「……なに」

「魔王さまがわたしたちを置いてトリスタニアへ向かったのね！」

「そう。でも、置いていかれたわけじゃないと思う」

「……男と一緒にでも？」

その言葉に、タバサは耳を疑った。

「……本当？」

「本当！」

「まさか」

「本当なのね！ 盗み聞きしたのね！」

「それ、バレてる」

雑木林の件でもばつちり盗み見を見破られていた。それどころかシルフィードの正

体まで。今回も例外という訳にはいかないだろう。

しかし、タバサの中では興味が勝っていた。本を閉じて、ため息混じりの様子で椅子から立ち上がる。

それを見たイルククウは着ていた制服をベッドの上へはいはいと脱ぎ捨て、素っ裸のまま窓から飛び降りた。

そして、何故かキュルケも加わった一行はシルフィードの背に乗り、最短ルートでトリスタリアを目指した。

しかし、到着すると一行は途方に暮れた。なにせトリスタリアは王都である。街が広いだけではなく、人の数も膨大だった。

「意外ね。タバサが野次馬根性発揮するなんて」

「馬が逆立ちをしたって聞いたら誰でも気になる」

「……それ、あの子が聞いたら怒るんじゃない？ あれでも繊細よ」

「本当は、うるさかったから」

そう言つて視線でイルククウを指す。

「ふうん」

「お姉さまだったら素直じゃないのね。まったく」

「……いいから、どこから探す？」

タバサも女子か、とキュルケは思った。

アルレットの行きそうな場所、というのをイルククウが提案し、街中の店という店をはしごして回ったものの中々見つからない。

休憩を取るために軽食屋を探して歩いていると、その人は見つかった。

よく知った中年男性の腕に、着飾った貴族の娘が抱きついていて。

街の中、甘えているような若い娘の様子と、男性の手には大きな紙袋。タバサとイルククウはその光景に見覚えがあった。金持ちの男性にねだって洋服を買ってもらったキュルケの姿である。そして、キュルケ自身にもその自覚があった。

魔王もやっぱり女子だったのか、とキュルケは思った。きつとケチのルイズが欲しい物を買ってやらないのだろうか、だからあんな冴えない禿男の腕をみつともなく掴んでいるのだ。全方位に対して失礼なことを考えていた。

しかし、問題はもつと別のところにある。その男性だ。

彼こそトリスティン魔法学院の教師にして火のトライアングルであるジャン・コルベール。その構図は実のところ、教員と若い娘、なのである。一種のスキヤンダルとして扱われてもおかしくない。

その二人は明るい様子でカフェへ入っていく。一行は逃すまいと後を追った。

店内の奥、周囲に人がいない席を選んだ彼らから隠れるように、一行は入口付近の席へ座った。アルレットにバレないとはつゆほども思っていないが、教師のコルベールと鉢合わせるような気まずい事態は望んでいなかった。あくまで盗み見、盗み聞きが目的である。

紅茶を片手にパイをつまみながら、耳の良いタバサを通して会話の内容を共有していた。

「……あの紙袋は洋服らしい」

「つままない。お菓子の包みがよかったのね」

「あなたももう気まんまんね」

「そんな食い意地は張ってないのね」

イルククウはパイを口へ放りながら、ふんと鼻を鳴らす。凶星だった。

「お礼を言ってる。お金は払ってもらったみたい」

「とうか、あの袋、かなりのブランド物じゃなかった？ もっと近くで見れば分かるんだけど」

「一番良さそうな店を選んだつもり、って言ってる。ミスタが」

「……あのミスタが。しかも自分で選んだと。はあ」

ブランド物を選んでプレゼントするなんて、若い頃はプレイボーイだったのかもしれない

ない。キュルケはタバサの話に想像をふくらませていた。

「……貰ったものは大切にすつて。ミスタを名前で呼び捨ててる」

「媚びてるわね……次も買ってもらおうつもりだわ、確実に」

「魔王さま、本当におじさん好きだったのね……」

「驚愕」

身体を寄せて合つてこそこそと話す一行は、目立っていた。知らぬは本人たちばかりである。

「ねえふたりとも。あれ、本当にあのおじさんが好きだと思う？ 次にも買ってもらうための演技に決まつてるわよ」

「あの子にそんな真似ができるとは思えない」

イルククウはあの子呼ばわりには眉をしかめたものの、まったく同じ意見には変わりがなく、タバサの言葉にうんうんと頷いた。

キュルケは、タバサがどうしてそうまで言うのかが分からなかった。時おり冷たい物の見方をする彼女も、思ったより純粋な心の持ち主なのかもしれない。貴族の娘も、平民の町娘も、金を持った中年男性に近づくとなれば決まって腹に一物を抱えているものだ。

「演技つてなんのこと？」

キュルケは驚いて飛び退いた。床を引きずった椅子が、店内に大きな音を響かせた。タバサの背後から現れたのは、件の彼女である。

「席、空いてる」

そう言つてコルベールがひとり座るテーブルを指差した。

「あ、あー……：相席してもいいのかしら？」

「うん」

「お邪魔では？」

「なんで？」

キュルケとの会話に、アルレットは小首を傾げる。

三人が言葉を返せずにいると、ひよこひよこ自分の席へ戻つていつてしまった。

「……どうする？」

「このまま帰るのが一番気まずいと思わない？」

「たしかに」

「こうなつたら魔王さまと食べるのね！」

三人の意見が合致する。観念して立ち上がると、紅茶とパイを持つて席を移動した。

アルレットはともかく、コルベールは気まずい顔をするだろうとキュルケは考えていたが、教壇に立っている時と変わらぬ普段通りの表情で紅茶を飲んでいた。

「ミス・ツエルプストーにミス・タバサ。奇遇だね。この店はよく利用するのかね？」  
「いえ……たまたまですわ」

「初めて」

「おお、そうか。私も初めてなのだよ。面白い偶然もあつたものだなあ」

アルレットはコルベールとタバサらの話にも興味をもつた様子もなく、ナイフでパイを小さく切り分けて口へ運んでいた。

「それで、君は、二年生のマントをしているが……見ない顔だね」

「イルククウ」

余計なことを言わないように、とタバサが間髪を入れずに代わって答える。

「そうか、ミス・イルククウか。はじめまして。火の授業を受け持っている、ジャン・コルベールというものだ」

イルククウが言葉を返そうとした瞬間に、タバサの右手が彼女の口を塞いだ。そして、後頭部にもう片方の手を添えると、人形を動かすようにコルベールへ強引にお辞儀させた。

言葉を発せずにもごもごと言うだけのイルククウに代わって、タバサが口を開く。何が何でも余計なことをして欲しくないという思いが現れていた。

「よろしくおねがいします。ミスタ・コルベール」

「あ、ああ？ よろしく、ミス・タバサ」

「イルククウ」

「……よろしく、ミス・イルククウ」

タバサはイルククウから手を離すと、戸惑うコルベールに対してお構いなしでパイを食べ始めた。

キュルケは親友の気持ちを慮って、何も言わないでおこうと思った。

「ところで、ミスタ？ どうしてルイズの使い魔と？」

「それか。彼女に衣服を見繕うよう頼まれてね。なにせ遠くの場所から召喚されて来たというから、トリスタニアの存在も知らなかったそうだ」

「はあ……」

それだけ？ というのが三人が持つ感想だった。コルベールからは何かを取り繕う様子も見えないし、それはアルレットも同じである。

見てはいけないデート現場を目撃した、と考えていたのが、アルレットとコルベールの認識によれば、見られて困るようなものでもなし。こそこそとしていたのは無駄だったのでは、と思い始めていた。

しかし、それでも晴れない疑問がある。キュルケは意を決して切り出した。

「ねえアルレット。ミスタ・コルベールが好きなの？」



質問の意図を理解したコルベールが、紅茶を吹き出しそうになっていた。しかし向かいの席に座る女子三人は、真剣な眼差しである。

アルレットはまたも小首を傾げて、何を言っているかわからないという顔をする。

「わざわざ嫌いな人と一緒にいない」

「好きなの？」

「うーん……いつも小言が多い」

「はは……そうか、それはすまなかつたね」

「でも、好き」

そう言つて、アルレットはおしとやかに微笑む。三人の表情が凍つた。素直に受け取れないコルベールは、頬をかいて苦笑いをしていた。

「……それで、好きな人の前だから偉そうな態度は控えてるの？」

「お忍びだから、わたしなの」

「お、お忍び？」

「秘密よ？」

「いいえ、言いふらしたりはしないけれど……お忍びつてどういうことかしら」

問いの意味が分からず、アルレットは考えこむ。対して、質問したキュルケは、どうして伝わらないのかが分からなかった。

お互いに首を傾げ合うという不思議な状況で、コルベールが助け舟を出す。

「お忍びは、お忍び以上の何物でもないんだらう。それで、どうしてお忍びをする必要があつたんだい？」

「わたしのところでは、お忍びをしなきゃ買い物ができなかつたから」

「なら、お忍びの時は取り繕わずにいられたわけだ」

「そういうこと」

たつたそれだけのやりとりで、キュルケは納得した。それは彼女がもともとお忍びをしなければいけない立場に居て、お忍びでは偉そうな態度も取る相手も居ない、という端的な答えだった。

「お忍びしなければいけないのは、魔王という立場のせい？」

「パイを食べ終えたタバサが、アルレットに次の質問した。」

「そんなとこ」

彼女が会話の中で初めてはぐらかすような言い回しをしたことを、コルベールだけが気付いていた。

タバサは紅茶で舌を湿らせて、言葉を続ける。

「それで、どうしてミスタを連れだした？」

「だって買い方が分からない」

「ルイズの方が都合がいいはず」

「そう?」

「またも理解の及ばない行き違いが生じる。このことについては、コルベール自身が疑問を持ち続けて、何度か訊ねたことでもある。」

「やっぱり、アルレットはミスタが好きなのね」

「どうして?」

「だってわざわざご主人を置いてミスタと街で腕を組むんですもの」

「……人混みは大変。だから、いつものようにしただけ」

「いつも……へえ、いつもねえ。いつの間にか、関係が長いのね」

「三人は納得した様子だったが、コルベールは違う。アルレットとまともに会話をしたのは、今日が初めてであった。」

ようやく疑問解決の糸口が掴めた、とコルベールは思った。

「もしかして、召喚される前には、私のような人物をお付きにしていたのかい?」

アルレットは頷いた。その場にいる全員が、そのやりとりで理解した。

大人の男性と大きな街で買物をするのも、人混みではぐれないよう腕を組むのも、取り繕わない自分でお忍びをするのも、趣味や習慣のひとつなのだった。赴く場所と連れにいる人間が異なっているだけで、彼女にとっては当たり前前の休日であり、疑問を投げ

かけられても答えられない。「いつものようにした」だけなのであった。

そしてひとつ、爆弾発言が投げ込まれた。

「わたしの護衛をしてた、勇者にそっくり」

紅茶を口に含んでいたタバサは思わず吹き出しそうになり、とつさに唇をきつく締めた。大きくむせ返って店内の注目を浴び、おまけに鼻から紅茶が垂れているのを、親友のキュルケは身を挺して隠した。

キュルケにイルククウ、そしてコルベール自身も、紅茶を口に含んでいればそうなたかかもしれない。そんな状況を、アルレットはきよとんとした様子で眺めていた。

「わ、私なんか、似ているのかい……？」

「そう。護衛の時は国の騎士団長だったけど、今では世界中に肖像画が飾られてる、伝説の人」

アルレットは誇らしげに言うが、目を真っ赤にしたタバサは再びむせ返った。

それは、世界中に飾られたコルベールの肖像画を想像したのかも知れなかった。

## 10話 『虚無の魔法使いⅠ』

ある辺境の森に、誰にも知られていない小さな村があった。

そこでは耳の尖った年頃の女と、どこへも行けない子供たちがひっそりと暮らしていた。畑もなければ働き口もない。女と子供が狩るのはうさぎが精一杯で、それもたいていは逃げられてしまう。

しかし、幼い村人たちはそれでも食うに困らない生活をしていた。なぜなら、その村には金があつたからだ。

夕食のシチューを煮込みながら、村の長である耳の尖った女は幸せそうに笑っていた。今日は彼女の誕生日である。この村を離れて暮らしている姉から、ささやかなプレゼントとたくさんの金銭を受け取った。

それでも、大切な姉の顔を見ることが彼女にとって一番の幸せであつた。

## 10話 『虚無の魔法使いⅠ』

ルイズはふつくらとしたすべやかな頬を林檎のように赤く染めていた。それは羞恥

によるものか憤怒によるものか、あるいはそのどちらもか。白いベッドシートの上に組み伏せられた彼女の表情は歪んでいた。

覆いかぶさった格好のアルレットは、赤い果実へかぶりつくようにキスをした。口を遮られたルイズは、呼吸を乱して小さく声を漏らす。

アルレットは抵抗するルイズの白い肩につき、体重をかけて押さえつけた。股下に広がるネグリジエの生地を膝で踏みつけると、ルイズは抵抗を諦め、行為が終わるまでなすがままに唇を受け入れた。

やがてアルレットはゆっくりと身体を起こし、長い行為からルイズを解放する。押さえつけられたせいで赤くなった肩口を撫でながら、ルイズは口を尖らせた。

「今日は噛まないのね。ご機嫌取り？」

「嫌……だった？」

「痛いのは同じじゃない」

アルレットはルイズの治らない不機嫌に困った表情を浮かべる。

ルイズは、彼女が何も言わずトリスタニアまで行ってしまったことを許せないでいた。しかも、男とふたりきりで、贈り物を両手に抱えて帰ってきたのだ。彼女の不始末で学長室に呼ばれていた間に、というのがまた不満な気持ちを増長させる。

召喚してから、初めての虚無の曜日。ルイズはそれが特別な日になると信じていた。

それは、ルイズがキスをされてもいいと思うくらいには彼女を好いていて、それまでに二人でどんな休日を通り過ごそうかと期待を膨らませていたからだだった。

ルイズの機微がわからないアルレットは、不安な表情で鳶色の瞳を覗きこんだ。しかし、そこにはぐしやぐしやになった感情があるだけで、その奥を見通そうにも目をそらして泣き出しそうな顔をするだけだった。

アルレットの顔を見るのが辛くなったルイズは、とうとう身体を押しつけて距離を離れた。押しつけられた形のアルレットは、目を伏せてベッドから降りてしまった。

「ごめん」

「しらない」

「ごめんね」

ルイズはアルレットから顔を背けて、頭から毛布を被ってしまった。

被った毛布の向こう側からドアの閉まる音を聞いたルイズは、急に押し寄せてきた後悔に押しつぶされそうになって、髪をくしゃくしゃにしながらうずくまった。



朝、目が覚めると、隣に誰も居ないことに、ルイズはたまらなく寂しくなった。

髪を梳かしている間に現れたシエスタに対してぶつきらぼうに事情を説明すると、彼女は用はないとばかりにさっさと部屋を出て行ってしまった。そのこともまた、ルイズの心をささくれ立てた。

ルイズはその寂しさに、アルレットを召喚する前の自分を思い出していた。

口を利くのは、キュルケと言い争いをするときだけ。たつたひとり寝て起きて味もわからない食事を口にし、使えもしない魔法を必死に勉強して、爆発させて怪我をしては嘲笑の的になる。いつ自分が崩れてしまうかも分からない。まるで不安定な崖の上に立たされているような、悪夢の日々だった。

アルレットは、ルイズの願いを叶えるといった。このままなら契約不履行だ、と思う。それから重い足取りで食堂へ向かい、そこでアルレットの顔を見たとき、ルイズはまた隣で食事ができると思った。内に抱えた昏い思いも吹き飛んでくれると思った。

しかし、アルレットの隣にいたのはキュルケだった。何度もからかわれ、何度も喧嘩をした相手であり、情けない顔を見られたくない一心で見ないふりをした。そのままいつものテーブルへ向かい、空席になった隣に座った。アルレットがどこに座ったのかは、考えなかった。



そうしてキュルケとアルレットを避けたまま、夕食の時間になった。ルイズは食欲が湧かなかつたため、昼食に続いて食堂へは向かわず、中庭のベンチで時間を潰していた。もしアルレットが自分の部屋に帰ってきたら、どんな顔をすればいいかわからないからだった。

どれくらい時間が経ったか、食事を終えた生徒たちが見え始めたころ、最も会いたくない人物が目の前に現れた。

それは、今日一日、意図して避け続けてきたキュルケだった。ベンチに座るルイズを、真正面から見下ろして言った。

「あなたね、いい加減許してあげなさいよ」

「……なんのことよ」

「とぼける気？ あの子が泣いている時に、なんとも思わないでぼけーつとしてるわけ」  
「あなたには関係ないでしょ」

「昨日も今日も、ベッドで泣いてうるさいのよね。いよいよどうにかしなきゃいけないと思って、シエスタに任せて出てきたけど」

「邪魔だったら部屋から追い出せばいいでしょ。わたしに言わないで」

彼女は、自分が怒ったくらいで泣くような弱い人間じゃない。泣きたいのはこっち

だ、とルイズは心の中で吐き捨て、キュルケの言葉に耳を貸さずほとんど聞き流していた。

「主人失格ね。召喚に成功したのも何かの間違いなのよ。所詮は『ゼロのルイズ』ね」

しかし、聞き逃せない言葉を聞いて、ルイズは顔を上げてキュルケを睨みつけた。

「なんですって？ 間違いなわけじゃないでしょう。成功したからあの子がいるんじゃない。ルーンだつて刻まれたわ」

「自分で来たんでしよう？ 『ゼロのルイズ』が成功なんてするわけないわ。もしかして、あなたが使い魔なんじゃない？」

キュルケはルイズへの苛立ちを込めて苦笑した。

『ゼロのルイズ』。ルイズの最も嫌う呼び名だった。そして、初めて自分の力で成功させた魔法を否定されたことが、ルイズの頭に血を上らせていた。それは、ルイズの中で貴族のプライドと同じくどうしても譲れないことだった。

「取り消しなさい！」

「主人失格つてところ？ ようやく通じたかしら」

「そうじゃない、成功するわけじゃないなんて言葉よ！ わたしは成功したわ！」

キュルケは失望の眼差しでルイズを見下ろした。ヴァリエールの家名は、腐つても公爵家のものであり、ツエルプストーの家とは良い意味でも悪い意味でも競い合ってきた

仲だった。ルイズに関しても、キュルケは彼女の魔法への姿勢を評価して、『ゼロのルイズ』のままで終わるはずがないと信じていた。

戦闘の魔法に優れたギーシュが相手にならないような、計り知れない強さを持った使い魔を召喚して、そうしたキュルケの期待は高まっていた。平生の努力する姿勢を見て、メイジの実力を測るなら使い魔を見る、の言葉を体現して欲しいと考えていたほどだった。

けれども、ルイズが使い魔の主人失格であることは今のやりとりで分かった。やはり、アルレットが彼女の使い魔になったのは何かの間違いだったと、キュルケは大いに失望した。加えて、泣いている使い魔をなんとも思わない態度に、その努力も見え透いた見栄の産物だろうと、そう思ってしまった。

魔法の使えないルイズにあった貴族の態度も、努力の姿勢も、キュルケにはくすんでしまったように映った。

「取り消さないなら、取り消させてやるわ」

「ふうん。ドットですらないあなだが」

ルイズが杖を取った。そうなれば、やることはひとつだった。

「人のいないところでやりましょうか。また呼び出しを食らって、あの子に置いてけぼりにされたくないでしょ？」

キュルケの挑発に、ルイズは無言で睨み返しながら立ち上がった。

夜の闇が深くなりつつある学院の裏庭で、二人は杖を抜いた。

キュルケはこの歳にして火のトライアングルを誇る魔法の実力があつた。学院内でも比肩する生徒はタバサくらいなもので、決闘と言つても気負うものは何もなかった。相手が『ゼロのルイズ』であれば、なおさらである。失敗魔法による爆発の威力はともかく、精度はまるで脅威に値しない。

でたらめに辺りを爆発させられて怪我を負う前に勝負を決めてしまおうと、キュルケは杖の先から二メートルもあるフレイム・ボールを作りだした。手加減なしの魔法に、ルイズが息を呑む。キュルケは足元を燃やして軽いやけどでもさせてやろうと考えていたが、相対するルイズの受ける印象はまるで違う。直撃すれば、怪我どころでは済まないかもしれない。

それでも逃げるわけにはいかない。向かってくるフレイム・ボールを打ち破ろうと、ルイズは杖を振った。

ルイズがとっさに唱えたのは、念力の魔法だった。フレイム・ボールの軌道を逸らし、その隙に杖を叩き落としてやろうとルイズは画策した。系統魔法に適性がないと分かった今では、彼女が頼れるのは貧弱なコモンマジックと自身の細い体だけだった。

キュルケはルイズが魔法を扱えるようになったことを知らない。アルレットが言うには、精気を吸う行為がルイズの有り余った精神力を減らしたおかげで、力加減を覚えて魔法が爆発しなくなったのだという。もう『ゼロのルイズ』とは呼ばせない。ルイズは、強い思いで魔法に精神力を込めた。

しかし、目の前に起きたのは念力の魔法ではなく、見慣れた失敗魔法の爆発だった。地面をゴツゴツとえぐりとする衝撃は、結果的にキュルケのフレイム・ボールを打ち破ったが、ルイズはひどく動揺した。アルレットを召喚してから一度も失敗魔法を起こしていなかった彼女は、また『ゼロのルイズ』に逆戻りしてしまうのではないかと、背筋が凍るような思いだった。

それと同時に、有り余った精神力の状態をいまさらに自覚する。昨晚、アルレットがあれだけ強く求めていたのに、ほとんど精気を吸われていなかった。

どうして、なんていうのは考えるまでもない。

ルイズがアルレットのことを、キスしてもいいと思えるくらいには好きだったように。アルレットは、キスだけでもいいと思えるくらいにルイズのことを好きでいた。そうして取った彼女の行動を、知らずの内に跳ね除けて、嫌な顔をしてベッドの上から押し返した。

強い後悔が、ルイズの胸をぎりぎり痛いくらいに締め付けた。それは、もともと

あつた動揺も撥ね退けるほどだった。

貴族のプライドを賭けた決闘の最中で、相手は待つてくれない。ルイズが立ち直るより早く、その周囲に炎の壁が立ちはだかった。

炎に四方を囲まれ身動きの取れなくなったルイズに向かって、キュルケは無情に言い放つ。

「あんたの負けよ。杖を捨てなさい」

ここが戦場ならば、キュルケが宣言する前にルイズは炎の壁に潰されていただろう。わずか一瞬の攻防で、キュルケはルイズの喉にナイフを突きつける形になった。火のトライアングルを誇るキュルケの魔法は、戦闘においてもギーシュとは一線を画するものだった。

高々と燃え上がる炎の熱に肺が焼けそうになるのをこらえ、ルイズは杖を振る。

「わたしはまだ倒れてない！」

フレイム・ボールを打ち破った魔法を、全力を込めて放つ。

精神力を制御できないなら、制御できないなりに力を使い果たすだけ。今のルイズには『ゼロのルイズ』を否定するよりも、訂正させたい言葉があつた。それが嘲笑される力でも、主人失格ではないことを証明するには、あの使い魔を従えるだけの実力を示さなければいけない。

「召喚したのは何かの間違いだった」と、言われたくはなかった。

でたらめに放たれた魔法は、キュルケから幾分も離れた場所を襲った。それでも、火薬にまとめて火を放ったような爆発が暴風を生み出し、キュルケの身体を吹き飛ばす。そして、その手から杖を奪い去った。力の源を失った炎の壁はかき消え、息を荒くしたルイズの姿が現れた。

風に運ばれる木の枝のように転がっていくキュルケの杖を、ルイズはよろめく足で追いかけて掴みあげる。

これで、キュルケは魔法の行使ができなくなつた。

「わたしはあんたより上よ。わかつた？」

「……ルイズ、あんたね。さつき、燃やしてやればよかつたのかしら」

炎の壁が燃え上がった時点で、この決闘の勝利はまぎれもなくキュルケのものでつた。それは敗者であるルイズ自身も理解していたことだつた。

それでもへたり込むキュルケに歩み寄り、怒鳴りつけるように言い放つ。

「いいから、さつきの言葉を訂正しなさい！」

「敗者であるあなたに対して、何を訂正しろつていうのかしら。思ったよりもずっと無能だつた、つて？」

「無能じゃない。わたしはトライアングルのメイジから実力で杖を奪つたの。それと

も、あんたは無能に杖を取られる間抜けだっていうの？」

「いうじゃない、『ゼロのルイズ』」

その時だった。月明かりでかすかに照らされた裏庭に、大きな影が落ちる。

二人が顔を上げたと同時に、あたりに轟音が響き渡った。それはルイズの魔法よりもずっと大きく、地響きを感じさせる衝撃だった。

そこにあつたのは、三十メートルはあろうかという巨大な土のゴーレムが、学院の宝物庫の壁を破壊せんとしている光景だった。



## 11話 『虚無の魔法使いⅡ』

その国の姫君は、物心の付いた日からそれまで、城から一步も外へ出なかつた。

箱入り娘と言われたが、それは檻に閉じ込められた罪人にも等しかつた。幼く無垢な彼女が一体どんな大罪を犯したというのか。城の者ばかりか、本人すらも知らない。

そんな中で、気の毒に思つた警護の者が手を差し伸べ、外の世界へと連れ出した。しかし、その態度は恭しく慇懃であり、友人とは程遠い姫と護衛の関係であつた。

だから彼女は、親しい人間に突き放されることの辛さを知らなかつた。目を閉じてベッドに横たわる彼女に、どこにも居ない誰かが囁く。

彼女の目と耳は特別だつた。閉じた瞼の向こう側に見えるはずのないものを見て、こえるはずのない声を聞いた。彼女は飛び起きて、涙で濡らした毛布を投げ捨てた。

同時に、学院に轟音が響き渡つた。

## 11話 『虚無の魔法使いⅡ』

一度、二度とゴーレムが大木のような腕を振り下ろす。

そのたびに、轟音とともにひびの入った学院の宝物庫の壁が崩れていく。

地面に響く振動を感じながら、ルイズとキュルケは逃げることもできずにいた。目の前にある圧倒的な質量を前に、どうしようもない無力感を感じていた。

せいぜい四メートルの範囲が限界の爆発や炎で、塔のようにそびえ立つあの巨人にいったい何ができるといえるのだろうか。宝物庫の壁が完全に瓦解するまで、呆然とそれを眺めていた。

ゴーレムの肩から黒い人影が飛び出して、宝物庫へ侵入していく。

何もできずにいた二人は、ゴーレムの動きが止まってようやく状況を理解した。

噂に聞く巨大な土のゴーレム、堂々とマジックアイテムを狙う盗人。あれは、宝物を狙う盗賊『土くれのフーケ』であるに違いない。

ルイズは恐怖も無力感も投げ出し、杖を握りしめて駆け出していた。

彼女を動かすのは、貴族のプライドだった。盗賊を目にしてそれをみすみす逃すなんて選択肢はない。

「ちよつと、あんたじゃ無理だつて！」

「わたしは貴族よ！ 盗賊を前にして、逃げろつていうの！」

ルイズが杖を振り、ゴーレムの右足に爆発が襲った。

しかし、土の塊はびくともせず、表面がぼろぼろと削り落ちるのみだった。疲弊した

ルイズの爆発では、ゴーレムにとうてい敵わないのは明らかだった。それでも、ルイズは爆発を重ねていく。

やがて、ゴーレムがぐらりと揺らいだ。

ルイズは喜色の笑みを浮かべたが、それもすぐにかき消える。割れた足の部位はまたたく間に修復され、巨体が二人の方向を向いた。ゴーレムはルイズの爆発によってよるめいたのではなく、搭乗者の到着によって自ら動き出したのだった。

そしてキュルケは、ゴーレムの肩に降りた黒いローブの人影が、目深に被ったフードの向こうからこちらを睨んでいるのを見た。

「逃げなさい！」

「わたしは貴族よ。魔法を使えるものを貴族と呼ぶんじゃない」

ルイズは、ゴーレムに乗る人影に向かって杖を振った。

「敵に背中を見せないものを貴族と呼ぶのよ！」

爆発は狙い通り、搭乗者の真下を襲った。しかし、今日で数十発目の爆発は見るからに力なく、人影をゴーレムの肩から吹き飛ばすには至らなかった。

その爆発を取るに足らないと考えたからか、ゴーレムは二人から興味を失ったように、反対方向へ歩き出す。

ルイズはそれを追いかけて、逃がすものかと再び杖を振った。

今度の爆発は、ゴーレムの頭に命中した。爆風にフードを攫われそうになった人影が頭をかばっているのが見えたが、やはりダメージは与えられない。

そして、ついにゴーレムが足を止めた。

「ルイズ、いいから逃げて！ もう十分立ち向かったわ。誰もあなたを笑ったりしないから！」

キュルケが顔面蒼白で説得するも、ルイズは奥歯を噛んで杖を振る。ゴーレムが立ち止まる理由といえ、ひとつだった。

ルイズの放った爆発は、振りかぶられたゴーレムの腕によつてあつけなくかき消された。

そして、その巨大な腕がそのままルイズに向かって振り下ろされる。眼前のどうしようもない絶望に、声も出すことができない。ルイズはただ目を閉じて、その場にうずくまった。

——しかしそれは、もうひとつの巨大な腕によつて遮られた。

衝撃音と地響きが辺りに響き渡る。ルイズの心臓にまで響いて、固まっていた身体を解した。

恐る恐る目を開いたルイズの前には、黒い沼が広がっていた。足を踏み入れれば、二度と光を見ることはないと思え、昏い闇色だった。

そして、その沼から生えた巨大な腕が、振り下ろされたゴーレムの腕をその場にとどめていた。

沼と同じ色をした腕は、それ自体がゴーレムに比する大きさであり、こうなればゴーレムを巨大と言つていいのか迷うほどだった。

その場を離れようとするゴーレムの腕を、闇色の腕はあっさり握りつぶした。

搭乗者は圧倒的な力の差の前に逃走の一手を選んだ。しかし、闇色の腕がゴーレムの腹をわしづかみにする。

そして、のけぞつた体勢のまま、ゴーレムの身体は上下真つ二つに分断された。

どさどさと地面に身体の欠片を落とすゴーレムは、やがて形を保てなくなり、ただの土へと還つていった。

森の奥へと消えていく黒いローブの人影を追うことも忘れ、ルイズは尻餅をついて震えていた。

腕ひとつで、まるでハエを潰すかのように三十メートルのゴーレムを葬り去つた。昏い闇色の沼に何が沈んでいるのかも、ルイズは想像したくなかった。それは、街ひとつを滅ぼす天災のようだと思つた。

やがてその腕は昏い闇色の沼へと還り、沼は逃げ水のように消えていった。

座り込んでいるルイズの元に、影が落ちる。今度は小さな影だった。

「怪我、してない?」

ルイズが顔を上げると、そこには目を赤く腫らしたアルレットの顔があった。目尻を下げて、不安そうな表情をしている。

「本当に泣いてたのね」

ルイズは、妹をあやすような優しい声音で言う。アルレットの情けない顔を見たら、つい先ほどまでの震えもどこかに消えていた。

そして、しっかりとした動作で立ち上がり、アルレットの身体を抱いた。

じんわりと熱く濡れていく肩口に、ルイズはアルレットの目からぼろぼろと涙がこぼれているのを感じ取った。後ろに回した手でゆつくりと背中を撫でると、アルレットの抱きつく力が強くなる。それでも、細腕からは弱い力しか感じなかった。

「ご主人様失格でごめんね」

アルレットが、ルイズの肩の上で首を振る。

「わたし、弱いくせにプライドだけ高いのよ。あなたみたいな凄い使い魔とは釣り合わないわ」

「しらない」

二人の体がよろめいた。それは、アルレットがより強くルイズへ抱きついたからだつた。

お互いの体を離しながらたたらを踏んで、なんとか転ばずに踏みとどまる。ルイズはおかしくなって笑ってしまった。

自分が『ゼロのルイズ』だとしても、アルレットにとって必要な存在なのだと思ひにしてみても感じた。

ルイズはアルレットの目元から指で涙を拭いて、額に顔を近づけた。切り揃えられた前髪をかきあげて、そつと口づけをする。ルイズが、初めて自分から施したキスだった。頬を染めるアルレットの髪を優しく撫でながら、ルイズはそれを人形に縫い付けられた金の糸のようだと思った。赤く腫らした目元も、唇まで垂れている鼻水も、不格好には見えない。ルイズにはむしろ、その無垢な顔が愛おしく感じた。

「あなたでも顔を赤くして恥ずかしがるのね」

「ルイズの気持ち、見えたの」

暗闇で光るアメジストの瞳が、穏やかに細められる。

「わたしのこと、ずつと大切にすって」

「……もう。勝手に見ないでよ」

アルレットが、再びルイズに抱きついた。今度は、甘えるような仕草で胸に額を押し付ける。

ルイズはそれを受け入れて、アルレットの小さな頭に頬を寄せ、肩を抱いた。

「あのー……ルイズ。お邪魔して悪いんだけど」

突然に聞こえてきたのは、ルイズがすっかり存在を忘れていたキュルケの声だった。「状況を説明して欲しいって。先生方が」

キュルケの方を振り向くと、そこには教員のコルベールとギトーが居た。

ルイズは飛び跳ねるようにアルレットから身体を離れた。離れるときの悲しそうなアルレットの顔を見ないふりをして、姿勢を正し教員の二人に向き合った。

「なな、なんででしょうか!」

「……いや、事情はすでにミス・ツエルプストーから聞いた。報告は明日の朝一番にする」

「は、はあ……?」

「それまで、我々は交代で宝物庫の警護をするつもりだ。だからはやく自室へ戻りたまえ」

ギトーが目を逸らしながら、しつしと厄介払いするように手を振った。隣のキュルケは、にやにやと悪い笑みを浮かべていた。

ルイズは腕に抱きついてくるアルレットを引っ張って、顔を真っ赤にしながらその場を離れるのだった。





ハルケギニアにその名を轟かせる大盗賊『土くれのフーケ』は、震える手を抑えながらドアノブを引いて部屋に駆け込むと、額に浮いた脂汗をローブの袖で拭いた。

目下の盗みのターゲットであるトリステイン魔法学院の寮内に彼女は居た。とはいっても、それは盗むために駆け込んだのではなく、ひとつの逃亡先だった。

そこは彼女がロングビルという女性秘書の顔を用いて獲得した自室だった。平民の扱いながらも上等な調度品の揃えられた一室は、彼女の学院での地位の高さを示している。

秘書というのはこの学院の長へ直に使える役職であり、彼女へ疑いを掛けることは長への背信に等しい。最上級の宝物を抱えるこのトリステイン魔法学院に秘書という形で潜入できたのは、甚だ僥倖であつたと『土くれのフーケ』は考えていた。

しかし、あの黒い巨人を見て考えを改めていた。

水差しかからコップに水を注ぎ、中身をすべて飲み干す。カラカラになった喉が潤い、歓喜の音を鳴らした。丸めた黒いローブをベッドの下に押し込み、だらしなく椅子へも

たれ掛かった。

ゲルマニアから来たトライアングルメイジと、魔法の使えない公爵家の三女。直前の下見では姿が見えなかったものの、彼女がゴーレムを生成する準備をしてから宝物庫へ向かうと、その二人がいた。

そして、公爵家の娘の失敗魔法が宝物庫の壁にひびを作った。土のトライアングルの彼女ですら傷ひとつ付けられなかった固定化を、何かの間違いか、貫いてみせたのだ。た。

これ以上はない好機と見た彼女は、あの二人が居るにもかかわらず宝物庫への侵入を試みた。ひびが入ったと教員に報告されてからでは遅い。そして想定通り、邪魔されずに『破戒の剣』を盗み出すことができた。

そこからが問題だった。目当ての物を手にしたのなら、彼女は一目散にあの場を去るべきだったのだ。

そうしていれば、あの怪物と相対することなく盗みを終えることができた。

その巨人の登場が姿を見せなかったアルレットの仕業だと、彼女は知らない。『破戒の剣』に憑いた呪いか、はたまた学院の宝物庫に仕掛けられた罠に、魔神を呼び出すマジックアイテムなんてものがあるのか。『土くれのフーケ』としてハルケギニアの貴族という貴族からマジックアイテムをかつきらつてきた彼女でも、まるで推測が付かな

かった。

ひとつ分かるのが、生きて帰れたのが奇跡に等しいということだった。腕の一本がゴーレムの高さに値するなら、あの怪物は一体どれほど巨大だというのだろう。想像すればするほど恐怖は膨れ上がっていく。

あれがこの学院に存在している以上、もう盗みは働けない。もし再び相対することがあれば命がいくつあっても足りない。それこそ、都市の人口ほども喰らってしまいそうな、怪物だった。

彼女は全身が粟立つような恐怖心もあつて、早々にこの学院を去ろうと決意した。

その頃、ルイズの部屋ではシエスタを交えた試着会が行われていた。コルベールからアルレットへと贈られた例のものである。

緩みきった表情のシエスタに着替えさせられたアルレットは、白かった。

「……黒や赤なんかより、ずっと似合うわよ？」

アルレットが身につけたのは、純白の上質な絹を用いたワンピースだった。見守るルイズとシエスタは、思わず嘆息する。透き通った白い肌とつややかなブロンドが合わさった清楚な雰囲気は、決して自分には真似できない。少女ならば誰もが持っている、深窓の令嬢のような存在への憧れをくすぐるものだった。

「お姫さまみたいです。ああ、素敵……」

シエスタはうつとりとした表情で見とれていた。

「ふふん。余は王族だからな」

「ああ、台無しだ……」

口を開かなければいいのに、とルイズは切に思った。アルレットはルイズの言葉に、考えたような仕草をする。

今度は、シエスタが紙袋から黒いドレスを取り出した。襟に白い生地が使われているだけで、それ以外の部分はすべて黒色が占めている。ふんだんにあしらわれたフリルと生地の質の良さが彩りの少なさを打ち消して、それが贅沢な衣装であることを示していた。

シエスタがアルレットのワンピースを脱がそうという時、アルレットがそれを静止した。

「これは、ルイズに着てもらおうと思ってたの」

「……え？」

きよんとするルイズに、アルレットは黒いドレスを手に取り、近寄った。

ドレスの両肩の裾を手を持って、ルイズの身体に重ねる。ちょうどアルレットの付けた噛み跡が隠れるような、首元の露出の少なさが見て取れた。

「シエスタ、おねがい」

「あ……はい。かしこまりました」

シエスタは状況を理解しないまま、同じく何が何だか分からない様子のルイズを着替えさせた。白いタイツと、黒い革靴もセットで履かせる。あつという間に、別人のようなシルエツトが出来上がった。

黒いドレスを身に纏ったルイズは、配色のせいで桃色がかったブロンドが際立っていた。鏡を見た本人が首を傾げる。

「アルレットが選んでくれたの？」

「うん。これだけ」

ルイズは鏡の中の雰囲気が一転した自分を見て、黒いドレスはあまり似合っていないのではないかと思った。

けれども、それを口には出せない。選んでくれた、という部分だけを素直に喜ぶことにした。

「ありがとう。嬉しい」

ルイズはアルレットに優しく笑いかけた。

「……ちがう」

「え？」

「もっと、顎を引いて、びしっとして」

アルレットが黒いドレスの裾を伸ばしながら、ルイズの肩を引いたり、足の開き方を直したりしはじめた。ルイズは、あのアルレットが礼儀作法の講師のような真似をし始めるとは、夢にも思っていなかった。

「口は開かないの」

「な、なによいきなり……」

「そういう低い声は出さない。口元を引き締めて、眉には絶対に力を入れない、少しも入れちゃダメ」

最後に前髪を綺麗に整えて、アルレットはルイズから一步下がった。

鏡の中にいたのは、まさに別人だった。普段の自分からは想像もできない、冷淡な目をした伶俐な印象の少女。桃色がかったブロンドも、隠れた少女らしさを演出するのにふさわしいとすら思う。アルレットから言われた通りのまま表情を動かさず、ルイズはじつくりと自分を観察する。そこには、どこかで見たような何かがあった。

「とてもお似合いです」

「ありがとう、シエスタ。なんだか別人みたい」

「そうですね。でも、すごく素敵です」

シエスタが微笑む。なるほど、とルイズは思い、アルレットに訊ねた。

「似てないけど、あなたと同じような雰囲気についてこと？」

「うん、わたしと同じ。あとは、口調を」

「……口調を？」

認めたくない、わかりきった答えを訊く。

「わたしみたいにして？」

「……それって、偉そうにすればいいの？」

「うん。交換。するの」

白いワンピースの、清楚な印象に様変わりしたアルレットが言う。

その上目遣いに、ルイズはやられていた。

「う……ちよつと」

「ルイズ、お願い」

一度咳払いをしてから、ルイズは意を決して挑戦した。

「うむ……わ、わかった……ぞ？」

たどたどしく、セリフを読み上げるような声に、アルレットは首を傾げる。

「うーん。ダメ。表情も変になる」

「……わたしにはこれが限界」

「そう。魔法を使うには意識が必要だから、もっと別の方法を考えないと」

「魔法？」

どこからその言葉が出てきたのか。コモンマジックを扱えるようになったルイズにとって、最も関心のある話題だった。

期待感に胸を膨らませ、アルレットから逃さず聞き出そうと身を乗り出した。

「あの偉そうなのは、魔法に必要なの？ 魔族を従えるためなんでしょう？」

「その二つに違いはないの。必要なのは、中身。行動が意識を塗り替える。」

言ったでしょ、ルイズ。わたしの魔法をあげるって」

ルイズはドレス姿のまま文机に向かうと、引き出しから羊皮紙を取り出し、ペンを手にとった。勉強家らしく、整った文字を紙面に書き連ねていく。

横から無言で紅茶のカップが差し出される。シエスタが一步引いて、恭しく礼をした。

「どうしたのよ、そんな仰々しく」

「これも必要な意識の一貫でございます。ルイズさま」

「……………ありがとう」

むず痒くなる気持ちを封じ込め、表情を崩さずにお礼を言う。

それから夜がふけるまで、黒いドレスのルイズと白いワンピースのアルレットは文机の前で話し続けた。



## 12話 『虚無の魔法使いⅢ』

朝一でこの学院から去ろう、と『土くれのフーケ』は考えていた。

しかし、なんということだろう。学院の宝物庫から盗んだこの『破戒の剣』、ただのよく切れる大剣ではないか。

これはおかしい。探知魔法のディテクト・マジックでも、類を見ない強力なマジックアイテムであることは分かっている。

こうでは売り物にもならない。途方に暮れて、彼女は愚策に出るしかなかったのである。

### 12話 『虚無の魔法使いⅢ』

早朝、『土くれのフーケ』が現れて学院中が大騒ぎになる中、学長室には事件の目撃者であるルイズとキュルケ、アルレットに加えて、教員一同が揃っていた。

ゴレムが宝物庫の壁を破壊する場に居合わせた二人の証言を聞いて、学長のオスマンは顎にたくわえた白い髭を弄びながら唸る。

「よもや、土くれの拳であの分厚い壁が破壊されるとは」

「賊を前にしながら、何も出来ず……申しわけございません」

ルイズは深く腰を折って頭を下げる。

「いいや、『土くれのフーケ』はトライアングルと言われているが、宝物庫の固定化を突破した腕。実力はトライアングルをはるかに凌ぐものだった。

ミス・ヴァリエール、ミセス・シュヴルーズ。これは、誰がその場に居合わせようと、どうしようもないことじゃ。気に病むことはない」

その日の見回りの当番は、シュヴルーズだった。しかし、学院の宝物庫には複数のスクエアメイジによる万全の固定化が掛けられており、まさかそれが破られるとは教員の誰も想像していない。見回りなどするだけ無駄だというのが教員間での共通認識で、彼女も例に漏れずその日の当番を自室で寝てやり過ごしていたのだった。

いつ学長や他の教員にどやされるかとひやひやしていたシュヴルーズは、ほっと胸を撫で下ろす。それに関して、教員も納得していた。宝物庫の守りを破る賊なんてものを見回りで発見したとして、いったいどうしろというのか、というのは教員全員が考えていたことだった。

「しかし！ ただ無抵抗に宝を篡奪されて、それで良いと思うか！」

「……しかしもなにも、学院長。無茶というものではないですか」

「あー、ミスタ……そう、コツパゲよ」

「コルベールです」

「おお、そうじゃった、ミスタ・コンビーフよ。お主は当番をサボつてはおらぬが、他のものは違う。無茶でも何でも、篡奪者へ立ち向かうのが貴族というものだろう。違うか？」

集まつた教員が、オスマンの言葉に目を伏せる。趣味がセクハラでも、オスマンはトリストインの貴族として尊敬すべき賢者のような人物だった。

ルイズはオスマンの言葉に満足気に頷いた。

「以降、当番をサボるなどということはないように。して、ちよいと左手が寂しいのじやが、ミスタ・コツパゲール」

「ミス・ロングビルでしたら、騒ぎを聞いて早々に調査へ向かったということ。あと、私はコルベールです」

「ふうむ。さようか」

オスマンは重々しく息をつく。

教員の中には、若い女性というものが居ない。セクハラが趣味のオスマンによる「左手が寂しい」の一言が指すのは、若い女性秘書であるロングビルのことだった。

「して、ミス・ヴァリエール。その格好はなんじゃね」

「魔法研究の一環でございます」

「ふむ、さようか」

学則を逸するにあたって何よりも便利で小狡い言い訳が魔法研究である。私服姿の二人は浮いているものの、咎められてはいない。

昨夜に続いて、ルイズは黒いドレスを身にまとっていた。アルレットも同じくワンピース姿で、眠たそうに目をこすっている。彼女が目覚めたのは呼び出しを受けてからで、シエスタが急いでネグリジエから着替えさせたのだった。

「学院長。右手が寂しいからといって、学生に手を出すのはやめて下さい。この学校が潰れますぞ」

「ええい、強いものに屈服するな！ 如何なる敵にも勇ましく立ち向かうのが貴族というもの！」

オスマンは言葉の勢いのまま立ち上がろうとした。それはもう、賢者と呼ばれるような威厳であった。

その動作の途中、中腰の状態でおスマンの動きが固まった。

「どうされましたか？」

コルベールだけならず、その場に居る全員が心配そうにおスマンの顔を覗きこむ。そこで、学長室の扉が開いた。

「お、おお……ミス・ロングビル……腰が、腰が……」

「オールド・オスマン！ 一体どうされたのです」

部屋に入ってきたロングビルは、だらだらと汗をかいて恐ろしい顔をしているオスマンを見て驚いた。扉を開けて真つ先に飛び込んできたシヨッキンキングな光景だった。

「はやくこちらへ来るのじゃ……ミス・ロングビルや……」

ロングビルは駆け足でオスマンの元へ寄る。

「いったいどうされたというのです！」

「せめてもの頼みじゃ……腰を、儂の腰を撫でてはくれんか……」

「ぎ、ぎっくり腰ですか……それで具合が良くなるというなら」

「お、おお、おお……」

オスマンの頼みにロングビルは嫌な顔ひとつせず、彼の腰を撫でた。だんだんとオスマンの表情に余裕が生まれ、ほつと息をついてから椅子へと座り直す。腰を撫でるだけなら近くにいるコルベールでいいのでは、とその場にいる全員が思っていた。

そして、まったくもって威厳の欠けぬ学院長の声で言う。

「さて、ミス・ロングビルや。調査の報告を」

「はい。今朝の騒ぎからすぐに学院周辺を調査いたしますと、近くの農民からそれらしい黒いローブの男を見たという証言を得られました。そして、森の外れにある小屋に

入っていったと」

それがフーケの隠れ家だ、と口をそろえて教員たちがざわめきだす。あの『土くれのフーケ』が学院の宝物庫を襲い、今もなお学院周辺に居る。その実感は恐怖を伴って現れた。

騒がしいなかで、アルレットがルイズにひっそりと声をかける。

「あさごはんまだ?」

「まだ」

「帰って寝てていい?」

「だーめ」

唇を尖らせて不満を訴えかけるも、ルイズの顔は真剣な表情でオスマンへ向いている。唇を尖らせて不満を訴えかけるも、ルイズの顔は真剣な表情でオスマンへ向いている。

「貴族たるものが騒々しい!」

オスマンの一喝に、学長室が水を打ったように静まり返った。

「こうしている間に、フーケに逃げられるやもしれん。早急にフーケの捜索隊を結成する。我こそが、というものは杖を掲げよ」

先ほどまで騒がしかったのが嘘のように、教員の誰も口を開こうとはしない。まるで捜索隊に指名されるのを恐れているようだった。

そんな中で、ひとつの杖が上がる。

「わたしがその命、お受けいたします」

「……ルイズ」

キュルケが驚いたようにルイズを見た。杖を掲げながら力強い眼差しでオスマンを見据えるルイズに、キュルケは昨日の失望もすべて吹き飛んでいた。

命を張る、ということは、見栄やプライドで安々とできることではない。決闘の決着から今のルイズまでを見て、やはり自分の目は正しかったと笑みを作り、キュルケは杖を掲げた。

「わたしも、お受けいたします。ヴァリエールに手柄を譲るなんて考えられません」

「じゃあわたし部屋で寝てる」

「こら、あなたも行くのよ。アルレット」

「うう、ねむいの」

ルイズは青筋を立てながら、学長室を出ていこうとするアルレットの手をつかむ。覚悟して杖を上げたのがなんだか台無しになってしまった。キュルケは肩を落として、ゆつくりと杖をおろした。

「あなたたちはまだ学生ではないですか」

「さすがに、君たちに行かせるわけには……」

シュヴルーズとコルベールの言葉に、オスマンは大きいため息を付いた。

「では、誰が学院の名誉を取り返しに行くところなのかね」

「彼女らが行くというなら、私が代わりに行きましょう」

杖を上げたのは、コルベールだった。

「ほう。ミスタ・ハゲテール、さつきはずいぶんやる気がなさそうだったが」

「さすがに、生徒二人にフーケを捕まえるというのは酷でしょう。怪我ではすまないのです、オールド・オスマン」

「そのとおりじゃ。しかし、君一人でも怪我では済まないことになり変わりない。ミス・ヴァリエールはグラモンの息子を凌ぐ使い魔を従えておるそうだし、ミス・ツエルプストーは火のトライアングルじゃ。申し分なからう」

コルベールはオスマンの言葉に頷いて納得した。

「それで、他にはおらぬか」

「私が。案内が必要でしょう。多少は魔法の心得もありますから、生徒をお守りします」

「おお、頼むぞ。ミス・ロングビル」



馬車の中、シエスタは毛布にくるまって眠るアルレットの寝顔を幸せそうに眺めていた。頭を膝に載せる、いわゆる膝枕の状態で、紅茶をすすりながらの一人鑑賞会である。その隣にはサンドイッチの入っていたバスケットが置かれている。アルレットのお腹が減った、眠たいのふたつをどうにか解消するために、シエスタは志願して捜索隊へ同行したのであった。

アルレットはレタスとチーズのサンドイッチを二切れ食べてから、食後に用意された紅茶を一口飲んでそのまま寝入ってしまった。シエスタが手にしているカップは、アルレットの飲み残しである。

そのカップに口をつけながらときおり不気味なにやけ顔を見せるシエスタに、ルイズは若干引いていた。

「ルイズ、この辺りにフーケがいるかもしれないっていうのに、この子、こんなんで大丈夫なの？ 武器も持てないメイドまで連れてきて」

「関係ないのに、無理やり連れてこられるだけかわいそうでしょ。これでいいの」

シエスタの膝で気持ちよさそうに眠っているアルレットを見て、ルイズは二人の同行に納得していた。アルレットの場合は眠気と空腹を解消すれば同行するのに不満はな

いだろうし、いざとなればシエスタはアルレットが守ってくれるだろう。それを信じているからシエスタも呑気な顔をしてティータムなんてものを楽しんでるのだ。

「ほんと、かわいそう。部屋でそのまま寝かせてあげればよかったのに」

「これでいいって言ったらいいの。まったくうるさいわね。あんたに何が分かるのよ」  
「泣かれて家出されるご主人さまがよく言うわ」

「……なんですって」

言い争いに発展しそうなルイズとキュルケの横で、コルベールはひとり居心地悪そうに縮こまっていた。ロングビルこそ馬の操縦でこの場に居ないが、もう一人は横になつて眠っている。狭い馬車の中で、なおさら窮屈さを感じる原因だった。

トリスタニアへ瞬時に移動した時のようにアルレットが魔法を使えば済むのでは、とも思ったが、ここままで穏やかに眠っているとそれも言えなくなる。

「ちよつとしたピクニックみたいでいいじゃないですか。アルレットさまも、馬車の中でこうやって食事をしてくつろぐのを楽しんでくれています」

「盗賊退治をピクニックって、本当に大丈夫かしら」

シエスタの言葉に、キュルケは大きいため息を付いた。

そしてもう一人、気付かれずに息をつく人物がいた。馬車の外のロングビルである。

「そろそろです。この道が開けたところの小屋が、フーケの隠れ家ではないかという場

所です」

土くれのフーケ退治をピクニック呼ばわり。ずいぶんと舐められたものだ、と内心で毒づきながら、実直でしとやかな学院の女性秘書として馬車の中へと声をかけるのだった。

森の拓けた場所で馬車が止まり、一行がぞろぞろと芝へ降り立つと、寂れたようなボロい小屋が目にとまった。

フーケの隠れ家はあれに違いない、と互いに顔を見合わせる。

「アルレットさま、まだ寝ていますか？」

「もう大丈夫」

「では、ちよこつと失礼しますね」

シエスタが懐から櫛を取り出し、アルレットの髪を梳かしはじめた。それが終わると、身をかがめてアルレットの白いワンピースの裾を直し、従者として主から一步引いた場所へ下がる。

「……で、いいかしら？」

ルイズがアルレットとシエスタの二人に問う。緊張感の無さに一行は毒気を抜かれた気分だった。

「へいき」

「はいはい。それで、どうしましょう。ミスタ」

「まずは私がひとりで偵察に行きましょう。小屋の近くまで行けば、中に人がいるくらいは分かるのでね」

「それって、熱……でしうか」

キルケは普段、コルベールを昼行灯の冴えない中年男性くらいにしか考えていなかった。トライアングルという位も同じで、授業では派手な魔法も使わない。

しかし、温度を明確に感じる事ができる、というのは彼女とコルベールの明確な実力の差であり、彼女の態度には敬意が伴っていた。

「それはまた授業で話すことにしましょう。私が合図をしたら、中に人がいるものだと思って欲しい」

「合図があれば、ひっそりと包围して奇襲、ですな。ミスタ」

「そのとおり。ゴレムも術者を捉えれば怖いものではないし、生成までに時間が掛かる。落ち着いて対処すれば、何も恐れることはない」

そういつて、コルベールは慎重に小屋へと近づいていった。

煤けた木板の壁の傍で、腰をかがめて意識を集中させる。それを遠くから見守るルイズたちは、固唾を呑んで見守った。

それから、わずかもしない内に踵を返して馬車の前へと戻ってきた。

「どうやら誰もいないようです。しかし、中に盗まれた『破戒の剣』や、フーケの足取りを掴む手がかりがあるかもしれない」

「なるほど。では、中を搜索するものと、外で見張りをするもので分ける……でしようか？」

ロングビルが小声で提案する。それに、コルベールは頷いた。

「では、私とミスタが外を」

「それがいいでしょう。フーケがいるとすれば、この周辺でしょうからな。となれば、ミス・ヴァリエール、ミス・ツエルプストーの二人が小屋の探索、そちらの二人は馬車の中から小屋の外を見張る、でよろしいですかな」

「わかりました」

「では、危なくなったらすぐに呼ぶこと。決して単独で対処しようとしなさいこと」

コルベールとロングビルがふた手に分かれて森へと入っていく。ルイズはぼーっとその向こうを眺めているアルレットに近寄った。

「ちよつとだけ、馬車で待っていてくれるかしら？」

「ルイズ、危なくない？」

「聞いてなかった？ 中には誰もいないって、ミスタが確かめてくれたわ」

「でも……」

「ルイズさまなら大丈夫です。ほら、アルレットさま。デザートにフルーツヨーグルトを用意してきましたから、中で食べましょう？」

アルレットはしぶしぶといった表情で頷き、シエスタに連れられて馬車へ入っていった。

「……ルイズさまだつて。アレ、あんたのところの使用人にでもなったの？」

「うるさいわね。さつさと行くわよ」

「なによ、まったく」

ルイズは黒いドレスを翻し、さつさと小屋へ向かつて歩き出す。悪気のない言葉にそっけなく返されて不満に思いながらも、キュルケは後に続いた。

小屋へ近づけば近づくほど寂れた印象が強くなる。人が住んでいるようにも見えないし、ずいぶんと拓けた立地にある。これが本当にフーケの隠れ家なのか、という疑問を抑えながら、ルイズは茶褐色に錆びついたドアノブを引いた。

中には、調度品の類もなく、砂の入り込んだ空き室が広がっていた。

蜘蛛の巣だらけで、目を凝らせば虫が這っているような廃屋に手がかりも何もなさそうだったが、ひとつ、目当ての物が無造作に転がっていた。一・二メートルほどの長細い金刺繍の箱である。

「あれよね？ 『破戒の剣』 って」

「え、 ええ……なんか、 高価そうだし」

「なんだかあっけないわね。 盗まれたのってこれだけなんでしょう？」

そういつて、 ルイズが箱を拾おうとした時だった。

昨晚聞いたばかりの轟音が、 辺り一帯に響き渡る。 ゴーレムだ、 と二人は顔を見合わせて、 ルイズは急いで箱を持ち上げる。

「……重い」

「ほら、 貸しなさいー」

キュルケはルイズの腕から箱をひったくって、 急いで小屋を出るのだった。

## 13話『虚無の魔法使いIV』

巨人が歩みを進め、地に足がつくたびに地響きが生じ、馬車が揺れる。シエスタは食べかけのフルーツヨーグルトが入ったふたつのカップに蓋をして、慌てることなくバスケットの中に収めた。

「危ないからシエスタもついてきて」

「かしこまりました」

白いワンピースと、そのやわらかな態度が眩しい。シエスタはアルレットの後ろ姿を追って馬車を出た。

## 13話『虚無の魔法使いIV』

二人が小屋から飛び出すと、そこにいたのは昨晩見たものと同じゴーレムだった。夜の薄暗闇と違って、暖かな陽光の元ではその大きさがよく分かる。二人はまるで塔を見上げるような気分だった。

それがフーケのゴーレムならば、目的はひとつ。キュルケの手にある『破戒の剣』を



取り返すことしかない。

森の方から向かってくるゴーレムに、二人は慌てて駆け出した。巨体は鈍重でありながら、木をなぎ倒す強烈なパワーと広い歩幅でずんずんと二人への距離を縮める。

あつという間に森の拓けた場所へと躍り出たゴーレムは、威圧するようにゆつたりとした動きで強大な腕を振り上げた。

二人はふた手に分かれて、地面に突き刺さらんとする腕を回避した。轟然と鳴り響く破壊音に耳をふさぎたくなる気持ちを抑え、ルイズは軽い足を飛ばしてゴーレムの背後へまわる。

しかし、キュルケの手には『破戒の剣』がある。長さ一・二メートルはある箱は、彼女の動きを阻害していた。

「キュルケ！ そんなのは捨てちゃいなさい！」

「捨てたとして、こいつをどうするのよ！」

手が空いたからといって、このゴーレムに敵うわけではない。そして、逃げきれぬわけでもない。

キュルケは箱を地面に突き立てて片手で支え、杖を抜いた。

ファイアー・ボールがゴーレムの顔に命中する。

しかしそれは、土くれの表面を焦がしただけだった。顔に当たったとはいえ無機物に

生體的弱点などあるはずもなく、ゴーレムはそのままキュルケに向かって腕を振り上げる。

やはり敵うはずもない、いよいよ箱を捨てて逃げようかと考えた時、キュルケはそびえ立つゴーレムの向こう側に蒼い竜が飛んでいるのを見た。

それはシルフィードではなく、うねりを上げて灼熱をまき散らす蒼い炎だった。獲物を喰らわんと大きな口を開けて、振り上げたゴーレムの腕へと飛び込んでいく。

質量を持たない灼熱の衝突はゴーレムの身体を揺るがすことなく、ただ熟れた果実が落ちるようにその腕を地面へとたたき落とした。ぐずぐずに焦げた土の塊が、ゴーレムの肩口からぼろぼろと溢れる。

「早くそれを持ってこちらへ！」

森の前で杖を構えるコルベールが叫んだ。その隣にはアルレットとシエスタが控えている。キュルケは戸惑いを押し殺し、全力で彼らの元へ走った。

ゴーレムは再生する。ならば馬車に乗って時間を稼ぎつつ逃げきるしかない。

しかし、箱を抱えたキュルケがコルベールの元へたどり着いても、その向こうに馬車は見当たらなかった。

「ミスター！ 馬車は！」

「それは、この子が馬ごと逃してしまったよ」

キュルケは絶句してアルレットを見た。しかし、アルレットは邪気のない表情で首を傾げるばかりだった。

「一体どうして」

「アルレットさまはただ、馬がゴーレムに怯えて逃げたがっていたのを叶えただけです」  
「ちよつと、あなたね……」

危機感のないシエスタの言動に、とうとうキュルケは噛み付いた。しかし、コルベールが首を振ってそれを制止する。

「まちたまえ、ミス・ツエルプストー。移動手段ならば、彼女の異国の魔法でどうにかできろ」

王都トリスタニアへ出掛けた日、アルレットとコルベールは馬や飛竜を用いずに、魔法を使って目的地まで移動した。街でキュルケらと合流したものの、イルククウの都合で現地での解散になっている。行き帰りをアルレットの魔法で済ませたコルベールは、この状況においても落ち着いていた。

争ったところで事態が好転するわけでもない。キュルケは分かかっており、こうなつてはコルベールの言葉信じるしかない。引き下がった。

「しかし、ミス・ロングビルはまだだ。それよりも……」

コルベールの視線の先、束の間に腕が再生し、傷ひとつなくそびえるゴーレムの姿が

あった。

そして、その巨大な影の元。黒いドレス姿のルイズが、杖を構えて仁王立ちしていた。「土くれのフーケ」！ 隠れていないで出てきなさい、わたしは逃げないわ！」

その言葉をあざ笑うように、ゴーレムは無言でルイズへ腕を振り上げる。

それを見たコルベールがすぐさま杖を振った。その杖の先から景色が歪むほどの灼熱が生み出され、蒼き竜のごとく唸りを上げてゴーレムへと向かっていく。

灼熱が腕へ衝突すると、土くれの表面をじりじりと焦がしてその動きを停止させる。しかし、先ほどのように腕が落ちることはなかった。

土のメイジは、錬金において文字通り変幻自在の創造をする。一度見た魔法に安々と打ち破れるほど『土くれのフーケ』の錬金は甘くない。

どれほど対策を打たれようともコルベールには焼き切る自信があったが、動きのある巨大な腕を芯まで燃やし尽くすにはやはり時間が必要だった。そうして焼き切ったとしても、ゴーレムはすぐに再生してしまう。

こうなれば互いの精神力の競り合いである。しばらくぶりに炎を振ったコルベールにとって不利な戦いであることは明白だった。

「ミスタ、わたしが術者を探し出します」

「いいんだ、そこにいるんだ。フーケと遭ってどうするつもりだね」

「しかし、ルイズが！」

キュルケが訴えかけるも、コルベールは首を振ってはねのける。どうすれば、と困り果てたキュルケは、昨晩の出来事を思い出してアルレットを見た。ほとんど半信半疑ではあるものの、もしかすれば、という思いがあった。

「あなたの魔法でどうにかできないの？ 昨日のあなたは、あなたなんでしよう？」

その言葉に、アルレットはしぶしぶといった表情でゆっくり一步を踏み出した。コルベールの制止の声も届いていない様子で、ゴーレムへと歩いて行く。

その時、ルイズははまだ逃げずにゴーレムへと立ち向かっていた。

緩慢に振り下ろされる腕を回避し、杖を振るう。焼け焦げた箇所を爆発が襲い、腕は耐え切れずに千切れ、轟音とともに地面へと突き刺さった。

再生させてたまるものかとルイズは焼け焦げたゴーレムの肩口へ爆発を浴びせる。

しかし、衝撃が土を削り取るよりも、フーケの錬金の再生速度が勝っていた。ルイズは、その場から離れようとせず、やけになって魔法の爆発を続ける。

「ルイズ」

「いいえ、あなたの手は借りない」

杖を振るルイズの横で、アルレットは白いワンピースをはためかせて無防備に佇む。

「わかっている。でも、魔王にも出来ないことがあるの」

「……なにかしら」

『『ここに居ないもの』を、『居るもの』にすること』

「うそよ。あなたには従えている魔族がいるじゃない。昨日のだって」

ゴーレムの腕が完全に再生される。再び振り下ろされた腕は、緩慢な動きなどではなかった。巨大な塊が大気をごうと切り裂いて、命を奪うための力が振るわれる。

ルイズはおもわず目を閉じて衝撃に備えたが、それは不定形な闇色のもやによつて弾かれていた。腕は的外れの方向へ軌道がずれ、ルイズから離れた場所の地面へと突き刺さる。

「あれは生きていない。ただの、残骸」

ルイズはゆっくりとまぶたを開く。そこには、無表情に闇色のもやを見つめるアルレットの姿があった。

空中でくるくると踊っていたもやは、やがて湯気のようにふっと消えてなくなる。

「ルイズはわたしが従えるものじゃない。わたしの、となりに立つの」

「……そんなこと、いったって、わたし……」

結局、守られている。盗賊一人捕まえられず、ゴーレムの攻撃から二度も救ってもらった。それだというのに、となりに立っていてもただ恥ずかしいだけ。

ルイズは、目を伏せて首を横に振った。

アルレットは静かにルイズへと歩み寄る。どこからか琥珀色をした革の鞆を取り出し、その刃を抜いた。

こなれた動作でナイフの柄を握りこむと、それをルイズへ向かってためらいなく振りかぶる。

そして、斬りつけられたものは音もなく地面へと落ちた。

「そんな棒っ切れ、ルイズには必要ない」

ルイズは指の先で切られた杖を見て、信じられないような表情をする。

今までアルレットがゴーレムへ手を出さなかったのは、自分で手を上げた任務を使い魔頼りに解決したくないというルイズの思いを忖度してのものだと考えていた。

しかしそれは、ルイズの手から魔法を奪う行為によって裏切られてしまった。

「どうして不満がるの?」

再び振り下ろされるゴーレムの腕は、同じく闇色のもやが弾いてルイズまで届かない。そうしてまた、もやは消えていく。

「ルイズには、あの残骸がどこへ消えていくのか、感じているはず。だからそんな棒っ切れ、もう必要ない」

闇色のもやが消えていった先には、青空が広がっている。

蒼穹。澄み切った大気に揺蕩う、生命の息吹。そこには、魔法という奇跡を起こすた

めの「基」がある。

特別な瞳を持つアルレットのように、それが見えるわけではない。それでも、ルイズは漠然と何かを感じ取っていた。

「昨日、教えたでしょ？ 魔法なんて、難しいものでもなんでもないので」「ずっと、ずっとやってるわよ！ それでもできないの！」

今のルイズの魔法は、本来ならば爆発するものではなかった。アルレットが精力を奪っているからであり、失敗魔法の発生する座標をコントロール出来ているルイズ自身の成長もある。

しかし、ゴーレムへ放ったルイズの魔法は爆発していた。それは、アルレットから教わった名も知らぬ魔法を全力で行使しようとしているからだった。

「棒っ切れなんてなくても彼らには伝わる。彼らには、人の心が見えるから」

「でも、でも……」

アルレットは目を伏せたルイズへと歩み寄り、息のかかる距離までぐっと近づいた。

そして、まるで召喚した日と同じように、むさぼるようなキスをした。

いつものような何かが失われ、奪われていく感覚ではない。正反対の、与えられる感覚。ルイズの心の底へと暖かいものが降りてくる。

「魔法をあげる」……彼女がそう言った日のことと同じ。アルレットの持つ特別な精



力が、ルイズに流れていた。

唇が唾液の糸を引いて離れる。

そこではじめて、あの日から漠然と感じるようになった何かを意識した。視界の隅で曖昧にちらついていたものが、確かに茫洋としてそこへ広がっていることに気付いた。それはきつと、彼女が対話し、使役していたもの。

アルレットがくずおれる。ルイズは慌てて膝をつき、横たわるアルレットの顔を覗いた。

赤くなった頬に手を置くと、そこは熱いくらいに発熱していた。ルイズが精気を奪われた時の状態を思い出したが、症状はそれ以上だと分かる。

ルイズは当惑して何も出来ず、ただまぶたを閉じて荒い呼吸をするアルレットの手を握るだけだった。

そして、今まさに二人を押しつぶさんとするゴーレムの足を、巨大な蒼い竜が襲った。灼熱の余波はルイズの黒いドレスをはためかせ、その手から短くなった杖を奪い去る。

ゴーレムはそのままバランスを崩して膝を折り、巨大な腕を地面へついて身体を支えた。しかし、またたく間に焼け焦げた左足が修復されていく。

遠くで、キュルケに身体を支えられているコルベールの姿を見た。

「わたしが、しなきゃいけない」

ルイズは立ち上がり、横たわるアルレットの前に出る。

轟然と音を響かせながら、ゴーレムが身体を起こした。太陽を遮り、二人のもとに巨大な影を作る。

静かに深呼吸をする。ルイズは流麗な所作でドレスの裾を直し、鳶色の瞳で蒼穹を見据えた。

今まさに二人の命を握りつぶさんとする巨人の姿が、高くそびえる。

ルイズは腕をゆつくりと掲げる。いつかアルレットがそうしたように、天を指す。

「エクスプロージョン」

無表情に命令をする。その言葉は、耳を持たない彼らへと確かに届いた。

ゴーレムの中心で白い何かが弾ける。

それは、爆発だった。土くれで出来た三十メートルの身体を、閃光が真っ白に覆う。隕石が落下したような爆風がその場を貫き、森の向こう側まで届く。

ルイズの黒いドレスは揺れない。まるで天の加護のごとく、透明な何かルイズとアルレットのふたりを包みこむ。

遠くで髪の毛が大変なことになっている二人の女が見えたが、気付かないふりをした。もう一人は髪がないので心配ない。

爆発によってゴーレムはひとつの塊も残さず、土くれですらないただの砂と化した。

ルイズはアルレットの元に座り込み、切り揃えられたブロンドの前髪を優しく撫でる。そして、傍に落ちていたナイフを手にし、ためらいもなく自身の人差し指へ刃を走らせた。その痛みは、なにか愛おしいようなものだ。ルイズは思った。

荒く息を吐く桃色の唇に、血液が滴る指を咥えさせる。ルイズは弱い力で人差し指の傷が吸われているのを感じた。頭を持ち上げて嚙下を促してやると、小さく喉が鳴る。

傷を吸われる力がなくなるとルイズは指を引き抜き、手早くナイフを鞘にしまつてからアルレットを横に抱き上げた。思っていたよりもずいぶん軽い体重に驚きながら、ゆっくりと立ち上がって歩き出す。一人の重さはルイズの細腕には堪えたが、それが苦しいことだとは感じなかった。

キュルケらの元にたどり着くと、アルレットをすぐ傍の木へもたれかかるように座らせた。

「ルイズ、ありがとう」

「起きてたの？」

アルレットは楽しげな表情で頷いた。

「心地よかったの」

「……今日くらいは許してあげる。まったく、重いんだからね」

寄つてきたシエスタが、アルレットの口元をハンカチで拭きながら心配そうな表情を

する。

アルレットはシエスタの手を掴んで、身体を起こした。それを支えるようにシエスタは肩を抱いてアルレットを立ち上がらせる。

「わたしでよかったら、ずうっと抱っこしてあげます。アルレットさま」

「シエスタのほうが気持ちよさそう」

シエスタの腕に抱きついたアルレットの視線は、ちょうどシエスタの胸へと向けられている。まったく邪気のないその表情に、ルイズはカチンと来そうになるのをなんとかこらえた。

## 14話『ほんとうに欲しいものⅠ』

「自分に嘘をつく」。それも、時が経てばついた嘘を忘れてしまう。

そうして、嘘で塗り固められた本当の感情は、いつしか心の隅でひっそりと眠りにつく。さらに時を経て、屈折して、屈折して、本当の感情へ辿り着くための道は、複雑な迷路となっていく。

やがては、ボロボロに傷んだ傷口を癒やすために生きるようになる。包帯に嘘という毒を塗って広がった傷口にあてがい、傷口はますます悪化する。その繰り返しは、人から人という形を奪っていく。

なぜ生きているのか分からず、自分が何を欲しているのかも分からない。心から希求する何かを失ったものは、やがて理由もなく人を殺め続ける悪魔となる。

## 14話『ほんとうに欲しいものⅠ』

「お二人、怪我はありませんか」

いつの間にか合流していたロングビルが、秘書の顔をしてルイズとアルレットを見

る。

「はい、ミス・ロングビル。無事でしたでしょうか」

「ええ。突如ゴーレムが現れたので、私は隠れて術者を追っていたのですが……見つか  
らず、逃してしまいました」

「なに、全員が無事で本当によかった。こうして宝物も取り返せた」

フーケを逃してしまったと暗い顔をするルイズに、コルベールが努めて明るく言う。

しかし、ロングビルは胡乱げな表情でキュルケの持つ箱を見て首を傾げる。

「それは……本物でしょうか？ あの『土くれのフーケ』のことです。あんなわかり易い  
場所にあつて偽物ではないとは限りません」

「以前、宝物庫の目次を作った際に見かけた箱に違いありませんが……ミス、中身は確認  
したかね」

「いいえ……」

「では、開けてみなさい」

コルベールに促されたキュルケは、箱を地面に横たえて金色の留め具を外す。

開いた蓋の下には、重厚で立派なシルバーの剣が収められていた。磨きぬかれた刃が  
光をよく反射しているのが、この剣がれつきとした業物であることを示している。不純  
物を多く含む粗雑な錬金では決して生み出せない輝きだった。

安堵を見せる一同に、ロングビルが言い放つ。

「ミスタ・コルベールは、『破戒の剣』がどのようなものか、ご存じですか」

「オールド・オスマンから聞いた話では、スクエアメイジが束になっても敵わぬ恐ろしい怪物をひと突きで殺したという、魔法の力を宿した剣だとか……」

「では、振ってみましょう。これが本物であれば——」

そう言つて、ロングビルは箱の中に手を伸ばす。しかしそれよりも先に、アルレットの手が剣の柄を掴んでいた。

ロングビルは驚いた顔でアルレットを見るが、すぐに苦笑するような大人の表情へと変わった。

「こら、危ないですよ。そんなもの」

アルレットが剣を持ち上げる。そして、一メートル以上もある分厚いそれを片手で軽々しく振りぬいた。

高い風切り音が響く。彼女の突然の行動に、一行は呆然と静まりかえっていた。

「何も無いところを切り裂いて、何かが起こるわけがない」

「……そうですわね」

「だから、何かを切ろう」

そう言つて、アルレットはあたりを見渡す。その視線は、あるところで止まった。

「そうだ。おまえがいい」

劍の切っ先は、ロングビルへと向けられた。

コルベールやルイズが何かを言おうとする前に、アルレットは素早い動きでロングビルの前に躍り出し、その劍を振りかぶっていた。

そして、切っ先はロングビルの額へ一筋の赤色を残し、綺麗な半月の軌道を描いた。へたり込むロングビルの顔につう、と鮮血の線が伝った。のけぞったためにメガネがずれ落ち、素顔がさらされる。それは学院の秘書でも、貴族の大人の顔でもなかった。

「間拔けな女」

アルレットはアメジスト色の瞳でロングビルを見下した。

「そんなに知っていたか？ この劍のこと」

ロングビルは答えずに、品位の欠ける表情でアルレットを睨みつける。

一行は何も出来ずにその状況を見守っていた。普段とは違うロングビルの様子こそが、暴挙に等しい行動に出たアルレットへの手出しを封じているのだった。

「この劍の銘は、ヴォーパル。人、悪魔によらず嘘を喰らう聖具。あなたのような『嘘つき怪物』を殺すために賢者がこしらえたもの」

「……そうか、そうだったか」

「自分に突き刺せばわかったことなのに。わざわざこんなところまで呼び出して猿芝



居。あげくに、あなたのでく人形は聖具も使わずに倒された。この後、どうするつもりだったの？ マチルダ」

蔑むような言葉に、ロングビル——マチルダ・オブ・サウスゴータは『土くれのフーケ』としての本性を表し、狂ったように高笑いをした。

「どうするって、剣の使い方はゴ丁寧に教えてくれたじゃないか！ あとはお前たちを殺して学院を去るだけさ！」

いつの間にか握られていた杖から、魔法が放たれる。マチルダとアルレットとの間に横たわる地面が、壁を作るように隆起しはじめた。

そうして現れたのが、三体の中型のゴーレムだった。人の二倍はある背丈と無駄の削がれたフォルムを以って、素早い動きでアルレットへと襲いかかる。

アルレットが片手でヴォーパルの剣を薙ぐ。そして、ゴーレムがその刃に触れた途端に形を失い、ただの土となり地面へ還っていった。その土くれは、虚飾を取り払ったゴーレム本来の姿だった。

そのままアルレットはマチルダへと距離を詰め、剣で杖を真つ二つに切断する。

「嘘を喰らう聖具」のヴォーパルは、触れるだけでマチルダも、そのゴーレムをも元あるべき姿へと還した。

「……シエスタ。あんな剣があるなら、わたし頑張る必要なかったわよね。あの大きな

「ゴーレムだって、一刺しで倒せたんじや」

「いいえ……あのときのルイズさま、とても勇ましく可憐で、かつこ良かったと思いますよ？」

「ありがとうシエスタ。でもねわたし、あそこで頑張る必要なかったわよね」

「……………はい、すみません」

ひそひそと会話をしているふたりに、キュルケは何も言えずにいた。対して、コルベールはゴーレムを瞬時に土へと返したヴォーパルの剣を興味津々に観察している。

「妹のため。復讐のため。愛情と憎悪。決して相容れない理由を持ちながら、どうしてそれを成し遂げた気になっているの？」

「いつ成し遂げた気になったものか、これから成し遂げるところなんだよー」

「違う。置き去りの妹を裏切つて、臆病に逃げまわるだけの義賊ごっこ。どちらも、永遠に成し遂げられない。わかってるでしょう、マチルダ。」

自分の嘘に騙されたあなたは、愛することも復讐することも永遠に叶わない、本当に望んだことをなにひとつ叶えられない」

マチルダは言葉を詰まらせる。アメジスト色をした悪魔の瞳が、彼女の全てを見通していた。

「かわいそうなマチルダ。悲劇の傷を嘘でふさいで、嘘を嘘で塗り固めて。やがて自分

の言葉さえも失ってしまった。

あなたは妹を愛する姉でも、正義を振るう義賊ですらない。やがては人殺しの悪魔、ジャバウォックになるの」

マチルダは、とうとうその場にへたりこんで俯いた。

ヴォーパルの剣に額を裂かれた時点で、結末は決まっているようなものだった。自分の中にある嘘が、あの剣に喰われた。あれはゴーレムのように形あるものばかりではなく、人の心にさえも作用する。凶らずも、マチルダは身を持ってその宝物の使い方を知った。

「逃げるためにわたしたちを殺すなら、おんなじことの繰り返し。例えそれが、盗賊から足を洗って、嘘のない本当に望んだ生活を送るつもりだとしても。あなたはまた、妹に人殺しの嘘について怪物になっていく」

「……ならばどうか、逃してほしい」

「だめ、ルイズの手柄は絶対に逃さない。これは、あなたの嘘が選んだ道」

「どうか、どうか!」

「嘘つきのあなたのままなら、きつと潔く処刑されることを選んだんだろうけど」

捕まれば、『土くれのフーケ』には間違いなく極刑が待っている。嘘を喰われる前のマチルダならば、プライドを優先したかもしれない。

マチルダが嘘偽りなく、本当に望むこと。それは生きて妹のもとで暮らすことだった。

血で真っ赤に染まった額を地面にこすりながら懇願するマチルダに背を向け、アルレットはヴォーパルの剣を箱へとしまった。そうして、コルベールへと促す。

「帰るから、箱持つて？」

「それは構わないが、その……ミス・ロングビルは」

「ルイズが捕まえる」

「え、わたし？」

呆けた顔のルイズを、アルレットが背中を押してマチルダの元に動かす。

「ほとんどルイズひとりの手柄。ここにいる全員が証人」

「そうねえ。わたしは何にもしてないし。この子はあるたの使い魔だし。ミスタは、大人ですわよね」

コルベールはゴーレムの攻撃を数回ばかり邪魔しただけで、もとよりフーケ捕獲はルイズの手柄だと考えていたため、快く領いた。そもそも得られる名誉に関心のない変わり者である。

「君が捕まえなさい。もう、戦意は失せているだろう」

「わ、分かりました。ええと……ミス、じゃなかった、土くれのフーケ！ あんたはわた

しに捕まった！　いいわね！」



フーケの捜索に出た一行は、報告のために学長室へと集まっていた。

背の高い椅子に腰掛けたオスマンが、顎にたくわえた白ひげを撫でながら、神妙な表情で言う。

「儂は、誰の尻を撫でて生きていけばいいのじゃ……」

ルイズの手によって捕らえられた『土くれのフーケ』は、既に学院の衛兵へと受け渡され、監獄のある王都へと連れられている。

学長室には優秀な秘書であった彼女を悔やむような空気が漂っていた。欺かれていたことに対しての痛みもあるかもしれない。彼女が極刑を免れないであろうことも含めて、ルイズ一行は複雑な気持ちを抱いていた。

「しかし、学長。なぜ盗賊などを雇い入れたのです。調べれば怪しいことはわかったはず」

「……出会いはそう、酒場でひとり麦酒を飲む、まあ面白いおしりのおなごを見たのじゃ。たまたま、たまたまこの手がまあ面白いおしりを撫でてしまったな。それでも怒らるのでそのまますの学院で働かないかと持ちかけたんじゃ」

もちろんのこと宝物を盗んだフーケが一番悪い。しかし、このスケベもそれに並ぶくらい悪い。一行は思った。

「コルベールが何か文句の一つでも言つてやろうと考えていた時、アルレットがある場所を指さした。」

「まあいい」

そこを代わりに撫でればいい、と言うアルレットだったが、ルイズとキュルケは笑いをこらえきれずに吹き出していった。シエスタは嫌味のない表情で微笑んでいる。

アルレットが指さしていたのは、コルベールの頭であった。

「いや……その、頭はおしりと違って硬いじゃろう。なんなら君のおしりでも……」

「オールド・オスマン」

「すまん、すまん。ちよつとしたジョークじゃ、ミスタ・コルベール。そう怒っていると八つ当たりにも見えるぞ」

コルベールはため息を付きながら引き下がる。それを見て、こほん、とオスマンは咳

払いをした。

「ミス・ロングビルのことは忘れるのが一番良い。一同、此度は『土くれのフーケ』の討伐、ご苦勞だった」

「私どもは何もしておりません。ミス・ヴァリエールがフーケのゴーレムを打ち倒し、見事捕らえて見せました」

「……ほう？　なんと、それは」

オスマンはコルベールへと疑わしげな視線を向ける。使い魔の召喚と契約を除き、魔法の成功したことがないルイズがあつた『土くれのフーケ』のゴーレムを打ち倒せるはずがない。オスマンの目はそう言っていた。

しかし、そんな風当たりがあらうと、ルイズは黒いドレスに薄い胸を張つて堂々としていた。

「ミス・ヴァリエールは、杖も使わず、閃光の魔法でゴーレムを一撃のもとに葬り去つてみせました。それはまるで、虚無のごとき……」

「なんとー！」

その魔法に加えて、ガンダールヴの使い魔まで従えるルイズを、コルベールはほとんど確信を持つて虚無だと考えていた。好奇心に踊りだしたくなる気持ちを抑えきれずに目を輝かせ、言葉が続ける。

「いいえ、まさしく虚無の再来でしょう！ 証人は、このジャン・コルベールとゲルマニアに名高いツエルプストー家の彼女です」

「ほう、ほうほう。いいや、間違いない。誇り高き貴族として搜索に名乗りを上げ、見事『土くれのフーケ』を捕らえて戻ってきたお主らを、この老いぼれは疑いはせん」

杖も使わずに、三十メートルのゴーレムを葬る魔法、といえば、その異常性は長く生きてきたオスマンだからこそよく理解している。それが虚無であるかという答えのいい問いはせず、ただその魔法が虚無に値する何かであることを確信していた。

コルベールは、賢者とまで呼ばれるオスマンのお墨付きを得て、いよいよ興奮を抑えきれずに身を乗り出した。

「では、一刻も早くアカデミーへ報告を！」

「ならぬ！」

「な、何故です！」

「今、この時に虚無の再来だと騒げば、戦争の道具にされかねん」

コルベールはオスマンの言葉にはっとして、恥じるように興奮を静めて引き下がった。

「……学長の深謀遠慮には、恐れいます」

「うむ。それで、ミス・ヴァリエール」



「は、はい！」

虚無の再来だのと言われて困惑していたルイズは、慌てるように返事をした。

「杖を持たずに魔法を使ったのは初めてかね？」

「……ええ、はい」

「努力に努力を重ね、辛い時間を経てようやく使えるようになった魔法じゃ。隠せとは言わん。今後はきちんと杖を持って、皆と変わらぬように魔法を行使しよう」

ルイズは納得して頷いたが、契約をしていた杖はアルレットのナイフによつて台無しにされている。どうしたものか、と考えていると、キュルケが隣から口を出した。

「杖が必要ないなら、調教に使う黒い棒でも持つてたら？」

ルイズがキュルケの靴を蹴り飛ばした。そんなドレスを着ているのが悪い、とキュルケは思うが、ルイズにとってはアルレットの選んだ衣装をからかうような口ぶりが許せないのだった。

黒色のドレスに対して抱いていた似合わないだとか奇抜だとかいう印象はすっかり消え失せ、ルイズにとって一番のお気に入りである一着となっていた。

「今後、どのようにお主の才能が開花していくかは知れん。ひとまず、火と風のラインメイズとして慎ましく振る舞うといい。力を示すことが必ずしも良い方向へ繋がるとは限らぬのでな」

「……わかりました」

昨日までのルイズは、ドットですらなかった。だから、それがラインであろうがトライアングルであろうが、ルイズにとってはメイジと呼ばれるだけで感極まるような思いだった。

潤んだ瞳でうつむくルイズを見て、キュルケは嬉しいような、悔しいような複雑な気持ちにかられた。ライバルのルイズが成長することは、この学院に入学してからずっと望んでいたことだった。どうか肩を並べるようなライバルになって欲しい。ルイズのひたむきな努力を知っていたから余計にそう思った。

同時に、もし本当にルイズが虚無の再来なら、自分を追い抜いて届かない場所まで行ってしまおうのではないか、とも考えてしまう。

「では、ミス・ヴァリエールには『土くれのフーケ』を捕らえたものとして、勲章の授与を申請しておこう。無論、勇敢に杖を掲げ、ミス・ヴァリエールを助けたものとして、ミスタ・コルベール、ミス・ツエルプストー両名にも報奨が降りるよう手配する」

しかし、勲章という言葉も聞いても、ルイズの表情は明るくなかった。

「あの……わたしの使い魔には」

「すまないが、それはできない。使い魔である彼女の扱いは、平民でも貴族でもないのだから」

オスマンははつきりと言葉にはしなかったが、使い魔は平民よりもさらに下の扱いだ、ということだった。

肩を落とすルイズに、オスマンは続ける。

「しかし、じゃ。城から認められなくとも、学院が報奨を用意することはできる」

「……ありがとうございます！」

「さあ、望むものを言ってみよ」

しかし、オスマンの言葉にアルレットは答えない。ルイズがアルレットの顔を伺うと、困ったようにシエスタの方を見た。

「アルレット？ なんでもいいのよ」

「……違う。シエスタも付いてきた」

ルイズははつとして、恥じるように眉をよせた。

「……そうね、ごめんなさい」

「わ、わたしなんて、何もしてませんし……」

「オスマン、シエスタにもいいでしょ？」

「もちろん」

アルレットの失礼に取れる態度にも、オスマンは鷹揚に頷いてみせる。孫のわがままでも聞くような目だった。

しかし、学長からの許可が降りたにも関わらず、シエスタはメイド服のエプロンの前で手を弄ばせて黙りこんでいる。普段なら指先を伸ばして綺麗に手のひらを折り重ねているところを、彼女らしくない仕草だった。

「ほら、せつかくアルレットが言ってくれてるんだから。欲しくないの？」  
「それは……」

欲しくないわけがない、とシエスタは思う。

シエスタはルイズやキュルケと違って、『土くれのフーケ』へと立ち向かう勇敢さをもつて捜索隊に加わったわけではない。置いてけぼりにされたくないし、アルレットの傍に居て世話をしてあげたい……キュルケが憤慨したように、そういう浮ついた気持ちで同行したのだった。

それでも、村に残してきた家族にマシな生活をさせてやれるなら、恥を忍んで「金銭が欲しい」と一言告げる覚悟がある。

貴族に向けて金銭を要求することが、どれほど恐ろしいことだとしても。

「お金、が欲しいです」

「ならば毎月の給金の十倍を贈ろう。良いか？」

シエスタは目を見開いて驚いた。そして、大きく腰を折って頭を下げる。

額が分かれば、その金銭と引き換えにどれだけ贅沢ができるのかも判然としてくる。

給金の十倍というのはシエスタにとって頬の緩むような数字だった。オスマンにとつても、王室からの謝礼を考えればまったく痛くない額である。

「ありがとうございます！」

「うむ。それで、そちらは？」

「うーん……」

アルレットは顎に指を当てて悩む仕草をする。ふと横を見ると、ほつとしたような様子の子のシエスタが見えた。アルレットはシエスタの手を取る。

水仕事で荒れてしまったその指は、ルイズやキュルケ、アルレット自身のようにすべやかで柔らかいものではない。爪の表面だつてよく見ればでこぼこしている。それを、アルレットは大切なものを愛おしむように指先でなぞつた。

決めた、とうなずいて、アルレットは口を開く。

「わたしは、シエスタをもらう」

予想外の言葉に、アルレットを除く全員が驚きを露わにしたが、それもすぐに納得へと変わる。

学院に雇われている彼女では世話係として十分に仕事ができないのを、自身が雇い入れて解消しようというのだった。あるいは、単に気に入っているからという理由かもしれない。

「まあ、よいじやろう」

魔法学院で貴族に仕えるのは、街場で働くよりも多くの給金が貰える。人出を募ればシエスタの代わりも明日には入ってこられるだろうと、オスマンは二つ返事で承諾した。

「しかし、人の管理もミス・ロングビルがおらんと大変じゃなあ……」

「学長。もしや、人事は彼女に任せつきりで？」

「……なんじゃあ、老人を攻めるような言い草しおつて」

もしフーケの仲間に潜入されていたらどうするのだろうか。人事を盗賊に任せていたと聞いて、コルベールは頭が痛くなった。

「これで、名実ともにシエスタはアルレットの専属メイドつてことかしら」

「あの、あの、わたし、いいんですか？」

「ええ」

浮かれた様子のシエスタに、ルイズは微笑んでうなずいた。

「シエスタ。これからもちゃんとお給料払うから。ルイズが」

「……そうよね、わたしが払うことになるのよね」

ルイズは決して多くない小遣いの額を思い出して、大きく肩を落とした。

## 15話『ほんとうに欲しいものⅡ』

夜の虫が鳴いている。

薄暗い牢獄の中で、娯楽といえば音を楽しむくらいなものだった。

処刑台へ送られる身で思索に耽ろうと、それが実を結ぶことはない。

それでも考えてしまう。きつとあの『破戒の剣』を持ち帰ることができたら、生涯金銭に困ることなくウエストウッドの森で穏やかに暮らせただろうと。

## 15話『ほんとうに欲しいものⅡ』

妹と穏やかに暮らすことがただひとつの望みだった。王家へ向ける憎しみも、のうのうと過ごす貴族へ対する敵愾心も、その望みが害されたから生まれたものにすぎない。

魔法は万の財を生み出す。盗賊となり、時として人を殺めることは、決して強いられただことではない。ましてトライアングルの土メイジともなれば、妹と村の子どもたちが慎ましかかな生活を送れるだけの日銭を稼ぐことは難しくなかった。

胸に刻まれた深い傷が、心に嘘をつかせた。妹のそばにいたいことよりも大切なことを

作り出した。

その嘘に踊らされて、手を汚し、どんどん後戻りができなくなっていくた。嘘をついた口で妹に暖かい言葉を掛け、人を殺めた腕で妹を抱きしめることは、苦痛を伴った。やがて、ウエストウッドの森から足が遠のいていった。

本当の自分は、かわいそうな妹に寄り添って穏やかに暮らすことを望んでいた。そして、妹こそがそれを切に望んでいることを知っていた。

だというのに、それをしない。とんだ大嘘つきだった。

『破戒の剣』によって嘘から解き放たれた自分ならば、また妹と穏やかに暮らすことができるだろうか。マチルダは、明日かもしれない処刑台へ登る日を忘れて、そんなことを思った。

「起きろ」

その声は、夢見心地の意識へと落雷のように到達した。

そして鉄格子の向こうから、暗闇に光るアメジストの宝石と悪魔のような鮮血の眼が覗いているのを見た。それは漆黑と真紅のドレスを身にまとったアルレットと、闇に溶ける黒色の毛並みの獣だった。

「……なんだ、笑いものにするためにきたのかい」

アルレットは答えず、薄暗闇の中で鉄格子を指さした。



指示を受けた獣が動き出す。その時、マチルダは獣の図体の大きさと、背に翼が生えていることに気付いた。

獣の口が鉄格子をくわえ込むと、それはぐしゃりと薄いアルミのようにひしゃげた。開いた隙間に獣が巨体をくぐらせ、牢の中へと入っていく。

マチルダは息を呑む。とうとう処刑の時間が来たのかと、身を震わせた。

「お前はここで獣に喰われて死ぬ」

「そうかい」

「さあ、らびたん」

獣がマチルダの影へと喰らいついた。ぐちゃり、ぐちゃりと水っぽい音が牢獄に響いた。

そうして出来上がった食べかけの肉を唾え、牢屋の隅へと放る。

「うむ、よくやった」

「ごちそうさま。でも魔王さま、食べかけを見られるの、なんだかはずかしい」

「大丈夫。わたしも城ではよく食事を残してた。もったいないって厨房でひっそりメイドが食べてるの」

「魔王さまと一緒にならはずかしくないわ」

そんな間の抜けた会話に、マチルダはゆっくりとつむっていた瞼を開いた。

そして、獣が喰らったであろうもの——死体と呼ばれたものへと、目を向ける。そして、首を傾げることになった。

「これは……?」

「マチルダ・オブ・サウスゴータの死体だ」

どこからどうみても、牛や豚などの食用肉である。豚の肉であれば、ほとんど胴体まるごとという大きさで、獣に噛みちぎられた跡がある。

前を見てみれば巨大な獣の姿はなく、アルレットの側で黒い毛並みの子猫が浮いている。マチルダには何がなんやらだった。

「幻影の魔法で、この肉はお前の死体になる。噛み跡がひどいものはすぐに火葬されるだろうから、見抜かれる心配もない」

「魔法だって……?」

「余が直々に学院の厨房から貰ってきた」

「牛の肉! 霜降りが舌でとろけるの。わたしの食べかけで良かったら、どうぞ?」

食べかけの食肉がどうして自分の身代わりなんかになるのか。

聞きたいのは肉の味じゃない。マチルダはなんだか気が抜けて、大きいため息を付いた。

「生肉は無理だよ。それで、どうすりゃいいんだい?」

「好きにすればいい。お前は死んだのだから」

「……見張りは居ないのかい？」

「居ても問題ない。見られたとしても、明日にはすっかり忘れてる」

「それもあんたの魔法か。まるで……」

「妹みたい？」

「……ああ。けど、あんたみたいにわけのわからないのじゃなくて、もつと純粹でかわいい娘さ」

マチルダは立ち上がって、囚人服についたほこりと土を払った。

「バカにはわからないくらい、魔王さまはすごいってことかしらね」

「はいはい、悪かったわよ。使い魔ちゃん」

ひしゃげた格子をくぐって牢から出ると、アルレットから杖が手渡される。まるでつきり無防備な姿に、マチルダは苦笑を禁じ得なかった。

「お人よしか何かかい？」

「魔王の仕事」

「……へえ、そんな仕事もあるものかね。なら、時間ができたら村に来て欲しい。お代くらい、払わせてくれないかい」

「遠くまで移動するのは難しいけど」

できたら行く、とだけ答えて、アルレットは子猫を伴って闇へと消えていった。目を凝らしても、その向こう側に影は見えない。

ただひとつ、心の底から望んでいたことがある。今はそれを叶えるべき時。

マチルダは杖をしまい、ウエストウツドの森へと帰るべく歩き出した。

妹の顔を思い浮かべては、頬を緩ませる。

足取りは羽のように軽かった。荒んだ心で杖を振るつたことなど、忘れ去ってしまったくらいに。

♪

学長室では、抜けた秘書の代わりにコルベールが書類仕事に駆りだされていた。

学者肌であるコルベールにとって、数字や文書の整理はお茶の子さいさいである。しかし、あるひとつの書類がコルベールの寂しい頭を悩ませていた。

「学長」

「なんだね。じじいは鼻毛抜きにいそがしい」

「仕事して下さい」

「ふうんだ。撫でる尻を持ってきてから言うんじやな」

女性秘書に対しては、これに加えてのセクハラである。よくもまあミス・ロングビルはあれだけ学長に仕えたなとコルベールは思う。

「ではせめて、この書類だけでも。私では判断しかねます」

「ん？ どれどれ……おお、なんとまた」

「いやはや、こんな場所にお招きしていいものか」

「ふうむ……ま、ええじやろう。先方も公務であちこち行ったり来たりじや。多少のわがままくらい」

書類の内容は、王室に関係するものだった。ゲルマニアで公務を終えたアンリエッタ姫が帰途に学院に滞在し、月末に行われる使い魔の品評会に審査員として参加するといふのは、以前から決まっていたことではある。

しかしそれに加えて、その書類にはアンリエッタ姫のわがままのようなものが書かれていた。品評会当日、アンリエッタ姫が直々にヴァリエール家の三女の部屋を訪ね、フーケ討伐に関する勲章の授与を行いたい、というものである。

一生徒の部屋に国の姫君が来訪するというのは、異例といえど異例だった。

「いやいやしかし、学院長、万が一にもミス・ヴァリエールに失礼があつたら大変ですぞ

「！」

「ええいさわがしい！ 仮にも公爵家の娘じゃ。心配はいらん」

オスマンはコルベールのまあるい頭をもんだ。

「やめて下さい」

「やめるわい。誰が好き好んで禿頭を揉みたがるか」

ペし、とコルベールの頭を軽く叩いて、オスマンは腕組みをしてふんぞり返った。

「それで、『破戒の剣』の報告がまだだったの」

「ええ、それなのですが……本来の銘を、ヴォーパルと言うらしく」

「ほほう？ それは、フーケが知っていたのかね？」

「いいえ。ミス・ヴァリエールの使い魔で。彼女は異世界から来たと言っています、

それと関係があるのではないかと」

アルレットが『破戒の剣』を知る口ぶりだったのは、ガンダールヴのルーンだけでは説明がつかない。触れただけでゴーレムを消滅させるような破格の性能を持った剣ならば、この世界のマジックアイテムだと言われるよりも、異世界の産物だと考えた方が納得がいく。

あるいはガンダールヴの他に、ミヨズニトニルンの力を持っているか、である。

ふむ、とオスマンは髭を撫でて頷く。

「『破戒の剣』というのは、儂が付けた名前だな」

「オールド・オスマンが？」

「うむ。まだ若かりし頃、ある山の麓で怪物と出くわした。それはもう、大きな怪物じゃった。この学院よりもずっと大きな、黒色の巨人じゃ」

オスマンは遠い目をして語る。

「その怪物を、『破戒の剣』の一刺しで葬った女が居た。助けられた近隣の村の住人は騎士様とはやし立てたが、女は賢者を名乗り、これは自分の不始末だとして晚餐を断ったそう。その後は村人と交流を持ちながら、山奥でひっそりと暮らすようになったという。

怪物を葬った夜、この剣は自分に必要のないものだと言いきり、決して争いを起こさぬ者にと、儂を名指して『破戒の剣』を授けた」

「それで、門外不出となっていたわけで」

「うむ。それでな、いずこから来たかと賢者に問えば、異世界からというではないか」  
「それでは！」

コルベールの推測がいよいよ現実味を帯びてくる。

見たことのない魔法に、見たことのない剣。異世界の存在は間違いない、そう思った。儂はその言葉を一度たりとも疑ったことはない。異世界というものはあるんじゃないや

う

「おお！ それで、賢者を名乗る方とは今もお会いしているのですか」

「……それが、どこかへ消えてしまった。異世界へ帰ったか、あるいはただ住処を移しただけか。」

あらゆる病を治し、不作の土地を肥やし、巫人の群れを追い払う。そして、賢者の美貌はいつまでも老いぬ。ガリアの血筋に負けぬ美しい青髪だった。

やがては強い信仰が興った。ちようどそれから、平穩を愛する彼女は行方をくらませたという」

異世界という胸の踊るような話であったが、その結末を聞いてコルベールは肩を落とす。

しかし、異世界からハルケギニアへ訪れた人間は一人ではない、と気を持ち直した。

『破戒の剣』をミス・ヴァリエールの使い魔へ譲ろうと思う。メイドをひとりやるだけでは不十分じゃからな」

「同郷のものだから……でありましょうか？」

「うむ。ただ宝物庫で眠っているよりも、帰れぬ故郷の宝として彼女が所有する方が良い」

「……お言葉ですが、彼女はフォークとナイフよりも重いものを持ちたがりませんぞ」



「……………そういう子じゃったか」

オスマンはなんとも言えぬ困った顔をする。

「まあ、彼女が納得しているのですからこれでいいのでしょう。では、仕事に戻って下さい」

「次の尻が見つかったらの」

コルベールは素知らぬ顔で鼻毛抜きに戻ったオスマンの腕を掴む。そして、勢い良く手前に引っ張った。

「おぎい！ ーいだい！ー」

「戻らないとこのまま寝れません。ミス・ロングビルがいなくなったせいで溜まっていくのですよ」

「抜いてる時に引っ張らんでも……こんなに抜けてしまうた」

美女にいじめられるならともかく、中年男性にされてはたまらない。痛みで目を赤くしたオスマンは、げんなりした気分で書類を手にとった。

## 16話『花より乙女、色気より食い気』

アルヴィーズ食堂の上には、同じだけの広さを持つホールがある。

フリッグの舞踏会はそこで行われていた。主役はもちろん、かの大盗賊を打ち倒した彼女である。

しかし、主役として華々しい演出での入場を果たしたこの舞踏会で、彼女は早々にバルコニーへと引っ込んでしまった。目的は酔い覚ましでも秘密の誰かとの密会でもない。

彼女はただ、自分の行いを思い出して、溜息を付くばかりだった。

## 16話『花より乙女、色気より食い気』

キュルケは大勢の男子生徒に囲まれて、是非にとダンスの誘いを掛けられていた。

普段ならば言い寄ってくる男たちに優越感を感じて自然と頬が緩むものだったが、今日は違った。どの男を見ても胸の高鳴りが感じられない。微熱のようにくすぶつた何かはあるはずなのに、それが男たちへと向かっていかない。

とはいえ、舞踏会ですることはひとつ。適当な男の手をとつて、踊り始めるのだった。耳に響いてくる音楽に感情を乗せて、軽やかにステップを踏む。だんだんと気持ちが悪くなって、適当に選んだはずの男もそれなりの紳士に見えてくる。

微熱のようにくすぶりはじめる恋慕の情。

これが欲しかった、とキュルケが頬を緩ませた時、視界に扉の開け放たれたバルコニーが映つた。

熱が急激に冷めていく。目の前の男もよく見てみれば、やつぱり適当に選んだだけあつて鼻がイマイちな優男だった。

音楽が止まると、キュルケは男に別れを告げてテーブル席へと足を向けた。

「隣、いいかしら」

「珍しい」

キュルケが催し事で男を相手にしないのは珍しいことだが、タバサがハシバミ草の山と格闘しているのはいつもどおりである。

タバサの口いっぱいに広がる苦々しい味を想像して、キュルケは眉をひそめた。

「何かあつた？」

「……珍しいわね。あなたがそんな気を利かせるなんて」

「シルフィードが仲間外れにされたつてうるさかった」

「ああ、なるほど」

『土くれのフーケ』討伐の話聞いた際に、置いてけぼりにされたと思わなかつた。しかしルイズやキュルケは、わざわざ友人を危険な目に晒そうとは思わなかつた。

タバサも、それを仲間外れだと騒ぐほど幼くはなかつた。

「なんだか、あつという間に追い越されて、置いていかれた気がしてね」

「ルイズが魔法を使つたつて話？」

「そうそう。ルイズも前はこんな気持ちだったのかしら」

「そんなにすごい魔法だった？」

キュルケは頷く。あの三十メートルのゴーレムは、スクエアメイジだつて簡単には倒せないだろう。

コルベールが見せた凄まじい火炎の魔法だつて腕を焼くので精一杯だつた。キュルケにとつて、あの炎ですらはるか遠い域にある。だというのに、ルイズはたった一言の詠唱で、それを打ち倒した。

「わたしもキュルケと同じトライアングル」

もしかして、慰めてくれているのだろうか。そう考えるとキュルケは嬉しくなつて、いつものようにタバサの頭を抱いた。

タバサは胸に圧迫されながらも、メガネがずれ落ちながらも、ハシバミ草を口へ運ぶ

手を止めなかった。傍から見れば奇妙な光景だったが、それが分かりづらい照れ隠しなのは、キュルケもなんとなく察していた。

バルコニーの手すりに寄りかかって、ルイズは考えていた。

いつ処刑台へと送られるかもわからない『土くれのフーケ』のことである。

夜の闇を見つめていると暗い考えに囚われる。例えば、フーケの命を奪ったと言えるのは誰だろう。処刑を執行する人間か、あるいは処刑台へと送った自分か、もしくは処刑のルールを作った人間か。

自分がフーケの命を奪うとしても、貴族として自覚を持ったときから覚悟は済んでいる。

これから『土くれのフーケ』に怯える人々を救えるのなら人殺しの罪をかぶってもいい。それこそが貴族としての使命であり大義だ。相手が額を地面にこすりつけて懇願したとしても、目をそらしてはいけない。

だから、自分のことよりもこの場に居ない使い魔が気がかりだった。

使命も大義もない彼女に、どうして手を貸すような真似をさせてしまったのだろう。どんな悪意に満ちた人間であろうと、命を奪うことだけは嫌っていたはずだった。なんだかんだ言ったって、アルレットが今まで一度だって人殺しに携わったことはないこと

を、ルイズは知っている。

彼女はあれから優れない顔色をしていた。それはきつと、あの時自分に精力をわけあたえたせい。夕方の授業から姿を見せていないのが不安を助長する。

一方的に人の心を見通して、自分の中身は見せてくれないのは卑怯だ、と思う。しばらく夜風にあたっていると、背後から声がかけられた。

「ルイズさま」

ルイズが振り返ると、そこには見慣れない衣装に身を包んだシエスタの姿があった。

胸元の赤いリボンが特徴的なメイド服のようなドレスだった。普段の白いエプロンはそのまま純白のフリルへと代わり、カチューシャが外れてつややかな黒髪がよく目立つ。

あつけにとられて、ルイズは見知らぬ貴族に声をかけられたのかと思った。

「どうしたのよ、その服」

「急いで街まで行って、アルレットさまを選んで下さり、ミスタ・コルベールに買っただきました」

「よかったわね」

嬉しそうな表情のシエスタに、ルイズは釣られて笑みを浮かべた。

「でも、メイド服を着なくていいの？」

「わたしはもう、ここの使用人ではありませんから」  
「そうじゃなくて……」

平民がドレスで着飾って舞踏会に入れば、貴賤に敏感な貴族に見咎められてもおかしくはない。

しかし、シエスタは気にした様子もなく堂々としていた。

「使用人のわたしの顔なんて、誰も覚えてる人はいないつて。目立たなければ貴族と同じだつて、アルレットさまが言つて下さいました」

「……それ、ひどいんだか優しいんだか」

「怒っているんです。顔にも、口にも出しませんけど」

「確かに、皮肉をかけているのかもしれないけど」

ルイズはそんなアルレットの話を、意外に思った。

貴賤の話はシエスタが生まれるずっと前から横たわっている問題であり、構造だ。人々はそれに従つて成長して、今を生きている。

彼女はあがままを受け入れる。だから、そういうった構造などに怒りを向けることはない。

あるとすれば、もっと個人的な感情かもしれない。

「ルイズさまも、そのドレス、気に入っているんですね」

「そうね。はじめは似合わないなんて思っちゃったけど」

「とつてもお似合いです」

「ありがとう、嬉しい」

今度は、シエスタが釣られて笑みを浮かべた。

「そうだ、せっかくなら料理を取りに行きましようか。今日のはなかなか食べられないわよ」

「ちよつとずるしてますけど……わたし、食べていいんですよね？」

「ええ。あの子もそのつもりで言ったんでしよう」

そうしてルイズはシエスタの横に並んで歩き出す。

バルコニーを出ると音楽が耳に近くなる。優雅に踊る生徒と、静かに食事を楽しむ生徒がいた。

食事を取ってからテーブルへたどり着くと、異空間に出くわした。もしかすると草食動物ばりにハシバミ草を頬張るタバサと、その隣で乱暴にワインをあおるキュルケの席である。

ルイズはタバサの隣へ腰掛け、シエスタも続いて横に座った。

「あの、わたし、本当にこれ食べていいんでしょうか」

テーブルに並べられたのは、普段アルヴィーズ食堂で食されているものよりずっと豪



華な食事だった。シエスタはごくりと唾を飲む。

「そういうみつともない態度してたらバレるわよ」

「す、すみません……」

肩をちぢこめて謝るシエスタに、やつぱり一朝一夕で平民らしさは抜けないか、とルイズはため息をつく。

「ルイズ、もしかすると彼女ってあのメイドのシエスタよね？」

とうとう突っ込んで尋ねてきたキュルケに、ルイズは悪びれずに頷く。

顔見知りのキュルケとタバサには隠し切れないと考えて、あえてその隣の席を選んだのだった。

「あの子の差し金かしら」

「それ以外に何があるっていうのよ」

「このメイドちゃんをルイズが横取りするってパターンもあるのよ？」

「三角関係」

「タバサ、良いこと言うわね」

ルイズが呆れて隣を見れば、シエスタは会話もそちのけで料理を見つめていた。まるで「待て」と言われた飼い犬のように熱のこもった眼差しだった。

「食べていいのよ。あんたの主人はわたしなんかじゃないんだから、好きになさい」

「……はいー」

シエスタは見よう見まねの作法におぼつかない手つきで食事を始めた。ときどき食器が音を立ててしまうのを、ホールに流れる音楽がかき消してくれた。

ルイズは軽くパイに手を付けながら、幸せそうに食事するシエスタをなんとなく眺めていた。

ふと、その向こう側に複数の男子生徒が集まっているのが見えた。何かあったのか、と目を凝らすと、見慣れた人影を見つける。

「シエスタ、ごめんね。ちよつと付いてきてくれる？」

ルイズが立ち上がって歩き出す。シエスタはわけも分からず、皿の上の料理を半分ほど残したまま急いでルイズの後を追う。

向かった先には、男子生徒が数人と、薄桃色のドレスで着飾ったアルレットの姿があった。揉めているという様子はないが、アルレットの表情は暗い。

ルイズはその中に割って入って、アルレットの腕をつかむ。

「まったく、遅いんだから」

「ルイズ」

「行きましよ。それとも、この人たちと踊るの？」

首を横に振る。ルイズは腕を引っ張って、男子生徒の集まりからアルレットを連れ出

した。

「アルレットさま、ドレス素敵です。お姫さまですね」

「……ありがとう、シエスタ」

「まあ、実際にそうだったんでしよう？ 似合うのも当然よね」

ルイズとシエスタに囲まれて、アルレットはほっとしたように頬を緩める。

「シエスタが選んでくれた」

「ふうん」

なら、お互いのドレスを選びあったのか、とちよつとした嫉妬に駆られてルイズは口をとがらせる。

「ルイズとシエスタのはわたしが選んだ」

「……そうよね。ありがとう」

「ふたりとも似合ってる。綺麗よ」

ルイズはそれで機嫌を直し、シエスタは思わず胸に手をやって噛みしめるように喜んだ。

アルレットの食事を取ってテーブルの席に戻ると、そこにキュルケの姿はなかった。ハシバミ草を頬張り続けるタバサに尋ねると、舞踏会らしく踊りに戻ったらしい。ルイズたちは、キュルケの分の席を詰めて、タバサの横に座った。

アルレットがシエスタに作法を教えながらふたり仲睦まじく食事をするのを、ルイズはときどき口を出しながら見守っていた。二人の皿に料理が無くなったころ、タバサがルイズに尋ねた。

「ルイズたちは踊らないの？」

「あなたと一緒によ。花よりパイやケーキに興味があるの」

タバサから親近感を得たような親しみの視線が送られる。体型のこともあつたかもしれないが、花より団子のスタンスに対してである。

「ハシバミ草はいかが？」

「……遠慮しておくわ」

タバサの前に積み上げられたハシバミ草の山は、見るだけで口の中に苦味が広がるようだった。肩を落として残念がるタバサに申し訳ない気持ちになりながらも、自分には無理だと思った。

見ない間にステーキやパイの皿も増えている。そういえば、このホールに入った時点からタバサは食事を続けている。いつまで食べ続けるのだろうか、とルイズは胃がむかむかして皿の積まれたテーブルから目をそらした。

「アルレットとシエスタは踊ったりしなくていいの？」

「わたしは、うまく踊れる気がしませんし……なにより相手が居ませんから」

そんなことはない、とルイズは思うが、もじもじと恥ずかしがっているシエスタを見ると、平民であることがすぐにでもバレてしまいそうな気がして、これ以上は言わないことにした。

「アルレットは？ さっきの男たちに言い寄られてたんじやないの？」

「……男の人は、苦手かも」

そう言つて、アルレットはアメジスト色の瞳を伏せる。

「そっか、あなたは見えるんだものね。ごめんなさい」

「わたし、ルイズがいい」

「踊るの？」

「ちがう」

アルレットは立ち上がると、ルイズの手を握った。どこかへ行きたいのだろうか、と席を立つと、ルイズの腕を抱いて身体を密着させたまま、バルコニーの方へと歩き出した。

シエスタは察して、ひっそりと後ろに付いていく。

扉をくぐると、ホールから死角になっているバルコニーの端まで移動した。

「シエスタ、見張つててね」

「はい」

「ちよつと、アルレット、まさか……」

「今すぐしたいの」

体が密着した。アルレットは、ルイズの首筋に舌を這わせる。ホールから隠れた場所でおまけに見張りを付けて、それが譲歩だとも言わんばかりだった。

ホールの騒がしさがあつても、お互いの息遣いが聞こえる距離。冷たい夜風が火照つた頬を自覚させる。こんなに人の多い場所で、薄桃色のドレス姿をした愛らしい使い魔に迫られている。背徳感と甘い欲望が入り混じつて、ルイズは胸が生々しく高鳴っているのを感じた。

唾液で濡れた首筋に、鋭い歯があてがわれた。ルイズは慌てて身体をのけぞらせる。

「ちよつと、待って」

「ルイズ……」

「ごめんね。このドレスだけは、汚したくないの。だから」

黒色のドレスはルイズにとつて特別なもので、わずかでも汚したくなかった。アルレットの着ているドレスも、シエスタの選んだものでよく似合っている。もし着れなくなつてしまつたら、後悔するだろう。

「ルイズ」

アルレットは熱に浮かされたような表情でルイズの肩を抱き、桃色の唇へとキスをし

た。

初めは齒が当たるような乱暴なキスが、だんだんと舌を絡めるような優しいものへと変わっていく。乾いていたものが満たされていくようだった。

荒い息を吐きながら、アルレットの唇が離れていく。ルイズはどこか名残惜しいような気持ちにかられている自分に気付いて、熱くなった頬をさらに赤くに染めた。

アルレットは抱いていた肩をゆっくりと離して、ルイズの手を握る。

「ルイズは唇のほうが好きなんだ」

「……………うるさい」

指先まで熱くなっている気がして、ルイズはアルレットの手をほどいた。顔を反らすと、頬を赤くしながらこっさり覗いているシエスタとタバサの姿があった。

「ちよつと刺激的」

「……………なんでタバサまでいるのよ。見張りはどうしたの」

「……………すみません！」

湯だったように耳まで真つ赤なシエスタは、失態を認めるように頭を下げた。見張りそつちのけで覗き見していたのだろう、とルイズは察した。

キュルケではなくタバサだったことは幸いかもしれない。そのタバサも、興味津々な様子で頬を染めていたのは勘弁して欲しかった。

「シエスタ、眠い」

ルイズに手を解かれたアルレットは、むっとしてシエスタへ寄っていった。

「朝、早かったですからね」

「部屋に連れて行って」

そう言つて、シエスタの手を取る。

「続きをするの？」

頬をゆるめてだらしない表情のシエスタに、タバサが尋ねる。

シエスタは再び顔を赤くしながら、大慌てで首を横に振った。



## 17話 『伝説の剣(?) I』

ルイズの部屋に戻ると、アルレットはこんなことを言い出した。

「今日からシエスタの部屋はここ」

学院の使用人ではなくなったのだから、居場所がないといえばいい。しかし、学長に取り合えばそれまで使用していた平民の宿舍のスペースを据え置くことはできたはずだった。

寮とはいえ、貴族の子が住まう場所。三人が住もうが問題ない広さがある。

しかし、当然ながらベッドはひとつしか用意されていない。

アルレットは夕方に買ったネグリジエをシエスタに押し付けた。

上質なシルクで編まれたネグリジエの肌触りの良さに、シエスタはお姫さまになったような気分で浮かれていた。それも、アルレットがベッドに潜り込んで手招きをするまでは、である。

世紀の大仕事をするかのように真剣味と覚悟の灯った瞳で、シエスタは貴族のベッドへと潜り込んだ。文机で勉強をしていたルイズは、ああまたベッドが狭くなるのか、くらいにしか考えていなかったが、シエスタとしては、そこは恐ろしい貴族さまの領域で

ある。同時に、触れがたいまでに憧れているアルレットの横で寝そべるといのがシエスタの緊張を増長させていた。

「ルイズは」

「まだ勉強してるから」

「そ」

アルレットは、少し距離を離れたところで仰向けに固まっているシエスタに抱きついた。

「おやすみ〜」

「……まって、わたしも寝る」

「ふん」

アルレットは勝ち誇ったような表情をルイズに向ける。

ちよつと嫉妬心をくすぐられたくらいでルイズは折れるつもりはなかったが、これではシエスタが一睡もできないだろうと勉強道具をしまうのだった。

17話『伝説の剣(?) I』

朝食の席では、『土くれのフーケ』が獄中死したとの噂が広がっていた。

巨大な獣が牢の格子を破壊してフーケを食い散らかしたという眉唾らしいものだったが、件の決闘を観戦していた一部にはアルレットと結びつけて考える者もあり、ルイズやシエスタなど彼女をよく知る者であれば、誰の仕業であるかは言わずともわかつていた。

ルイズは隣を見る。黒と赤のドレス姿に、貼り付けたような無表情。流麗な所作で食事を口へと運んでいく様は絵になっていているが、近寄りがたい印象があった。ルイズ自身も黒いドレスを身につけているが、真似は出来そうもない。

アルレットの姿を見れば見るほど耐え切れなくなっていく。ルイズは食事の手を止めて口を開いた。

「ねえ、アルレット。昨日、何してたの？ シエスタは知ってる？」

突然名前を呼ばれたシエスタは、アルレットの後ろで肩を驚かせる。

シエスタは今日も赤いリボンが特徴的なメイド服のようなドレスを身につけていた。アルレットは隣で同じように食事をさせようとしたが、反感を買うからとルイズが止めた。当人らが納得したとしても、貴族のひんしゆくを買って強い風当たりを受けるのはシエスタである。

「昨日は、ルイズさまが授業を受けている間に街へ行っただけですよね？」

「その後」

アルレットはシエスタよりも遅れてホールへと入っている。その遅れた理由をルイズは問いただしているのであった。

シエスタは分からないといったように首を傾げる。

「ルイズの心配しているようなことはない」

「それじゃあ……」

「マチルダは生きています。『土くれのフーケ』は死んだ」

言葉の意味がわからずに考えこむも、理解が及ぶとルイズはほっと息をついた。アルレットが嘘を言うことはない。なら、マチルダと呼ばれたあの女性は生きていますし、『土くれのフーケ』という大盗賊は死んだのだろう。

アルレットは人を処刑台へと送る手助けはしなかったし、牢獄で人の命を奪ったわけではなかった。ルイズの中にあつたもやもやとした罪悪感が、霧が晴れるように消えてなくなった。

「でも、大丈夫なの？ また盗賊になったりとか……」

「心配ない」

「それって、あの剣で切りつけたから？」

「そう。ヴォーパルの剣は賢者によって編み出された、偽りを斬り払う聖具。それがゴーレムであろうと、人の心に巣食う嘘であろうとも虚無へ還す」

「……またよく分からないかつこよさげな言い回ししてるけど、ようするに改心させ  
たってことでいいのね？」

「そうともいう」

ルイズは肩の荷が下りた気分だった。これでフーケの件はすべて丸くおさまり、何も  
背負うことなく元の日常へ帰っていける。

しかも、これからはラインクラスのメイジとして。それはルイズがずっと望んでいた  
ことだった。普通の貴族と同じように、勉強をして、魔法の鍛錬に励み、使い魔の世話  
をする。ただひとつ、魔法の才能がないという欠点のおかげで叶わなかったもの。

「ルイズ？」

「……ううん、なんでもない」

愛しい使い魔の声に、ルイズは穏やかな表情で答えた。



まだ生徒たちが授業を受けている昼の時間帯。アルレットとシエスタのふたりは、王

都トリスタニアにある図書館にいた。

普段なら、アルレットはルイズとともに授業を受け、シエスタは召使の仕事をしている時間である。しかし、アルレットがどうしても調べたいことがあると言いだしたので、ルイズはそれを許可し、シエスタはそれに同伴した。トリステイン最大規模の図書館と言われるフェニアのライブラリーは利用に制限があるため、次に規模の大きいと言われる王都の図書館まで足を運んだのだった。

平日の昼間でも、館内にはちらほらと人が見える。貴族も平民も入り混じっているために、アルレットとシエスタのふたりはとうとうと中央のテーブルに腰を下ろし、目立つことなく調べ物に集中できていた。

「ねえ、この単語はどういう意味？」

「ええと……ちよつと、待ってくださいね」

シエスタは分厚い辞書を開いて、アルレットの指す単語を探した。

「たぶん、自分の内側を見つめること……みたいなの、反省とはまた違うんですけど……」  
「うーん、なんとなく分かった。これもダメ」

不満そうに言ったアルレットは、手にとっていた本を読みかけのままテーブルの上に積み上げる。

調べ物は、思った以上に難航していた。そもそも、ハルケギニアとアルレットの居た

世界とでは言語が違う。普段アルレットは魔法やルーンの力を用いて意識を得ているものの、本来であれば文字はおろか言葉すらわからない。そうなれば当然、文章中の伝わりづらい表現や、理解しづらい概念が出てくる。

とくに、平民のシエスタには読めない難しい本がずらつと並んでいるため、ふたりで四苦八苦するはめになっていた。

「こちらの本は、なんて書いてあるんでしょう?」

「……『精霊信仰』って書いてある」

「信仰ですか……なんだかオカルトっぽいのはわかりですね」

「うん……でも、これ」

そう言いながら、アルレットはシエスタから受け取った本を開く。

今まで開いていた本と同様に、系統魔法に関しての内容だった。テーブルに積んでるのは、魔法の本質を論じる本ばかりである。しかし、魔法というのは原理として解明する手段がないもので、論じる書籍はどれも内容が異なってくる。著者の憶測でしかない持論を、本一冊分の論拠で埋めようというのが限界らしい。

ただ手に取った中でも、精霊という概念を用いているものは初めてだった。

アルレットがしばらく中身を読んだ後、シエスタが声をかけた。

「どうついでしよっつー」

「まだわからないけど、一度持ち帰ってみる価値はあるかも」

アルレットは本を閉じて、ふう、と息を吐く。

「じゃあ今日はこのくらいにしましょうか。このまま調べていても埒が明きませんし」

「うん。お腹すいた」

「……あ、ごめんささい。お昼の時間、こんなに過ぎていましたね」

シエスタは懐中時計を見ながら言う。普段学院で取る昼食の時間から、二時間も遅れていた。あまり空腹に耐えられないアルレットも、今日はよく集中していたのだろうか、と思う。

「では、テーブルの本はわたしが片付けておきますね。アルレットさまは休んでいてください」

「んー。つかれた……」

両手を膝において背もたれに寄りかかり、アルレットは体を休める。

上品な仕草が白いワンピース姿とよく似合う。シエスタは、思わず見とれていた。

「どうしたの？」

「……あ、なんでもありません。急ぎますね」

「ねえシエスタ、お昼はパイがいい」

「わかりました。良いお店、王都で一緒に探しましょうね」



「ううん。わたし、いいお店知ってるの」

「……そうなんですか？」

アルレットが王都を訪れたのは3度目のことである。初めて訪れた際に、コルベールを伴って利用した店があった。

「うん、シエスタも連れて行ってあげる」

「楽しみ！」

舌の超えたアルレットが言うのだから、それはおいしい店なのだろうと、シエスタは笑顔をこぼした。

「つかれた……足いたい……」

都合4度目の台詞だった。アルレットはシエスタの腕に抱きつきながら、とぼとぼと歩く。

太陽が稜線近くまで降りてきたため、建物に囲まれた裏路地の通路は影に覆われて薄暗くなっていた。時々アウトローらしい平民を見かけていたものの、奇跡的に襲われるようなことはなかった。アルレットが選んだ道という理由でシエスタは口を出さなかつたが、女二人で歩くには好ましい場所ではない。

それもこの薄暗さなら尚更で、危険に巻き込まれるのも時間の問題かもしれないとシ

エスタは考え始めていた。

「あの、アルレットさま、他のお店探しでしょうか。このままだとお夕飯になっちゃいますし」

「……………うん」

図書館を出た後、アルレットのおすすめるパイの店へ向かおうとしたものの、この有様だった。

歩けど歩けど、店には着かない。王都を一周するくらいは歩いた気がする。どんどんアルレットの表情が曇っていくのを、シエスタはなにも言えずにいた。もしかして場所がわからないのだろうか、と察していたものの、指摘すれば恥をかかせてしまうかもしれない。

しかしとうとう疲れきってしまったのか、アルレットは白状した。

「場所、忘れちゃった……………」

「……………その、あの……………はい」

見るからに落ち込んでいるアルレットを前に、シエスタはいたたまれない気持ちでいっぱいだった。シエスタにとつては、もはやパイのことはどうでもよくなっていた。

「わたし気にしてませんから！ 大丈夫です！ それよりたくさん歩かせてしまつてごめんなさい、もっと早くに言えば良かったですね」

「……ごめんなさい……」

「わたしはアルレットさまとたくさんお散歩ができて良かったです」

返事をする代わりに、アルレットはシエスタの腕に抱きつきながら、ぐつと体を寄せた。

「では、どこかおいしそうなお店、ふたりで見つけましょう?」

「うん、甘いものがいい」

「そうですね、たくさん頭使いましたから」

王都をさんざん歩いて飲食店を見て回ったあとなので、シエスタもアルレットもある程度の土地勘ができていた。これからどこへ足を運ぼうか。疲れているし近場がいいけど、どうせなら奮発して美味しいものを食べたい。

そうシエスタが思案している時だった。

ごん、と低い衝撃音が、狭い裏路地に反響した。

音のした方向、後ろを振り返っても裏路地の道に変わった様子はない。なんだったんだらう、と首を傾げながら前を向き直ろうとしたところで、腕にしがみついていたアルレットが、シエスタの元を離れた。

「アルレットさま?」

「危ないからちよつと待ってて」

そう言つてアルレットはひとりで来た道に戻つて、足を運んだことのない道へ曲がつていった。

王都の裏路地は入り組んでおり、もしかすればはぐれてしまふかもしれない。シエスタは見失つてしまふ前にアルレットの後ろを追つた。

何やら男の声が聞こえた。曲がり道の壁から顔を出して様子をうかがうと、そこにはアルレットの姿の他に、黒いマントの貴族と、身なりの良い平民の姿があつた。

平民の後ろには大きな荷台があり、鉄くずのようなものが積み上げられてる。平民が金属をかき集めて売りさばくことで日銭を稼いでいることは、聞かずとも見て取れた。問題は、金属売りを生業にしている平民の前に立つ、黒いマントの貴族だつた。

貴族は杖を抜いていた。そして、平民は怯えて体を震わせていた。

「そのの」

アルレットが声をかけた。貴族はそこではじめてアルレットの存在に気付いたようで、一瞬驚く表情をした後、すぐに外向けの貼り付けたような笑みを浮かべた。

「こんな場所になんの用だい、貴族のお嬢さん。こんなところに来ちや危ないじゃないか。私が保護してやろう」

整えられた三日月型のひげを上下させながら、貴族は下卑た声を出す。そのままアルレットに近寄り、その肩をつかもうとした。

「アルレットさまに触れないでください」

シエスタはアルレットに触れようとする貴族の手首をつかんで、放り投げるように手放した。貴族に対してこんな行動に出るなんて、自分自身でも信じられない気持ちだった。けれど、どうしても許せないという気持ちでシエスタの中にはあった。

汚いものと扱われた貴族は笑みを崩し、みるみるうちに顔を赤くして憤りを露わにしていく。

「なんだ、君は！　どこの貴族だ！　私が家ごと潰してやる！」

怒号のような声にシエスタは身を縮こませる。そんな様子を見て、アルレットはシエスタを後ろにかばった。

「あの荷台の鉄は、おまえのもの？」

「そんなわけないだろう、あんなガラクター！」

「そう、ならいい」

激昂して赤くなった貴族の顔を、アルレットは無表情に見つめた。その態度に貴族はますます憤慨し、とうとう杖を突きつけようとした。

アルレットは動かない。しかし、ふらりと貴族の体が揺らいた。杖が手から離れ、裏路地の土の上に落ちた。

そして、貴族は意識を失ってその場に倒れこんだ。

「……なに、したんですか?」

「忘却の魔法。目を覚ましたら全部忘れてる」

「そうですか……お優しいですね、さすがアルレットさまです」

諍いらしい諍いを起こしたにも関わらず、互いに怪我のひとつもなかった。穏便に済む手段があれば取ってもおかしくないものだったが、シエスタは感動していた。

その間に奥で震えていた身なりの良い平民が起き上がって、低い腰でアルレットのそばに寄っていた。

「あ、ありがとうございます、貴族様! 私どもが鉄を溶かして使うからって、土のメイズの仕事が減るとか、それで……」

「わたしはべつにどうでもいい」

「そ、そうですか、なにかお礼を出来るものがあればいいのですが」

「なら、それ。もらってもいい?」

アルレットが指差したのは、荷台に積まれた鉄くずに混ざっていた、サビだらけの大きな剣だった。

「ん? よくみりや、あのとときの嬢ちゃんじゃねえか! とうとう俺をもらう気になつてくれたか!」

武器屋で出会った時と同じように、鐔の部分をかちやかちやと鳴らして大剣が声を発

していた。

「……やっぱ、やめようかな」

「おいおい待ってくれ！ 貰ってくれねえと俺は溶かされちまうんだよ！ 助けてくれ！」

「わ、私はまったく構いませんが……これで礼になるなら」

アルレットはこくりと頷く。それを見た平民が、鉄くずの山から大剣と鞘を引き抜いてアルレットに差し出した。

「こいつは鞘にしまえば静かになります。かなり重いですが、大丈夫ですか、貴族様」  
「……うーん」

「わたしが持ちます。任せて下さい、こう見えても仕事で鍛えられてますから」

そう言って、シエスタが大剣と鞘を受け取る。予想以上の重さに「うっ……」と声を漏らしてしまったものの、アルレットに気を遣わせないためにも必死で平気な顔を取り繕った。平民はそんな様子を苦笑いで見て見ぬふりをした。

「助けてくださってありがとうございます、貴族様」

「うん」

アルレットは再びシエスタの腕に抱きつく。そして、元来た道を歩き出した。しかしシエスタが両手に大剣を抱えているため、歩く速度はずいぶん落ちていた。

「ところでアルレットさま、このボロ剣、なにに使うんです?」

「俺はボロ剣なんて名前じゃねえ、デルフリンガー、もといデルフと呼べ」

「知らないことは年寄りに聞くのが一番」

「俺を年寄り呼ばわりするな、まあ、6000年は軽く生きたがな」

「なるほど、さすがアルレットさまです。古い剣は古い剣でも、知能を持った剣なら知ってることもあるかもしれませんね」

「おい娘つ子ども! 俺を無視するな!」

「ねえシエスタ、うるさい、これ……」

「そうですね……鞆にしまっちゃいましょう。けどこれ、サビだらけでうまく入るんでしょうか」

「待った待った、もうちつと静かにしてやるから、勘弁ー」

ガチャ、と大剣が鞆に深くまでしまわれる。

「あ、黙った」

「ちゃんとしまえましたね」

静かになって満足した二人は、また店探しを再開した。当たりも薄暗くなって、橙色の街頭がちらほらと見え始めている。店に入っても、昼食というより夕食になってしま



## 18話 『伝説の剣(?)』Ⅱ』

そろり、と部屋の中に足を踏み入れる。文机に向かうルイズのうしろ姿が見えた。

シエスタの後に続いて、アルレットも扉を潜り抜けて部屋に入る。

「ずいぶん遅かったじゃない」

ルイズが振り向かず、後ろのふたりに声をかけた。びくりとふたりが肩を驚かせる。

王都から返ってきたころには、すでに夕食の時間も過ぎていた。本来なら学院の授業が終わる前には帰る、という約束のはずだった。

アルレットは以前、虚無の曜日にルイズになにも言わずコルベールと王都に出掛けてしまったことを思い出していた。また怒らせてしまったかもしれない。恐る恐るルイズの顔色を伺った。

## 18話 『伝説の剣(?)』Ⅱ』

「夕食、厨房に言って残しておいてもらってるから。今からちゃんと謝ってきなさい」

「……すみません、ルイズさま」

「いいわよ、事情はわかったから」

ルイズは夕食の席に出ないふたりを気遣って、ふたり分の食事を残していた。しかし、アルレットとシエスタは王都で食事を済ませてしまっていた。気遣いが無駄になってしまったこともあって、ルイズの不機嫌は尚更だった。

「で、あの鉄くずみたいな剣はなに？」

「ああ、あれはデルフリンガーと言つて、アルレットさまが……」

そう言つてシエスタが視線を送ると、アルレットはすでにネグリジエに着替えてベッドの上突つ伏していた。静かに肩を上下させているところを見るに、眠つてしまったのだろう。普段よりもずっと早い就寝だった。

そんな様子を見るとルイズの不満もやり場が無くなって、苦笑に変えるしかなかった。

「大変だったのね。まあ、いいわ。説明は明日で」

「……すみません。では厨房に行つてきますね。それと、アップルティーも淹れてきます」

「ありがとう、シエスタ」

シエスタが一礼して部屋を出る。ルイズは文机に向き直つて、アルレットが持ち帰つ

てきた分厚い書籍を手にとった。

タイトルは『精霊信仰』。精霊という言葉に聞き覚えはあるものの、それが『敬うべきなにか』であること以上の知識はない。精霊と魔法にどんな関係があるのだろうかと首を傾げながら、ルイズは表紙を開いた。

シエスタから受け取ったアップルティーを口にしながら、本の内容を要約して羊皮紙に書き出していく。

精霊という不確かな存在に頼った論述がされているものの、書いてある内容はそれなりに説得力があった。長いページをかけて慎重に論拠を重ねているため、結論とされる部分はルイズの中で非常に短くまとめられた。ただ、やはり魔法というのは証明の手段がないらしく、結局のところ推論止まりでしかない。

内容としては、『魔法という奇跡は、すべて精霊の所業である』という突飛な一文から始まる。そして系統魔法、先住魔法についての基礎を前提に、精霊と魔法との結びつきを論じていく。最終的に『系統魔法は精霊を術者の意思に従わせることで、先住魔法は精霊との対話を経て精霊の意思によって行使される』という短い結論が述べられる。

著書は、精霊が見えるという巫人の少年との出会いから、『精霊信仰』の執筆に至ったらしい。

ルイズは共感のようなものを覚えながらその本を読みきった。

先住魔法については詳しくないものの、『精霊を術者の意志に従わせる』という表現は、ルイズの中でしっくりとくるものだった。

搜索隊としてフーケを捕らえた前日の夜、ルイズはアルレットからある魔法を教わった。フーケのゴレームを一撃で葬り去ったエクスプロージョンである。アルレットが言うにはただの爆発魔法ではなく、人の意識だけを刈り取ったり、兵器だけを破壊したりと特殊な攻撃魔法らしい。ぜひ習得したいとルイズは扱い方を尋ねたものの、アルレットの解説はちんぷんかんぷんだった。

しかし、初めてエクスプロージョンの魔法を使った時、確かにルイズには何かが見えていた。それを精霊と呼称していいのかは分からない。アルレットの言う『彼ら』が、薄つすらと見えていた。そして、ルイズが爆発を意味する言葉を口にすれば『彼ら』はそれに従い、見事にゴレームを打ち倒した。

見えた理由は、きつとアルレットから受け取った精気。彼女にとって『彼ら』は当たり前のように見えている存在なのだろう。その彼女の命をもらって、一時的にはあるものの、ルイズも『彼ら』を見ることができた。

あの魔法を自在に使いこなすには、『彼ら』を理解しなければならぬ。そのための『精霊信仰』という本なのだろうと、ルイズは理解した。

大きくの伸びをしてその場を振り返れば、シエスタが目を眠そうにこすりながらテーブルに座っていた。ルイズが勉強を終えるのを律儀に待っていたらしい。時計を見ると、普段の就寝時間を大きく過ぎてしまっていた。

「あなたも疲れているんでしょう？ 先に寝ていけばよかったのに」

うつらうつらとしていたシエスタは、ルイズの声をかけられてハツとしたように背筋を伸ばした。

「あ……ルイズさま。お勉強、お疲れ様です」

「本、ありがとう。とても勉強になったわ」

「それはよかったです。アルレットさま、ルイズさまのためだって、本当に頑張っ探していましたから」

「……ええ」

アルレットは以前、ルイズに言った。

「魔法をあげる。ルイズが、本来使うべき魔法。わたしと同じもの。」

エクスポージョンの魔法を成功させたのもアルレットのおかげであり、それから先の段階、アルレットと同じ魔法を扱えるようにするまでがふたりの約束だった。

しかし、アルレットはこの世界の魔法を知らない。ルイズに魔法を教えるための共通言語が無いような状態だった。

そこでアルレットは『精霊信仰』という本を持ち帰って、ルイズに読ませた。世界は違えど、魔法の本質は変わらない。つまり、『精霊信仰』に書かれた魔法の解釈は、アルレットの持つ魔法の解釈に近いものであると考えられる。

「シエスタは先に寝ちゃっていいわよ」

「……まだ続けるんですか？」

「ごめんね。興奮しちゃって、眠れそうにないから」

このまま勉強と鍛錬を続けられ、アルレットのしている世界が分かるかもしれない。そうすれば、自分も彼女と同じ魔法を使えるようになるかもしれない。

ルイズは充足感を噛み締めながら、新しい羊皮紙を取り出して、ペン先をインキに浸した。



夕暮れ時の静まり返った雑木林に、弱い風が吹き抜ける。木から伸びた枝々がゆらいでささめきを鳴らした。ひらひらと葉が落ちて、ルイズの頭の上にちよこんと乗る。

ルイズは杖をぶんぶん振り回しながら、興奮気味に言った。

「もしかして今の魔法、成功した!? 風、吹いたわよね?」

「……なわけあるか。たんなる自然の風だ」

デルFRINGガーがかちやかちやと鏢の部分を動かしながら、呆れたような声を出す。今しがた吹いた風が自分の手によるものではないとわかると、ルイズはがっくりと肩を落とした。

「……ねえアルレット、なんでこんなボロ剣持って帰ってきたの?」

「ごめんルイズ……なんか、思ってたのとちがう、失敗だったかも」

「あん? 勝手に期待して勝手に裏切られた顔すんな!」

学院の授業が終わり、3人（うちひとりとは剣）でルイズの魔法の特訓をはじめたものの、ことは停滞していた。

デルFRINGガーの言い分は正しいかもしれないが、その前に魔法の特訓と聞いて「俺が指導してやる!」と豪語したのも彼である。その責任は十分に問いつめなければならなかった。

「だいたい、どうやったらこんなのが6000年も生き残るの? 冗談でしょ」

自称6000年前から存在するというインテリジェンスソード。

しかしデルFRINGガーの見た目はボロ剣。錆びついて脆くなっているような恰好で、

一振りでも折れてしまいそうな頼りなさだった。

「この剣、魔法がかかっている」

「へ？」

デルフリンガーは気の抜けたような声を出す。そして数秒の静寂の後、大声を上げた。

「あー！！！」

「うるさいわね！」

「思い出した！ いやー思い出した！ あんまりにもろくな使い手が現れねえんで、倉庫の奥で腐ってるつもりでボロ剣の恰好してたんだった！」

「はい？ これが本当の姿じゃないってこと？」

「たりめえだろ、このデルフリンガー様が錆びつくはずがねえ！」

「うるさい……」

アルレットが耳をふさいでデルフリンガーの騒々しさに抗議する。

この剣、4000年も生きているとか、本当の姿があるとか、うさんくさいことこの上ない。ルイズはすでにデルフリンガーを胡乱げな目で見ていた。

「静かにしなさいよね、それで本当の姿って？ あるんなら早く見せなさい」

「おし待ってろ、すぐこんな姿とはおさらばしてやる！ ……えーと」



「どうしたの？」

「いや、どうやんだっけな……」

デルフリンガーがかちやかちやと鐙を動かすのをやめて、沈黙する。

「忘れちゃった」

「あ、そ」

とうとう見限ったルイズはデルフリンガーに背を向けて、魔法の鍛錬に戻ろうとする。

「おい！ 本当だからな！ 俺の本当の姿はこんなじゃねえー！」

「うるさい……アルレット、それ鞆にしまっちゃって」

「わかった」

アルレットはルイズの言うとおりに、デルフリンガーの柄を掴んで鞆にしまおうとする。その瞬間、騒がしかったデルフリンガーの声がぴたりと止まった。

「……こりやおでれーた。嬢ちゃん、使い手ってだけじゃねえな。使い手で担い手なんて、前代未聞だこりゃ」

「担い手？」

「おい嬢ちゃん、俺の魔法を解け。担い手にできないなんて言わせねえ」

「できるけど……まあいつか」

そういつてアルレットはデルフリンガーに手をかざす。

そして、数秒と経たないうちだった。音もなくデルフリンガーの刀身が真っ白な光に包まれていく。光はやがて収まり、黄金色の輝きとともにデルフリンガーの刀身がふたたび外にさらされる。それは、光に包まれる前とはまったく違った姿をしていた。

傷一つない、不思議な輝きを放つ大剣。わずかな汚れも見当たらないというのに、6000年前から存在すると言われても疑いが持てない。この剣が傷付くところがまるで想像がつかないほど、圧倒的な存在感を放っていた。

姿を変えていたというのも納得ができる。人を狂わせるほど位の高い宝物だ。ろくな使われ方をしないなら、倉庫で埃をかぶっていたほうがマシというのも言い過ぎではない。

「アルレット? これ、なにをしたの?」

「デイスペル・マジック。魔法を消すやつ。本当はあとでルイズにこれをやって欲しかった」

「おい、俺は実験台か! ……いやーしかし、こりや気分がいい。どうだ娘っ子、見たかこれが俺の本当の姿だ!」

見た目は変われど、口はまったく変わらな。ルイズは今までのぞんざいな扱いを謝罪しようか迷ったが、褒めれば凶に乗ってますます騒がしくなるのが安易に想像できた

ため、言葉を吐き出さずに飲み込んだ。

「……すごく見えやすくなった」

アルレットがデルフリンガーを両手で持ち上げて、正面に構える。そうしてアメジスト色の瞳で、輝きを放つ刀身をじつと見つめた。

「お、おい、なにしてんだ」

「黙って」

聞きたいことはあったが、ルイズはアルレットが集中しているのを見て、それが終わるのを静かに待った。

やがて満足したのか、アルレットがデルフリンガーを下ろして雑木の土に突き刺した。そして足元をもつれさせて、ふらりと倒れかける。

ルイズは慌ててアルレットの華奢な肩を支えた。そのまま顔を覗き込むと、少し熱が出たような赤い顔が見えた。

「もしかして、デルフリンガーの中を覗いたの？」

「……うん。疲れちゃった」

「無理しないでいいのに……もう」

「ん……」

精気が足りないと、アルレットはルイズにキスを求めた。ルイズはデルフリンガーの

目を気にしたが、これからもしなければならぬことなので、所詮は剣だからと割り切ることにした。

「ありがと、ルイズ」

「ん」

「いやあ、娘っ子たち。ずいぶんと情熱的なキスだっーふがつ!」

ルイズは土に突き刺さったデルフリンガーを無言で蹴りつけた。

あの行為はアルレットが生きるために必要なことで、笑われていい気はしない。ただ、そもそもアルレットが熱に浮かされたような目でルイズを見るので、そう見られるのも仕方ないといえれば仕方なかった。

「からかわないで。お願い」

「……あー悪かった悪かった。そんな顔すんなって」

「で、アルレット。この剣、本当に6000年も前のものなの?」

「うん……始祖ブリミルの使い魔が愛用してた武器みたい。頑丈だし、魔法を吸収する特性もあるし、まあまあすごいやつ」

「それは……」

始祖ブリミルの名前が出てきて、ルイズは言葉を失う。それに相当する威容は、確か

にある。

アルレットの瞳は人だけでなく悪魔の中身まで見通すもので、剣に対しても正確に働くことに疑問はない。そしてなにより、彼女は嘘をつかない。

目の前で光る大剣は、真正正銘、伝説の剣だった。

「おお、おお、そうだ！ 魔法を吸収するみたいな特技もあつたな！ つーことで、嬢ちゃんみたいな使い手が俺様と組んだら文字通り一騎当千よ」

「それって相当すごいじゃない。それに、始祖ブリミルを知っているってことよね、あんた」

「おうおう！ 懐かしい名前だなあ。そういや嬢っ子、誰かに似てんなと思つたらブリミルのねーちゃんだ」

「そんな恐れ多いこと、あるはずないでしょ。伝説といえど、長く生きてると頭はそうとうボケてるのね。」

あと気になったんだけど、なんでその子の呼び方が嬢ちゃんで、わたしが嬢っ子なのよ」

「そら気品の違いよ、見たところ娘っ子と比べるべくもないだろ」

「デルフリンガーの冗談つけない言葉に、「うっ……」とルイズは声を漏らす。自分がアルレットにいろいろと負けてしまっていることは重々自覚しているところだった。

ただ、アルレット自身の中に位付けはない。ルイズやシエスタは自分と隣り合うもの、という考えをふたりは十分に知っていたため、劣等感を覚えることはなかった。

「大丈夫、ルイズ。わたしより素質あるのよ?」

「……え、ほんと?」

「んなわけあるか、どうみてもへっぽこじゃねえか」

ルイズは無言でデルフリンガーのそばにより、ふたたび刀身を蹴りつけた。

「ねえアルレット、こいつの中身、もう覗いたのよね。ってことは用済みよね、こんなボケた老人」

「なあ、老人は言いすぎじゃねえか?」

「だって、いろいろ忘れすぎてるから話しても実りがないもの」

剣を振る使い手もいなければ、自分の能力すら忘れていたというのに、なんの役に立てるというのか、とルイズは考えていた。加えて、すでにアルレットがデルフリンガーの中身を見通してしまっているために、デルフリンガーの話せることはすべて知っている状態でもある。

「うん。用済みだしデルフリンガーは今度街に返してくる」

「ちよいと待て! そらねえだろ!」

「……冗談。結構つよいみたいだし」

そう言いながら、アルレットはデルフリンガーの柄をつかみ、鞘に挿しはじめた。

「しまうのも無し！ 話せば分かる、ちよつとだけ俺の話をしてー」

ガチャリ。

「やった、黙った」

「よくやったわ」

「この剣のおかげでいろいろ分かった。虚無の担い手のこととか、ハルケギニアの魔法のこととか」

「……それはすごい成果ね。いくらで買ったの？ あれ」

「タダ」

「ま、あんなサビだらけじゃそうよね」

肩をすくめてから、ルイズは鍛錬を再開するべく杖を握り直した。

## 19話『親友』

「武器は人を傷つけるものだから」

デルフリンガーを所持する気はないと、アルレットは言った。

アルレットの発言はデルフリンガーの存在を否定するようなものだった。これにはルイズも、さすがにデルフリンガーの気持ちを考えてほうがいいとアルレットを諭す考えが湧いたものの、当のデルフリンガーは文句も言わずすんなりと受け入れた。

「使う必要がないならそれでいい」というデルフリンガーの言葉に裏はなく、自虐を込めた様子もなかった。必要ないなら必要ないで喜ばしいと、簡単に笑い飛ばせるのは年の功が成せる振る舞いかもしれない、とルイズは思った。

しかし翌日、デルフリンガーは激しい後悔に襲われていた。所持する気はない言ったアルレットが取った行動は、デルフリンガーをコルベールに譲る、というものだった。

デルフリンガーに魔法を吸収する特性があることを伝えるとコルベールは喜々として受け取り、これは素晴らしい研究材料だ、と興奮を露わに研究室にこもってしまった。夕方、シエスタは研究室のある棟から、悲鳴を聞いた。誰の悲鳴かは、言うまでもない。



## 19話『親友』

ベッドの上、ネグリジエ姿のふたり。夜も更け、窓の外の闇はますます深まっている。いつもよりずっと長いキスだった。いつもより、お互いの顔が赤くなつて、息が上がつっていた。

アルレットの額に滲んだ汗が、ルイズの額に落ちた。アルレットはルイズに覆いかぶさつたまま、ふたたび桜色の唇に自分の舌を割り入れる。ルイズはまぶたを閉じ、湿つたまつげを揺らしながら、なすがままにそれを受け入れた。

もう何度目か知れない。唇が離れると、アルレットは火照つた体をルイズに擦り付ける。体がうずいて仕方がないというふうに、ルイズの上で息を荒くする。そうして疼きが収まるとまた、唇にキスをする。

まるで動物のように、直情的に欲する。ふたりのあいだに言葉はなく、あるのは熱っぽい息遣いだけだった。

きい、と蝶番が小さく音を立てた。わずかにあいたドアの隙間から、シエスタがそりと部屋に入ってくる。手に持った盆には、ルイズお気に入りティーセットの乗っていた。

扉に鍵をしてから、音を立てないようにテーブルに紅茶の準備を始める。3つめのカップに紅茶を注ぎ終わると、シエスタはテーブルの席に座った。そのまま横目でベッドの方をちらちらと盗み見ながら、顔を耳まで真っ赤に紅潮させて、ふたりの行為が終わるのを待った。

「や……もう、だめ……」

ルイズがか細い声を上げて寝返りをうち、毛布に頭をうずめる。ようやく行為が終わったらしいことを知って、シエスタはちいさく息を吐いた。安堵のような、落胆のような、自分でも判然としない複雑な気持ちだった。

頬の赤いアルレットが機嫌よくベッドから降りて、シエスタの隣に座る。ルイズに逃げられてしまったものの、十分満足したらしい。

「今日はなんだか、ずいぶんと長かったですね。ルイズさまは大丈夫なんでしょうか？」  
「大丈夫。これも、ルイズにとって大事なこと」

「魔法に必要なこと、ですか？」

「うん。わたしの精気をあげて、ルイズの精気をもらって、お互いを混ぜあったの」  
「そ、それはまた、なんてうらやましー」

シエスタは言葉を止めた。視線の先に、毛布の隙間からこちらを睨むルイズの姿が見えた。

「……これからも『混ぜ合う』の、するんですか?」

「ううん。とりあえずは、しないつもり」

「そ、そうですか……」

「ちよつとシエスタ! なんて残念そうにしてるのよ!」

がぼつ、とルイズが毛布を退けて起き上がった。そして、これみよがしに大きなため息をつく。

のそのそとベッドから這い出ると、アルレットの向かいの席に座り、シエスタの用意したティーカップに手を付けた。

「アルレットも調子のりすぎなのよ」

ふん、と赤く染まった顔を逸らして言う。

「でもルイズ、ああするの好きでしょ? 知ってるもの」

「……もう! あのねアルレット、そういうことを人前で言わないで、絶対に。わたしだって恥ずかしいの!」

ふたりだけの状況なら、お互いが知っていることを口に出しても問題はない。ただ、この部屋にはシエスタも住んでいる。ルイズはまた羞恥に顔を赤くして、頭をぶんぶんと横にふった。

「いいえルイズさま。わたしはおふたりのこと、誰かに話したり、笑ったりしませんか

ら、大丈夫です」

「……ええ、そうでないと困るんだけど……はあ、シエスタはいいわよね」

「な、なんですか。わたしだっておふたりがうらやましいんです。ちよつとだけ……

いえ、すつごく。アルレットさまにあんなふうにされて、キスだつてあんなに長く……」

「う、う、うるさい……」

「わたし別に、うるさくないです。おふたりがしているあいだはいつも静かにしてますよーだ」

シエスタはすこしむつとしたような表情をする。

「ま、魔法に必要なことなの。好きでやってるんじゃないわ」

「そんなのわかっています。そうじゃなかったら、わたし……」

同じ部屋で暮らしているのにひとりだけ除け者のような形になるのは、せめて理由がなければ耐えられない。せざるを得ないからそうしている、という経緯がなかったら、嫉妬と疎外感に狂って死んでしまえそう、とすら思えるのがシエスタだった。それは、ルイズ自身も理解して気にかけていることでもある。

「納得できるように説明するとね、アルレットが見ているもの……仮に精霊として、その精霊をわたしも見れるようになるために、この子の精気をもらっていたの。でもそれじゃ、この子は倒れちゃうから、いつもどおりわたしの精気を与えて」

「そ、それで、『お互いを混ぜあった』ですか……」  
「うー、うん……そうなるんだけどね」

シエスタがアルレットの何気ない言い回しに執着しているところを見るに、そうとう溜まるものが溜まっているのかもしれない、とルイズは苦笑を浮かべた。

「精霊が見えるようになったなら、ルイズさまもアルレットさまみたいに魔法が扱えるようになるんでしょうか？」

「そうよ。フーケ討伐のときみたいにも。でも、この子からもらった精気も自分の中に溶けてすぐに消えちゃうし、それって自分の力にはならないから。消えちゃう前に魔法を使う感覚を覚えて、消えたあとでも自分で使えるようになるうっていうこと」

「なるほど……」

「わたしね、やっと、自分にできることが分かったのよ」

魔法学院に入学してからずっとそうだった。がむしゃらに杖を振るって、失敗魔法という分かりきった結果を繰り返すだけの日々。教師に尋ねても失敗の原因は分からず、どの本にも解答が書かれていない。出来ることといえば、使えない魔法の勉強をして、爆発に身構えながら杖を振るうだけ。

今までは、暗闇の中を歩いていた。けれど、今は違う。ようやく先の見える努力ができる。容易い道ではないかもしれないけれど、道なりにずっと歩いていけば、きちんと

答えにたどり着くことが出来る。

「シエスタとアルレットが持ってきてくれた本と、剣のおかげよ。ありがとう」

「……応援してます、ルイズさま」

幸せそうに微笑むルイズを見て、シエスタは心からの言葉を送った。



「ねえタバサ」

「ん」

「最近あの子、授業に出てないわよね」

ヴェストリの広場を見渡す。演習の授業の一環で、教師である『疾風』のギトーが風のトライアングルスペルの実演を始めようというところだった。トライアングルスペルというのは誰もが憧れを持つところで、広場にいる生徒たちは真剣な眼差しでそれを見守っていた。

しかし、このタバサとキュルケのふたりは違った。学生の身にしてすでにトライアン

グルクラスのメイジにまで上り詰めており、目標として見ているのは最高位のスクエアクラス。トライアングルスペルの実演にも、退屈さを感じていた。

気になるのは、ルイズのこと。

ツエルプストー家とヴァリエール家は隣り合う領地でいざこざも多く、犬猿の仲と言つても差し支えなかった。そのいざこざの中で最も大きな亀裂を生んでいたのが、代々ツエルプストーの者がヴァリエールの恋人を横取りしてきた、というものだった。

幼いころからヴァリエールとの因縁を聞かされてきたキュルケは、トリスティン魔法学院に留学して、さあヴァリエールと張り合つてやろう、と息巻いていた。しかしフタを開けてみれば、そのヴァリエールは『ゼロのルイズ』。魔法の才能もなければ、恋愛に興味を持たず、張り合うところもないと思えた。

けれど、ただひとつだけ。ルイズは芽の出ない魔法の才能を、どれだけ笑われようと、失敗して怪我をしようと、決して諦めなかった。その貴族としてのひたむきな姿勢だけは、今の自分ではとうてい敵わないと敗北感さえ覚えた。

張り合いがないと感じていたはずなのに、いつの間にか、ルイズは親友のタバサに並んで気にかける存在になっていた。自分にはないものを持っている。だから、応援しなくなつたし、いつしか負けたくないと思うようになっていた。

「あなたの使い魔は、ルイズについてなにか知らないの？」

そういえば、タバサの使い魔はルイズの使い魔にべったりだった。もしかすると一緒にいるかもしれない、とキュルケは考えた。

「最近、雑木林のほうに向かうの見たって」

「一緒にいるわけではないのね。それで？」

「なんか、魔法の鍛錬をしてるって」

「……へえ。あのルイズが授業をサボるなんておかしいと思った」

ルイズといえば、努力家。座学の成績はトップを譲らず、品行もさすがは公爵家の娘というもの。ただし魔法の才には一切恵まれず、生真面目さしか取り柄がないと言っても過言ではないような人物だった……少し前までは。

キュルケの頭に浮かぶのは、フーケ討伐の際に放った、ゴレムを打ち倒した光の魔法。ルイズの生真面目さが貴族としての向上心から来ているのなら、確かに学院の授業を欠席してもおかしくないかもしれない。杖も持たずに一撃で巨人のようなゴレムを打ち倒す魔法を、学院の教師が教えられるはずがない。それよりも彼女の使い魔、アルレットから教わるほうが身になるに決まっている。

前を向き直ると、ギトーはまだ生徒たちに得意の風のスペルを見せびらかしていた。名目である演習授業というよりもギトーによる見世物に近い様相を呈している。

キュルケは横目にタバサを見た。すでに本を広げて、読書で時間を潰そうという体勢



に入っている。

「授業抜けるけど、タバサも来る？」

「……雑木林？」

「そう。あなただっけに気になるでしょ？」

「行く」

タバサが短く返事して、ぱたん、と本を閉じる。

ギトーを囲う生徒たちを尻目に、キュルケとタバサはヴェストリの広場を後にした。

「つまりは魔法に必要なのは精霊との対話。けれど人間と精霊とではまず波長が合わない。そこでこの世界のメイジは、精霊と契約した杖で無理やり波長を合わせ、精霊に命令を下す」

「ふむふむ、なるほどね」

「すぐくためになる。先生」

「さすがなのね！ 魔王さま！」

タバサとキュルケ、途中で加わったイルククウの3人は、雑木林で臨時に開かれたアルレットの講義を受講していた。

教師を褒める生徒たちの言葉に、ふふん、とアルレットは薄い胸を張る。

アルレットはルイズに話した内容をふたたび滔々と語っていく。それは、ここ数日のあいだ自身の特殊な感覚と本やデルフリンガーから得たハルケギニアの魔法知識を統合し、時間を掛けて獲得した魔法の解釈だった。

「だから、それぞれの細かな波長の違いが、魔法資質の有無と扱える魔法の種類を選ぶ。キュルケとタバサが同じトライアングルであってもまったく別の性質を持つように」

「わたしとタバサでは元々持つてる波長が違うってことよね。私は火の精霊に近い波長で、タバサは風と水、イルククウは先住魔法」

「……それで、ルイズの波長はいったいどんなもの？」

失敗爆発で地形が変わりかけていた秘密の練習場。そこに四属性のドット・ラインスペルを使い分けるルイズの姿があった。

アルレットの臨時講義が行われているのは、その場所から少し離れた木陰である。キュルケは今までの癖で、ルイズが杖を振るたびに爆発が起ころのではないかと身構えてしまう。それほど、ルイズが魔法を成功させているというのが信じがたい光景でもあった。

「ルイズの波長は……この世界では、『虚無』と呼ばれるものに当たる」

キュルケとタバサが絶句する。まさか、伝説の魔法系統が実在していて、しかもそれが同級生だというのだから、驚かないでいるほうが無理というものだった。ただ、イル

ククウはそれより、無表情のままめつたに表情を崩さないタバサの驚き顔を、物珍しきで眺めていた。

「だから系統魔法には波長があわないし、いままで失敗し続けてきた……というのが最近わかったこと。ちなみに余も『虚無』に当たるらしい」

アルレットはふたたび薄い胸を張る。

「でも、あの子もあなたも系統魔法使ってるじゃない」

「その理由は……絶対に内緒。ルイズが恥ずかしいから言わないでって言ってたから」

「……? 恥ずかしいことってどういうこと? 恥ずかしいことで系統魔法が使えるように成るのかしら」

「内緒」

「まったく検討つかない」

「それはもう、いつものキスに決まってるのね! きゅいきゅい!」

「あ……」

イルククウの言葉を受けて、アルレットが気の抜けたような声を出す。それでキュルケとタバサのふたりは、なるほど分かったというようにうなずいた。

「キスには不思議な力がある」

「ふーん……またしてたのね、アレ」

タバサは頬を染めてわずかに鼻息荒く、キュルケは意地悪を思いついたような顔で言った。

「し、知らない……わたし何も言っていないもん……」

「きゅい？ 魔王さま、わたし正解？ 正解なのね、きゅい！」

両手を上げてはしゃぐイルククウを見て、アルレットは気まずそうにドレスの生地をいじる。ルイズの嫌がることをしてしまった、という思いが湧き上がってきて、後悔が頭をもたげる。

ごっつん、とイルククウの額にタバサの大きな木杖が当たった。

「すこしは人の気持ちを考えて」

「い、いたい……お姉さま……」

それを見て、キュルケが小さく笑みをこぼした。

すう、と緩やかな風が吹いて、キュルケの赤髪が横に流れる。キュルケは自然とルイズの方へ視線を向けた。ルイズが風の魔法を使っているようだった。

その鳶色の目は、この学院に来てから見続けてきたものと同じ。変わらずひたむきで強い表情をしている。魔法が成功するようになって、同じだけの力が込められている。

虚無や韻竜はたしかに伝説の存在かもしれない。ただそれを知ったところで、今まで

とはなにも変わらない。少なくともこの学院を出るまで変わらずそばに居られるし、張り合い続けていられる。

「タバサ、イルククウ、そろそろ行くわよ。昼食の時間」

「ん」

「やったー！ おひるなのね！」

「罰としてあなたはごはん抜き」

「……………え」

その後、やかましいイルククウを抑えるために、結局のところ『ごはん抜き』は撤回された。

## 20話『籠の鳥』

ハルケギニアは今日も平和だった。

トリステインの姫君であるアンリエッタは、数人の護衛を連れて無防備な馬車旅をしていた。小鳥のさえずりを聞きながら、馬車に揺られて深い森の中を進んでいく。

公務の旅では不機嫌な様子でいることの多いアンリエッタもこの日ばかりは穏やかな表情で森の木々を眺めていた。

いつも口やかましい鳥の骨は別の馬車に乗っている。かわりに口を利く相手も居なかったが、それはそれで平常である。気軽に話せる人間というのは、姫君という立場からは望めない存在だった。

だから、これから見れるであろう懐かしい顔に心を踊らせていた。

幼い日の遊び相手、ヴァリエール公爵家の娘。お互いに成長して立場もずいぶん変わってしまった。あの頃のように手をつなぐことは出来なくとも、親しい距離で、同じ視線で一緒に笑いたい。国の存亡に関わる重大な悩みを抱えながらも、アンリエッタは期待に胸を膨らませていた。

## 20話『籠の鳥』

次の日の早朝、ルイズは使い魔の品評会の出し物について頭を悩ませていた。魔法の鍛錬にのめり込むあまり、そんな行事があることもすっかり記憶から抜け落ちていた。

ふつう、何週間も前から準備をして、使い魔と共に訓練を重ねてから挑む行事である。しかし気が付いてみれば、今日がその当日。この日が来るまで、どのような出し物にするかすらまったく考えていなかった。せめて出し物を決めなければ付け焼き刃でしのごとすらできない。

文机の椅子に座り、うんうんと唸るネグリジエ姿のルイズ。すぐに朝食の時間だというのに、髪を梳かすのも忘れていったい何ごとかと、シエスタが恐る恐る話しかけた。

「……ルイズさま？ 風邪でも引きましたか？」

「……………今日よ、今日なのよ」

「今日？」

「品評会」

「ああ……」

シエスタは以前と同じように、赤いリボンが特徴的なメイド服のようなドレスを身にまとっていた。そんな貴族のような格好でアルレットの着替えを手伝っているのだか

ら、未だに違和感が拭えない。

アルレットのネグリジエが取り払われたところで、ルイズは窓の外へ目をそらした。

「ねえ、何か良い案ある?」

「うーん……アルレットさまですから、何をやっても大賞は間違いなしかと。けれど、やっぱり迷いますね、出来ることはよりどりみどりです」

「……あのねえ、審査員はあなたじゃないのよ」

「し、知ってますけど……本当に、アルレットさまはどんな使い魔よりもうすごいですし」

「ねえ、品評会って?」

アルレットが寝起きの声で尋ねる。すっかり忘れていたのだから話す機会もなかった、とルイズは自分に言い訳をする。

「春に召喚した使い魔をお披露目する催しよ。自分の使い魔に芸を覚えさせたりして、ね」

「今日?」

「そう。ちょうどお昼ね。将来国を背負うメイジたちがどんな使い魔を召喚したかは大切なことだから、国の偉い人まで見に来ることになってるのよ」

「だからそんなに悩んでるんだ。ふーん」

「今年はゲルマニアからご帰国なさったアンリエッタ姫殿下が、トリスタニアまでの帰



路にあるこの学院にご滞在なさるの。だから、何が何でもまっとうな出し物を用意しなきゃいけないわ」

シエスタが下着姿のアルレットに赤と黒のドレスを着せる。金色の刺繍が窓から差し込む朝日に反射した。

ルイズは視線をアルレットに戻して、そろそろ自分も用意しなければ、と立ち上がる。クロローゼットから学生服を取り出してさっさと着替え始めた。

「じゃあ……お姫さまが来るんだから、なんかすごいことしたい」

「うーん、ただ凄いことでも困るのよ。学長に言われたでしょ。ごく常識的な範囲で、当たり前まえのことをしなきゃいけないの」

「常識的?」

「そう。知らないでしょあなた、常識的って言葉。あなたに常識を期待してないからわたしが出し物の内容を考えてるわけ。おわかり」

アルレットが肩を落として消沈する。大人気なかつただろうか、と思いつつ、できることはないかと尋ねてみることにした。

「なにか、魔法以外で得意なことってある?」

「えと……ピアノとかヴァイオリンとか」

「へえ、さすがというかなんというか」

「あと、油彩画」

「絵も得意なの。じゃあとりあえず、なにか描いてもらえる？」

そう言つて、ルイズは普段勉強に使つているペンと羊皮紙をアルレットの座るテーブルに差し出す。

アルレットはやる気に満ちた表情でペンを握つた。ルイズとシエスタが見守る中、羊皮紙にインクを落としていく。やがて絵が完成すると、羊皮紙を誇らしげに胸元に掲げた。

「アルレットさま、とってもお上手です！」

両手を合わせて褒め称えるシエスタを見て、ルイズは思った。なるほど、得意だと勘違いするわけだ。ルイズ自身も絵が得意だとは思わないが、少なくともアルレットよりは上手に描ける自信がある。これでは、ピアノやヴァイオリンも本当に得意なのかは疑わしい。

とは言つても、アルレットの瞳の前で嘘を付き続けるのは無理がある。元の世界では、そもそも教える人間が居なかつたのだろう。

「シエスタ、本当のことを言つてあげるのも優しさよ。恥をかくのはこの子なんだから」

「……じゃあルイズさまが言えればいいじゃないですか」

「う……」

シエスタの恨みがましい視線に、ルイズは何も言えなかった。「下手」と、たった二文字でも口にすれば、心が痛くなるような光景が広がってしまうのが分かりきっていた。

話が見えていないアルレットは、首を傾げるばかりである。

「ね、どう？ ルイズ」

「……上手ね、アルレット」

「ありがとう、ルイズ、シエスタ」

目を細めて嬉しそうに笑うアルレットを見ると、これでもいいか、と思えてくるのだった。

しかし、品評会は別である。本当に恥をかかせてしまつては可哀想だし、なにより恥をかくのはルイズも同じだった。

「他に出来そうなことか、ある？」

「うーん……城で一度、演劇のお披露目をしたけど、上手だつてすごく褒められた」

「演劇かあ……そうねえ。確かに、上手そう」

「おかあさまによく似てるって」

「お世辞じゃなさそうね、あなた声を使うのも得意そうだし。でもね、今日発表するには時間も人数も足りないから、難しいわ」

「魔法を使えば……」

「だから、それはダメ」

お偉い人にアルレットの魔法を見せてしまったら、そのままアカデミーに連れていかれてもおかしくない。オスマンに釘を差されたことを抜きにしても、この学院にいる間は平穩に過ごしたいとルイズは考えていた。

朝食の時間も差し迫っている。それが終われば、あとは午前の授業を終え、昼食を挟んでから品評会が始まってしまう。

このままでは、恥をかくどころの問題ではなかった。うんうんと唸るルイズに、アルレットは呑気な顔で話しかける。

「なにもないなら、ピアノが引きたい。わたし、歌も得意よ」

「……それは、語り引きってこと？」

「城では、いつも部屋でピアノを引きながら歌ってた。絵は、本当はあんまり好きじゃないの。やることがないからやっていただけ」

あまり期待できない、と思いつつも、案が浮かばないのだから仕方ない。聴くだけ聴いて、あまりにダメならごまかさずにはつきりと伝えようと、ルイズはアルレットの提案を飲むことにした。

「じゃあ、とりあえず聴かせてくれる？ ピアノくらいなら学院にもあると思うから」

時間も足りない。とりあえず、ルイズの朝食は抜きになりそうだった。アルレットと

シエスタはこの後、ゆっくり朝食を取ってもらえればいいものの、ルイズはここ最近、授業が欠席続きになっているので危機感を覚えていた。朝の授業も出なければならぬ。

両手で口を抑えながら、あくびを噛みこらす。そのまま部屋を出ようとしたところで、シエスタに呼び止められた。

「ルイズさま、髪、跳ねていますよ。梳いて差し上げますから、座ってください」

「あー」

自分の髪を触って気づく。髪を梳くのすっかり忘れていた。

このまま出ていたらキュルケに笑われるところだった、とほつと息をついた。

「近ごろ頑張っていますから、疲れているんですね」

「ルイズ、無理しないでね？」

「ちよつと寝ぼけてたみたい。心配しないで」



昼時のヴェストリの広場で、がやがやと観衆がざわめいている。生徒たちは緊張と興

奮が入り混じった様子で落ち着きなく品評会の始まりを待っていた。

やがて教師によるコールが掛かると、発表を行う一人目の生徒がフクロウの使い魔を伴って観衆の前に現れる。生徒は緊張したようなぎこちない動きで、観衆に向かってお辞儀をした。

来賓席では、護衛の兵士に左右を囲まれたアンリエッタが窮屈そうに肩をすぼめていた。ルイズの姿を探そうと辺りを見渡していると、マザリーニにみつともないと見咎められてしまった。親友の姿を探すことのどこがみつともないのか、とアンリエッタは内心で悪態をついてみたものの、学院を訪れた際から生徒たちの注目は自身へ向いている。目立つような行動が良くないことは、アンリエッタ自身もよく分かっていた。

フクロウを連れた生徒が観衆による拍手の中、出し物を終えて生徒たちの列へ戻っていく。

何事もなく品評会が進行していけばおのずとルイズの顔も見られるだろう。アンリエッタは椅子に深く座り直して観覧に努めることにしたものの、思ったよりも早くその姿を見ることになった。

制服を着た生徒たちの中で、ドレスで着飾った人間がいれば目立たないはずがない。どうして今まで気づかなかったのか、とアンリエッタは疑問に思う。

黒いドレスを着た、冷たい雰囲気の彼女。泣き虫で意地っ張りだった幼い頃とはずい

ふんと印象が違うものの、桃色掛かったブロンドと整った顔立ちは間違いなくあのルイズのものだった。

出し物に必要な衣装だろうか。ルイズの隣には、同じように制服を身にまとっていない生徒がふたりもいた。しかし、肝心の使い魔の姿が見えない。となれば、さすがはヴァリエール家の三女といったところか、大型の飛竜を召喚したに違いない。

アンリエッタは親友の晴れ舞台に期待をふくらませながら、ルイズの名前が呼ばれるのを待った。

火竜や風竜が登場し、その雄々しい姿に観衆が沸き立つ。品評会も終盤になって、とうとう教師の口からルイズの名前が読み上げられた。

アンリエッタは身を乗り出してルイズの登場を待ったが、一向に観衆の前へ現れる気配がない。首を傾げていると、建物の方からレビテーションの魔法で黒いグラッドピアノが運ばれてくるのが見えた。

設置されたピアノの影から、杖を手にしたルイズが現れる。続いて、白いワンピースの少女がピアノの前に用意された背の高い椅子に腰掛けた。

「生徒同士の、合同の発表というのもあるのですね」

いままで発表した生徒の中に、ふたり以上で舞台に立った例はいない。ルイズは白いワンピースの彼女とたいそう仲がいいのだろう、と微笑ましく思っていると、アンリ

エツタの斜め後ろに座るマザリーニが訝しげな声で言葉を返す。

「いいえ……そのようなことは認められていないはずですが。そもそも、マントを身に着けていないというのは、魔法学院の教育は——」

マザリーニの言葉を遮って、ルイズのよく通る声がヴェストリの広場に響き渡った。

「これから、私、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールの使い魔、アルレット・オブ・アンジュを紹介いたします。

春の召喚の儀、私の呼び出した使い魔は、異国から訪れました彼女でございます。彼女は大変優秀なメイジであります。見慣れた系統魔法を実演することは面白みに欠けると考慮いたしました。今日は彼女にしか響かせることのできない音楽を鑑賞して頂きたいと思っております」

ルイズが指揮棒のように杖を振る。それに合わせたようにアルレットがピアノを弾き始めると、観衆ひとりひとりの耳に、まるで間近で演奏されたような繊細な弦の音が響き渡った。

「このように、細やかな音色まで皆さまの耳に届くよう、私が風の魔法を行使しております。では、ご清聴くださいませ」

アルレットの演奏を背景に、ルイズが観衆に向かって深く腰を折った。

幼い頃から変わり者だと思っていたものの、まさか人間を使い魔にしているだなんて



思わなかった。アンリエッタは妙な関心を覚えながら、耳元に響く演奏に耳を澄ませる。

高名な演奏家を知るアンリエッタには、その演奏技術が稚拙なものに思えた。限られた九十の音で、どこか聴き覚えのある旋律を奏でる。決して下手とは言えないもの、ありきたりといえればありきたりで、拍子抜けしたというのがアンリエッタの正直な感想だった。

演奏が佳境に差し掛かったところで、ささやくような歌声が旋律に合流する。

知らない国の言葉で紡がれた詞は、単調なピアノ音に暖かな色を与えていく。歌というにはあまりにも声量が足りず、風の魔法がなければほとんど耳に届かないだろう。聴こえるはずのない、細かな息遣いまでもがひとつの音楽だった。

演奏と同じく、それが才覚のある歌い方だとは思わない。声の美しい貴族の少女が、ただ聴いたことのあるようなメロディで詞を口ずさんだだけの歌。

楽しげな色の中に郷愁のような憂いを残して、透き通った歌声がヴェストリの広場に響き渡る。歌声の中にある表情の豊かさに、アンリエッタは自然とまぶたを閉じて聴き入っていた。

ピアノが最後の音を響かせて、歌声が中空に消えていく。

静まり返ったヴェストリの広場に、観衆による拍手の音が沸き起こった。火竜や風竜

の使い魔が発表を終えた時よりも、手を叩く音はずっと少なかったかもしれない。それでも、アンリエッタは今日一番の感激を込めて、ルイズとその使い魔に拍手を送った。

品評会の最後には、もつとも素晴らしい使い魔を選ぶ投票が行われた。集計が終わると、抜きん出てトップに選ばれたのはタバサのシルフィードで、他の上位者の得票数にはほとんど違いがなかった。

上位者の中には、ルイズの名前も上がっていた。彼女に投票した教師がほとんどいにも関わらず上位者に選ばれたのは、投票券がアンリエッタに五十枚、来賓と教師に十枚、生徒に一枚と不平等に分配されている中で、アンリエッタが票のほとんどをルイズに投じたからである。加えて、ある程度の生徒人気をそれ支えて、ルイズは五位の位置につけたのだった。

得票の上位十名にはそれぞれ教師からのコメントが読み上げられる。アンリエッタが複数票を投じてくれたことを知らないルイズは、どうしてわたしたちが選ばれたんだろう、とそわそわしながら自身に対してのコメントを待った。

当のアルレットは、舞台上に立つために着替え直した白いワンピース姿で、堂々とシエスタの提供する紅茶と茶菓子を楽しんでた。順位や教師からのコメントに興味は無いらしく、全体の発表が終わった時点で品評会への関心が消え失せている。

「ええ、次、得票五位のミス・ヴァリエール。ミスタ・ギトーからのコメントが寄せられております。

品評会は使い魔を通しメイジの実力を示す場であるから、十つの子どもでも出来るお遊戯会のような出し物は適切ではない。この失敗から、求められたことの趣旨を理解しようとする姿勢を学んで欲しい——以上です」

司会を任されたコルベールの読み上げた言葉に、くすくすと嘲笑が沸き起こる。上位者選ばれたのは、きつと何かの間違いだったのだろう。ルイズはため息を付いて、大きく肩を落とした。

それでもアンリエッタから拍手をもらえたのだから、失敗ではなかった。コルベールとオスマンからは理解を得ているし、アルレットも楽しそうにやっていた。

呑気な様子アルレットを見ると、これでよかったかもしれない、とルイズは思った。



今朝はどうなることだろうと慌てていたものの、何ごともなく使い魔の品評会を乗り越えられた。

その日の、夜の帳が下りたころ。

その時間に行われる行為はアルレットを召喚してからの習慣になっていた。食事や睡眠、水分補給とまったく同列で、必要なこと。

「ねえ、さすがにそろそろ、わたし……」

貧血でどうとう寒気がしはじめた。ルイズは覆いかぶさったアルレットの肩を押し、お互いの体を引き離れた。

アルレットは、ルイズの顔色を見てはつとしたような表情を浮かべた。血の気が引いて青い顔をしている。血を吸い過ぎたせいだ、とすぐに分かった。

「……ごめんなさい、ルイズ」

ルイズの身体にまたがったまま消沈する。悪気の無い失敗なら、ルイズとしても怒る気にはなれなかった。

「うん……どうしたの？」

「ちよつと、足りなくて」

「こんなに吸ったのに……？」

こくり、とアルレットは頷く。そしてルイズの肩に両手を置いて、くちづけをした。

アルレットの唇から血の味とともに暖かいものが流れ込んでくる。失っていた血液が戻ってくるような感覚だった。貧血の症状もあつというまに解消されていく。

キスはほんの一呼吸の間に終わった。これで、アルレットが吸い過ぎた分を返してもらう形になった。

「たぶんね、ルイズの精気が薄くなってる」

「それは……」

「魔法の鍛錬で、たくさん使ってるから」

言葉を失う。自分のしている努力が、結果的にアルレットが生きるために必要な養分を奪っている。

「……控えたほうがいいなら、そうする」

多少足踏みしてもいい。ようやく手に届きそうな魔法でもアルレットのためならと、よどみなく言えた。

しかし、アルレットは首を横に振る。彼女も彼女で、ルイズと似たような気持ちだった。

「ルイズにはルイズの願いを叶えて欲しいの。少しくらい、大丈夫だから」

「でも、あなただって辛いんでしょう？ その、足りない……」

「あ、あの——！」

シエスタが声を張る。勇気のこもった行動だった。

ベッドの上、ふたりだけの世界に入っていたルイズとアルレットは、驚いてシエスタの方を振り向く。

「あ、えと、その……わ、わたしじゃ、代わりになりませんか……？」

## 21話『てのひら』

赤いリボンが解かれ、無造作にベッドの上へ投げ捨てられた。

ゆるくなつた襟から肩をだけさせて白い肌を露わにする。鎖骨から肩口にかけて手のひらをすべらせると、シエスタは小さく身震いをした。

肩口を覆う小さな手のひらが、シエスタの体を押し倒す。

ベッドの上で仰向けになつたシエスタは、心臓が跳ね上がるのを感じた。どくん、どくんと体の外へ響きそうなほどうるさく鼓動して、身動きを取ればそのまま死んでしまふのではないかと思つた。

どんどん顔が焼けるように熱くなって、唾を飲み込むと口の中がからからに乾いていくことに気付く。

アルレットは、シエスタのこわばつた体の上に覆いかぶさつた。左膝でシエスタの股下に広がるドレスの裾を踏みつけて、左手でドレスの生地を覆われた二の腕をpushさえつける。突然の痛みに、シエスタは思わず声を漏らした。

アルレットはルイズに拒絶された時のことを思い出して、慌ててシエスタの肩から左手を離した。

「ごめんね」

「……平気です。いくらでも、酷くして下さい」

「シエスタ……」

ついでにむような、触れるだけのキスをする。五度繰り返してから、アルレットはシエスタから顔を離れた。

お互いの瞳がよく見える距離で見つめあう。シエスタの瞳は水気を帯びて潤んでいた。

アルレットは恍惚とした表情でシエスタの首元へ顔を埋めた。あらわになった白い肌の表面に何度も舌を這わせて、唾液で湿らせていく。

口元に鋭い犬歯をのぞかせたアルレットは、濡れた首元へかぶりついた。アルレットの歯が皮膚にさわる感覚にシエスタは身を硬くする。ぷつり、と犬歯が皮膚の表面を貫くと、鋭い痛みと灼熱感に襲われた。

シエスタは漏れそうになる声を堪えながら、アルレットの歯が自分の中へ入ってくるのを受け入れた。



夜風が首元に冷たい。煌々と輝く夜空の星も、うつむいて歩くルイズの目には映らなかった。

胸の奥から、もやもやとした感情が湧き上がってくる。

この気持ちはなんだろう、と考え続けるのは、それが嫉妬の感情であることを認めたくないからだだった。

あのふたりのことは、好きだとよどみなく言える。だからこそ、そんなふたりへ汚い感情を向けている自分に後ろめたさを感じる。

アルレットは、シエスタにも『する』と言った。

それは、ルイズのことが不必要になったわけでも、嫌いになったわけでもない。精力を魔法の鍛錬で消費してしまうせいで、アルレットに供給する分が足りなくなってしまうだけの話。

それに、平民であるシエスタが与えられる精力はほんのわずか。加えて言うなら、アルレットとルイズはメイジとして性質が似通っているおかげで、お互いの精力が馴染みやすいという特徴もある。精力の多さと相性の良さがあってこそ、アルレットはルイズの前に現れたと言っても過言にはならない。

シエスタにはただ少し、アルレットが生きるのに必要な分を補ってもらうだけ。ルイ

ズが必要とされているのは今までと変わらない。

だというのに、いざあのふたりが行為を始めようとすると、ルイズはどうしようもない居心地の悪さを感じて部屋を出てきてしまった。

魔法の練習をしてくる、と平静を装ってみたものの、外に出てみれば夜も更けている。眠気もあつたし、どう考えても魔法の練習をするような時間ではなかった。

煉瓦の壁に寄りかかって、首元の傷跡に手を当てる。

傷口が開いているわけでも、かさぶたがあるわけでもない。治ったはずの傷跡の上に、指で触って分かるほどの凹凸ができています。

深く付けられた傷跡は、いつまでたっても白くなつてそこに残り続ける。

また、噛んで欲しい。そうしたらこのもやもやした気持ちも全部、傷の痛みになつて消えてくれる気がした。

「ルイズ……？」

突然に名前を呼ばれて、ルイズは俯いた顔を上げた。そこには、ルイズよりも少し背が高いくらいのも、フードで頭を覆ったローブの人影があつた。

「私です、ルイズ・フランソワーズ。覚えていますか？」

フードをつまみ上げて、その面貌を月光の元に晒す。

透き通るような白い肌と、アクアマリンのような輝きを持つ瞳。みるみる幼い日の思

い出が蘇ってくる。あの頃はおてんばでいじわるで、さんざん自分のことを振り回していた。親友で幼馴染のアン。

今では立派な王女として民の前に姿を見せるようになった。ずいぶん遠い存在になって、ルイズ自身も貴族として尊敬を向けている。その人がいまこの場で、自分と同じ目線で微笑んでいた。

「姫殿下……どうしてこのような下賤なところへ」

「殿下なんて、やめてちょうだい。私たち、おともだちでしよう？」

「しかし、姫殿下……」

「おねがい。私にとつて、あなたは今でも一番大切なおともだちなの。宮廷には心を許せる相手なんていない。あれからずっと、ルイズだけ、ルイズだけが私のおともだちよ」  
アンリエッタはルイズの手をとつて、その鳶色の目を見つめた。アルレットがそう望んだように、アンリエッタも同じように対等な目線で接して欲しいと願っているのが伝わってくるようだった。

それでも、ルイズの中にある王女への憧憬や貴族としての姿勢が、ルイズの意志を押しつけてそれを許そうとしない。会話を続けようと浮かんでくるセリフは、どれも王女へ向けるかしまった言葉ばかりだった。

黙りこんでしまったルイズに、アンリエッタは目を伏せながら言う。

「……そうよね。ルイズは、この学院でたくさんの人と出会って、素敵な使い魔と暮らしているんですもの。ごめんさい、私ばかりが気持ちを先走らせてしまっただけ」

「そんな、そんなこと！」

「よいのです。それよりもルイズ、こんな場所で暗い顔をして、いったいどうしたの？ あなたが私をどうと思っていなくても、私はあなたのことが心配だわ」

「それは……」

アンリエッタになれば、自分の身を打ち明けられることに抵抗はない。しかし、ルイズには自分でもはつきりとしれないもやもやとした感情をどう伝えたらいいのか分からないのか分からなかった。

「私には、言えないことかしら？ それならそれで、聞きません。けれど、こんなところにおいては風邪を引いてしまいます」

そう言って、アンリエッタはルイズの手のひらを握る。アンリエッタから暖かな体温が伝わってきた。

アンリエッタはそのままルイズの手を引いて、寮のある棟へ向かっていった。その後姿を見ていると、ルイズはなんだか幼い頃を思い出すようだった。

「姫さま」

「……ルイズ」

握っていただけの手のひらが、お互いに握り合う手のひらになった。アンリエッタは足を止めてルイズを振り返る。

ルイズは一步を踏み出してアンリエッタの横に並んだ。互いに目を合わせて、ルイズは緊張気味に、アンリエッタは目を細めて穏やかに笑った。

♪

王女にあんなものを見せておいて、言い訳になるとは思わない。

忘れていたのだ。すっかり、ぽっかりと。手のひらから伝わる温度を感じて、暖かくてふわふわとした気持ちになって。寮の廊下を歩いて、いつものようにアンロツクの魔法を唱えて、ノブを引いて。

だからだと味わいながら食事をしている自身の使い魔の姿を、晒してしまった。

アンリエッタは顔を赤くしたが、ルイズは顔を青ざめた。

「まあー」というアンリエッタの声に、ルイズは「いやあー」と叫んだ。

つまるところ、アンリエッタに対してアルレットの事情を話すことになってしまふの

だった。

シエスタは顔を真っ赤にして、ふらふらとした足取りで紅茶を淹れるために部屋を出て行った。

ルイズとアルレット、アンリエッタの三人になった部屋の中で、ルイズは意を決して洗いざらい事情を話す。その間、行為を邪魔されたアルレットはベッドでふて寝をしていた。

話を聞いたアンリエッタは、はあはあとうなずいて、なるほど、ルイズはあのシエスタというメイドに嫉妬をしていたのだ、と口に出さずに納得する。

紅茶を淹れて帰ってきたシエスタは、まだ頬をりんごのように赤くしていた。

「姫殿下、お、お口にあうかどうか、でございます」  
「ええ、ありがとうございます」

「言葉遣いが変よ、シエスタ」

シエスタはテーブルに三つのカップを用意する。紅茶を注ぎ終わると、向かい合うような形で座るルイズとアンリエッタにそれぞれ、もうひとつはルイズの隣の席に置かれた。

「アルレットさま、紅茶を淹れました。よかったですら」

「ミルク？」

「はい。アルレットさまのはお砂糖の入ったミルクティーです」

アルレットはもそもそとベットから身を起こして、乱れた髪のままテーブルへ向かう。王女が来訪してしようと、あくまでここは自分の部屋らしい。すっかり見慣れてしまった無防備な様子で目をこすっていた。

「あの、アルレットさん。よろしければ、私の隣に座りませんか？」

「ふむ、よかろう。王女よ、同じ王族として——」

ルイズは慌てて席を立って、アルレットの口を手で抑えこんだ。

「ご、ごめんなさい、姫さま。ほら、そんなだらしない姿で対抗心燃やしても仕方ないわよ。シエスタに直してもらいなさい」

「ふふひへ」

口から手をどけて、アルレットを櫛を持ったシエスタに押し付けた。再び席へ着くと、ため息を付きながら紅茶を啜る。

アンリエッタはそんな様子を見て、くすくすと上品に笑った。

「ルイズ、昔から変わった人だと思っていたけど、まさか人間の使い魔を召喚するなんてね」

「……何もいえませんか」

「でも、聞いたわ。あなたがあの『土くれのフーケ』を捕らえたのでしょう？　きっと使

「い魔もあなたが特別な証に違いないと思うの」

「わたしではなく、わたしの使い魔になってくれたあの子が特別なのです。今でも、わたしは姫さまには敵いません」

「まあ、彼女を信頼してるのね」

敵わないのは、魔法以外の部分もだった。

幼い頃、新しく買ってもらった人形をアンリエッタに横取りされても、何も言えなかったり。さつきみたいに、一步を踏み出せずにも優しく手を引いてくれたり。

自国の王女としての尊敬も、親友としての尊敬も、ルイズにとっては変わりなかった。

「シエスタは座らないのかしら？」

「いいえ、姫さま、彼女は平民で……」

「先ほどの話より、存じ上げています。でも、私とルイズのように、おともだちでしょう？」

ルイズは王女と同じ目線で席についている。なら、平民が座るのも同じだとアンリエッタは言う。

ちようどアルレットの身だしなみを整え終えたところでの発言に、シエスタは立ち尽くしたままあふたと当惑する。

「わ、わたしなんかが同席して、いいんですか……？」



「いいの。姫さまのご親切をはねのけるほうが失礼に値するわ。だから、わたしの隣、座って」

動きが固まっているシエスタと相反して、アルレットはすたすたとシエスタの元を離れて、何のためらいも見せずにアンリエッタの隣の席に着く。

仕方ない、とルイズは隣の椅子を引いた。ぽんぽん、と空席の座面を叩いて、シエスタに座るよう催促する。

こうなれば無視することの方が失礼だと気付いて、シエスタは硬い動作で恐る恐る椅子に座った。

「し、失礼いたします……」

「そんなに恐縮しないで。私、ただおしゃべりがしたいだけなの。普通の、学生みたいに。」

ねえ、シエスタも、ルイズやアルちゃんと敬語なんて使わずに、自由におしゃべりしたいでしょう？」

「わた、わたしが、アルちゃ……ん」

アルレットの持つカップがソーサーと擦れて音を立てた。

「あら、ダメでしたか」

「ダメ」

ぶるぶると首を横に振る。アンリエッタは残念そうに笑った。

「あなたってよくわからないプライド持つてるわよね。アルちゃんなんて可愛らしいと思うけど」

「……ルイズちゃん」

「……確かにダメね」

脳が拒絶反応を起こしている。自分の中で海よりも深く根付いている貴族のプライドが許さないらしい。

なるほど、アルレットの場合は魔王のプライドか、とルイズは思う。

「あら、私には？」

「アンちゃん」

「……うーん、嬉しいのだけど、なんだか」

「変ね」

よくある愛称の「アン」でいいのではないか、とふたりは考えるも、どうやら「アルちゃん」と呼ばれた彼女なりの意趣返しらしい。

そんな中で、シエスタが期待の籠った眼差しでアルレットを見つめていた。

「あ、あの……」

「おねえちゃん」

「はい！」

「アルちゃん」と呼ばなかったシエスタだけが、唯一まともらしい呼称で呼ばれていた。ニュアンスとしては姉妹というよりも年上の女性に対して用いるものだったが、喜色満面な様子の子のシエスタの脳内でどうなっているかはルイズからはつきりと見透かされていた。

「姉がかしこまった態度なのは妹の教育上いかなものかしら。ねえシエスタ」

「ええと、それは……わたしがアルレットさまを妹扱いするという……あの……」

「まあまあルイズ、ふたりが可哀想だわ」

「姫さまが言い出したようなものなのに」

「そうね。ごめんなさい、アルレットさん」

幼い頃のように楽しそうな様子の子のアンリエッタを見て、ルイズは頬を緩める。王女として成長して、遠く触れがたい存在になってしまったと、そう思っていた。前に座る王女ふたりと、隣に座る平民のメイド。去年までの自分ならこの状況を嫌っていたかもしれない。けれど、今はどこか居心地良く感じていた。

「ねえ、アルレットさん。今日の演奏は、いったいどこの国の曲なのでしょう？ 私、とても感動しまして、たくさん投票してしまいました」

……なるほど、それで上位者に選ばれたのか。ルイズはようやく納得した。

「とても遠くの、アンジュという国の音楽家が作った曲。あまり知られてないけれど、素敵でしょ?」

「ええ、とつても。アンジュ、ということとは、アルレットさんは本当に王女なのですか」

「ふふん。今は魔王」

「まあ、王さまだったの! 遠くには、まだ見知らぬ国があるのですね」

アルレットの異国の話に、アンリエッタは興味深げに耳を傾ける。ルイズやシエスタにとつても興味のある話だった。アルレットは魔族の大陸であるゲヘナとやらには胸を張って語るものの、出身らしいアンジュについてはほとんど口にしたことがない。

「曲もさることながら、綺麗な歌でした。あれも、アンジュという国の言葉なんですよ  
ね」

「うん。わたしの一番好きな歌」

「いったいどんな詞だったのでしょうか?」

アルレットは紅茶で喉を潤してから、まぶたを閉じて胸に手を当てる。

ハルケギニアの言葉のまま、まるで歌うような声音で詞を口にしはじめた。

——穏やかな世界の中で「わたし」は泣いている。

青空のもと、緑の絨毯の上でも。それが世界で一番大きな城の中だとしても。「わたし」はたったひとり、ぽつんと佇んで涙を流している。それでも世界は変わらず、静か

で穏やかなまま寄り添ってくれる。涙が止まることはなくても、「わたし」に寄り添い続けてくれる。

アルレットが口ずさんだのはそういう詞だった。

城にいたころはずっと部屋の中でピアノを引いていた、とアルレットは言う。

歌が得意になるわけだ、とルイズとシエスタは思った。

「私も、その歌が好きです。もしかしたら私たち、似ているのかもしれない」

アルレットは、微笑むアンリエッタの顔を覗く。

「アン。ルイズの大切な友だちなら、いつでもわたしが城の外に連れ出してあげる」

「……お城の外？」

「うん。わたしの魔法で城を抜けだして、ルイズと会うの」

「そう……それは素敵ね。時間はあっても、自由に出歩ける機会がないから。ルイズに

会うということは、あなたとシエスタにも会えるのかしら？」

「そういうこと」

アンリエッタはアルレットの言葉をほとんど信じていないものの、そんな魔法があることを想像して楽しそうな表情を浮かべる。

ルイズとシエスタにはそれが嘘でも冗談でもないことが分かっていた。アルレットの魔法なら、たとえ相手が王女だとしても、時間さえあればこうして茶会に招くことが

出来る。

「ねえ、アン。話していいないことがあるでしょ？ 話してみて」

アルレットのアメジスト色の瞳に射抜かれて、アンリエッタははつと息を呑んだ。

「わたしは凄いや魔法使いなの。さっきのことも、嘘じゃない」

「……本当みたい。お見通しなのね、アルちゃん」

「だから、それヤダ」

「私たち、もうおともだちよ。それともルイズみたいに、姫さまって呼んだほうが良いかしらっ？」

「……もう、好きにして」

ルイズはついさっきまで抱えていたもやもやした気持ちを忘れて、そんな二人の様子を眺めていた。

好きな人同士が仲良くしていれば、なんだか心が暖かくなる。アンリエッタと同じように、いまままで心を許せる相手がいなかったルイズは、そんなあたりまえのことにふと気付いた。

「今日は大切な用事が、ふたつあります。ひとつはフーケ討伐の勲章授与。もうひとつは……ある頼みごとになるのですが」

「話してください、姫さま」

「……それが、たいへんな危険を伴うのです。ですが、私に頼れるのはあなたぐらいで……」

「いいえ姫さま、姫さまのために何かできるなら、それがわたしの本望です」

勲章という言葉もそっちのけに、ルイズは身を乗り出していた。

「……ありがとう。大切な友だちにこのような頼みごとをしてしまう私を、どうかお許しく下さい」

## 22話『賢者の娘Ⅰ』

その国の姫君は、忌み子ではないかと囁かれていた。めったに民衆へ姿を見せず、現れたかと思えば暗い色のドレスを着てバルコニーから無表情に手を振るのみである。

賢者の娘が姫君の部屋へ通いつめて療病をなさっているというのは、城のメイドから流れた話であった。賢者の娘の口を開かぬ態度が、よりいつそう話に真実味を加えるのである。

出産とともに命を落とした王妃の、たった一個の忘れ形見。

次の王座へ着くべきお人がこうでは堪らぬと貴族たちは王へ意見したが、王は一顧だにせず新たに妻を迎えることを拒んだ。

統治者として秀抜な手腕を發揮し続けた王も情に惑わされるようではいけないと、貴族たちの間で姫君を暗殺する計画が上がった。しかし、いざ刺客を送ってみればそこはもぬけの殻で、姫君は賢者の娘とともに国から姿を消していたのであった。

## 22話『賢者の娘Ⅰ』



熾火の真つ赤な灯りを暖かな色だと感じるようになったのは、ウエストウツドの村に住むようになってからだつた。

火を焚くのは決まって、野宿をするときである。盗賊に身をやつしてからは宿と宿をはしごして生活していたものの、盗みを働いた夜には宿へ帰れない。そういうときに、誰もいない薄暗い森のなかで罪悪感と孤独感を押し殺し、帰る家のないことを恨みながら、じつと火にあたつて冷えた体を暖めるのだつた。

今は違う。一度は失つた家も、ここにある。マチルダは熾火の他にある、もうひとつの暖かな温度に肩を預けた。

「どうしたの？ マチルダ姉さん」

「子どもたちも寝たから、カッコつける必要もないと思つて……嫌だつた？」

「……ううん。姉さん」

互いに肩を触れ合せて、熾火の赤を見る。

望む限り、明日も、十年後もこの時間は続いていく。ふたりには魔法があるのだから、この村が無くなつたとしても、また居場所を作ればいい。

けれど、ふたりは人間であつて、悪魔のように人の心を覗くことはできない。

自分がそれでいいと感じていても、相手はそう感じていないかもしれない。気を遣わなければいずれ軋轢が生まれて、拒絶につながってしまう。

「ねえ、テファ。ここには年の離れた子どもしかいない。ずっとこのままというのも、寂しいと思わないか？」

「……どうするの？」

ふたりだけでもよかった。そう考えていても、互いがその言葉を否定することはなかった。

マチルダの頭の中に、公爵家の娘が連れていた使い魔の姿が思い浮かぶ。

魔法を使えない落ちこぼれのメイジが召喚した、人の形をした使い魔。公爵家の娘の魔法も、その使い魔の存在も、マチルダの常識の範疇外にあった。そして、それが自分の妹にも当てはまることにマチルダは気付いていた。

「使い魔なんていたら、楽しくならない？」

春の召喚の儀から、暗い顔ばかりをしていた公爵家の娘が穏やかな表情を見せるようになった。家族や恋人と結ぶような、ああいう特別な絆がティファニアにもできたらいい。

まさか、人の形をした使い魔が本当に呼ばれるとは思っていない。熾火の灯りと、肩から伝わる人肌の暖かさに当てられて、何気なしに浮かんできた思いつきだった。

「うん、楽しそうかも」

ティファニアはいつも戯れている森の動物たちと親しげに暮らす場面を想像をする。

子どもたちの世話だけでも大変なのに、使い魔の世話まで増えたら大忙しかもしれない。

けれど、マチルダの話はとても魅力的なものに思えた。長閑な森の中での暮らしは、もつと賑やかで忙しいくらいがちょうどいい、と思う。

「なら、ティファアが使い魔を呼んで欲しい。わたしなんか呼んだら、可愛げないのができそうだ」

「ええー……わたしに呼べるかな……」

「できるに決まってるじゃないか。わたしが保証する」

「……わかった」

ティファアは頷き、意を決した顔で立ち上がる。

「いま召喚するつもりかい？」

「うん。そのほうが、一秒でも長く一緒にいられると思うから」

「それはそうかもね。こんな夜遅くだから、呼ばれる使い魔も寝ているかもしれないけど」

妹の可愛げのあるこだわりに苦笑を漏らしながら、マチルダは立ち上がってティファアの隣に立つ。

ティファアは懐から小さな杖を取り出して、それを意気揚々と天高く掲げた。

「我が名は、ティファニア。えーと、ええとー……なんだっけ、ペンタゴン？」

召喚の魔法はいったいどんな呪文だっただろう。幼いころは、大人になったらどんな使い魔を召喚しようかとワクワクしたものだった。

ティファニアはずっと昔に魔法の勉強で目にした、召喚の呪文を思い出そうとする。

「えー……わたしの……運命を司る？ ……なんだっけ……」

呪文がどうしても思い出せない。それでも杖の先に魔法が宿っているような予感を感じて、気持ちを含めて声を張り上げた。

「よ、よろしければ、わたしの……使い魔になりませんか！」

でたらめな詠唱だった。才能が無いと分かって以来、普通の魔法からは遠ざかっていたために、うまくいくような自信はない。

唯一唱えることのできる忘却の魔法と同じように、とにかくイメージを形にしようとティファニアは杖を振った。

「ちよつと、テファ。そんなので……」

出てくるはずがないと、マチルダは笑う。それからすぐに、その鏡は現れた。

「……もしかして、成功したのかな？」

「みたいねえ……信じられないけど」

使い魔のいる空間に繋がる、銀色のゲート。あわい光を放っていて、くらがりでも

はつきりとその存在が見て取れる。

どんな使い魔が現れるだろうか、とふたりはじつとその鏡面を見つめた。

やがて銀色を割って肌色が姿を現す。徐々にその形があらわになると、ティファニアは声を上げた。

「やー！ いやー！ 姉さん助けてー！」

鏡面からは、腕が生えていた。何かを掴もうとしているのか、その場でうねうねとせわしなく動いている。まるで溺れた人間がわらを掴んで生き残ろうとするような必死さともいえる。

くらがりの中では、ほとんどホラーだった。もしかすると悪魔や魔物を召喚してしまったのではないかと、ティファニアはマチルダに抱きついてその身を震わせる。

「まさか本当に人間がねえ……テファ。助けてあげなよ」

「お許してください！ どうか！」

「……はあ。仕方ないからわたしがやるよ」

「やだあ！ ごめんなさい！」

ティファニアに抱きつかれたまま、ティファニアを引きずってマチルダは歩みを進める。

半ば信じられない気持ちで、マチルダは鏡面から伸びる白い腕を引っ張った。

ずるり、と奇妙な感触を伴って腕が引き抜かれる。

鏡面の奥から現れたのは、ローブに身を包んだ小さな人影だった。そのままうつ伏せに倒れこんで、か細い声でうめき声を上げる。

「あれ……？　ひと？　人間？」

「テファと歳の近い女の子みたいね。にしても……」

頭の高い位置で結われたつややかな髪は、目が醒めるような鮮明なラピスラズリの色だった。

平民ではまず見られない色彩であり、しいていうなら、ガリアのやんごとなき血筋を連想させるはつきりとした青色だった。少女の手荷物だろうか、高級そうな黒色のトランクケースが傍に転がっている。

倒れ伏していた少女が、もぞりと緩慢な仕草で立ち上がる。

お世辞にも背が高いとは言えず、銀縁のメガネと低い位置で結われた短めのポニーテールが相まって、整った顔立ちにしてはどこか地味な印象を受ける。全身をローブで覆い隠していて体型は見取れなかった。

ひとつ明確に言えるのが、ティファニアが呼び出したのは何の変哲もない十五・六歳に見える少女だということだった。

ティファニアは、召喚した少女の茜色をした瞳を見据える。

「あ、あの、はじめまして。召喚に応じてくれて、ありがとう……ごいいます。わたし、ティファニアといいます」

少女に向かって一步を踏み出し、握手をしようときこちない動きで手を伸ばす。極度に緊張しているのはくらがりでも分かるほどだった。

「契約は、握手じゃできません」

少女の口から発せられたのは、硬質で透き通った青い水晶を思わせる声だった。差し出した手を下げて、ティファニアが首を傾げる。

「え……えつと?」

「わからないならわたしがやります」

今度は、少女が泰然とした様子でティファニアの方へ一步を踏み出した。互いの息がかかる距離まで近づいて、少女はティファニアの頬に両手を添える。

ティファニアは混乱しながらも、これから起こることを察していた。幼いころは、大人になつたらどんな使い魔を召喚しようかとワクワクしたものだつた。使い魔を召喚した後には、頭を撫でながらキスをして「おともだち」になる約束をするつもりだつた。少女は頭半分分の身長差のあるティファニアに向かってつま先を伸ばし、ぐつと顔を近づける。

柔らかいものに、唇が塞がれた。鼻腔をくすぐる甘い匂いと脳がしびれるような感覚

に、ティファニアは思わず声を漏らす。

ティファニアは抵抗する余裕もなく、少女の唇と契約のキスを交わすことになった。

「……これで契約は終わりました」

少女はティファニアから一步下がって、ローブを脱ぎ始める。その下から、襟付きの白い半袖シャツとワインレッドのプリーツスカート姿の慎ましやかな体型があらわになった。胸元を飾る細い赤のリボンタイが歳相応の可愛らしさを引き立たせており、センスの良さを伺わせる。

「学生さん……なんですか？」

ティファニアは羞恥に頬を赤くしながらも、気まずい気持ちのまま黙っていられずに少女へ語りかけた。

「学生じゃなくて、学者、のつもり……」

「……そうですか、ごめんなさい。そういうえば、お名前は」

「アニー。アニー・オブ・アンジュ」

「アニーさん、ですね。ええと……ふ、ふつつかものですがどうぞ、よろしくおねがいします」

「……はい。ティファニアさん」

アンジュ、なんて家名は聞いたことがない。マチルダは、目の前の少女がやんごとな



き血筋とは違うであろうことに、ほっと胸をなでおろした。

「それで……何をなさっているでしょう？」

ティファニアは動揺した声音で言う。アニーと名乗った少女は、あろうことか細かいボンタイを解いて、シャツのボタンを上から外し始めていた。

「その、主従関係を結ぶにあたって、使い魔のルーンを確認しておくべきだと思います」

「え、ええと……」

「あの、胸のところ……見えますか？」

戸惑いながら視線をやると、はだけたアニーの胸元には薄っすらと白い文様が浮かび上がっていた。

本当に人間が使い魔になったのか、と妙な関心を抱くと同時に、ティファニアはアニーの首元にあるものに目を奪われる。

鎖骨から上にかけて、白く肌に残った無数の小さな傷跡が折り重なるように広がっていた。あまりの痛々しさに、ティファニアは思わず眉をひそめて、アニーから視線をそらす。

その傷跡がひとつだけなら、ただ事後的に怪我を負っただけかもしれない。けれど、まるで自傷行為のように繰り返し付けられたであろう傷跡の重なりは、とても尋常なものには思えなかった。

ティファニアが視線を逸らしたのを見て、アニーはシャツのボタンを下からかけ始める。やがて傷跡は襟に隠れて見えなくなった。

アニーはリボンタイを黒いトランクケースに閉まってから、ティファニアとマチルダに向き直る。

「そちらの方は、どなたでしょう」

「マチルダ。この子の、テファアの姉だよ」

「一緒に暮らしていらっしやるのですか？」

「ああ」

「そうですか。これから、よろしくおねがいします」

アニーはマチルダに向かって深く頭を下げた。

今までの様子から彼女が冷たい性格をしていると考えていたのが、思い違いだと気付く。アニーをよく観察してみれば、緊張して肩がこわばっているのが分かった。

「その薄着じゃ寒いだろう。そのローブも着て、はやくこっちに来な」

マチルダはアニーの腰に手を回して、焚き火の前まで体を押す。

ちようどティファニアと肩がふれあうような格好になって、アニーは気恥ずかしさにティファニアから顔を逸らしながら、その場にしゃがみこんだ。

アニーはローブを羽織りながら、体を丸めて火に手をかざす。緊張よりも微笑ましき

が勝つて、ティファニアはアニーに寄り添うように腰を下ろした。

向かいに立ったマチルダは、そんなふたりの様子を腰に手を当てながら満足そうに眺める。

「どうしてテファアの使い魔になってくれたんだい？」

「……この世界に、尋ねびとがいるんです」

「この世界……？」

聞き慣れない言い回しに、マチルダはオウム返しに尋ねる。

「わたしは、ここではない世界からやってきました」

「ここではない世界？ 東方というわけではなく？」

「まあまあ、マチルダ姉さん。急がなくてもいいじゃない。これからゆっくりお話しましょう」

ティファニアが上機嫌な声で言う。確かに、こんな村で生活するのに、何を急ぐこともない。

「じゃあ、暖かい飲み物でも入れてくるかね。アニー、なにがいい？」

「……ありがとうございます。何があるのでしょうか？」

「まあ、いろいろと。これでも不自由しない村だから」

「では……ホットミルクか、カフェオレか……あの、無ければなんでも」

「わかった、ホットミルクだね」

ティファニアと似たような好みだった。それに、人見知りがちなところもよく似ている。

もしかしたら、ティファニアがひとり増えたようなものかもしれない、とマチルダは思った。

## 23話 『賢者の娘Ⅱ』

## 23話 『賢者の娘Ⅱ』

ほう、と息を吐く。焚き火に照らされた煙のような白色は、瞬きの間に夜の闇へと溶けて消えた。

ミルクの暖かさとはちみつの甘さに、アニーは思わず頬を緩める。冷えた両手を赤茶のマグカップで温めながら、熾火の赤を見つめた。

「信じてくれるんですね」

「信じるだけなら簡単なもんだよ」

アニーはティファニアの特徴的な耳を前にしても、何を言うこともなかった。

エルフの象徴である尖った耳は、ハルケギニアに住む人間にとつて恐怖の象徴そのものでもある。幼い子どもならまだしも、アニーはどこからどう見てもメイジであり、年ごろの少女だった。

彼女が言うように異世界から来たのであれば、ティファニアに対してのリアクションが見られないことにも説明がつくかもしれない。

学院にいた公爵家の娘とその使い魔のことを思い出しながら、マチルダは疑いを持た

ずにアニーの話を飲み込んでいた。

「なんだか素敵かも。大切な人のために異世界からやってきた、なんて」

ティファニアは楽しそうな声で言う。こんな突拍子もないような話をまるで疑わないのもどうなんだろう、とマチルダは姉として心配になった。

「その人がどこにいるか、わかるの?」

「……わかりません。でも、きつとすぐにでも見つけます」

「そっか……ねえ、マチルダ姉さん」

「手伝おう、つていうんだろう?」

マチルダは渋い表情で、首を横に振る。

「テファアは行かせられない。代わりにわたしが手伝ってやるよ。ガリアからトリステインまで、さんざん歩きまわったからね」

「その……ありがとうございます」

「それで、居場所を知った後はどうするんだい?」

「できるだけ、その人のそばに居たいと思います。けど、恩も返さずにこの場所を去ることとは出来ませんから、この場所から魔法で移動したいと思います」

「でも……、森の奥だし……言っちゃあなんだけど、辺境だよ?」

「わたしの魔法なら、問題ありません。目的地さえわかれば」

系統魔法に、フライより優れた移動魔法は存在しない。毎日のようにフライの魔法で村や街を往復するというのは、無茶な話だった。

そこでマチルダにはふと思ひ当たることがあった。

「……というのは、もしかすると、召喚魔法で通ってきたアレみたいに？」

「ええ、ゲートを使います」

「……そうかい。もしかすると、あんたの探しびと、知っているかもしれない」

「……本当、ですか？」

「ああ、もし違うとしても、手がかりくらいにはなるだろう」

トリストイン魔法学院には、ティファニアと同じように、人間を使い魔にした生徒がいた。そして、マチルダはその使い魔の使用した未知の移動魔法を見ている。

きつと、そういうことなのだろう。

「どうしたんだい？」

「なんでもないです」

「よかったですね、アニーさん」

アニーは銀縁のメガネをずらして、人差し指で目元の涙を拭った。マチルダは空になったマグカップを片手に立ち上がる。

「明日は早く出るから、あんまり夜遅くなるんじゃないよ。寝坊でもしたら野宿をする

はめになる」



村の傍に流れる川で、朝の水浴びをする。

日が眩しく、空が遠い。鳥はさえずり、風が木々の葉を揺らしている。冷たい水は興奮した頭を冷ましていくようだった。

アニーは白いタオルで全身を拭くと、トランクケースから取り出した教会の旅装束に着替えはじめる。

やがて身だしなみを整え終わると、黒いブーツで砂利を踏みしめながら川沿いを水流に沿って下っていった。修道服に機能性を加えたような衣装を身にまとい、髪を結わずにメガネを外したアニーの姿は、昨晩とはほとんど別人だった。

川幅が広くなり、水の流れが弱まったあたりで立ち止まる。アニーの視線の先には、ローブに身を包んだマチルダが大きな岩に寄りかかっていた。

「……驚いた。あんた、シスターだったのかい」



「信心なんてありませんけど、動きやすい服がこれしかなかったの」

水流の先には、小さな滝とちよつとした崖が見える。マチルダに聞いた話では川沿いをそのまま下つて森から出るらしい。

この傾斜と岩の多さを見るに、そうとう険しい道になることがわかった。動きやすい服を選んでよかつた、とアニーは胸をなでおろす。

「わたしは土のメイジだから、多少の地形ならどうとでもなる。大変だったら言つてくれ」

そう言つてマチルダは崖へ向かつて杖を振つた。すると、砂利の下に隠れていた土が小石を押し浮き上がり、みるみるうちになだらかな斜面が広がっていく。

「……すごいです」

「土のメイジなら、このくらい大したことないんだがね」

「わたしの世界に、こんな魔法はありませんでした」

砂利の敷かれた地面は相変わらず大変それでも、傾斜が緩やかなら苦勞せずに進めそうだった。

ぼーつとしている内に、マチルダが新たに生まれた道を歩き出す。アニーは駆け足でマチルダの背中を追つた。

川沿いに満ちた朝の空気の中を、砂利の音を立てて進んでいく。

アニーはマチルダの一步後ろを歩きながら、川の流れをじつと見つめていた。ときどきマチルダが立ち止まり、杖を振るって地形をなだらかにする際には、元来た道を振り返って川の水が流れてくる方角を睨む。マチルダは不思議に思いながらも、取るに足らないことだと口にするとはなかった。

「なあ」

「なんででしょう」

「その人とは、どういう関係なんだい？」

探している彼女を大切に思っていることは、マチルダにも十分に伝わってきた。

しかし、その彼女には公爵家の娘とメイドがいる。割り込む隙もないような、近い距離に見えた。アニーが彼女を思う姿を見て、マチルダは不安な気持ちにかられてしま

う。  
「……その人は、あまり体が良くないんです。ですから、幼いころからずっとわたしが診  
ていて……」

「それだけかい？」

「えーと、まあ……」

「仲はいいんだろう？ 幼なじみってところか」

「……義妹です。でも最近是好かれていないというか、もしかすると嫌われちゃったのかもって」

「そりゃあ、難儀なこったね」

一方通行か、とマチルダは複雑な表情をする。

「アニーをその彼女と会わせたところで、気持ちよく終わることはないだろう。けれど、主治医と患者のような関係なら、手伝わないわけにはいかない。マチルダ自身にも、その彼女に対しての借りがあった。」

「ティファニアさんは、異種族だったりするのでしょうか」

今度は自分が尋ねる番だ、とばかりに、アニーはマチルダへ疑問を投げかける。

「ハーフェルフ。向こうでは見ないかい？」

「……そうですね。エルフはもう絶滅したそうですから……長い耳と言うのは、初めて見ました」

「ふうん。まあ、こつちの人間でも見たことのある人間は少ないさ」

「ということは、種族間で敵対してるのでしょうか。だから、森のなかで暮らしている」と

「……ああ」

物分りがいい、とマチルダは感心する。向こうの世界でも同じような歴史があったの

か、それともアニーの頭の回転が早いのか。もしくは、その両方かもしれない。

「でしたら村のことは、きちんと黙っています」

「そうしてもらえると助かるよ」

そう頷き前へ向き直ったところで、マチルダの足が止まった。

どこから来たのか、進む先には年端もいかない少女が立っていた。

村の子どもだろうかと考えるも、マチルダは少女の長い栗色の髪と、身につけている安生地洋服に覚えがない。まだ街まで距離があるというのに、どうしてこんなところに人影があるのかわからなかった。それも、幼い子供ひとりきり。

距離があつて表情こそ見えないものの、少女はうつむいて悲しんでいるように見える。立ちつくしたまま動かないし、何かあつたのかもわからない。

近くで話を聞こうと、マチルダは少女の方へと駆け寄った。

マチルダを引きとめようとしたアニーの手が、空を切る。

「どうしたいんだい？ こんな森の深くに、ひとりで」

マチルダは膝に手をつけて身をかがめ、うつむく少女の顔を覗き込む。

「……あの、あの」

「わたしたちは別に怖い人じゃない。教えてごらん」

「わたし、ひとりで……ひとりで……」

「両親は？」

「いない……誰もいない……」

「離れて！」

マチルダは右腕を強く後ろに引かれて、砂利の上でたたらを踏む。見れば、腕を掴んでいたのはアニーの両手だった。

困惑しながらアニーの顔を見やる。しかし彼女は目を合わせることもなく、細腕に似合わぬ強い力でマチルダの腕を引っ張り、少女との距離を引き離れた。

「痛いって、どうしたんだい」

咎めるような言葉を無視し、アニーはその場で屈みこんで足元のトランクケースから赤色の手鏡を取り出す。すぐに立ち上がると、手鏡の鏡面を少女へ向けて突き出した。

マチルダはアニーの背中越しに少女の方を見る。しかし、そこに立っていたのは少女ではなく、少女の形をした黒い何かだった。

その何かは少女の声で苦しそうにうめき声を上げ、真つ黒に染まった両手で顔面を覆う。何事かと目を凝らしてみれば、黒い肌は樹木のような質感をしており、彼女は人間はおろか翼人やオークからもかけ離れた存在だと分かった。

「……いったい、どういうことだい」

「ただ、この手鏡で彼女をあるがままの姿に還しただけです」

「まさか、悪魔が化けていたとでも——」

「そのとおりです。あれは、悪魔」

尋常ならざる出来事に思わず漏らしたマチルダの冗談を、アニーは真剣な表情で肯定する。

「……わたしの、不始末です。わたしがこちらへ来た時に……」

「ああ……」

うめき続ける悪魔を、マチルダは呆然と眺めていた。トリステイン魔法学院から牢獄へ送られ、その直後に牢の中で見た黒い毛並みと赤い瞳。なるほど、あれはやはり悪魔だったのかと納得する。なんにせよ、この世の、この世界のものではないのだろう。

ただ、アニーの苦い顔を見れば、アニーがその悪魔と友好的な関係にはなく、意図せず連れて来てしまったことが分かる。

「わたしが始末します。マチルダさんは目を閉じて、耳をふさいでいて下さい」

「悪魔と言っても……害意はないみたいだけど」

牢獄で会った悪魔は恐ろしくはあったが、伝承で語られるような災いをもたらす存在だとは思えない。

今この場にいる悪魔は少女の輪郭をしており、声を漏らして悲しんでいるように見える。マチルダはアニーの「始末」という言葉に抵抗を覚えざるをえなかった。

「いいえ。いまは、真実の姿を暴かれて苦しんでいます。やがてふたたび子どもに化けて、わたしたちの間に、村の子どもたちの中に取り入ろうとするでしょう。」

わたしには、悪魔と対話する術がありません。だから……」

「……わかった。わたしにはわからない。アニーに任せるよ」

アニーのこれからしようとするのが、アニー自身の本意では無いことはその表情から十分に伝わっていた。マチルダはおとなしく引き下がり、後ろを向いてアニーと悪魔を視界から遠ざけた。

「アルラウネの声には催眠効果がありますから、悲鳴をまともに聴いてはいけません。精神がやられますから、視界になくともまぶたを閉じて、強く耳を抑えて下さい」

マチルダはアニーにしたがって目を閉じて耳をふさぐ。

しばらくその場でじっとしていると、少女の叫び声が耳をふさいだ手のひらから伝わってきた。くぐもった音では、どんな声音かも判然としない。だというのに、マチルダは感情をひどく揺さぶられるような感覚に陥った。

まるで、涙を流すティファニアを見守っているときのように、胸が張り裂けそうな気持ちになる。マチルダ自身、悲鳴が飛び交う戦場で盗みを働いたこともあった。その際にも、こんな思いに駆られることはなかった。

「マチルダさん」

アニーの手が、マチルダの肩に触れる。はつとして、マチルダは耳から手を離し、まぶたを開いた。

「……大丈夫、ですか？」

「あ、ああ……」

いつまでも聴こえているように感じていた悲鳴は、すでに止んでいた。あたりを見渡せば、そこにいたはずの悪魔の姿もない。

「アルラウネの催眠効果はもうありません。あとは、心を落ち着かせれば元に戻るはずですよ」

「……わかった。あんたは、大丈夫なのかい？」

「修道服も、肩書も、飾りではありませんから」

アニーは変わらず、泰然とした様子で黒いトランクケースを片手に歩き出す。修道服があの手鏡のようにマジックアイテムになっているのか、それともアニー自身に耐性があるのかは分からなかったが、ともかく問題はないらしい。

マチルダは沈んだ気持ちを押し殺して、アニーの後ろ姿を追った。



## 24話 『ラ・ロシエール』

朝靄の向こうから、グリフォンの大きな影が近づいてくる。

学院の正門まで辿りつくと、ばさ、ばさと翼を羽ばたかせ、周囲の芝を風で揺らしながら地面に着地した。

雄々しい鼻息を漏らすグリフォンの背から、ひとりの男が降りてくる。羽帽子と口ひげが印象的な、端正な顔立ちをした青年だった。

長髪と貴族のマントを揺らしながら、正門の横に佇むふたつの人影へ向かっていく。

「ワルドさま？　ワルドさまなのですね！」

「ルイズ！　元気にしていたかい？　相変わらずキミは綺麗だな」

「そんなこと……いいえ、ワルドさまこそ、凛々しいままでいらつしやいます」

ルイズの隣に立つシエスタは、不思議そうにふたりの様子を眺める。どういった関係なのだろうか、と首を傾げていると、驚くような言葉が飛び込んでくる。

「聞いたよ。たったひとりである『土くれのフーケ』を捕らえたんだってね。さすがは僕の婚約者、僕のルイズだ！」

シエスタはルイズに婚約者がいることに驚きを隠せず、思わず開いた口を両手で塞

ぐ。

アンリエッタから聞いた話によると、旅の同伴者はトリスティン魔法衛士隊に所属する名のある貴族の青年だという。とすると、グリフォンに乗って現れたワルドという男こそが、その彼に違いない。

「レディというなら、可愛らしいなんて言わないで。お恥ずかしいです」

「美しい、と言うべきだったか。すまないね。その細い体で頑張っているのが、たまらなく愛おしいのだよ」

「そんな……」

ルイズは頬を赤らめながら、微笑むワルドから顔を背ける。

魔法学院に入学して長い間会っていないはずなのに、ルイズが努力家なことを知っている。ワルドの言葉も、恋人に向けるものに近い。

婚約者という言葉に嘘はないのだろう。シエスタは複雑な気持ちのまま、ふたりの出立を見送った。

## 24話『ラ・ロシエール』

早朝の、まだ朝靄が晴れない時間帯。

されど、ラ・ロシエールは『港町』である。土地の住人は眠りの中にあつても、旅人や旅人らの出立を賑やかす行商人と船の船員たちが通りを行き交つており、町そのものはすつかり目を覚ましていた。

まばらな人通りの中、ローブに身を包んだアルレットとシエスタはゆつたりした歩幅で、散歩をするように景色を楽しみながら歩く。はじめこそアルレットは眠たそうな目をしていたが、土メイジの鍊金によつて生み出された石造りの町並みに圧倒されたようで、今では目を輝かせてあちこちに視線をやっていた。

辺境の村で育つたシエスタも町並みに興味を抱く気持ちは同じだったが、注意散漫になつているアルレットの面倒を見ることに終始してしまつている。そもそも、アルレットがいなければラ・ロシエールを訪れることもなかつたわけで、興味津々な様子 of アルレットを見ただけでシエスタは満足していた。

あの夜、アンリエッタがルイズにした『頼みごと』は、アルビオン王国の皇太子、ウエールズ・テューダーへある密書を届けること。密書の内容は、アンリエッタのしたためた恋文を返還してもらうというものだった。ルイズとアンリエッタは、もし恋文の存在がレコン・キスタ軍より公表されれば、ゲルマニアとの同盟関係が——などと小難しい政治の話を交わしていたものの、本来はただの召使いでしかないシエスタにとつては、まるでわからない話であつた。

ただ、アルビオンは現在、内乱状態にある。戦場へ出向く以上、自分が足手まといであり、同行してはいけない存在だということは理解している。

危険な任務であるとして、アンリエッタは魔法衛士隊の護衛を寄越したものの、その護衛にアルレットの魔法を見せびらかさないに越したことはない。密命であるために、メイドに使い魔の世話をさせながら、という旅行じみた行動も控えざるをえなかった。

護衛はアンリエッタが信頼する人物であり、単独任務そのものに慣れているということでルイズとしては心強く思っていた。

そこでルイズが提案したのが、ルイズと護衛、アルレットとシエスタに分かれての別行動である。

トリステイン魔法学院からラ・ロシエールまでの地図を確認したアルレットは、ルイズとワルドの出立の見送りから戻ったシエスタと共に、移動魔法で一足先にラ・ロシエール入りしていた。

「朝ごはんを食べられる食堂もあるみたいです。いわゆる、モーニングというものです  
ね」

「お腹すいたかも」

「なら、向こうの食堂にでも入ってゆつくりしましょうか」

シエスタは緑の看板を掲げた建物を指差す。店の入口あるスタンド型の黒板には、白

チヨークでメニューとその値段が書かれていた。

「わたし、トマトオムレットたべたい」

「わ…………たかい」

「そうなの？」

金銭感覚のないアルレットは、黒板に書かれたメニューの金額を見て首を傾げる。

「き、きつと…………だいじょうぶ…………なはず」

アルレットから『たべたい』のひとことを聞いたシエスタに、退くという選択肢はなかった。ルイズから旅費として渡された財布を取り出して、中身を確認する。

「…………たかいです、アルレットさま」

「…………そうなの」

「うん…………そうなの」

財布には平民のシエスタから見れば目がくらんでしまうような金額が詰められていた。とたんに財布の中身がずしりと重く感じて、手元が怪しくなってくる。硬貨のひとつひとつが鉛に錬金されたのではないかと思うほどだった。

ともあれ、アルレットが食べたいといったオムレットも十や二十頼んでも痛くないことがわかった。シエスタは諦めたような表情をしているアルレットに微笑みかけ、ぎこちない動きで財布を懐にしまう。

「なんと、大丈夫、みたいです」

「……たかいのに、平気なの？」

「はい。ルイズさまの財布を預かっていますから」

そう言つて、シエスタが店の扉を開けようとした時だった。

建物の横にある路地から、大柄の男が切羽詰まった様子で大通りへと飛び出してくる。その男は、驚いたまま固まっているシエスタの横を通り過ぎようとして、スタンドライ式の黒板につまづいてしまった。巨体はその場でよろめき、今にも倒れそうな様子でシエスタへと迫る。

「おお……とつとー」

男がたたたらを踏むのを、シエスタは思わず受け止めた。幸い、男は倒れることなくその場で立ち直り、苦笑いを浮かべてシエスタへと軽く頭を下げる。そして、「すまねえな！」と手を振りながら再び別の路地へと走って消えてしまった。

シエスタが男が消えていった方向を呆然と見つめていると、今度は先ほどの男よりもう一回り体格の大きい巨体が、同じ路地から顔を出した。

「おおい、嬢ちゃんたち。こつちにやたらと大きな男が走つてこなかったか？」

「あ……ええ、はい……」

「そうか！ なら、どつちへ行つたか分かるか？ あいつあ、最近やつかいな盗賊でさ

あ」

「はあ……向こうの、建物の横の路地を曲がって行きましたが……」

戸惑いながら応えるシエスタの言葉に、男は苦虫を噛み潰したような顔で大きく舌打ちをした。

「チツ！ 向こうじゃ、もう追えねえか。なあ、そいつとぶつかつたりはしてねえよな？

スリの達人だもんで、ありやあ、身体が触れたら盗まれたと思っくい」

「え？ あ——」

財布を確かめるようにローブの懷を抑えると、空になったポケットの感触にシエスタはみるみるうちに顔蒼白になっていく。

「どど、どうしましょう……ああ、ルイズさまに顔向けできません……こんな……」

「シエスタ……」

「……わたし、なんてこと……アルレットさまの食事も用意できない……こんなの、こんな……」

ぼろぼろと涙をこぼして泣き始めたシエスタに、男は優しい声音で語りかける。

「……なんだ、メシくらいならおごってやる。あんま、高い店は無理だな」

シエスタはその言葉を聞いて、顔を上げた。しかし、そこにあつたのは男の顔ではなく、アルレットの後ろ姿だった。

男とシエスタの間に割って入ったアルレットは、宝石のようなアメジスト色の瞳で、戸惑う男の顔を睨めつける。男は子どものやんちゃを許すような柔らかい態度で苦笑をするも、目尻はわずかに引きつっていた。

先に口を開いたのは、視線に耐え切れなくなった男のほうだった。

「いつたい、どうしたんだい？ 嬢ちゃん」

「共犯者」

「……は？」

「ひとりはスリを働いて、ひとりは弱っている人に付け込んで窃盗、誘拐」

男は怒りに表情を歪めて地面に唾を吐きかけ、アルレットの無表情を忌々しげに睨みつけた。

「……はん。どういう教育をしてるんだ？ あーやめやめ、なんつう失礼なガキだ！」

男の大声にシエスタは肩を驚かせる。男はシエスタに対しても鋭く睨みつけたかと思えば、あつさりと同を返し、通行人にぶつかりながら大通りを去っていった。

怒りを露わに声を荒げた大男と、目を腫らして泣いているシエスタという状況は、通行人の注目を大いに集めていた。

目立ってはいけけない、ということを理解していたアルレットは、シエスタの腕を引いてその場を去ろうとする。泣いているシエスタが衆目にさらされるのも忍びなかった。



「……ごめんなさい、アルレットさま」

財布を盗られた時には、ふたりとも戸惑って何もできなかったけれど。もう一人の男からは体を張って守ってくれた。おまけに、こうして手を引いてくれている。

シエスタはいつまでも泣いていられないと、ハンカチで涙を拭ってアルレットの横に並び立つ。

「ルイズは、怒らないよ?」

「……そうですよね」

シエスタはできるかぎりの明るい声色でアルレットの言葉に応えた。

ルイズが信頼して託してくれたお金だった。掠め取ってもわからないような形だったし、平民が手にすればそういう考えに至ってもおかしくはないことは、トリステインで育ったルイズならばよく知っているはずである。

お金とともに、信頼も受け取っている。託されたお金を紛失してしまったことは、シエスタにとって叱責を受ける、受けないの話ではなかった。けれど、そのことはアルレットにも瞳を通して伝わっていた。

ただ、アルレットの不器用な慰めで、シエスタの沈んだ気持ちもいくらか救われるのだった。



「本当に、地図が手に入ればどうにかなるのかい?」

早朝の、やっと朝靄が晴れてきた時間帯。ラ・ロシエールの大通りを、ローブの女性と修道服の少女という奇妙な組み合わせが歩く。

「はい。できれば正確な方がいいです。ここから目的地まで、ほとんど山も谷もなく行けるんですよね」

「そのはずさ。一度馬で往復したことがある」

「なら問題ありません」

移動魔法が便利なものだというのは分かっているけど、ここまでだとマチルダも考えていなかった。知らない場所にも飛べるといふなら、もしかすれば砂漠を超えて東方にも行けるかもしれない。東方のものを持ち帰って売りさばくことが出来れば……などと考えたところで、マチルダは首を横に振る。

今のマチルダに、危険を犯してまで大金を得る理由はなかった。ただ、フードで目元を隠して町を歩いていると、どうにも昔の癖が出てしまう。

「どうか、しました?」

「……いや、なんでもない。それより、そろそろ休もう。朝食もとっていないだろう」  
アルビオンの森を出てからラ・ロシエールまで移動魔法を使ったものの、森を出るまでにそれなりの距離を歩いている。アニーはまったく疲れた様子は見せないが、足の細さを見れば心配になるものだった。

移動魔法も大きく精神力を消耗するらしいし、無理をする必要もない。移動魔法のおかげで予定よりもずつとはやく目的地に到着するはずだから、ラ・ロシエールでゆっくりするのもいいかもしれないと、マチルダは考えていた。

「なら……あそこの、オムレツが食べたいです」

アニーは緑の看板が下げられた建物を指差す。スタンド型の黒板には、トマトオムレツの文字があった。

「……………」

そこには、盗賊業から足を洗った今のマチルダにとって渋りたくなるような金額が書かれていた。

アニーを横目で見れば、ずいぶん期待に籠った表情をしていた。マチルダは思わず財布を取り出し、中身を確認する。

……いけなくもない。代わりに、自分はコーヒー一杯で我慢することになるが。

そう考えて顔を上げたとき、マチルダの視界に突飛な光景が移った。

「おげっヒー！」

大男が、奇声を上げながら宙に待っていた。その下では、何やら苛立たしげな顔をしたら、アニーが男の服を掴んでいる。

つまるところ、アニーが男を投げていた。

地面に叩きつけられて、男はさらなる奇声を上げる。

マチルダは呆然とその光景を眺める。その細腕のどこにそんな力があるのか。いつそ物理法則を無視しているのではないかと思う。

注目を浴びているのは当然として、この状況に拍手をする通行人まで現れる始末だった。

そんな大技をやつてのけたにも関わらず、アニーは息のひとつも乱さずに男を見下ろした。

「……危ないですから、いきなり飛び出してこないでください」

「うっわあ……」

いつそゴミを見るような目とでも言うべきだろうか、アニーの目はそのくらい冷め切っていた。

「そこまでするかい……?」

「……財布」

「え？」

「取ろうとしてました、この人」

「……ああ」

それでこの通行人の態度か、とマチルダは納得する。「よくやった！」という声まで聞こえてきた。

「ふうん。あんた、スリ師かい」

「そ、そんなわけあるかいな！」

マチルダは地面に倒れ伏した男の前でしゃがみ込み、胸ぐらをつかみあげた。

「こそ泥風情がよくもこのわたしに、なあ」

マチルダが振り上げた拳が、男のみぞおちにめり込んだ。男は巨体に似合わない甲高いうめき声を上げながら、えびぞりで地面をのたうちまわる。

ふう、と息を吐いて、マチルダはローブに付いた砂を払いながら満足そうに立ち上がった。

「マチルダさんも、そこまでやりますか」

「わたしは舐められたままっていうのが一番気に食わないんだよ。一発くらいくれてやらないとね」

「でも、そうとう痛そうですね？」

「そういうアニーもこいつを投げたじゃないか。この石畳なんて硬いなんてもんじやないのに」

「……こほん」

アニーは頬を染めて、わざとらしく咳払いをした。どこに照れる要素があったのだろうか、とマチルダは苦笑する。

「ま、スツキリしたしオムレツをたらふく頂こうか」

「……ここでもいいんですか？ わたしは、別の場所でも……」

財布が苦しいのをすっかり見通されていたらしいものの、マチルダは涼しい顔で懐を叩いた。

「臨時収入さ」

「……目には目を、ですわね。わたしも好きです、それ」

まさかアニーに親近感を覚えるとは思ってもいなかった。案外、仲良くやっていけそうだな、と思ったが、ふたりが取った一連の行動はティファニアには絶対に見せられないと思いき直すのだった。

## 25話 『再会』

「これから、どうしましょうか……」

ふたりで路地裏を歩きながら、シエスタが沈んだ声で言う。明るく振る舞おうと思っても、上手く行かないものはしかたがなかった。

ルイズとワルドより早くラ・ロシエールに到着した分、任務の成功率を高めるためにアルビオンの情勢を調べあげる予定であった。恋文を返還してもらうのに、言い付かった猶予はアルビオン王室のあるニューカッスル城の陥落まで。今日一日は、酒場や書店を巡って調査に費やしても問題はない。

けれど、お金がないため酒場にも入店できなければ、食事を取ることもままならない。ルイズがラ・ロシエールに到着するのは夕方頃の予定らしい。このまま空腹を我慢しながらルイズが到着するまで町を練り歩くというのは、アルレットを引き連れているシエスタには考えられないことだった。

「……一度、学院に戻ろう？」

「でも、アルレットさま、それは……」

これから戦場へ赴くメイジにとって、精神力が無くては丸腰と同義である。移動魔法

に費やす精神力が、移動距離に比例することは聞かされていた。

ラ・ロシエールからトリステイン魔法学院まで、短時間で往復する負担はシエスタには想像できない。けれど、アルレットが有する精神力がそれほど多くないことは、シエスタの首元にある噛み跡が語っている。

「こつち来て、シエスタ」

「は、はい……」

腕を引かれて、裏路地を早足で行く。アルレットは薄暗く奥まったところで足を止めたかと思うと、建物の裏口らしい木の扉をためらいもなく開け放った。

そこには、明かりもなく埃っぽい石造りの部屋が広がっていた。樽や木箱が並べられているところを見ると、店の倉庫部屋なのだろう。

アルレットはシエスタの背中を押し込んで、木の扉をそつと閉じた。窓のない真つ暗な部屋の中、シエスタの耳元にささやく声が聴こえる。

「……ちようだい」

返事を待たず、アルレットはシエスタの首元に手を伸ばし、乱暴にリボンタイを解く。湿った空気に晒されたシエスタの首元に、アルレットの唾液に濡れた舌が這った。

「今日は、たくさんもらうから」

「……はい。好きなだけ、もらって下さい」



## 25話『再会』

太陽が登り朝の空気も晴れてきたころ、ルイズとワルドはごうごうと風を切つて飛びグリフォンの背にまたがって、『港町』のラ・ロシエールを目指していた。

ルイズがアンリエッタから言い付かった密命は、戦場を越えてアルビオン軍の将・ウエールズの元へ赴き、アンリエッタのしたためた密書を手渡すこと。生半可な覚悟で挑めば命を失いかねないし、覚悟を背負ったところで生きて帰れる保証もない。

アンリエッタやシエスタの前では平静を装つても、アルレットには緊張を見透かされているに違いない。昨夜、寝付けなかつたせいでルイズの目元にはうつすらと隈が浮かんでいる。

「驚いたよ。あの『土くれ』を下したルイズが、まだラインメイジだったなんてね」

ワルドの言葉に、ルイズは今日何度目かの作り笑いを浮かべた。

ルイズがワルドの背に掴まっている以上、ワルドにルイズの表情は何えないもの、そうでもしないと暗い声で相槌を打ってしまいそうだった。

久々の再会だからか、ワルドはルイズに対して饒舌に質問を続けた。実家のことから、学院の授業のこと、そして特にワルドが興味を示して尋ねたのが、ルイズの魔法の

ことである。それに対してルイズは学院長からの進言通り、目覚めたばかりの火と風のラインメイジでまだ自分の魔法に関して詳しくないと回答を濁した。

加えてワルドは会話のために、グリフォンに騎乗するふたりの周囲の音を遮断し、無風の空間を作り上げていた。風の抵抗を受けないことからグリフォンの乗り心地も改善されたものの、ワルドは魔法学院を出発してから魔法を使用し続けていることになる。

これから戦場へ赴くというのに、会話のために精神力の無駄遣いをしていいのだろうか、とルイズは不安に思う。ただでさえ初めての任務で、命がけと言ってもいい内容だというのに。

それほど自分のことを想ってくれていたのか、と考えるも、それにしても会話の内容が表面的な印象があった。帰省した実家で優しく話を聴いてくれる姉の姿よりも、どちらかといえば厳しい表情で学院の成績を報告させる母の姿が思い浮かんでくる。

——幼いころの憧れは、いったい何だったのだろう。

ワルドの背中で作り笑いを解くと、不安と緊張が溜息になって口から漏れた。

そんなルイズの様子を知らずに、ワルドは上機嫌なままルイズに質問を投げかける。

「それで、ルイズはどんな使い魔を召喚したんだい？ 今日連れてないみたいだが

……」

「それは……ちよつと風変わりで。姫殿下から聞き及んでいるとばかり、思っておりまして」

「ああ、アンリエッタ姫殿下からは昨晚に簡易の命令書を受け取っただけだからね。で、風変わりというのはいったい？」

「えつと……」

追求するように投げかけられたワルドの問いに、ルイズは言いよどむ。

素直に答えたとして、はたして信じてもらえるだろうか。メイジを使い魔にしたことは、ルイズの召喚の儀を見てきた同級生ですら、未だに半信半疑であるのが現状だった。「……あの、風変わりというのは、種族がわからないという意味で」

「ふむ……なるほど。今日、連れていけないということは、あまり足の速い生物ではないみたいだね」

「ええ、そうなのです。それに、グリフォンでの長旅をさせるには心配で」

「まだ幼いというところか。ふむ、未知の種族というが、ルイズの使い魔なら将来は期待できそうだね。」

もしかすると、既に絶滅したはずの韻竜だったりするかもしれない」

ルイズは誤魔化すように笑う。今朝からワルドに対する憧れは薄れていたものの、平然と嘘を吐けるほど蔑ろにできる存在ではなかった。

「……そうだ、ルイズ」

今まで明るい様子だったのが、ワルドは一段トーンを落としたような声音で背後のルイズに呼びかける。

「なんでしようか？ ワルドさま」

ルイズが返事をしてから、ワルドは考えこむように黙りこんでしまう。何事だろうか、とルイズは身構えながら、ワルドが口を開くのを待った。

やがてワルドは、不安定なグリフオンの上で危なげなくその場を振り返り、中腰の体勢のままルイズへ向き直った。

「僕のごとは、いまでも好いてくれているかい？」

「……それは」

許嫁と言っても、正式に取り付けたものではない、いわば口約束だった。

幼いころには、ルイズ自身もそれに悪い気はしていなかった。けれど、結婚を真剣に考えられる年齢になって、あの頃から環境や考え方が百八十度変わって……まだ、考え直したいという気持ちになっていた。

ワルドの問いに対する答えは決まっている。けれど、相手は幼い日の憧れだった男性。拒絶をして、このまま嫌われても構わないとは、どうしても思えない。

何か、なんでもいいからその場をごまかそうと、ルイズがワルドの顔を見上げたとき、

すでにワルドは前を向いてグリフォンの綱を引いていた。

「いや、いい。目を見れば分かる……そうか、やはりそうか」

「ワ、ワルドさま？ わたしはまだ答えておりません」

「ルイズ、きみは優しいな。けれど、これだけ会っていないかったんだ。気持ちが薄れていても仕方ないさ。」

だから、これから……これからは、もつと僕の傍にいてくれないか。そうして、気持ちの整理がついた日にはどうか僕を選んで欲しい」

真剣な声色を帯びたワルドの言葉に、ルイズは顔が熱くなるのを感じた。ほとんど異性に言い寄られたことのないルイズにとって、初めての経験だった。

魔法を失敗して叱られてばかりいた幼少のころ、ワルドの優しい声と大きな手のひらに励まされた記憶が蘇ってくる。思えば、その記憶は学院生活での心の支えだった。

恋愛についてはわからない。けれど、人を想っていたことはある。

姉のカトレアと、幼なじみのアンリエッタ。そして大きな暖かさで包んでくれる、許嫁のワルド。つい最近まで、そのたった3人を想っていた。

学院に入る前も、入った後も、何もかもうまくいかなかった。魔法の使えない貴族に、人は寄ってこない。ひとり苦しみながら杖を振るだけの日々を経て、向けられていた過去の優しさが、ますます尊いものへと変わっていった。

今のルイズの中でも、ワルドにもらった優しさは大切に抱きしめられている。

「ワルドさま、わたし……」

「いいんだ。急いで答えを出さなくても。今でなくとも、これから僕のものになってくれれば……」

ルイズは言いかけた口を閉じて、そのまま黙りこんだ。

「僕のもの」——その言葉に、ルイズは言いようの知れない違和感に襲われた。それは、ワルドの独りよがりな言葉のせいかもしれないし、すでにルイズの心を占める存在があつたからかもしれない。

ただ至極単純に、ルイズは今の自分がワルドのものになるところを想像できなかつた。

ワルドは、黙りこんだルイズに対して何を思ったのか、明るい声音で続ける。

「さて、ラ・ロシエールまでもう一息だ。まだ時間に余裕はある。せっかく訪れたんだから、少しくらいの観光も許されるだろう。どこへ行きたい？」

「……ええ。でも、わたしにラ・ロシエールの町はわかりません。ワルドさまに任せます」

「そうかそうか。レデイのエスコートをするのは僕の勤めだったね」

そう言つてワルドは小さく笑みをこぼした。その笑みに、ルイズはどこか寂しさを感じ

じていた。



シエスタは同じ轍は踏まぬという思いで、アルレットを引き連れながらラ・ロシエールの大通りを歩いていく。

例によって他人の財布を預かったために、重責を感じずにはいられなかった。人とすれ違うたびに緊張を強いられながら、懐に入った財布を両手で庇いつつ周囲に気を配る。初めの頃と違って、シエスタに町並みを眺める余裕はなかった。

あれから学院に戻り、アルレットがシエスタを連れて向かったのが、コルベールの部屋である。挨拶をしなればとしどろもどろになるシエスタを置き去りに、アルレットが落ち込んだ顔で金銭をねだると、コルベールは苦笑しながら「ふたりで楽しんできなさい」と財布をまるごとシエスタに手渡したのだった。

その姿がどことなく『姪っ子に小遣いを渡す叔父』のように見えたことについては、すでにシエスタの胸の奥にしまわれている。

「……たまごサンド、食べたいんですか？」

シエスタは手で財布をかばいながら、アルレットの視線を追う。ブラウンのペンキが塗られた看板の下、壁がけのメニューボードには『たまごサンド』の文字があった。

アルレットはいかにもという表情で、悩ましそうに黙っている。

「オムレットはやめて、あの店にしますか？」

「……あ」

自分の中で結論が出たようで、アルレットは店のメニューボードから視線を外して前を向く。

「やっぱり、オムレットが食べたい」

「そうですね、お預けでしたし」

アルレットは空いたお腹をさすって、ふう、と息を吐く。

財布を盗まれたのが飲食店を探していた最中のことだったために、ふたりの空腹はこ  
とさら進んでいた。

石造りの建物群は壮観でも、ラ・ロシエールは広いわけではない。元来た場所、緑の  
看板を掲げた店までたどり着くのに、ほとんど時間はかからなかった。

さつさと店の扉をくぐるシエスタの後を、アルレットは期待の表情で続く。

店内に入ると、気の良さそうな中年女性が、店奥の厨房から顔を出す。



「いらつしやい。空いてるから、席はお好きにどうぞ。旅人さん」

値段の高い店、ということとでシエスタは若干の緊張をしながら、女性に頭を下げた。客から頭を下げられたからか、女性はおかしそうな笑みを浮かべながら厨房へ下がっていく。シエスタは顔を上げると、座る席を選ぶために店内を見渡した。

空いているという言葉通り、客といえば修道服の女性とローブ姿の女性という奇妙なふたり組がいるくらいである。

それなら座る席はアルレットに決めてもらおうと後ろを振り返るも、そこには誰もいなかった。

「あ、あれ!？」

窃盗の次は、もしかして誘拐——という嫌な考えが浮かんだところで、アルレットの姿は簡単に見つかった。

店内にいた唯一の先客、修道服とローブのふたり組。アルレットはシエスタの元を離れて、そのふたり組と会話をしているようだった。

何かトラブルでも起きたら大変だと、シエスタは慌ててアルレットの元へ駆け寄る。そんな心配もよそに、アルレットと会話を交わしていたふたり組の表情は明るかつ

た。それよりも気にすべきことがある。

ふたり組のうち、ローブを身にまとった女性に対して、シエスタは驚愕のあまり呆け

た顔で尋ねた。

「……あの……もしかして、ミス・ロングビルですよね？」

「見れば分かるだろう。ただ、その名前を口に出されると困るんだけどね」

「も、申し訳ありません！」

「こちらから、余計に目立つ」

「この店、誰も入ってませんけどね」

マチルダの言葉に、修道服の女性がコーヒートを片手にすました表情でツツコミを入れる。

「そちらの方は？」

「旅の連れさ。いや、わたしの方が連れだったかね」

「……アニーといえます。アニー・オブ・アンジユ。あなたは？」

「アンジユ……」

シエスタはアニーの問いに答えることなく、呆然とする。それからはずと我に返り、慌てて言葉を返した。

「すみません！ わたしは、シエスタと申します、使用人をやっております」

「よろしく願います、シエスタさん。名前のとおり、わたしは挨拶もせずそこで縮こまっている彼女の義妹です」

「義妹……いい、いもうと……?」

「ええ」

シエスタは驚いて、テーブル脇に佇むのアルレットに視線をやる。どちらかといえば、アニーの方が姉に見えるのだが、それはアルレットの容姿が幼いせいだろう。うつむきがちに黙りこんで、ちらちらと横目でアニーの様子をうかがう様子も、どこか妹然としている。

「アルレット、わたしのとなりに座ってください」

アニーはうつむいたままのアルレットに声をかける。慣れたような指示の仕方だった。アルレットは不安げな表情で、アニーの横に座った。すこし肩をこわばらせながら、両手を膝の上に置く。

「無事でよかった。急に、いなくなったから……」

アニーの声は、はつきりと分かるほど震えていた。そしてアニーはそつと腕を伸ばして、アルレットのひざ上に置かれた手の甲に、自分の手のひらを重ねあわせる。

「心配しました」

「……ごめんなさい」

アルレットはなにか悪いことをしてしまった子どものような表情をして、気まずそうに目を伏せた。

「……あの、わたしも失礼してよろしいですか？」

「ああ、構わないよ」

微妙な空気感の中、シエスタはいそいそとマチルダのとなりの席に腰を下ろすのだった。

## 26話 『女神の杵Ⅰ』

何度目か、会話が途切れる。

トリスティン魔法学院からラ・ロシエールまでは、グリフオンと言えど半日を要する距離である。ルイズにとって物珍しい空の旅といえど、目的地に到着するまでに間、とくに何をする用事もない。時間は有り余っていた。

「ワルドさま」

「なんだい？ ルイズ」

「ついに魔法衛士隊の隊長にまで栄進なさったのですね。遅ればせながら、おめでとうございます」

「……ああ、ありがとう。とはいっても、何も変わらなかつたよ。一番上まで登りつめても……なにひとつとして……」

「ワルドさま……？」

ワルドはなにか考えごとをするように黙りこんでしまった。少しして、わずかにトーンを落とした声で言う。

「でも、君に祝ってもらえてよかった。もしかすれば、少しは頑張った甲斐があつたのか

もしれない」

26話『女神の杵Ⅰ』

微妙な空気感は、マチルダとシエスタが世間話の話題を振るなど払拭しようとするおかげで、ほとんど取り払われた。アルレットとアニーの間にはわずかな隔たりのようなものが残っているものの、初対面のアニーとシエスタも打ち解け、おおむね食事を楽しむことができた。

4人がトマトオムレツを食べ終わり、アルレットとシエスタは紅茶、アニーとマチルダはコーヒを片手に食休みを始める。そろそろ込み入った話をしてもいいだろうか、とシエスタはアニーに疑問を投げかけた。

「アニーさんも、こちらに召喚されてきたんですか？」

「はい。マチルダさんの妹に」

「なら、すごい偶然ですね。姉妹揃ってなんて……」

「偶然ではないですよ。わたし、アルレットを探しに来たんです」

「あ、そうなんですか」

そもそも召喚魔法とはどういうものなのだろう。魔法をよく知らないシエスタは、曖

味に相槌を打った。

メイジが使い魔を召喚することは知っているが、使い魔も自らの意志で召喚されることを望めるらしい。

「えと、それじゃあ、アルレットさまを元の世界に連れて帰るために来た、とか」

「それは……いいえ。今さら帰っても、仕方ないですから……」

アニーは不満を漏らすような口調で言う。シエスタに向けたわけではなく、アルレットに向けたわけでもない。言葉通り、「仕方ない」というような調子だった。

「彼女の体質は知っていますよね？」

「あ……はい」

今朝、噛まれたばかりの首元が痛む。アルレットの体質と言われて思い当たるのは、精力を与えてもらわないと生きていけないことだった。

「じゃあ、こちらに来る前はアニーさんが？」

「そういうことになります。以前はわたしがアンジュの城に通って」

「それでアニーさんは、アルレットさまが異世界に消えてしまって、心配だったんですね」

「はい……でも、良かったです」

人から精力をもらうには、なにより同意と相性が必要になる。同意があったとして

も、たとえば相性の悪いメイジに召喚された場合には、すぐに精力が足りなくなってしまう。相性が良くとも、同意がなければアルレットは諦めるだろう。

だから、生きていてよかった。

マチルダは話の内容がわかっていない様子だったが、アニーの安堵の表情を見て、満足気にコーヒーを飲んでいた。

しかしもうひとつ、シエスタの中に疑問が浮かび上がる。

元の世界にいた時は、アニーが精气を与えていた。なら、精力に困ることもなく、苦勞せずに生きていけるはずだった。だというのに、なぜアルレットはわざわざアニーと離れて、ハルケギニアに渡る危険を冒したのだろう。

「アルレットの顔色も悪くないですし、シエスタさんと相性が良いんですね」

「あ、いえ、わたしはメイジではないですし、ただの使用人というか……」

「わたしを召喚したのは、ルイズ」

「そうでしたか。ルイズ……ルイズという方なのです、覚ええました。お世話になってるのですからあとで挨拶をしましょう、アルレット」

「……むう」

シエスタは故郷のタルブ村での生活を思い出していた。自分も年の離れた妹に、こんな態度をとっていたような気もする。やっぱり、アニーは妹というよりも、年の離れた



姉かもしれない。

少しむつとした顔を出来るのも、その人に甘えているからだ。故郷で弟や妹の面倒を見てきたシエスタには、そんな甘え方も見慣れたものだった。

「そういえば、ヴァリエールの嬢ちゃんは一緒じゃないんだね」

「はい。ルイズさまとは、夜に『女神の杵』亭で合流する予定になっています」

「ふうん、あそこか。ひとまず、尋ね人がこんなに早く見つかってよかったよ。すごい偶然だね、これから魔法学院の方へ向かおうと思つてただけだよ」

マチルダがコーヒーカップを傾けながら、上機嫌に言う。

「ところであんたらは、ラ・ロシエールに用事でもあるのかい？ アルビオンは今ごろ内乱で観光どころじゃないし、ここらもだいぶ物騒だよ」

「えつと……」

どう答えたものか、とシエスタは言いよどむ。向かいに座るアルレットも同様に事情を話しているのか図りかねていた。信頼できる相手とはいえ、密命は密命。情報を漏らしてしまえばルイズの信頼にも関わってくる。

どうやら話が進まないらしいのを察して、助け舟を出すようにアニーが疑問を口にする。

「……内乱状態、なんですか？」

「ああ、あんたには話してなかったっけ。近ごろレコン・キスタなんていう戦争したがりの貴族連合が現れてね、内憂で不安定だったアルビオン王室を謀略にかけて内乱状態。保つて三日、そろそろ王室のあるニューカッスル城も落とされるころさ」

「……そうですか。この世界には、戦争があるのですね」

アニーは胸に手を当て、悲しげに目を伏せる。修道服の格好と相まって、その姿はまるで本物のシスターのようだとマチルダは思った。

「まるであんたの世界では戦争がなかったみたいな言い方だけど」

「ええ、そのとおりです。わたしとアルレットの居た世界には、人や国よりも恐ろしい存在がありました」

「戦争どころじゃなかった……ということは、災害などが多い地域だったのでしょうか？」

アルレットは元いた世界のことをあまり語りたがらない。シエスタにとって強く興味を惹かれる内容の話だった。

シエスタの質問にアニーは少し悩んでから、小さくうなずいて肯定する。

「たしかに災害と言えるかもしれませんが、正確には、悪魔と呼ばれるものです。軍隊などを国の外へ持ちだしても、他国へ侵攻する前に、悪魔の手に吞まれて壊滅するでしょう」

マチルダはラ・ロシエールまでの道のりで遭遇した悪魔を思い出していた。

たしか、アニーはアルラウネと呼んでいた。アルラウネの声には強い催眠効果があるらしく、彼女の指示に従って耳をふさいでいなければ、精神を蝕まれてまともではいられなくなっていただろう。

悪魔の一匹が悲鳴を上げただけで、声の届く範囲にいるすべての人間が行動不能になる。そんなものが蔓延る世界なら、たしかに戦争どころではない。あるいはそのおかげで、人と人が争うこともなく、手を取り合って生きていけるような世界なのかもしれない。

「ただ、ここはハルケギニアだ。元の世界に帰る気がないなら、戦争とも付き合っていくしかない。しかも目下にあるレコン・キスタとやらの目標は、『ハルケギニアの統一』と『聖地奪還』。どうやったって身近なところで血が流れる」

「……とても苦しいですが、受け入れなくてはならないのですね」

「とくにこの世界の貴族っていうのは兵士だからね。もしトリストインが戦火に巻き込まれれば、魔法学院の生徒ですら戦力として徴集するだろうし。たとえ逃げたとしても、ヴァリエールの嬢ちゃんほどのメイジなら王室は血眼になっても探しだして戦場へ送り出すさ」

生き残りたくば力を振るえ、と。国は貴族のためではなく、大多数の平民のためにあ

る。少数の貴族の犠牲で多くの平民が助かるのだから、個人の意志は徹底的に黙殺される。

「戦争、なんですよね……」

シエスタがぼつりとつぶやく。アンリエッタの密命は、戦場をこえてアルビオンの王子……つまり、レコン・キスタにとつての敵将に接触すること。この密命を受けた時点で、すでに戦争の渦中にあることになる。

今回の任務を除いても、ルイズがメイジである以上、切っても切り離せない。

「アルレット、シエスタさん。危ないことに巻き込まれているなら、どうぞ話してください。わたしはアルレットを助けるためにこの世界に來ましたから」

「アニー……でも」

アルレットはなにか言いたげな様子でアニーの顔を覗きこむ。心配そうに、相手を案ずるような目だった。それに対して、アニーは穏やかな表情で首を横に振り、アルレットの手を握った。

「……ごめんなさい」

「いいんです、アルレット。マチルダさん、そういうことなので、少しご迷惑をお掛けするかもしれませんが」

「いいや。あんたたちには返しきれない借りがあるからね、わたしも協力するよ。」

まあ、つもる話もあるだろう。ただ、このラ・ロシエールはアルビオン行きの船が停泊する港町になってるから、レコン・キスタの連中もそこらをほつつき歩いてるかもしれない」

だから話し合いは場所を移してからにしよう、マチルダは席を立つ。

入店したところから時間も経って、店内にもちらほらと客の姿が見え始めていた。

♪

風石を利用した『空飛ぶフネ』も、暗闇での航行は危険を伴う。

つまり、フネを走らせるのは明朝から夕方まで。日が落ちてしまえば仕事を終えた船員たちがラ・ロシエールの街並みにごった返す。この街の夜が騒がしいのは、酒場の賑わいがあるからだ。

酒場から漏れる橙色の明かりが、ルイズの不安げな横顔を照らす。喧騒が遠く聴こえた。

「不安かい？」

「……不安でないはずがありません。戦場なんて見たことありませんから」  
返ってきた素直な答えに、ワルドはふつと笑う。

「変わったね、ルイズ。昔のキミはあんなに負けず嫌いだったのに」

「え……そうでしょうか」

「ああ。ずいぶん柔らかくなった。まるでキミの姉——カトレアみたいだ」

「……それは」

「言葉遣いもあるだろう。しかし、中身がそっくりだよ」

頬が熱くなるのを感じた。メイジの落ちこぼれと言えど、公爵家の娘として生まれた。両親譲りの容姿を褒められることは多かった。貴族としての姿勢や努力を褒め称えられることも、少なくはなかった。

けれど……ここまで気持ち上がることは、一度もなかった。

それは、大好きな姉の名前が出たからかもしれない。思ってもいなかった。自分が、あんなに大きな暖かさを持った人に、似ているだなんて。

「……すまない。なんというか……彼女と比べるべきではなかったね。ルイズはルイズなのだから」

「いいえ、いいえ。わたし、とても嬉しくて。言葉を失ってしまいました」

「そうか、ならよかった。嫌われてしまったかと思ったよ。しかし、ルイズは本当にカト

レアのことが好きだったからね」

「……ええ、大好きです。でも、気付きませんでした。好きというのは、憧れの裏返しだったのですね」

誰かに似ていると言われて気持ちが悪くなるのは、それが憧れの人だからだ。

「ワルドさまは、本当にわたしのことが好きですか？」

ワルドの顔から、ふっと表情がかき消える。青みがかった瞳が街の明かりを反射していた。その色からは、何も読み取れない。

「……ああ。僕はキミにあこがれているんだ」

ラ・ロシエールの街はそう広くない。お目当ての宿、『女神の杵』亭にはすぐにとどり着いた。

一階は広々とした酒場兼食堂になっており、顔を赤くした貴族たちが談笑していた。しかし、あくまで貴族の利用する建物らしく、ラ・ロシエールの他の酒場よりいくらか落ち着いた感じがある。

すぐに宿の亭主が現れ、宿泊する部屋に案内される。2階の隅にある小ぢんまりとした一室だった。空き部屋はほとんどなかったらしい。

ただ貴族ご用達と言われる宿だけあって、調度品は小奇麗で、ベッドも上質なもの

だった。

「長旅で疲れただろう。今日は早く休んで、明日の明朝出立しよう」

「はい。それとワルドさま、ご存知でしょうか。ラ・ロシエールの方に、今回の密命に協力してくれる方がいらつしやると。姫殿下から、同じ『女神の杵』亭に泊まると聞いております」

「それは本当かい？ 聞いていなかったな」

訝る様子もなく、ワルドは肩をすくめた。

「不確定なことですから、姫殿下も簡易の封書には載せなかったのでしょうか」

「なるほど。なら、夕食の席で挨拶を交わそうか。顔はわかるのかい？」

「ええ、わたしの知り合いです」

「そうか。姫殿下も、顔見知りのほうが協力しやすいと判断したんだろうね。それにキミの初めての任務だ」

重大で過酷な任務だというのに、人員はすべて顔見知り。アンリエッタの配慮がはつきりと感じ取れた。

ルイズは今さらながらに、人に恵まれていることを実感する。自国の姫とスクエアアメイジの許嫁を味方につけて、さらには誰よりも強力な使い魔もいる。カトレアやシエスタのように心を支えてくれる人は、一見誰にでも務まるように見えて、決して替えが効



かない。

「お腹が空いてしまいました。もう夕食は準備されているのでしょうか？」

「分からないが下に降りてみるのもいいだろう。何もなくとも、酒瓶ならすぐに開けてくれるさ」

「ええ」

ワルドの後に続いて部屋を出て、一階に降りる。

面積としては学院の食堂の半分ほど。それでも酒場として利用する客と宿泊客、両方が押し寄せても、十分に収まる広さをしている。

今日は席の半分が客で埋まっている。これだとアルレットとシエスタを探すのも一苦労かもしれない、と考えたところで、こちらに手を振る女性の姿が見えた。

「……ミス・ロングビル？」

そして、その横にはタバサに似た青髪の女性と、向かいにアルレットとシエスタの姿が見える。

「あの席にいる女性たちかい？ 協力者というのは」

「あ……はい。そうなると思います」

ワルドを先置いて、ルイズは急ぎ足でテーブルに向かう。椅子はちょうど2席空けられていた。

「あの、ミス？ どうしてここに？」

「久しぶりじゃないか、ヴァリエールのお嬢ちゃん。あとあたしはただの平民なんだ、ミスなんてやめて、マチルダと呼んでおくれ」

「は、はあ」

ロングビルという名前は伏せたほうがいいのだろう、ということを観察したものの、どうしてここにしているのかが分からない。それと、マチルダの隣にいる青髪の女性も。

「はじめまして、お嬢さん方。僕はワルド。こんな場所だから詳しくは伏せるが、風のスクエアだ」

「どーもご丁寧に。堅苦しいのは嫌いだ。とりあえずそこに座って酒でもどうだい、好青年」

「っはは、剛毅な女性も嫌いじゃない。ではお言葉に甘えて、そのワインを頂こうかな」  
そう言ってワルドは金貨を5枚ほどマチルダの手前に積み上げ、音を立てながら荒っぽく椅子に座る。ルイズもそれに習って、萎縮しながらもいそいそと席についた。

「いいね。わたしも嫌いじゃないよ、そういう金払いのいい男はさ」

マチルダは金貨を懐に取めると、グラスのワインを一気に煽った。

そして空になったグラスとテーブル端に積み重ねられた新しいグラスの2つを並べると、それぞれにワインを注ぐ。

「さて、名乗ってもらったことだしこちらも簡単に自己紹介しようか」

マチルダはワインの注がれたグラスをワルドに差し出す。

「ああ、よろしく」

そう言ってワルドは受け取ったグラスを低く掲げ、乾杯のポーズを取った。

## 27話『女神の杵Ⅱ』

深夜に差し掛かろうかという時間帯、ラ・ロシエールは夜とともに静けさを深めていく。船に携わるものは皆明朝の出港に備えて就寝してしまった。

残るのは、怪しげなごろつき集団ばかりである。

ラ・ロシエールの街の隅、裏路地の入り口にひっそりと佇む酒場『金の酒樽』亭には、そういった輩がよくあつまる。平民から位の低いメイジまで。大抵が懐に危ないものを隠し持っており、流血沙汰も少なくはない。

そんな酒場に、ひとりの貴族の男が足を踏み入れる。仮面を被っており素顔は伺えない。ただ、その小綺麗な服装に酒場のごろつきたちは金の匂いを嗅ぎつけて、息を潜めて様子をうかがう。

仮面を被った貴族の男——ワールドが酒場の中央テーブルの、最も人が集まっている場所へどうどうと割って入る。そして、じゃらじゃらと金属音と立てる布袋を、テーブルの真ん中に放り投げた。

「依頼だ」

無感情な声で一言言い放つと、テーブルを囲う者たちが沸いた。

## 27話『女神の杵Ⅱ』

ルイズはベッドで横になるワルドの目を盗んで、音を立てないようこつそりと部屋を出る。廊下の突き当りをまっすぐ突き進んで、一番奥の、もつとも大きな部屋の前で立ち止まり、控えめにノックをした。

一呼吸おいて待つと、蝶番がきいと音を立てながら扉がひとりでに開く。ルイズは半開きの扉に滑り込んだ。

小さな照明がうすい橙色を放って、部屋の中を薄明るく照らしていた。ベッドが6つ並んでおり広さも上々。最上級の部屋らしく、調度品はヴァリエールの屋敷にあるものとほとんど変わらない豪華なものばかりだった。

人影は、ふたつ。奥にあるひとつのベッドの上で、折り重なっていた。部屋の扉を開けたらしい人物は見当たらない。どうやらあの場所から魔法を使ったらしい。

ベッドに近づくと、それがどういう状況かすぐに分かった。

話しかけても仕方がない。ドレッサーの椅子に座って、それが終わるまで待つことにした。

やがて折り重なっていた人影が離れて、ルイズに声をかけた。

「おまたせしてすみません」

「いいえ……こつちこそ邪魔だったみたい。わたし、必要なかったわね」

ルイズはアルレットに精力を与えるために部屋を訪ねた。相性の合わないシエスタからもう半分では足りず、今ごろ腹をすかせたペットのように落ち着きなく自分を待っているだろうと、そう考えていた。

しかし、実際に訪ねてみれば……アニーがすでにそれを行っている最中だった。

そして満足したらしいアルレットは、ベッドで気持ちよさそうに眠ってしまったている。言ってしまうと、ルイズは用済みだった。

ワルドに訝しまれる前に、すぐに部屋に戻ったほうがいいかもしれない。けれど、アルレットの妹と名乗る彼女、アニーと話してみたいという気持ちがあった。

「いいえ。わたしがいない間、アルレットの面倒を見てくれてありがとうございます」

「あ……うん。あなたがいままでこうして血を与えていたのよね」

「はい。生まれてからずっと」

「……そっか。大変ね、あなたも。この子、けっこう容赦ないでしょ」

ふつつつと湧き上がってくる、嫉妬のようなもやもやとした気持ちを振り払うように、つとめて明るい表情を作った。

「わたしの役目ですから、苦しいと思ったことはありません。でも……」

「でもっ？」

「でも、わたしが苦しいと感じていなくても、彼女のほうが心苦しく思っているかもしれない」

それは嘘だ。アルレットの瞳は人の心を見通す。アニーがその役目を心から受け入れているなら、アルレットが心苦しく思うことはない。

それも、生まれた頃からの付き合いというアニーが知らないはずがなかった。

「人って、あくまでも理性的な生物なんです。その場の心地良さに流されることもありますが、どんなに熱に浮かされていても、かならず冷める時が来る。そうしてすぐに後悔や不安感に襲われるんです。次にはその後悔や不安感を恐れて、幸福と不幸の勘定をし始める」

「難しいわ。意味は、なんとなく分かるのだけど」

「たとえば、ルイズさんとアルレットが相思相愛で、気持ちを通じあつて……恋仲になりたりして」

「……え？」

唐突な例えに、どきりとさせられる。

「きつと、とても素敵です。深い、深い愛を、生涯に築きあげるでしょう。お互いの気持ちに後悔はありません。すべてをその愛に捧げられるのですから。やがて幸せな生涯

だったと大往生を迎えられるはずです」

「……そういうことも、あるかもしれないけど」

ルイズは目をそらして気恥ずかしげに答える。ただ、言葉の意図がつかめない。

「そんな幸せな選択を、しない場合だつてあるんじゃないでしょうか。理性的な頭で、未来の幸福と不幸の勘定をして……」

「勘定……」

「はい、すべて勘定なのです。公爵家の娘が、偉大なメイジとなったあなたが、同姓への愛を公にする不幸を。女性としての幸せを得られずに生涯を終えてしまう不幸を。子を成せないという取り返しのできない不幸を。すべて埋めきれぬ幸福が、そこにはなければなりません。」

たとえあなたが心の奥底から望んでいたことだとしても。そんなあなたの気持ちを知ることができたとしても、未来を知ることができません。あなたを想えばこそ、できない選択があると思うのです。彼女があなたを想っていて、あなたが彼女を想っていて……あなたがワルドという男性と結ばれる幸せを願うことは、おかしいことではありません」

こほん、とひとつ咳払いをする。

「失礼しました。ただの例え話ですから、気にしないでください」



「それにしてはなんだかずいぶん具体的」

ルイズは不満気のため息をついた。

まるでアルレットと話している時のように。どこか見透かされているような気がする。容姿こそ似ていないものの、やはり姉妹なのだろう。

「わたしより小さいですけど、わたしの姉なんです。彼女は、妹のわたしの役目を憂いて……心苦しく思っ、ご存知のとおり、わたしの目の前から消えてこのハルケギニアに来ました。わたしがこの役目を受け入れたのにもかかわらず、です。いきなりだったから、嫌われたかと思っ、ごく落ち込みましたけど……わたしの幸せを願っ、とだと、今日、きちんと教えてくれました」

忠告、なのだろうか。ルイズが今の関係を望んで受け入れていても、それがなにかの障害になるなら、また姿を消すかもしれない。

あまり気持ちのいい話ではなかった。なにより、今のルイズには思い当たることがある。

ルイズが魔法を使えば使うほどアルレットの精力が足りなくなる。だからルイズは、喉から手が出るほど欲しがった魔法でも、使用を避けるようになるかもしれない。この精力はアルレットの分なのだから、と。

そうなれば、たとえルイズが納得して、それでもいいからそばに居て欲しいと、心

の奥底から願っていたとしても……アルレットはルイズのために、身を引くに違いない。

「でもアルレットがこの世界に来た理由は、他にもあるんでしょう？」

ただ精力を求めることが心苦しくなっただけなら、わざわざハルケギニアを訪れるのもおかしい話に思える。対象がアニーからルイズに変わっただけで、なんの解決にもなっていない。

「……そうですね。やはり話してはいないのですか」

「あまり話したが見えないみたいだから」

アニーは窓の外を見やった。宵闇の空に、双子の月が吊るされて輝いている。

「今、シエスタさんとマチルダさんには席を外してもらっているのですが……そうですね、彼女たちが帰ってくるまで、簡単にですがお話しします」



暗い廊下を歩き、こつそりと部屋の扉を開く。部屋を出る際には無かった橙色の明か

りが、足元にこぼれた。

ワルドが文机のランプを灯して本を開いているようだった。どうやら眠っていなかったらしい。

「おかえり、ルイズ。こんな時間に、どこへ行っていたんだい？」

「……え、えっと、その……」

「あの娘たちのところかい？」

隠し事が見つかってしまった、としどろもどろになるルイズとは対照的に、ワルドは微笑みながら言う。

「知り合いなら、女性同士で話したいことがあつて当然だろう。気が利かなかつたね」

「あ……いえ、黙っていて、申し訳ありません……」

ワルドは席を立ち、優しい顔を浮かべてルイズの元まで歩く。そして、ルイズの肩口にぼんと手を置いた。

「それより、明日は早い。ゆっくり休んでおくれ。小さなルイズ」

「はい……おやすみなさい、ワルドさま」

「ああ、おやすみ、ルイズ」

ルイズがベッドに潜り込んだのを見届けてから、ワルドは指を鳴らしてランプの灯りを消す。そしてワルド自身も隣のベッドに潜り込み、ルイズに背を向けて横になった。

しばらくすると、寢息が聞こえてきた。

厚い毛布にくるまって暗闇を見つめる。身体は疲れているはずなのに、目が冴えて眠れなかった。いつまで経ってもまぶたが重くなってくれない。

アニーから語られた話の内容が、頭の内側にこべりついている。

どうしてアルレットが、ハルケギニアを訪れたのか。理由はひとつじゃない。いろんな問題が重なりあつて、この結果が導き出されている。

ハルケギニアしか知らないルイズでは、決して知ることのできなかったことが大きく関わっている。それはアルレットの居た世界のこと。

ルイズの曖昧な認識では、たいして複雑な印象は抱いていなかった。アルレットの世界には魔族という存在があつて、それはハルケギニアというエルフや亜人のようなもの。その魔族を統べる王があつて、それが自称魔王のアルレット。魔王はゲヘナと呼ばれる魔族の大陸に君臨していたらしい。

最近知ったことが、アルレットがアンジュという国の姫君だったこと。アンジュがゲヘナの大陸にあるかは知らない。細かいことは置いておいて、一国の姫君であつたアルレットが、その特異な瞳と能力を以つて悪魔を統べ、ゲヘナの王を名乗つていた、というのがルイズの認識で、ルイズが見ていたアルレットという人物の背景だった。

そして今日知つたのが、ゲヘナという大陸が減びているということ。

海に浮かぶ巨大な大陸が、まるごとひとつ。永遠に明けない夜に吞まれ、荒廃した大地には二度と草木が芽吹くことはない。すべての生命が息絶えた。あるのは、はてなく広がる闇だけ。

晴れた日のアンジュの港からは、その光景がうつすらと伺えるという。まるで雲間から垂らされた黒いシミが、水平線のある一箇所に垂れているような、おぞましい景色。黒いシミが垂らされた場所こそが、ゲヘナの大陸であり、悪魔の手によって滅ぼされた地であるという。

その、退廃の最果てにある大陸で、王を名乗り、誇らしげに胸を張っていたアルレット。

いつか、彼女が話していたことを思い出す。

魔王を名乗っていないながら、こんなハルケギニアの辺境において大丈夫なのだろうか、と、何気なしに浮かんだ素朴な疑問を口にした。

——ところであなた、魔王なのにこんなところにおいて大丈夫なの？

アルレットはこともなげに答えた。

——もう全部、終わったこと。ひとつの大陸を犠牲にして、人間は魔族から逃げ延びた。魔族もまた、安寧の地を手に入れた。

その時は、ふたりにチェスをしていた。

試合の結果はルイズの惨敗だった。黒の駒を指揮するアルレットは、白の駒をすべて追い出し、盤上を黒で埋めた。

はつきりと分かれた白と黒。それは人間と魔族を意味していた。

戦いは終末を迎え、世界から白と黒の駒が入り交じる戦場が消え失せる。魔族は盤上の争いに勝利し、安寧の地を得た。人間は盤上の争いに敗北したものの、魔族の手から完全に逃れ得た。アルレットはそう言っていた。

黒の駒を指揮するアルレットこそが、魔族の王だった。

魔族を率いてひとつの大陸を退廃の最果てへ導いた。そして魔族の大陸を築き上げ、廃墟の城で玉座に腰を下ろす。その王は、悪だろうか。はたして何色の駒だろうか。

人々を魔族の手から救った彼女は、少なくとも悪ではないし、魔族を率いて大陸を滅ぼしたのだから、間違いなく白の駒ではない。

悪でなくとも、白の駒でないなら……彼女が魔族と同じ、黒の駒であるなら。白の駒と同じ場所に立つことは許されない。

彼女の居場所は、そこにしかない。そして、彼女は誰かに精力を分け与えてもらえないければ生きていけない。

退廃の最果てにある大陸の、廃墟の城。その王室に住まう姉妹が、アルレットとアニーだった。

その世界には、ただふたりを除いて、生命という生命が存在を許されない。魔族は渦巻く闇であつて命ではない。そんな場所でアルレットに血を捧ぎ、終えてしまう生涯を、アニーは認めていたという。

いくらアニーがその運命を納得して受け入れていたとしても、姉のアルレットは認めないだろう。だからアルレットはルイズの召喚に応え、廃墟の城から姿を消し、そこにアニーがいる理由を奪つた。アルレットがハルケギニアへ渡ることは、定められていたことなのかもしれない、とルイズは思う。

もう自分に縛られることなく、アンジュの国で平和に暮らして欲しいと、アルレットは妹の幸せを願つた。ルイズとアルレットの出会い、その結果だつた。

戦いの果てにあるものは、深く想い合っている姉妹の袂すらもたやすく分かつ。

ルイズにはそれが恐ろしくて仕方なかつた。学院で平穏に日々を過ごしているだけなら、きっとふたりにその時は来ない。ただ、ルイズが魔法の力を求めてアルレットの精力を受け取つた時から、その平穏が不確かで不安定なものへと変わつていったことに、気付いてしまった。

結局、その日の夜はほとんど寝付けなかつた。

アルレットについて知つたこと。それまで何も知らずに接していたこと。驚愕や呆

然というより、後悔や後ろめたさだった。

それに加えて、胸にくすぶる不安や焦燥感のようなものが、眠れない意識を追い立てる。

例えば、アルレットに教わった魔法を吸収して、可能なすべてを自分のものにできたなら——もう、アルレットがルイズのそばにいる理由はなくなる。それどころか、ルイズの精力を奪うことは、魔法の邪魔立てにしかない。

アルレットがルイズの精力を奪うことによつて、ルイズは魔法を満足に扱うことができなくなつてしまうのだから。

清廉な矜持を胸に携え、貴族として杖を振り、国を導く。

幼いころから望み続けていた、心の奥底からの願い。アルレットはルイズの目を通して、それを知つてしまつてゐる。

ルイズの幸福を願うなら、アルレットはルイズのそばを離れるに違いない。今のハルケギニアには、ルイズの他に、深く想い合つた妹がいるのだから……それはアルレットにとつての幸福にも繋がる。

ベッドの上で何度も寝返りを打ちながら、数時間にわたつてその焦燥に胸を焼かれつづけた。

空が白み始める前。もつとも夜の深まる時間になつてようやく、疲れた心が意識を手



放しはじめ、うつらうつらと眠りの淵に足を踏み入れたときだった。

野太い怒号が聴こえた。窓の外に赤みを帯びた明かりが浮き上がる。そして——硝煙の匂い。

……戦場の空気がそこにあつた。ルイズが毛布を退けて飛び起きたと同時に、地鳴りのような衝撃音が建物全体に響き渡る。

横を見れば、ワルドが既にマントを羽織つて、腰に剣型の杖を下げていた。

「ワ、ワルドさまー！」

「ルイズ、静かに。僕は向こうの部屋で眠っている彼女たちを呼んでくる。それまでに支度をするんだ。場合によっては、すぐにこの街を出なければならぬ」

「——はい」

ルイズの返事にうなずいて、ワルドは部屋を飛び出す。言葉とは裏腹に切迫した様子を見せず、平時のように落ち着きを払った様子だった。

そんなワルドを見て、ルイズは焦りや不安を出来る限り抑えこみながら、急いで衣服を着替え始めた。

## 28話『戦場と脱出』

『女神の杵』亭は不気味な静寂に包まれていた。

数分前に聴こえた怒号や地響きの気配はすでに鳴りを潜めている。窓枠の向こうに見えた赤みを帯びた明かりも、いつのまにか消えてしまっていた。

ワルドに集められたルイズ一行は、『女神の杵』亭2階の階段踊り場に集まり、1階の様子を伺っていた。

階段の手前で身をかがめているワルドは、音に敏感な風のメイジである。特有の感覚を頼りに可能な限り音の情報を拾い上げ、『女神の杵』亭周辺の状況把握に努めていた。

「……どうやら、この建物自体が盗賊の集団に囲まれてしまっているようだな」

「おいおい、ずいぶんと大胆じゃないか」

壁にもたれて腕組みをしたマチルダが苦笑を漏らす。

『女神の杵』亭は貴族ご用達の宿であるため、就寝時間にもなれば無防備な金持ちがこの一箇所に集まっているようなものである。長年盗賊として活動していたマチルダには、この宿を狙う理由は十分に理解できた。

だが、相手は貴族……つまりはメイジ。懐に抱えた金額は大きいが、その能力は強大。

ハイリスク・ハイリターンといえるが、天秤が釣り合っていない。リスクのほうが遥かに重いことは、メイジであり盗賊でもあったマチルダにとつて身にしみているところだった。

「よほど腕に自信があるんだろう。メイジが仲間についている可能性が高い」

「そりやまたずいぶんと厄介なこと。しつかし、ついてないねえあんたたち。こんなこと、めつたにあるもんじゃないよ」

「……他人事のように言うが、マチルダ、キミにも戦ってもらいたい。この人数を僕ひとりで守り切るのは少々骨が折れそうなんでね。身のこなしを見るかぎり、場馴れしているのはキミとアニーくんくらいなものだ」

ワルドが上げたふたりを除くとこの場にいる人間は、緊張と不安で気がそぞろになっているルイズ、寝ぼけた様子のアルレットと、その肩を支えているシエスタである。

「わたしの依頼主はあんたじゃなくて、そこで寝ぼけ眼をこすつてるお嬢さんだ。あんたの婚約者を守る目的なら別途料金になる」

「……こんな状況下で報酬を要求するなんて、やはり変わってるな」

ワルドは緊迫した表情を緩めて、口元に笑みを浮かべた。

「気に障ったかい？」

「いいや、分かりやすくして好ましい。ますます気に入ったよ」

「そうかい、光栄だね。で、いくら払ってくれる？」

「昨晚渡したワイン代の20倍を払おう。ところで、得意な属性とクラスは？」

「土のトライアングル」

「なら、キミには裏口の方を一任する。屋内と表口は地形が狭いから、僕のほうが適任だろう」

「了解。ま、仕事しましょうかね」

不敵な笑みを浮かべて、マチルダは使い古した杖を手に握った。

## 28話『戦場と脱出』

1階の入り口にある両扉が開け放たれていた。

武器が向けられている。暗がりの中で、月明かりを反射した矢の切っ先が無数に浮かび上がる。

気を抜けばその瞬間に絶命してもおかしくない。分かっていたことでも、目前にすると心臓が跳ね上がった。

2階の階段を降りたのは、ルイズとワルドのふたりだけ。他の4人は客室の窓から『女神の杵』亭の外へ出た。

作戦はこうだった。ワルドがルイズをかばいながら時間を稼ぎ、マチルダらが裏口を囲っている盗賊たちを排除する。裏口から続く道がひらけたら、そこから盗賊たちを振りきって全員で港を目指し、船長に頼み込んでアルビオンへの急ぎの便を出してもらう。

この街のどこに盗賊が潜んでいるかわからない以上、ラ・ロシエールを出るために最速で最善の方法を取る必要があった。

ごくり、と唾を飲みこんで、息を吐く。

そしてほんの数瞬後、暗闇の中、風切り音と共に銀のやじりが飛来する。狙いは定められていない。しかし、数は数十を数えるほどだった。

細い切っ先も集まれば面になる。盗賊たちが仕掛けてきたのは、避けることの叶わない攻撃だった。なら、それを迎え撃つ他にない——杖を取る以外に、生き残る道はない。ワルドが剣状の杖をひとふりした。

詠唱を行う時間はない。ルイズもワルドに倣って、ありつたけの精神力を込めて杖を振るう。

その瞬間、大気が震えて、ふたつの風が空間を切り裂いた。

ルイズとワルドがそれぞれ放ったエア・ハンマーの魔法は、馴染むように混ざり合い、やがてひとつの風になる。弓の攻撃による風切り音よりも、遙かに大きく、猛々しい音。

巨人の拳が振り下ろされたような、ごうと唸る一撃だった。

酒場として使用されていた『女神の杵』亭の、机や椅子、カウンタ―に酒樽と酒瓶、ガラスの照明に皿や食器が、風に吞まれていく。まるで屋内に小さなハリケーンが訪れたような有様だった。

そして、ふたりが杖を振るった先……盗賊たちの元へ襲いかかり、その身体を大きく弾き飛ばす。

……風が収まった後、矢を射つたものは、誰一人としてそこに立っていないかった。

「これほどとは……ルイズ、キミはやはり素晴らしい」

ワルドがルイズの方を振り向いて、感嘆の声を漏らす。暗がりの中でワルドの目がきらりと光ったように見えた。

「ワルドさま——！」

ルイズは叫んで杖を振りぬいた。

盗賊の放った火矢が空間に赤い光を走らせて、ワルドの後方から迫っていた。数にして5つ。それをワルドは身をかがめて避け、ルイズの放ったエア・ハンマーがすべて墜する。

「おっと、油断したよ」

見れば、盗賊の数は半数に減っていた。しかし、背後の暗闇から同じだけの数の盗賊

が姿を現す。

火矢を携えた弓を引いて。

それを確認した瞬間に、火矢の第二波は放たれていた。ルイズの魔法は間に合わない。

ルイズは両腕で顔面をかばうようにして来るべき攻撃に備える。しかし、それは身を起こしたワルドの剣技によって防がれた。

安堵、その数瞬後。

「つつ——」

ルイズが思わず悲鳴を漏らす。

地面に叩き落とされた火矢が、火柱を上げて燃え上がっていた。熱い。庇うように手前に差し出した右手が焼けるような痛みさらされる。

風の魔法によつてめちやくちやにされた屋内は、燃やすのに手頃な薪が散らばっているようなものだった。しかし、ただ木片に火が移つたにしては激しすぎる燃え方。考えられるのは魔法しかない。

「まさか、火のメイジがいるって言うの？」

「いいや、おそらく油の錬金だ。まずいな……この数的不利で、なおかつメイジが敵となると防戦一方だ」

ワルドは苦虫を噛み潰したような表情で杖を振る。再び飛来した火矢が風に煽られて墜落し、傍で燃え上がる炎に吞まれて灰になった。

炎が明かりになって周囲を見渡せるようになっていたものの、それ以上に危機を感じさせる状況にある。敵の規模が見えないことと、燃え広がりつつある火事が不安を煽り立てていた。

「ワルドさま、下がってください」

魔法を発動する気配を感じ取って、ワルドは無言でルイズの後ろに下がる。

ルイズが杖を振り下ろすと、炎の熱を押し切ってひんやりとした空気が周囲に満ち始めた。そして、どこからともなく現れた水のかたまりが、燃え上がる炎に降り注いだ。

残ったのは黒々とした炭の山と、濡れた床。炎が消えて薄暗さが戻ってくる。

目的は、全員で港を目指すこと。そのためにマチルダらが裏口で戦っている。表に立つ自分たちがすべきことは時間稼いだ。

練習以外でこうして魔法を扱ったのは二度目になるものの、十分な手応えを感じていた。これならワルドの隣に立つても恥ずかしくない働きができる。芽生え始めた自信とともに、ルイズは再び杖を振るった。





『女神の杵』亭の裏口を出ると、拓けた小さな丘が広がっており、その向こう側には巨大な世界樹の枯れ木が屹立している。

その世界樹の枯れ木こそ、ラ・ロシエールの誇る空の港である。

「依頼主曰く、ここいつらは殺して欲しいそうだ」

声のする方には、武器を携えた盗賊の群れ。ワルドの言葉通り、港へ続く道は盗賊たちによって阻まれているようだった。

群れの先頭には、仮面で素顔を隠した男が佇んでいる。マントと腰に携えた杖から、メイジであることは明らかだった。

マチルダは内心で舌打ちをする。思った以上にやっかいかもしれない。

いつ攻撃が来ても守れるようにと、マチルダとアニーのふたりは、アルレットとシエスタをかばうように一歩前に出た。

「子どもとは言えメイジだ、油断も容赦もいらない」

仮面の男が口にして、杖を構えた。それに倣って盗賊たちが一斉に広がりだし、暗闇の中でまばらにうごめきはじめる。

不気味な静寂が支配する場に、一本の矢が飛来した。

それが彼らの合図だった。多勢に無勢ともいえる状況で、仮面の男の宣言通り、油断も容赦もない一斉攻撃が始まった。

四方から放たれた無数の矢とともに、仮面の男によるエア・ハンマーが襲いかかる。

マチルダの反応は素早かった。杖を振り、予め用意していた錬金の魔法を発動させる。雑草の生えた地面が隆起し、土が塊を形成し始めたかと思うと、マチルダらを中心に囲い込む防御壁が出現した。

矢の雨は鈍い音をかき鳴らしながら土塊の防御壁に突き刺さり、厚い守りを貫くことはできない。

しかしそれは、猛々しい風の鉄槌によつていともたやすく瓦解させられた。仮面の男が放ったエア・ハンマーの直撃だった。

仮面の男は杖を振るだけの僅かな動作で、即席とはいえ土のトライアングルが錬金した防御壁を打ち破った。ドットやラインクラスのメイジが扱える威力ではない。最低でもトライアングル、スクエアメイジの可能性だってある。

マチルダは眉をひそめた。いくらなんでも無茶苦茶だ。これほどの才覚を持つメイジが、盗賊なんて卑しい立場にいるなんて。

崩壊した土塊が土砂崩れのようにマチルダらの頭上に降り注ぐ。臨戦態勢あったア

ニーも、手をこまねいているばかりではなかった。

アニーの振った杖の先から白い光がほとぼしる。その光は瞬く間にラ・ロシエールの暗闇を白色に塗りつぶし、降り注ぐ大量の土塊のすべても飲み込んでいく。以前、ルイズがマチルダの大型ゴーレムを打ち倒したものと同じ、エクスプロージョンの魔法だった。

光が晴れて暗闇が帰ってくると、そこには土埃ひとつ舞っていないかった。二元通りの、静寂をたたえた夜が広がっている。

「困りました。このままではすぐに精神力が尽きてしまいます」

すました顔でアニーは言う。状況は防戦、たださえアルレットに精力を分け与えているのだから当然かもしれない。

アニーがルイズほどの精神力を保有しているなら、今のエクスプロージョンの魔法で身を潜めている盗賊ごと一網打尽にできたはずだった。

「……あの男さえ討てば戦意喪失して、細かいのは消えるだろう。しよせんは義のない賊の集まりだ」

「なら——」

「そうですか。それでしたら」

アニーがアルレットの言葉を遮り、前へ歩み出した。仮面の男と向き合うようにして

凜然と立つ。

「わたしがやります。マチルダさんはアルレットとシエスタさんを」

「アニー……」

「大丈夫。敵が一人ならわたしでもなんとかできます。これから戦場が続きますから、アルレットは温存して下さい」

「別にいいけど……やるつたって、どうやって」

仮面の男とアニーの距離はいわばメイジの距離。弓の援護に加えてトライアングル以上の魔法を盾にされれば、近づくことも敵わない。魔法をぶつけ合うにも、精神力に余裕のないアニーにとって打ち合いは不利になる。

まして、相手はワンアクションで分厚い土塊を突破する風の使い手。けれどマチルダの中には、アニーの扱う未知の魔法ならば、という思いもあった。

「近づいて、意識を奪います」

「……わかった、任せたまよ」

どうやって近づくというのだろう。マチルダには分からなかったが、アニーが杖を構えるのを見て可能なのだろうと納得する。そして、自分の役目を果たすべく再び防御壁の錬金を始めた。

仮面の男もすでに詠唱を始めている。その影響か、薄暗い雲が上空で渦巻いていた。

先ほどのエア・ハンマーよりも遥かに強力な魔法が放たれようとしていることは、平民であるシエスタの目にも明らかだった。

「シエスタ。なにかあつても、わたしが守るから」

「……はい。魔王さま」

今立っている場所が、紛れもない戦場だった。その不安を和らげてやろうとアルレットはシエスタの腕を抱く。

メイジ3人のうち、もつとも早く魔法を発動させたのはアニーだった。

その様子をじつと眺めていたシエスタの目からは、彼女の姿が一瞬のうちに掻き消えて見えた。そして視線を仮面の男の元へ向ければ、上空から地上へ迫りくる雷槌に照らされて、丘を凄まじいスピードで駆け抜ける小柄な彼女の姿が映る。

大気を轟かせて大地へと突き刺さった雷槌の魔法は、それを上回る速度で駆けるアニーの快足によつて躲された。喫驚した仮面の男が慌てて後ずさる。

マチルダの錬金が再び防壁を生み出しはじめた。やがて土塊が視界を遮って、それ以上の光景は伺えなかった。

「ライトニング・クラウド……」

土壁の檻の中でマチルダがつぶやく。風のスクエアスペル、雷を操る御業。ライトニング・クラウドを目にするのはマチルダも初めてだった。

アニーが未知の魔法を使うのは、今回が3度目。それよりも、仮面の男に対する興味が強まる。

スクエアメイジの盗賊なんて聞いたことがない。スクエアというクラスは特別も特別で、顔が割れば名前も知れるような存在。マスクを被る理由にも納得がいく。だからこそ、長年盗賊業をやっていたマチルダが彼を知らないはずがなかった。

そうなれば考えつくのは、仮面の男が盗賊などではないこと。彼はおそらく名のある貴族で、盗賊を雇ってまでマチルダらを狙う理由がある。

「……レコン・キスタ、ね。面倒ごとに巻き込まれちまったみたいだ」

土塊の防御壁は静かに佇んだまま揺らがない。戦場の空気が掻き消えたのをマチルダは感じた。もう一度杖を振るい、土塊を大地へと還していく。

「アニー、あの男は？」

「申し訳ありません、マチルダさん。逃してしまいました」

「……逃したって？ ワイバーンでも現れたのかい」

開けた視界に敵の姿はなく、ラ・ロシエールの静謐な夜の丘が広がっていた。目的は港への道を切り開くことで、目標は達したと言っている。

あとはルイズとワルドを回収してアルピオンへと飛ぶだけだ。

「触れた瞬間、男の全身が風が変わってかき消えました。何かの魔法でしょうか」

「……信じがたいけど、偏在の可能性が高い。自分の分身を生み出す最高位の魔法さ」  
「そんな魔法が……」

「ああ。本体である男はまず間違はなくラ・ロシエール周辺に身を潜めてる。とつとつこの街を脱出したほうが良さそうだ」

分身にスクエアスペルを扱わせるなんて、化物としかいいようがない。アニーが不意打ち同然の魔法で撃退したものの、二度目が通用するとは限らない以上、再びあの男と相まみえるのは危険だ。

目標を達成したことをワルドらに知らせるために、マチルダは夜空に向かって火の魔法を放った。

## 29話『天秤』

ラ・ロシエールの誇る空の港、世界樹の枯れ木。

その幹に穿たれた穴をくぐると、内部には巨大な空洞が広がっている。階段が内壁に沿うように上へ上へと続いており、それぞれのフネへ向かうための出入り口が並んでいる。

栈橋は世界樹の巨大な枝そのものだ。フネはその枝の先に、実るように停泊している。

悠長に階段を登っている時間も体力もない。ワルドを先頭に、フライの魔法で目的の栈橋まで飛んでいく。

平民のシエスタとはいえば、アルレットと共にカラスのような生物にまたがっていた。世界樹の空洞にたどり着いた際に、ワルドが魔法の使えないシエスタを背負って飛ぶことを提案したものの、あるじのアルレットが断固として断り、代わりに用意した飛行手段である。

カラスのような、と言っても、大きさはその10倍はありそうなもので、横を飛ぶマチルダは子どものように怯えていた。



「……ねえシエスタ、それ本当に大丈夫？ 落ちたりしない？」

「は、はい、ルイズさま。乗り心地は、とても良いです……」

「……そう。それは良かったわ」

アルレットの背にひしとしがみつくシエスタに、ルイズはひきつった笑みを浮かべた。

## 29話『天秤』

「にしても、今のアルビオンに急ぎの用事とはねえ」

「詮索はよしてくれたまえ」

船長の言葉に対して短く言い放つ。

拒絶の態度とともに踵を返し、ワルドは甲板の金属を踏みながら客室へと帰っていった。

すでに賃金は支払い済みだ、という支配者の態度。この朝靄の中を航行している『マリー・ガラント』号の船長は、それでも文句の一つも口にする気はなかった。

なにせ、彼の手に握られているのは金貨数十枚はくだらない価値のダイヤモンド。急な航行を受ける代わりに、依頼主のワルドから受け取った前払いの報奨だった。売値を

船員全員と分け合ったとしても、平民である彼らにとつて向こう一年は生活に困らないほどの金額になるだろう。

雲間から冷たい風が吹きすさぶ。

デツキの手すりに両手をつけて空を見下ろす。フネは高度を上げて、やがて世界樹の枯れ木も遠くになった。

室内用の植木ほどに小さくなった大樹を眺めながら、ルイズはぽつりとつぶやく。

「綺麗なんだけど……ね」

世界樹の枯れ木。根本から見上げても、その天辺が見えてこないほどに巨大だ。だといふのに、この旅で感嘆の二文字を覚えることはなかった。

思えば、壮観なラ・ロシエールの石造りの町並みも、まるでくすんだ灰色の石畳を前にしているような無関心さで通り過ぎていた。

嘘みたい。

この先のアルピオンに、戦場が広がっている。今しがた、ラ・ロシエールの小さな戦場を越えてきたこともそう。

そう、ルイズは独りごちる。どこか、目の前に写ってきた景色と、これから目にするものを信じきれない。

今まで過ごしてきたのは、貴族の温室。

騒がしいと言つても、生徒のくだらない談笑がせいぜい。不快な匂いのある場所なんて、奇妙な薬品が置いてあるコルベールの研究室くらいなものだ。

戦場には、柔らかな天蓋付きのベッドも、メイドが配膳してくれる暖かな食事もない。刃物が削ぐのは死んだ動物の肉ではなく、同族の血肉。

ルイズ自身に覚悟がないわけでも、温室の環境に依存していたわけでもない。むしろ、戦場を歓迎する感情すらあった。

戦場は、貴族としての榮譽をつかむ場所だと考えていた。生まれてから最近まで、一度として戦いによる流血を忌避したことはない。戦果を上げれば、胸の内でも育て続けてきた自分だけのプライドを、意味のある尊厳へと昇華できる。

そんな、命を輝かせるための場所。

名誉のため、といえば自分本位に聞こえるかもしれない。ただ、名誉には結果が伴う。多くの人間を救い、国に報い、未来に希望を示したこと。それは、大切な人を守ることにも繋がる。自分のためであれ、他者のためであれ、榮譽をつかめる人間が手を伸ばさない理由はどこにもない。

持たざる者だったルイズにとって、なおさら特別な意味を持つていた。

ただ、どうしても、今この時。榮譽を与るためのこの旅を考え直さずにはいられない。

頭をもたげる。あまりにも不釣り合いだと、心が拒絶している。——アルレットと、シエスタのこと。

どうして、あの無垢な顔に返り血を塗らなければならないのだろう。「私」という存在が、必要とされてしまったのだろう。

理由はわかっている。あの「ゼロのルイズ」のままであれば、誰からも必要とされなかったのだから。

力を持つものの責任。

生まれ持つて責任を背負っていたわけではない。自ら望んで力を手に入れて、責任を背負い込んだ。

そのために、この戦場に不釣り合いなふたり、アルレットとシエスタがいる。

不釣り合い。ふたりを見ていると……あの貴族の温室で流れている緩やかな時間に、身を置いているような気分になる。こんな時だと言うのに。

それを壊して、血の臭いに触れさせるのは、他ならぬ自分自身で。

「ルイズ——」

いつのまにか、その人が隣にいた。ルイズと同じ姿勢で、もう見えなくなってしまう。アラ・ロシエールの方を眺めている。

「……アルレット。シエスタは？」

「疲れてすぐに眠っちゃった」

「そっか……そうよね、精神的な疲労も相当なはずよね」

貴族として育てられたルイズには、覚悟の伴った精神がある。くらべて、ただの平民として長閑な村で育ってきたシエスタの精神に、戦場に対する心構えや覚悟が備わっているはずがない。

「ねえルイズ、その手……」

「え……？ あ、これ……そういえばあの時、やけどしちゃった」

痛みなんて忘れていた。『女神の杵』亭から港へ向かうまで必死だったし、それからは考え事で頭がいっぱいだった。

盗賊の放った火矢が土メイジの鍊金した油に触れて、火柱をあげた時。今思えば、火傷したのが右手だけでよかったとも思う。一歩間違えれば命を落としてもおかしくない。

爛れた皮膚に目を向けると、今になって痛みが蘇ってきた。やけどはそれほど酷くないものの、無視できるほど小さくもない。

「冷やしておいたほうが良かったわね……いえ、そうだわ。水の魔法使えば」

「ルイズ……」

アルレットがルイズの焼けただれた右手を両手で優しく包む。

白く透き通った、すべやかなアルレットの手。包み込んだてのひらから、治癒の魔法が施されているのを感じる。

ただなすがままで、きれいな手だな、なんて馬鹿みたいに考えていた。

「もう、いたくない？」

「……うん。ありがとう、アルレット」

両手が離される。自分を見る……心配そうに眉を寄せる、きれいな顔。

整っているとか、造形が美しいとか、そういう意味の「きれい」じゃない。例えば、透明な澄んだ水を蓄えた湖が、陽光を反射してきらきらと光っているような。

それでいて、こんなに暖かな温度を持っている。——きれい。

ワルドの言葉を思い出す。

——変わったね、ルイズ。昔のキミはあんなに負けず嫌いだったのに

変わった。魔法の力を希求して、泥沼の中でもがいていた頃とは、見える景色も違う。

——ああ。ずいぶん柔らかくなった。まるでキミの姉——カトレアみたいだ

憧れていたし、その言葉を聞いて全身が沸き立つような喜びを感じた。

体の弱いカトレアが魔法の力を振るうことはめつたにない。けれど、彼女は人に与えることができる人間だ。ハンディによって他人にかける苦勞より、いつでも彼女が与えるもののほうが大きい。

あんな人になりたいと思いつつも、ルイズはそうならなかった。だからこそ、あんなにも魔法の力を求めた。その隙間を名誉で埋められるようにと。

でも、もういい。ルイズは頷く。

召喚した使い魔が本当にもたらしてくれたのは、魔法の力ではない、もつと別のものだった。

この旅の途中でようやく気づいた。魔法の力を求めれば求めるほど、アルレットとシエスタの居場所が汚れていくこと。

アルレットがルイズの精力を奪うことは魔法の邪魔立てにしかならず、引け目を覚えずにはいられない。ルイズのそばにいれば、ふたりは血の臭いを嗅がずにはいられない。

「アルレット。いっておくけど、使い魔の契約は死ぬまでだからね」

「うん、しってる」

「それとね、決めたから。わたし」

「ごめんなさい、と心の中で謝る。それは、今この場所にはいない人たちへ向けてのもの。

ルイズはアルレットの方へ向き直る。それを受けて、アルレットはゆつくりと振り向き、目を合わせようとす。

「あのね——」

「おい、あの船、もしかして……」

ふと聞こえた船員の言葉に、ルイズとアルレットのふたりはフネの進行方向を振り返った。

そこに異変があることは目を凝らさずとも分かった。

雲間から覗く、巨大な黒い船体。その風体だけで異質さは十分だった。加えて――

「旗がない！　ありや空賊船だ！」

一人の船員が叫ぶと、甲板がにわか騒がしくなる。

黒いフネの船体は『マリーガラント』号よりも遥かに大きく、接触すればそれだけでこのフネは風に飲まれかねない。下手に抵抗すれば乗員全員の命が危うい。

空賊の目的はフネの積み荷と乗船している貴族の身柄。おとなしく彼らに従い、それらを引き渡せば、乗員の命は助かるかもしれない。

しかしその選択は、アンリエッタから託された密命を放棄することになる。意識せずともルイズの右手は懐に伸びていた。

手によく馴染む。強く握った杖を、黒いフネへ向けてゆつくりと突きつける。

「僕にはどうすることもできない。ルイズ、君にはできるのかい？」

さすが非常時にも動きが早い、とルイズは横を見る。客室に戻っていたはずのワルドが腕を組んで黒いフネを見上げていた。



スクエアメイジもひとりの人間でしかない。ひとりで到達できる限界というのは、人が想像するよりずっと低い位置にある。

「……はい、できます」

それでも、できるはずだ。フーケのゴーレムを打ち破った魔法なら、フネのひとつくらい撃墜するのも。

丸2日間はアルレットへ力を渡していないため、大きな魔法を放てるだけの力も残っている。

杖を握る手がかすかに震える。自分の中に迷いを感じ取って、それでもやらなければと頭を振り、精神力を指先に募らせていく。

マントの裾が引つ張られる感触がした。誰か、なんていうのは、振り向かずともわかる。

目があつた。奥深く黎明色をたたえた瞳に、意識を鷲掴みにされる。

「平気よ。あのフネ、きつと空賊じゃない」

「……え？」

「なんだか、変装してる」

アルレットは黒いフネへ視線を向ける。近づいてきたとは言え、あまりにも遠い距離。しかし彼女にはすべてが見えているのだろうと、ルイズは納得する。

「……ルイズ、無理しないで。わたしを頼って」

「けど、これはわたしが任されたことだから……」

「あのままフネを落としていたら、人が死んでた。わたしを頼ってくれたら、そんなことにはしない。ルイズが悲しむことにはならない」

「……それは、でも」

迷惑をかけたたくない。大切に思えばこそ、頼れない。もしどうしようもなく、人を傷つけなければならぬなら、それはアルレットではなく自分の手で行うべきだ。

今回はたまたま、アルレットが解決策を持っていただけ。

そう、ルイズは意地を張る。……けれどそんな意地なんて、人の命の前では些細なことだ。わかっている。

「……アルレット。変装してる、っていうのは本当なの？」

「うん。貴族らしい貴族だから……たぶん、あれはアルビオンのフネ」

「なるほど、それならば納得がいく」

状況を見守っていたワルドが言う。

「この時間、僕は無理を言っただけでフネを出してもらっているに過ぎない。それなのに、この時期と時間、こうして出くわしてしまうことがそもそもおかしいんだ」

「空賊だからこそ、こんな時間に忍んで飛んでいるとは考えられませんか」

「フネを飛ばすのもタダじゃない。ああまで立派な船体を空に浮かべているんだからなおさらだ」

略奪目的の航行も、無駄足なら大損失。この時期と時間を選んで空賊が航行するはずがない。

「さて、鬼が出るか、それとも仏が出るか……」

鬼なら既に出てしまったが、とワルドは船室の方を睨めつけて内心で吐き捨てる。船室にはマチルダやアニー……彼の分身を打ち倒したふたりが空賊の襲撃に備えて身を潜めていた。

そんな様子を見て、ルイズの漠然とした不安がくすぐられる。

「ルイズ。大丈夫だから、もどろろ？」

「……ええ。疑ってなんかない」

何か考え事をしているようで、ふたりの会話にワルドは反応を示さない。

アルレットはルイズの手を引いて、船室へ足を向ける。きつとシエスタの紅茶を楽しもうなんて考えているのだろう。そのマイペースさが、心を落ち着かせてくれた。

## 30話『皇太子』

『マリーガラント』号の船室ロビー。

ルイズ一行はいかにも賊一味、という風貌の空賊らに囲まれていた。

甲板にいたワルドや船長の姿は見えない。おおよそ拘束されて別の部屋へ運ばれているのだろう。このフネが空賊の手に渡ってしまったことは、その場にいる誰もが察した。

空賊の長らしい赤バンダナの男は無精髭を弄くりながら、ニタニタと下品な笑みを浮かべて言い放つ。

「このフネは丸ごと買い取った！ 代金はお前らの命だ、文句ねえな？ 貴族のお嬢さん方」

目を凝らせば、この男の触っている無精髭……偽物だ。アルレットの言うとおり、フネを占拠している空賊は変装した貴族の集団らしい。

アルレットと顔を見合わせて肩をすくめる。こみ上げてくる笑いをこらえながら、ルイズは杖を放棄して両手を上げた。

## 30話 『皇太子』

ロビーの広いテーブルに紅茶のカップが6つ並べられる。シエスタを除くルイズ・ワルド一行と男の分。茶菓子は無いものの、この一室が貴族の館にすり替わったような状況だった。

給仕を終えたシエスタが、アルレットの斜め後ろへ静かに待機する。

「はっはっは！… さて、どこから話したのか。それに懐かしい顔まで」

こりや一本取られた、とあっけらかんとして笑う空賊の長……もとい、貴族の男。

バンドナや付け髭を捨てて変装を解いた彼は、美しいブロンドと整った目鼻立ちをしていた。紅茶を口に含む動作ひとつとっても、平民には決して真似できない気品に満ちている。まじりつ気のない温室育ちの匂いがした。

「まずは……すまなかつた。演技とはいえ、脅すような真似をしてしまったことを詫びよう」

男は席を立ち、ルイズらに向かって頭を下げる。彼の正体はわからずとも、公爵家育ちのルイズが恐縮を覚えるような流麗な所作だった。

「あ、頭をお上げ下さい。我々は密使なのですから、王党派の方々が怪しむのも当然ですわ」

「こうして貴族派の補給を断つ作戦だったんだ。もう貴族派に、そんな小細工は意味ないと分かつているのだがね。僕はまだ戦わなければならぬ」

「ウェールズ殿下、この子らは気にするような子たちじゃないよ。もうよしなつて」

「……マチルダ」

その言葉を受けて、ウェールズと呼ばれた男は素直に引き下がりが、席に着いた。

聞き間違いだろうか、とルイズは耳に残った言葉を復唱する。

「うえ……うえーるず、でんか……」

……ウェールズ殿下。アルビオン王国、皇太子。

「そう、ウェールズ殿下。まさか空賊ごっこしてるところに出くわすなんてね、ほんと、どうなってるんだか」

「いやあ、恥ずかしいところを見られたよ。久しいね、マチルダ」

「ししし失礼いたしました！ わたくしつ、知らず知らずのうちに失礼を！」

今度はルイズが立ち上がって、勢いよく頭を下げた。そのつむじと真つ赤な耳を前にして、ウェールズは微笑ましいものを見るように笑みを浮かべる。

「畏まらなくていいんだ、勇敢な大使殿」

「しし、しかし！」

「アンリエッタの命とは言え、よくぞここまで足を運んでくれた。僕はその勇氣に敬意

と感謝を表する」

「……ウエールズ、殿下」

「アルビオン王家の名にかけて、無事にトリステインへ帰すことを誓おう。すでにその名も失墜せんというところだがね。だからこそ、最後までこの尊厳を守り通さねばならない……命に変えても」

戦を諦めたような将の言葉。しかし、その瞳の力強さに思わず見惚れてしまいそうになる。

ルイズが強く焦がれていた、気高い貴族の姿がそこにあつた。

「ほら、ルイズ」

「……あつ……」

我を忘れて立ち尽くしていた。ワルドに促され、ルイズは頬を染めながら席に座り直す。

「はん、やっぱり亡命する気はないんだね。ウエールズ殿下」

「当然だよ。そういう君は、どうやらトリステインの人間になつたようだね」

「いいや。ただ、それもいいかもしれないね。この子らのこともあるし」

そう言つてマチルダはアニーとアルレットに視線をやる。

マイペースに紅茶を楽しんでいるアルレットの後ろで、シエスタがあっけにとられた

様子で口を開いた。

「マ、マチルダさんて、アルビオン王家の方とお知り合いだったんですね……すごいです」

「わたしは元々こつちの貴族なんでね。サウスゴータなんていう立派な名前もあつたが、今じゃあんたと同じただの平民さ。畏まらないでくれ」

「はい、心得ております」

臆さずに笑みを浮かべるシエスタに、ルイズは「シエスタも成長したなあ」なんて感心する。普段から元・王女のアルレットを付きつきりで世話したり、ルイズと同じ部屋で暮らしたり、アンリエッタとの茶会に同席したりと平民では一生縁のないような経験を積み重ねてきただけあるかもしれない。

ウエールズがかちやり、とティーカップをソーサーに置く。

王族にだけ許された、場を支配する間合い。その場にいる誰もが、彼が何かを話そうとしていることを感じ取り、意識をそちらへ向ける。

「さてさて、密使殿にご用向きを伺おうか。あまりにも特殊な邂逅だっただけに、本来の要件が遅れてしまった」

「……はい。この、アンリエッタさまからの封書を読んでいただければ——」





長いアルビオン王国の歴史が終焉を迎えようとしている。

兵の数は王国軍が三百、対して反乱軍は五万を下らない。アルビオン王族の首はまもなく跳ねられるだろう。形勢はすでに貴族派の勝利に大きく傾いている。

アルビオン王国の内戦は、王党派と貴族派の間にある内紛である。

王党派、つまりアルビオン王室が払拭しきれなかった内憂が、貴族派の反乱という形になって、彼らに鉾を突き立てている状態。

貴族派が王党派を追い詰めたという事実はもはや覆しようがなく、国王であるジェームズ一世の汚名が雪がれることはない。もはやアルビオン王室が国政を立て直すことは困難である。

内戦がいくら長引こうとも。王党派はすでに敗北している。

ニューカッスル城、アルビオン王国の誇る華やかな要塞。ウェールズに連れられ、その絢爛な廊下を歩く。

「ずいぶんとのんびりしているのね。この城の人間たちは」

アルレットがぼつりとつぶやく。それに対して、ウエールズは小さく笑みを浮かべるだけだった。

ルイズはアルレットが王族の人間に失礼を働かないか気が気でなかった。使い魔の失態は主の責任、ということとは、春の召喚の儀から幾度となく思い知らされている。ところが外交問題及ぶ可能性があつては、神経質にならざるを得なかつた。

件の恋文はウエールズの居室にあるという。ルイズとアルレットは、それを懐に預かる目的で、彼の居室へ向かつている途中だった。

今はちやうど昼食の時間。「旅の付き添い」扱いである他の4人は今ごろ、きらびやかなシャンデリアのもとで饗されている頃だろう。アルレットがこつそりシエスタに付いていこうとしたところを引き止めたのはもちろん、ルイズだった。

「まさか、恋文のひとつが、大きな問題になりかねないなんてね。僕もうっかりしていた」

トリステインとゲルマニアとが同盟を結び、ハルケギニアを脅かしている貴族連合レコン・キスタから互いの国を守る。そのために、アンリエッタとゲルマニア皇帝の婚姻関係が必要だった。

そしてその大切な婚姻関係にヒビを入れかねないのが、アンリエッタがアルピオンの皇太子ウエールズへしたためた秘密の恋文。ニューカッスル城を貴族派の反乱軍に

乗つ取られれば、その恋文は公のものになるだろう。というのも、レコン・キスタがアルビオンの貴族派から起こった組織であり、レコン・キスタそのものだからである。

「ええ……王族というのは、なんでもできるように見えて、恋のひとつも満足に……」

自分の知る王族、アルレットやアンリエッタを思い出して、ルイズは目を伏せる。彼女らも、耐え忍ぶ役割ばかりを背負わされてきた。

「同情してくれているのかい？　彼女に……僕の愛しいアンリエッタに」

「はい……いえ、同情だなんて、失礼にあたるかもしれません」

「いいや、それでいい。アンリエッタもこれから先、こらえなければならぬことも多いだろう。だからせめて、気持ちを汲み取ってあげて欲しい。……汲み取られることのない気持ちは、いつか錆びついて歪んでしまう。ガリアの彼のようになってはいかん」

「……はい」

……この人も王族だ。だからこそアンリエッタの気持ちが分かるのだろうと、ルイズは納得して頷いた。

けれど……この人の気持ちは、誰が汲み取ってあげられるのだろうか。今この時、何かをこらえるようにして、アンリエッタの幸福を願っている彼の苦しみは。

「さあ、――」が僕の部屋だ」

廊下に並ぶ扉の中でも、少しだけ豪華な扉。そこがウェールズの居室らしい。

ふたりはウエールズに続いて部屋へ入っていく。部屋の様相は、ルイズの居室よりもずっと質素だった。

「ここにしまつてあるんだ。一番の宝物だね」

ウエールズは椅子に腰掛けて、机の引き出しを開ける。中から鍵付きの小箱を取り出すと、胸に下げていたネックレスの小鍵を使って、大事そうに解錠した。

箱の蓋裏には、幼いアンリエッタの肖像が描かれていた。そして中の封筒から現れたのは一通の手紙。

手紙は何度も読み返されたようで、皺もシミもついている。ウエールズはそれと同じく大事そうに開いて読み始め、読み終われば祈るように両目をつむった。

彼が目を開くまで、ルイズはただ唇を噛みしめていた。

殉死する前夜の、愛しいものへ捧ぐ祈り。そう見えて仕方なかったし、きっとそのようなだろうと思った。

「これが件の恋文だ。よろしく頼む、大使殿のふたり」

ウエールズは手早く手紙を折って封筒に戻し、ルイズへと差し出した。

「……たしかに、受け取りました。ウエールズ殿下」

「ああ。長旅もご苦労だった。帰りのフネが用意できるまでに、君たちにはこの城で一番の饗しをさせて欲しい」

「……っ、それは、我々が最後の客人だからでしょうか？」

思わず口をついて出ていた。後悔する気持ちより、押さえつけていた感情が溢れ出していくのを感じる。

今しがた受け取ったアンリエッタの恋文をウエルズの胸に押し付け、ルイズは目に涙を浮かべてまくしたてる。

「どうか、どうかトリステインに亡命してくださいませ！ 姫さまもそれを望んでおられます！ きつとあの封書にも、殿下の亡命を望む一文が書かれていたはずです！ ですから、ですから……これから私たちと共に、トリステインへ——」

「ルイズっ」

アルレットに呼びかけられ、ルイズははっとして言葉を止める。

ウエルズの顔を見れば、ひどく泣いているような表情をしていた。しかし、すぐにその表情もかき消えて、彼は口元に笑みを浮かべる。

「そうか。アンリエッタにも、このような心優しい友がいたのか。きつと、無事にやっていけるだろう」

「殿下っ、そうではなく……！」

「……ルイズ、だめっ」

アルレットに腕を抱きしめられて、ルイズは隣を振り向く。そこには涙をこらえてい

る、いつもの泣き虫な顔があった。

どうして彼女がそんな顔をしながら、ウエールズの亡命に反対しなければならないのだろう。ルイズは問いかけるように視線をやる。

「このひとはもう、心の色が変わるくらい、深い覚悟をしてしまったあとだから。……もう、苦しませないであげて」

「……ありがとう、ふたりとも。苦しくなんてないさ、僕は幸せものだ。アンリエッタに、城に残ってくれた臣下たち、それに出会って間もない異国のお嬢さん方まで。こんなにたくさんの人が、僕の命を尊んでくれる」

「ウエールズ殿下……」

「なればこそ、この命の意味のあるものにしなければならぬ。決して、亡命を選び、トリストインに戦火を持ち込むことは許されない」

「……っ」

かの大敵レコン・キスタに、トリストインへと攻め入る口実を作る訳にはいかないと。誇りに命を擲つわけではない。愛しい姫君のいる国を守るための選択であると、ウエールズは言った。

それでも、ウエールズが亡命を選ばないことも、亡命が許されない状況であることも、同じくらい納得できないとルイズは涙をこぼしながら歯噛みする。

そんな様子を、ウエールズはただ困ったような表情を浮かべて見守っていた。

「……ルイズ。大丈夫だから」

ぎゅ、とアルレットに手を握られて、ルイズは顔を上げる。

アメジストのような、深い紫色をたたえた瞳。何度目の当たりにしても吸い込まれそうになる、瞳の奥深くに沈んだ闇色。

彼女という存在には、あまりにも不釣り合いな色だと思う。

「さあ、ふたりとも。返還は済んだ。もう密命のことは忘れてくれていい。このニューカッスルで休んでいってくれ」

「……はい、ウエールズ殿下」

ルイズはそれ以上何も言うことができず、ただウエールズの背中に続いた。

## 31話『暖かな黎明Ⅰ』

記憶に焼き付いている。

自分を形作ってくれた大切なもの。忘れられるはずがない。

大きな池に浮かんだ小舟の中、仰向けになつて空模様を眺める。

遠い、遠い向こうに浮かぶ、大きな雲に思いを馳せる。

小舟が揺れるたびに、水面がちやぶちやぶと音を立てる。ときおり木々が葉音を鳴らして風の訪れを知らせてくれる。

別世界。私だけの箱庭。

魔法の使えないおちこぼれ。

大好きだつた両親や姉から叱られ続ける日々。

いつしか世界が嫌いになつていた。だから、別の世界へと逃げ込んだ。

屋敷の庭園を抜けた先にある、手入れのされていない池。遊びに使われていた古い小舟がいくつか杭につながれているだけ。

ある日、そんな箱庭に侵略者が現れた。

「ようやく見つけた」



小舟に影が降りて、羽根帽子のシルエツトが目映る。

「また泣いているのかい」

「あ……」

「寂しくないかい。こんな場所で」

「……さみしい。でも、帰りたくありません」

母に叱られて部屋を飛び出してきた。今ごろ、母や使用人たちが慌ただしく屋敷内を探し回っているはずだった。

「帰りたくない」。両親に言っても、姉に言っても、使用人に言っても、きつと咎められてしまう言葉。

だというのにその人は、そうか、とだけ頷いて受け止めてくれた。

「苦しくなったら休めばいい。寂しくなったら、誰かに甘えればいい。君が頑張ってることはよく知っている。大丈夫」

そう言つて優しく前髪を撫でてくれた。その暖かさと大きさが胸に焼き付いて、いつまでもそこに残つたためくもりを忘れられずにいた。

### 31話『暖かな黎明Ⅰ』

慣れないベッドの感触に違和感を覚えて身を起こすと、今度は慣れない部屋の景色が広がっていた。

締め切ったカーテンから赤みがかかった日が漏れている。

ぼんやりとしてなかなか意識が覚醒してくれない。どうやら長い夢を見ていたらしい。

やがてここがアルビオンのニューカッスルであることを思い出すと、ルイズは慌てて部屋を出た。

「おはようございます。よく眠れましたか？」

廊下ではニューカッスルのメイドが待機していた。ルイズは乱れた髪をそれとなく整えながら応える。

「え、ええ。もう祝宴会は始まって？」

「はい。目を覚ましたら案内するよう、仰せつかっております」  
「わかった。着替えて身だしなみを整えてくるから、待つてて」

寝過ごした、とルイズは頭を抱える。ウエールズから恋文を返還してもらった後、ルイズは体を気遣って部屋で仮眠をとることにした。しかし、旅の疲れや緊張が溜まっていたらしく、目を覚ました頃にはすでに日も落ちる頃合いだった。

ニューカッスルでは今夜、祝宴会が行われるらしい。

言つてしまえば、敗戦を前にした最後の晩餐。どんなに良い食事を出されて、会話に花が咲こうとも、後には暗い感情が残るに違いない。ルイズ自身は乗り気ではなかつたものの、アルレットが参加したいと言ひ出したがためにお目付け役という理由ができてしまつた。

一旦部屋に戻ると、ルイズは手早く黒いドレスに着替えなおし、身だしなみを整えた。鏡を覗く。すでに慣れてしまつた、伶俐な印象をした自分の姿が映る。

アルレットの魔法は、その特殊な瞳を通じて精霊と対話し、「命令」を下して奇跡を起こす。

より「命令」を強くするために、まずは衣装から意識を変える。すべてはその粉飾のための格好と口調。彼女からはそう教わつた。

けれど、それも。

コンコン、とノックの音が聞こえる。

「ミス、ご友人がお尋ねに。よろしいでしょうか？」

「もう平気よ。お願い」

メイドに通されて部屋に現れたのは、ドレス姿のシエスタだつた。

細かな所作も小奇麗で、白い生地と顔に赤いリボンがよく映えている。平民出身の彼女もさすがに着慣れてきたかもしれない。

「お迎えに上がりました、ルイズさま。そろそろ起きる頃かなーと」

「もう、祝宴会がはじまる前に起こしてくれたりよかったのに」

「疲れていらつしやるようでしたから。よく眠れたみたいでなによりです」

「そうね。シエスタも覚悟しておきなさい。このベッドならいくらでも眠れそうよ、さすがは王様のお城つてかんじ」

「わ……それは楽しみです。食事も素晴らしいですよ、早く行きましょう」

微笑むシエスタの顔にも、すこし疲れが見えた。アルピオンまでの船旅で少しだけ眠っていたものの、ここまでの道のりが道のりだ。寮のベッドでゆっくり休ませてやりたいと思う。

案内をシエスタに頼むということで、ニューカッスルのメイドには下がってもらい、ふたりで広い廊下を歩く。

「ごめんなさい、シエスタ。こんな危ない場所に連れてきちゃって」

「いいえ……足手まといで申し訳なく思います。好きでついてきたわけですから」  
「そうね」

ルイズは心にもなく頷く。否定しても、話はきつと平行線になる予感がした。

好きでついてきたと言っても、シエスタにはトリスティンでふたりの帰りを待つという選択肢はなかった。シエスタがアルレットにとって必要不可欠な支えであることを

ルイズは知っている。

「あの子の前なら、そもそもわたしだって足手まといだけだ」

「そんなことないです！ 危ない場所といえますけど、わたし、不安なんてありません。おふたりのそばにいますから」

「……そ、ならいい」

その嬉しそうな笑顔から、本心からふたりを頼りにしているのが伝わってくる。ルイズは頬が熱くなるをぐまかすように顔をそらした。

力を持たない人間を守るのは貴族の使命というものの、魔法があればこそだった。以前のままの『ゼロのルイズ』だったら、頼られることなんてなかったかもしれない。

「ところで、宴席にアルレットを置いてきて平気なの？」

「それでしたらアニーさんが付いているので大丈夫だとお思います」

「あ……そっか。彼女も一緒なものね」

どこからかもやもやとした気持ちが湧き上がってくる。それが嫉妬の感情だと気づいて、ルイズは苦笑した。

「どうされましたか？」

「ううん。ただ……再会できてよかったなって。あのふたり」

「そうですね。異世界まで追いかけて、こうしてまた出会えて……なんだか素敵です」

そうやってシエスタは胸の前で手を合わせる。純粹な心でアルレットの幸福を祝っていた。それを見て、ルイズにも同じ気持ちで降りてくる。

「そうね、別れたままなんてあまりにも辛いもの」

それでもアルレットはその選択をした。妹のために。

「今度は別れないようにしないとけませんね」

「ええ、そのとおりよ。嫌がってもちゃんとそばにおいておくの。わたしの使い魔なんだから」



長いアルビオン王室の歴史を締めくくる晩餐。最後の祝宴会はとびきり賑やかに、胸の片隅では締め付けられるような痛みを残しながらも、華やかに行われた。

後の会場に残ったのは果てしない虚しさ。この宴席の終わりがまさしく王室の終わりを意味していた。

祝宴会の最中、ウエールズは明日死にゆく身であることなど微塵も感じさせない振る

舞いで貴族らの相手をしていた。そして、それは貴族らも同じで、各々が己の誇りに殉ずることに憂いを持たず、心の奥底で誰かの幸福を願いながら盃を交わしていた。

こんな人々を見たくなかつた、とルイズは拭いきれない暗い感情を押し殺す。

「アルレット。明日の早朝、フネを出してくれるみたいだから。今日は早く寝ましょう」  
「うん。その前に……」

「あ……そつか。アニーのところに行く？」

「ううん、ルイズの部屋。今日は一緒に寝る」

「……そう。まあ、いつも一緒なものね」

ルイズたちの他に、ニューカッスルに客人はいない。空室も有り余っていてひとりひとりに広い客室を与えられている。

一人部屋で寝泊まりする、というのはアルレットと喧嘩して以来のことだった。

アルレットを連れて割り当てられた客室に戻ると、すでにシエスタが扉の前で控えている。  
いた。

すでにアルレットが声をかけていたらしい。

3人で部屋に入ると、客室が学生寮と同じ景色に映る。すこし部屋は広いし、調度品はよりきらびやかでも、見える人は同じだった。

「これじゃあ、いつもどおりじゃない」

「そうですね。でも、昨日は別々でしたから」

シエスタがくすくすと笑う。

「ルイズ、ワルドの部屋がよかった？」

「べ、別にそういうわけじゃない。だいたい、そんなの落ち着いて休めないわ」

「……そう？」

「懐かしいとか、そういうのはあるけど……一緒に部屋で寝たいかっていうのは、別」

「そうならいいけど……気を付けてね、ルイズ」

そう言つて不安げな目を見せる。ルイズはまさか、と耳を疑った。

アルレットが誰かに言及する言葉には、その瞳から得た裏付けがあるはずだった。

「……ワルド子爵はあの魔法衛士隊の隊長よ？ マザリーニ枢機卿の信頼を受けて様々な任務をこなしてきたっていう」

「それに加えて、ルイズの婚約者」

「……そうね、婚約者。ただの口約束だけ」

だからアルレットは、はつきりとワルドについて言及することを遠慮している。まだルイズがワルドとの思い出を大切に思っていて、婚約の話も考える余地を持っていることを、アルレットは知っている。

「ワルドは何かを隠してる？」



「……うん」

アルレットは態度を変えず、言うつもりはないという素振りでも顔を見せず。

「わたしはあなたを信じるから。ひとりでも背負い込まないで」

それでも言わないと、どこかへ行ってしまうそうだった。そう考えてしまうのも、アニーから聞いた話がまだ頭の片隅でくすぶっているからかもしれない。

意を決したようにアルレットがルイズを見て、口を開く。

「……あのひとはレコン・キスタ。ウエールズの暗殺と、恋文の回収を狙ってる」

「そんな——」

それ以上、言葉が出てこない。信じてと言った手前だというのに、アルレットの言葉を飲み込むことができない。

「レコン・キスタって、ウエールズ殿下たちの敵……ですよね？」

シエスタの問いに、アルレットはこくりと頷く。

敵。それも、『ハルケギニアの統一』と『聖地奪還』を掲げる巨大な反乱軍で、トリステインを脅かす大敵に違いなかった。

トリステインはレコン・キスタから身を守るためにゲルマニアとの同盟が必要で、その同盟締結にはアンリエッタのしたためた恋文が重要性を持つ。つまるところ、今度の

密命はトリステインがレコン・キスタに対して打ち出した策の一端だった。

レコン・キスタの人間にその密命を授けたとなれば、その策は無意味どころか、彼らを手助けしていると言ってもいい。

「……そう、なんだ」

「信じるの……？」

「疑ってなんかない。それに……なんだか、変わったような気がしてた」

「ワルドが？」

「そう。昔はもう少し、距離が近かった気がする。今はなんだか、仮面をかぶっているというか、掴めないというか……とにかく、昔とは違うのは、なんとなく分かった」

落ち込んだルイズの声を聞いて、アルレットも表情に影を落とす。会話が途切れて暗い雰囲気場面に降りようというところで、シエスタが口を開く。

「……昔は、どんな方だったんでしよう？」

「いつも優しくくて、どこか寂しそうで……でも、大きくて頼りになったし、頼りにしてた」  
「なんだかそれだけ聞くと白馬の王子さまみたいですね。優しくて身長が高くて顔も整ってて、すごいところの隊長で、どこか憂いがあつて」

「……人は歪んでしまうから。みんな、ルイズやウェールズみたいにはなれない」

どうしようもない痛みを抱えながらも、その痛みを真正面から向き合い、正しい選択

を続けることの難しき。ルイズはウエールズに及ばないまでも、魔法が使えない間ずっと、それを続けてきたつもりだった。

けれどもし、春の召喚の儀でアルレットが現れなければ……いずれ、耐えきれないときが訪れていたかもしれない、と思う。

「ウエールズはわたしが守るから。心配しないで」

「うん、わかった。頼りにしてるから」

「あとね、たぶんだけど……あの人はルイズのことも狙ってる、あわよくば」

「え……？ わたし？」

「レコン・キスタに虚無の力が必要みたい。だから、ルイズのこともわたしが守る」

「虚無……」

栄誉を立て続けて、魔法衛士隊の隊長にまで上り詰めたワルド。ずっと昔に両親が交わした口約束の婚約話を覚えていたこともルイズにとって意外だったし、長い間、会う機会も会おうとする努力もなかったのに、今になって結婚を迫ってきたことにも違和感が拭えない。

……裏切られていた。胸が締め付けられるような思いに駆られる。

それでも、目の前で不安そうに表情を曇らせる使い魔を見ると、どうでもいい痛みに思えた。

「わかった。ちゃんと守ってね、使い魔なんだから」

「うん、任せて」

ルイズに頼られたアルレットは、少しだけ嬉しそうに胸を張る。

本当は頼りたくなんてないし、誰かを傷つけたり、傷つけられたりなんてことはさせたくない。けれど、アルレットの居場所が生まれるなら……今はそれでもいい。

「今日はたくさんもらっていいから。わたしのこと、守ってもらうんだもの」

ルイズはベッドに腰掛ける。アルレットは、吸い寄せられるようにルイズに迫った。

そのまま華奢な肩を押して、ふたりでベッドに倒れ込む。もう堪えきれないと息を荒くして、アルレットはルイズの首筋に食らいついた。アルレットは艶やかなブロンドを乱しながら一心不乱にそれを飲み下す。

「いつもどおりですね、わたしの位置も……」

肩を落としながらぼつりとつぶやく。シエスタは折り重なって食事をするふたりを尻目に、食休み(?)の紅茶を入れるべくそつと部屋を出た。

## 32話 『暖かな黎明Ⅱ』

ウエールズはテラスの柵に手をつけて遠くを見やる。夜明けが来ないかと、地平の向こうを睨む。

上着一枚で外へ出たのは失敗だった。やはり早朝のアルビオンは冷える。一度部屋に戻ろうかと考えるも、踵を返すことはなかった。

今日で最後になる。どうしても、訪れる夜明けを見届けたかった。

浮遊大陸アルビオン。ハルケギニアで最も星に近い場所から臨む空。

ニューカッスルは、高潔な意思のもと、心を種として炎を燃やしつづける彼らのためにある。その姿は、今日の日をもって誇りと気高さを持たない灰色の断崖となる。

この城が貴きものの城として最後に浴びる、夜明けの鮮烈な光。栄光と言い換えてもいい。

「誰かね」

風使いのウエールズが、無音の足音を拾う。

足音の主はウエールズの問いに答えない。代わりに、金属の擦れる音を鳴らした。冷えた空気を纏って、白銀の刃が月光を反射する。

ウエールズは懐の杖を握りながらその場を振り返った。懐から手を伸ばし、魔法を発動する直前、杖を向けた人物の正体に戸惑いを覚え、その手を止める。

「まさか、子爵——」

### 3 2 話『暖かな黎明Ⅱ』

早朝。ルイズはまだ日の昇らない時間に目を覚ましていた。

日の昇らない時間とはいえ、アルビオンの地平ははるか上空に伸びている。当然ながら夜明けの訪れは遅く、日の暮れは早い。

勉強するにも道具がないし、勝手に城内を歩くのも気が引ける。朝食までの間、手持ち無沙汰のルイズは備え付けのテラスでぼんやりと空を眺めていた。

ニューカッスルがレコン・キスタの手に落ちたが最後、この特等席でアルビオンの絶景を眺めることも叶わなくなる。夜明けを見届けたら部屋に戻ろうと考えていた。

風の音に紛れて、がちやり、と部屋の方から扉の閉まる音がした。

嫌な予感がする。ルイズはわずかに逡巡した後、部屋へ戻ることにした。

物音で目を覚ましたらしいシエスタが、目をこすりながら体を起こす。その隣に、アルレットの姿はない。

「えっと、ルイズさま……?」

「あの子ね、出ていったのは」

寝起きで理解の追いつかない様子のシエスタを尻目に、ルイズは部屋の扉へ向かう。

「ごめん、ちよつと探してくる」

ルイズは廊下へ出て迷わずに駆け出した。客室が並ぶ階の一つ上へ、階段を駆け上る。

行き先には強い心当たりがある。「頼りにしてるから」……そう、託してしまった。おそらくウェールズの身に危険が迫っているのを察して、部屋を飛び出したに違いない。

案の定、ウェールズの部屋の扉に鍵はかけられていなかった。そして誰もいない室内と、開け放たれたテラスへ続くガラスの戸。

駆け足で室内を横切つて、その向こうへと足を踏み入れる。

そこには、3つの人影があった。

互いの杖を抜いて向かい合うワルドとウェールズ。そしてその間に割り込んでいる、探していた彼女。

アルレットの左手には琥珀色の鞘があった。そして、右手には……抜き身のナイフが握られている。

身を屈めたアルレットが、ナイフを振り抜いてワルドが持つ剣の鐔を叩き、空中へ弾

き返した。

跳ねて飛んだワルドの剣は、テラスの柵の向こう、城の外へと落ちていった。その剣こそワルドの杖であり、メイジとしての彼を無力化した瞬間だった。

「なるほど、やはり君がガンダールヴだったか！」

追い詰められたはずのワルドが、焦りなど微塵も感じさせない表情で声を上げる。

「ワルド子爵！ 一体どういうつもりだ」

「語るまでもないだろう、レコン・キスタはアルビオン王子の首を取り、戦の種であるアンリエッタの文を奪う」

ウエールズは顔をしかめ、ワルドの淀んだ瞳を睨みつける。

「どちらにせよこの首は貴様らに捧げる。何故このような非道な真似を！」

「敵将の首を欲しがらぬ兵士などおるまい、ウエールズよ！」

「ワルド……」

ルイズは拳を握りしめる。アルレットの話したことは、やはり真実だった。悔しさと空虚さが入り混じった行き場のない感情が湧き上がって、喉奥から溢れそうになる。

「ルイズ、君が居合わせてしまったのが残念だ」

「……ウエールズ殿下を暗殺して、何食わぬ顔でトリスティンへ帰ろうというつもりだったのですか」



「いいや。こうして君が手に入らなくなってしまった以上、トリスティンへ戻る理由はない。本当に、残念だ」

「ウエールズ、うしろっ」

アルレットが叫ぶ。背後の上空からウエールズの背中を貫かんと迫る剣。アルレットが弾き返したはずの、ワルドの杖だった。それは担い手もなく、魔法の力でひとりに飛んでいた。

声に反応したウエールズが素早い体捌きで剣をかわす。剣は、何を切り裂くことでもできずテラスの石畳に転がった。

ワルドが転がった剣に手を伸ばそうとするのを、アルレットが体で遮る。代わりにウエールズが剣を拾い上げ、刃をその首に突きつけた。

「裏切り者は貴様ひとりではないな、協力者はどこの誰だ！ 答えたまえ！」

「ううん、ワルドひとり」

ワルドは未だに無手であり、魔法は扱えない。この剣にレビテーションの魔法をかけてウエールズの命を狙った者が別にいるはずだった。

しかし、アルレットはそれを否定する。

「大使殿、何故あなたがそうと言いきれる？」

ウエールズの目は、アルレットを鋭く睨んでいた。

「……っ、これは、風の魔法だから」

アルレットはワルドに向かつて容赦なくナイフを振るう。ウエールズに動きを封じられていたワルドは、為す術もなくその刃を身に受けた。

しかし、切られた場所から血が吹き出すことはなかった。代わりに風が吹きすさび、ワルドの姿ごと夜明けの向こう側へと消えていった。

アルレットとウエールズの2人だけがその場に残された。ルイズはウエールズのもとへ駆け寄る。

「まさか風の偏在だったとは……」

「ウエールズ殿下、ご無事ですか」

「ああ、怪我はない。……そうだ。命を助けてもらったと言うのに、大使殿を疑ってしまった。本当にすまなかった」

後悔に表情を歪めるウエールズに、アルレットはうつむいて首を横に振る。

王子の部屋で起こった一瞬の危機に駆けつけ、明け方の薄暗さの中で飛ぶ剣の存在にいち早く気付き、風の偏在をひと目で見破る。メイジの常識で考えれば疑いの余地がある一連の流れ。頭の回転が早く、風系統に自信のあるウエールズにとってはなおさらだった。

「彼女は、わたしの使い魔で……すこし変わっていて」

「使い魔だって……？ 人間の使い魔にするなんて、聞いたことがない」

「ええ、ルーンもしつかりと。ウエールズ殿下の危機に駆けつけたのも、彼女に特別な力があるからでございませう」

「……そうか、それなら、本当に感謝しなければならぬ。今日死にゆくこの身のため、勇敢にも小さなナイフひとつでスクエアメイジに立ち向かったのだから」

「はい。私の使い魔であることが、とても誇らしく感じます」

アルレットは口をつぐんだまま、照れ隠しにルイズへ体を寄せた。

「しかし……子爵は目的を達していない。すぐに偏在を用意して襲ってくるだろう。とくに、アンリエッタの恋文を持つミス・ヴァリエールを狙って。あの手紙は、彼らに狙われる前に火の魔法で焼いてしまってください」

「し、しかしつ、これは姫さまの、殿下へ向けた大切な……」

ウエールズは無言で首を振る。その瞳に覚悟の色を見て、ルイズは頷くしかなかった。

「……わかりました」

「ニューカッスルを脱出するフネの出港時間も、彼に知られてしまっている。予定を変更してフネを出そう。ミス・ヴァリエールを狙って襲撃がないとも限らない」

「いつごろでしょうか」

「すぐに出す。ついてきてくれたまえ」

そう言って、ウエールズは忙しく歩きだした。ルイズがその後ろに続く。

「……アルレット?」

ルイズが背後を振り返ると、アルレットはウエールズの後に続かず、その場に立ち尽くしたままだった。

「わたしは、ここに残る」

「ミス。どんな事情があるかわからないが……トリステインの大使殿を危険にさらすわけにはいかない」

「わたしは、わたしの勝手で残る。もう密命は終わった」

耳を疑うような言葉だった。ルイズはアルレットの瞳を見る。強く、ウエールズの間を見据えていた。

「今を逃したら、帰りのフネは出せない。それでも残るといいのかい?」

「うん。ルイズは先に帰ってて」

「……アルレット。あなた、わたしの使い魔でしょうか? それに……」

フネがなくとも、アルレットには移動魔法がある。けれどもし、そのための精力が足りなくなってしまうたら……ルイズはそう考えるだけで身が震える思いだった。

たとえアルレットが戦火に吞まれたニューカッスルで生き残ったとしても、ルイズや

アニーによる精力の提供がなければ生きていけない。アルレットをひとりにする  
こと自体が、そもそも許したくないことだった。

「あの人たちの目的には『ハルケギニアの統一』がある。いつかわからないけど、いつか  
トリステインと敵対する。だから、アンはわたしたちに密命を下した、それを遅らせる  
ために」

「そうだけど……まさか、あなた」

「トリステインの敵はルイズの敵、ルイズの敵はわたしの敵。あの人たちを止めるのは、  
早いほうがいい。早く、しないと……血がたくさん流れる前に」

レコン・キスタの兵はおよそ五万。対して、ニューカッスルに残った王党派は三百。  
ウエールズは笑い飛ばそうとするも、アルレットの顔を見て、それが冗談ではないこ  
とに戸惑いを覚える。

「いつかトリステインと敵対するから」なんていうのは口実に違いなかった。アル  
レットは唇を噛み締めながら、「たぐさんの血が流れる前に」と嘆いていた。

アルレットはレコン・キスタやトリステインより、戦争そのものを見ている。もつと  
言えば、人の血が流れることそのもの。

……まるで、元居た世界で人々を悪魔の手から救ったように。

また、ひとりになろうとしている。

「……僕はフネを手配してくる。それまでによく考えておいて欲しい」

そう言つて、ウエールズは部屋を後にする。朝の薄明かりに照らされたテラスでふたりきり、静かに向かい合う。

「ねえ、本当に残るつもり？」

「うん、ここに残る。ルイズはシエスタやアニーと帰つて、危ないから」

「……だめよ、だめに決まつてるでしょう。ふざけないで」

ルイズは思わずアルレットの薄い両肩を掴んでいた。危ないならなおさら、ひとりになんてできない。

強い口調で叱咤されたにも関わらず、アルレットはひるまなかつた。ルイズの目をまっすぐに捉えてはなさない。

「ルイズ、どうやって悪魔が生まれるか、知ってる？」

「……知らない、けど」

きちんと納得してもらうために、何かを伝えようとしている。そう感じたルイズは、アルレットの方から両手を放して、耳を傾けることにした。

「火の魔法は火の精霊に、土の魔法は土の精霊に呼びかける。なら、無の魔法は」

「……それが悪魔だつていうの？」

「そうだけど、そうじゃない。生物が持つ『生の力』そのものが、無の魔法を司る精霊。

それが大地と、海と、空に果てしなく溶けてる。コモンマジックは、自分の体内にあるものを。虚無の魔法は、世界に広がってるものを使う」

「属性のない魔法だけ、他とは違うと思ってたけど」

「おなじ。火は火の精霊がいるから起こる。水は水の精霊がいるから流れてる。生物は、生の精霊がいるから生きてる」

それが書籍やデルフリンガーから得た魔法に対するアルレットの見解らしい。その見解がどう悪魔の話と繋がるのだろう、と接ぎ穂を促す。

「生物は生まれるときに、その『生の力』を世界から取り込んで『生きる』ことを始め、死を迎えるとふたたび『生の力』を世界に向かって吐き出す」

「いつもあなたがもらってる、精力のこと？」

「うん。でも、その『生の力』は、強い嘆きの色で染まってしまうことがあるの。それを宿したひとが命を失って、嘆きの色に染まった『生の力』が世界に向かって吐き出されるとき」

「……悪魔」

「そう、悪魔になる。強い嘆きの意志を宿してしまった精霊。こっちの世界では、そういう生まれないと思うけど。ひとが血を流し続けられ、悪魔はきつと生まれる」

薄々、感じ取っていた。アルレットの接している悪魔は、「生きていない」命の残骸。

たしかに、胸に鼓動を宿して生きていたはずのもので、今は呼吸をしていないもの。

どうしようもない苦しみに慟哭し、それでも報われずに心を黒く染めてしまった命。嘆きの色に染まった『生の力』は、その体を離れるときに、強い意志を持つてしまう。

その意志を宿した『生の力』こそが悪魔だと、アルレットは言う。

「ハルケギニアも、いずれあなたの居た世界みたいに？」

「うん、きつと。悪魔は異物、精霊にとつての毒。精霊がいなくなると、大地も海も空も荒廃して、人に不幸をもたらす。苦しみがさらなる苦しみを呼んで、悪魔が際限なく生まれるようになる……わたしのいた世界は、そうだった」

アルレットのいた世界も、元々はハルケギニアと同じように悪魔の影はなく、系統魔法が栄えていたのかもしれない。

しかし、世界を塗り替えるほどの嘆きが集まってしまった。戦争、飢饉、疫病の時代がそれを招いた。

「……ルイズのいる世界だから。このままずっと、幸せであってほしい。そのためなら、わたしは」

ルイズは口をつぐむ。代わりに出てきたのは、誰に向けたかもしれない文句だった

「どうして、どうしてあなたがやらなきゃいけないの」

「……わたしにしか、できないことだから」



初めて表情を曇らせたアルレットに、ルイズはそつと両手を回す。包み込んだアルレットの体は、わずかに震えていた。

たまらず強く抱きしめていた。この小さな体に、どれだけのものを抱え込んでいるのだろうか。

甘えたがりのくせに、どうしようもないことだけははっきりと線引きしていて、ひとりで抱え込んでしまう。

力を持つものの責任。ルイズが魔法を身に着けた先にあるものと同じ。

ルイズが虚無の担い手として目覚めたら。その時は、大切な人も置いて、戦場で血流することになる。あるいは大切な人ごと、傷つけてしまう。

アルレットはきつと、生まれたときからそうだった。……だから、とルイズは意を決して、気持ちを伝える。

「わたしはどうなつてもいい。アルビオンも、トリステインも……ハルケギニアも。ただあなたとシエスタと、3人で静かに暮らせたならそれでいい。あなたが幸せになつてくれればいいって、ずっと考えてた……」

「そんなの、ルイズが……」

「魔法なんてもういらなくて、決意したの。その代わりたくさん勉強して、貴族として恥ずかしくないような人になる。それでいいでしょう？」

「ルイズ……」

「行かないで。帰ろう、学院に」

静かに、嗚咽が漏れていた。アルレットに強く抱きつかれて、ルイズはその小さな背中を撫でた。

やがて嗚咽が収まるとルイズの体から離れ、アルレットは涙で赤く腫らせた目元を細めて、ルイズに微笑んだ。

眩い日を通して、夜明けが訪れる。茜色が光の速度で地平を染めていく。

「やっぱりわたし、ルイズのいる世界が幸せであってほしいよ」

「……変わらないんだ」

「うん、でも、これで最後にする。ルイズが穏やかに暮らせるように、あの人たちを止める。駄目？」

「……わかった。そのかわり、わたしも残るから。そこだけは譲らない」

「……ありがとう、ルイズ」

アルレットは胸に手を当てて、心に降りてきた暖かさを噛みしめるように、もう一度微笑んだ。

## 33話 『暖かな黎明Ⅲ』

「まさか、あの魔法衛士隊の隊長さまが、ねえ」

「アルレットが警戒していましたから、怪しいとは思っていました」

「そりゃ、ご主人さまを取られて妬んでたのかと」

ルイズがアニーとマチルダにワルドのことを伝えると、考えていたよりも軽い調子で、あっけらかんとした声が返ってきた。

同じロビーに居たシエスタは、昨晚アルレットからワルドについて聞き及んでいたため、驚きもなくその報告を飲み込む。

「わたしは必要でしょうから残ります。元の世界でもずっと、そうしてきましたから。マチルダさんは？」

「まあ、アニーの隣で見物していいこうかね。面白そうだ」

「け、見物なんて、そんな軽々しく言えるものじゃないわ！ 相手は5万よ！」

「返しきれない恩があるんだよ、あの子には。王家への恨みを忘れたわけじゃないが、それとこれとは別だ」

ルイズの非難に、マチルダは大人の表情で返す。これからどんな危険があるかわから

ないというのに、堂々と言い放つその姿が、言葉に表せないほど頼もしく感じた。ルイズはしぶしぶ引き下がりがながら、自分はどうにも姉という存在に弱いのかもしれない、と思った。

「危なくなつたら、あんたらを城から逃してやるくらいはできるさ。それに知つてのとおりに、とんずらには自信がある」

「……分かつたわ。シエスタ、あなたは」

「足手まとい、ですよね。でも、わたしは……おふたりのすることを、見届けたいです」  
「逃がすのがひとり増えたくらいどうつてことない。支えてやんな、勝てる算段があるならあとは心の問題さ」

「は……はい！」

マチルダに背中を押され、シエスタは決意を固めた表情でルイズを見やった。仕方なく頷く。わがままでこの城に残るのは、ルイズも同じだった。

「結局のところ、みんな帰らないのね」

「人望、ですな」

「なんだか嬉しそうね、シエスタ。こんなときだつていうのに」

「当たり前です。ここに残るといふことは、アルレットさまが想われている証拠ですから」

「……そうね。わたしも、あなたも。だから残ったんだもの」

### 33話『暖かな黎明Ⅲ』

朝食の時間は、静かに、そしてどこか晩餐の名残を感じさせながら過ぎていった。

その後、ウエルズに話を通したというアルレットが、城に残った王党派の重役とルイズらを食堂に集めていた。白いテーブルクロスの席にシエスタの淹れた紅茶の匂いがたちこめる。

「お、お口にあうか、どうか……」

「ありがとう」

紅茶を受け取ったウエルズがシエスタに微笑む。まさに王子さま、という笑みに、アンリエッタのことが少しだけ羨ましくなるような気持ちに駆られた。

けれど、命を落としてしまえばそんなことも言えなくなってしまう。シエスタには、アルレットの選択が自分のことのように誇らしく思えた。

「ルイズ、魔法はどのくらい使える？」

「わからないわ。虚無の魔法は、ほとんど使ったことがないし……でも、フーケのゴーレムに使った魔法なら、まだ何度か打てるはず」

昨晚、アルレットには容赦なく精力を持つていかれた。それでも人並み以上の貯蔵量を維持している。これまでの努力を怠らない姿勢が、魔法に目覚めたあとのルイズをさらに一段階上へと押し上げていた。

シエスタが長方形のテーブルをぐるりと回り、紅茶のカップをすべて配膳し終えた。

「ありがとう、シエスタ。今日も、とても美味しいわ」

「恐縮です、アンリエッタさま」

集められた王党派の重役らの視線を集めているのは、最奥の上座に座るアルレットよりも、トリステインの王女、アンリエッタだった。

「それにしても、なぜこの場にトリステインの姫が居られるのだ。一刻も早く、脱出の手引きを」

「父上、それは——」

「アルビオン王、それは私が説明いたします」

アルレットがウエルズを制して、アルビオン王のジエームズ一世へ声をかける。王党派の重役たちが、ようやくアルレットへと視線を向けた。

背の高い椅子に小軀をすっぽりと納めている。ローブもマントも身につけていない、漆黒と真紅のドレスに身を包んだ、昏い瞳の少女。

一声で食堂が静まり返る。その振る舞いひとつひとつが気品を帯びて、存在の尊さを

見る者に顕示している。静かであり、その瞳の奥に心を揺さぶるようなざわめきを感じさせる。

貴い身に許された、場を支配する間合い。王族すらその雰囲気呑まれて言葉を忘れる。

「私はトリステインの使者にして遠い異国の王、アルレット・ド・ゲヘナ。ヴァリエール公爵家の三女、ルイズ・フランソワーズの使い魔しております」

人を引きつける堂々たる姿勢と、ゆったりとした話し方。この場において必要な、人を従わせるだけの威厳を小さな体にまとわせていた。隙をまるで感じさせない。目尻や口角の片隅にすら、一片の弱さも残していない。

演じるのは得意だと言いつ張っていたものの、まさかここまでだとは、とルイズやシエスタは舌を巻く。

「今ここで、トリステインとの同盟を結んでいただきたくこの席を用意いたしました。すでにアンリエッタ女王とウエールズ皇太子には、話を通しております」

「女王とは、まさかアンリエッタ姫は——」

「はい。私は空位となつているトリステインの王座に、即位することを決断いたしました。その上で、ウエールズ皇太子と婚姻を交わし、アルピオンと末永く手を取り合う未来を望みます」

室内がにわかになじめき出す。今日にも消えてしまいかもしれない王室に持ちかけられた、同盟の提案。理解が追いつかない、という者がほとんどだった。

「レコン・キスタはいつ狼煙を上げてもおかしくありません。事は一刻を争います。今ここで、婚姻と同盟を」

「しかし、トリスティンの軍が間に合うはずもない。この同盟に一体何の意味があるというのだ」

ジェームズ一世がアルレットに鋭い視線を向ける。それに対して、アルレットは顔色の一つも変えず、淡々と言葉が続ける。

「アルビオン王であれば、存じ上げておりました。私は王家の血筋であるヴァリエール公爵家の三女と契約した使い魔であり、ガンダールヴのルーンを持つ者」

「まさか、そのような…」

王党派の内、ジェームズ一世だけがその意味を理解し、声を荒らげる。そしてすこしの静寂の後、ぼつりとアンリエッタが口を開いた。

「軍が間に合わずとも、この同盟には意味があります」

「なぜだね、アンリエッタ王女」

「……私、アンリエッタ・ド・トリスティンは、虚無の奇跡がここにあることを、始祖ブリミルに誓います」



虚無の奇跡。その言葉が、ふたたび室内がざわつかせた。同盟の話を持ち出したときよりも騒々しく、話の荒唐無稽さを表していた。

しかし、動揺の矛先を王女に向けることは、ひとりを除いて誰もがためらわれた。アンリエッタはまもなく女王となる身であり、現王であるジエームズ一世と並ぶ身である。

「……失礼を承知で伺おう。そなたは、本物のアンリエッタ王女かね」

「……はい。これがその証明になります」

アンリエッタが左手を胸元に掲げる。その薬指にはめられた空色の宝石の指輪が、確かな輝きを放ちはじめ。そして輝きは、向かいの席に座ったウエルズへ向かって伸びていった。

ウエルズは示し合わせたように、左手を胸元に掲げた。そして、同じく薬指にはめられた、今度は新緑色の宝石の指輪が輝きを放つ。

ふたつの輝きが、アンリエッタとウエルズの間で光の虹をかけた。

王家に伝わるふたつの指輪。その証明は共鳴によって現れる虹を見て行われる。王族であるからこそ否定することのできない、なによりの証明だった。

「水のルビーと、風のルビー……どうやら、邪推であったようだ」

「閣下、すでに追い詰められた我々に対して、このような奸計をかける必要などありません

まい。我々にできるのは、奇跡にすぎないなものでしょう」

ウエールズの隣に座る、老將軍のパリーがジエームズ1世へ言葉をかける。それに対して、ジエームズ1世は深く頷いた。

「しかし、レコン・キスタも虚無の奇跡を名乗っているとの噂もございます。もつとも、真偽は怪しいのですが」

王党派のひとりが言う。アルレットは落ち着きを払った態度でそれに応える。

「ラ・ロシエールで聞き込みを行いました、彼らは虚無の威光を借りて反乱軍を作り上げたと。しかし、私の知る虚無の魔法であれば、王党派の数がわずか300になるまでニューカッスルを攻めあぐねているというのは考えがたいでしょう」

「……虚無の魔法とは、いったいどのような」

「ひとつに閃光の魔法があります。精神力に大きく左右されますが、ルイズであれば、戦場の半分を焼き切ることも難しくありません」

戸惑いながらも、おお、と王党派が沸き立つ。

300の兵では戦場の一角すら落とせないだろう。たったひとりの魔法で戦場の半分を焼き切るというのが事実なら、なるほど奇跡に違いない。

「威光を示して民を従わせようと言うなら、レコン・キスタが使わぬ手はありません」

「だというのに、風の噂に留まっているということは……やはりペテンか」

そのとおりだ、とアルレットが頷く。

「私どもの国も、レコン・キスタの脅威は他人事にございませぬ。ニューカッスルという絶対要塞をハルケギニアの敵に渡してはならないのです。今、レコン・キスタを討たねば」

「身から出た錆だ、他国には申し訳なく思う。アルレット殿」

「では」

「飲もう、同盟を」

その一言で、場の雰囲気が一変する。元々憂う未来もなかった者たちは、その希望に身を委ねて喝采した。

虚無の奇跡。伝説では、王家の血筋に現れるという英雄の再来。

万の軍勢をどうにかできるかはわからない。それでも、来るはずのなかった明日が望めることを喜んだ。

「伝説の再来とは言え、大使殿御一行はお若い方ばかりだ。パリー」

「ええとも、ウエールズ殿下。では、さっそく作戦会議をせねばなりませんな。この老骨が力を貸してしんぜましょう。その間、殿下は」

「手早く婚姻の儀を。我々も部屋を移しましょう」

アルレットが指示を出すように言い放って、席を立つ。それに付き従うようにして王

党派の人間も席を立った。

そんな様子を前にしても、一貫してアルレットの表情に変化はない。そこにあるのは、胸の奥で静かに燃え続ける炎。

「これで最後にする」。アルレットはそう言った。その言葉と決意がどれほどのものであるか、ルイズには手に取るようにわかった。

♪

奇襲作戦という提案に、アルレットは首を振った。提案主の老將軍パリーの言では、王党派に十分な大義があり、後に責められるものではないという。

この戦に、トリステインが加わる理由。それは、この戦を終えた先にあるレコン・キスタや他国の脅威を取り除くこと。

トリステインとの同盟関係を明らかにし、王党派は改めて宣戦布告をする。この戦を制したのが誰であるか明白にすることを、アルレットは作戦の第一条件にした。

望むのは、レコン・キスタの完全なる崩壊とトリステインが有する戦力の誇示。わず

か300の軍が正面から5万の兵を打ち破るさまを、敵將の目に焼き付け、王党派は後に虚無の奇跡を他国に喧伝する。

そして敵対するものすべての意思をくじき、始祖ブリミルの加護を受けた虚無の杖が、平和を望むトリストインと王党派の大義とともにあることを示す。

アルレットがその考えを伝えると、王党派の人間はこぞつて笑いを上げた。嘲笑ではなく、今の今まで考え得なかつた、勝利の展望に対するおかしさだつた。半信半疑ながらも笑みを浮かべて奇跡に身を委ねられるのは、見られる夢は見ようと、最後の瞬間まであかく覚悟があればこそかもしれない。

その後、アルレットの考えを汲み取りながら、パリーを中心に変戦が練り上げられた。わずか300の人員を散らすことはできない。城に残つたすべての者をアルビオンの艦体に乗員させ、陸地を捨てる。レコン・キスタの誇る万の陸兵はすべて意味を成さなくなる。

そして空に躍り出た王党派は、アルビオンで最も堅牢とされる艦体『イーグル号』に虚無の担い手を置き、そこを司令塔とする。王党派の艦隊はニューカッスルの上空を飛び、虚無の力を借りてレコン・キスタの艦隊を打ち倒す。

綱渡りではあるものの、制空権さえとれば、消耗を回復する時間が生まれる。あとは残つた万の陸兵に対して一方的に攻撃を加え、降伏へ追い込むことができる作戦だつ

た。

ニューカッスル城を占拠されたとしても、エクスプロードの魔法であればレコン・キスタ兵だけを一網打尽にできる。

「虚無の担い手の他に、私も空戦に出ます」

「しかし、そなたは武器を扱うガンダールヴとやら。砲撃でも担当しますかな？」

食堂と同様、会議室の上座に着いたアルレットは首を横に振る。代わりに、指先に小さな炎を宿してみせた。

両手に杖はなく、見て分かるのはそれがメイジの扱う魔法ではないということだった。

「先住魔法と……！」

王党派に湧き上がる動揺と、畏怖。ある者は恐怖を、ある者は侮蔑の感情を示す。

アルレットはそれをアメジスト色の瞳で受け止める。そらさずに、強く見つめ返す。

「アルレット、どうして」

教える必要があったのか、とルイズはアルレットに問う。この世界で先住魔法の存在が忌避されていることを、知らないはずなんてない。開戦前に結束が崩れようとしている。

「知られてしまえば忌み嫌われると、分かっております。しかし隠し通せぬこと」

「ガンダールヴの力ではありませんまい。そなたは一体」

「パリー、私が何者であるかはどうか、詮索しないでいただきたく思います。でなければ」

「……力を貸さぬと」

「はい。のちに彼らがトリステインに攻め入っても、私が討ち果たすまで。どれほどの代償を支払ってでも、私は遂げます」

耳を疑うような内容の言葉。しかし、その声音と表情を見れば、それが嘘やハツタリであると微塵も感じさせない。

寶石を埋め込んだような双眸は、わずかばかりも揺らがない。その決意の色は、ウエールズが見せたものに似ていた。

「……同じフネに乗るといふことは、生死を共にするといふこと。覚悟は同じです。」

私は虚無の担い手、ルイズ・フランソワーズによって召喚され、使い魔となりました。始祖ブリミルの手によるめぐり合わせを、どうか信じていただけませんか」

アルレットの言葉を受けてしんと静まり返る中、ジエームズ1世は深く頷く。

「もはや、賽は投げられた。我々は誇りとともに剣を振るうまで。その奇跡が真実のものであるかは、始祖ブリミルのみぞ知るところであろう」

「さようでございます、王よ。成せることを成すまで。どのような結末が待ち受けてい

ようとも」

ジェームズ1世の言葉に、パリーが続く。

そうなれば早かった。王党派は沸き立ち、戦へ挑もうと士気を上げる。あとは剣を取って戦うのみ。

「通達を。正午より、我らは狼煙をあげる」



## 34話 『始祖と魔王』

レコン・キスタが最後まで王党派を攻めあぐねていたのは、ニューカッスルがハルケギニアで指折りの艦隊を備えているからだだった。

そして、その中でも際立つのがアルビオンの誇る艦体『イーグル号』。黒塗りの重厚な船艇が空を滑るさまは、見るものすべてを威圧する。

その甲板を踏みしめると、ルイズの胸にじわじわと実感が湧き上がってくる。今の今まで、アルレットが気にかかってそれどころではなかった。

空に上がれば戦場。ジエームズ一世の言うとおり、賽は投げられた。ふたたび大地を踏むには、未来を勝ち取る他にない。あるいは二度と戻ってこれないかもしれない。

黒いドレスの裾をつまむ。色は少ないものの、フリルがふんだんにあしらわれた華美な衣装。しかし、それは虚無の魔法を助けるものであり、まるで戦士の身につける鎧のようでもあった。

「ルイズ」

背後から声がかかる。声の主は、すぐにルイズの横に並び立った。

「ねえ、疲れちゃった」

「……頑張ったわね」

手を握って、体を寄せる。他にいたわる方法が思いつかなかった。

それでもアルレットは嬉しそうに口元を緩めて、ルイズの肩に寄りかかる。歩きづらは少しも煩わしくなかった。手のひらから伝わる温度が心を暖めてくれる。

「奥の部屋で、シエスタに紅茶でも淹れてもらいましょう」

「うん、一緒にのめ」

「もしかしたら、もう用意してくれてるかもね」

「たしかに。シエスタだもの」

### 34話『始祖と魔王』

風に運ばれていく雲海の向こう、鉄の塊のような戦艦が姿を現す。遠く、雲と比べてはるかに小さいそれは、ずんずんとこちらへ向かって航行してくる。

その背後から、ぽつり、ぽつりと黒色が増えていく。まるで群れたカラスのようだと、ルイズは思った。

イーグル号の甲板からは、ニューカッスル城の姿がはつきりと伺える。高度はないものの、アルビオン大陸がそもそも抜きん出た高地にあたる。ここに来て、改めて空気の

薄さと肌寒さを感じさせた。

「ルイズ。あの艦隊の、乗員の意識だけを刈り取る。できる？」

「……やるわ。やらなきゃいけない」

ひとつの作戦を失敗すれば、それがそのまま全員の死につながる。今まではアルレットがいれば、という思いもあった。

けれど、敵は5万。逃げ場のない戦場で、体力のないアルレットが相手取るには多すぎる。

「パリー、ぎりぎりまで引きつけて。撃ち漏らせば一気に不利になる」

「難しい注文ですが、ええとも、任せてください。『鉄壁』と呼ばれたこの老将軍、全力で応えてみせましょうぞ」

ドレス姿のアルレットに語りかけるパリーは、さながら「じいや」といった様だった。

「それにしても、慣れておりますな？ いやはや異国の王を名乗るだけではありません」

「……詮索？」

「とんでもない！ 若い身で無理を貯めすぎると心を歪めてしまう。せめて、この老骨の前では気張らなくとも良いと、お伝えしたかった」

「……あなた」

パリーはルイズですら目を疑うようなアルレットの変わり身を見抜いていた。その

事実に驚愕を隠せない。

「……王族というのは、幼い時分から背負わねばならぬものが多すぎる。ウエールズ殿下もそうでございました」

「ウエールズも……」

「そう。であるからこそ、ウエールズ殿下をお救いください、想い人との婚約を授けてくださった大使殿御一行には感謝が尽きませぬ。この老骨、必ずや期待に込めてみせましょう。この灯火が消えるときまで」

「ありがとう、パリー……わたしも、応えるから」

「やはり、年相応の表情が一番美しく見えるものですな」

そう笑って、パリーは踵を返してその場を後にした。そしてすぐに、甲板の向こうから船員に檣を飛ばす声が聞こえてくる。ついに敵の姿が現れたと、ますますイーグル号は慌ただしくなる。

「元気なおじいさんね」

「うん、好き」

「じゃあ勝たなきやね」

「うん。ウエールズも、パリーも、死なせない」

アルレットはルイズに向き直り、細い肩をそっと抱いた。それに応えるようにルイズ

はアルレットの腰に両手を回して、長いまつげの下の、アメジスト色の瞳を覗き込む。そしてお互いが示し合わせることもなく、唇を合わせた。

ルイズの中に、暖かいものが降りてくる。アルレットの精力がルイズの血になつていく。

見えるはずのないものが、聴こえるはずのない音が、そこにはある。唇が離れると、それがはつきりと感じられた。

「ねえ、どうしてアルレットは精霊や悪魔と言葉を交わせるの?」

「……半分くらい、同類だから。本当にそれだけ」

「そっか。じゃあ今は、わたしも同類ね」

茫洋と広がる空の海に満ちている。世界を形作るための力。

大地が広がり、水が流れ、火が燃え、風が吹き、生が芽吹く。そのための理と、存在。それと言葉を交わせるのは、同じ存在以外にない。

ふたたび甲板の先頭に並び立ち、遠くの空を見据える。はつきりと艦体の形が見て取れるほど、その群れはイーグル号に迫っていた。

ごうごうと風が唸る。冷たさが頬に裂けるような痛みを与える。血液が指先に集まり、両足で立っている感覚が失われていく。

「最後尾に一番大きい艦体。たぶん、司令塔のいる『レキシントン号』」

「大丈夫、届く」

「うん。ルイズを信じる」

アルレットがルイズの左手を取る。あたたかくて柔らかな感触がした。まるで日向のような心地よさで包んでくれるその手を、ルイズは大切に握り返した。

「大使殿！」

後方からパリーの声が聞こえた。これ以上近づけば、敵の艦隊から集中砲火を受けてもおかしくない。「時間が来た、限界だ」という合図だった。

ルイズは杖を持った右手を前へ突き出す。杖はルイズの右手からするりと落ちて、イーグル号の下、地上へと落下していく。無用の長物を、ルイズは今度こそ捨て去った。

意識を塗り替える。平民を従わせるのは貴族、貴族を従わせるのは王族。しかし、今ルイズが従わせるべき相手は人ではない。虚無を司る精霊、人や動物に命を吹き込む『生の力』。彼らを扱う力は、虚無の担い手として選ばれたルイズに備わっている。あとは、対話するだけ。その手助けをしてくれるのが、彼らを従えるための意識。

アルレットは相手の瞳を覗き込むだけで、その内に秘めた『生の力』と対話して、相手の考えや本質を読み取ってみせる。アルレットの力を借りた今でも、ルイズはそれに遠く及ばない。

けれど、今この瞬間、やることは至極単純だった。

「エクスポーション」

爆ぜろ。無表情に、しかし心の中で炎を燃やしながら、そう命令を下す。

ルイズの指先から生じた光が、青い空にほとばしった。それが生命の力の波濤なら、その光がなにをもたらすかも、ルイズの思いのままだった。

奇跡の名にふさわしい極光は、流れ星よりも短命に、蒼穹へ吸い込まれて消えた。

風がひとときわ唸った。沸き立つ乗員の声は、ひとつ残らずかき消される。イーグル号の帆が喧しくなびき、突風に横殴りにされた船体がぐらぐらと空を泳ぐ。

これだけの衝撃があつて、レコン・キスタ艦隊に損傷は見られない。しかし、その変化は一目瞭然だった。

やがて風が止むと、イーグル号の乗員はその成果を確認した。

レコン・キスタの艦体がひとつ残らず前傾している。空に浮かぶ巨大な鉄の塊たちは、操縦者を失い、宙を滑るようにして緩慢に落下していた。ルイズの虚無の魔法は、空のレコン・キスタ軍をたしかに葬り去っていた。

このまま行けば、レコン・キスタ艦隊はイーグル号の下を通り、地上のニューカッスル付近に墜落する。丈夫な戦艦が低速で不時着したところで、艦体そのものはまず損壊しない。しかし、衝撃でその場から投げ出されるであろう乗員のほとんどは、無事でないに違いないことが違った。

「虚無だ、本物の！ 奇跡の担い手だ！」

「大義は我らにあり！」

騒ぎ立てる王党派の貴族たちの声が、ルイズの耳には遠く聞こえる。

この作戦にはまだ続きがある。繋いだ左手を握ると、アルレットがそれを強く握り返した。

「アルレット」

「うん、大丈夫。ルイズを人殺しになんてさせない」

イーグル号の船員たちは、ルイズが相手空軍を無力化したことで沸き立っている。

仮に王党派が虚無の力を借りて大勝したとして、力を持った先にあるものは、同じ戦争に違いない。

ならば、どちらの陣営にも付かず、あらゆる人間の上に立つ者として争いを終わらせる。

ルイズの目的は栄誉でも、金銭でも、戦うことでもない。すでに杖を捨て去った自分にとって、すべて価値の無いものに思えた。

だから、この空の上で目指すことは、戦争の勝利ではない。この理想が始祖と魔王、ふたつの奇跡と共にあることを、レコン・キスタ軍だけでなく、王党派の目にも焼き付ける。



アルレットが左腕をゆっくりと持ち上げ、天上を指差す。異変は音もなく訪れた。

……沼が広がっていく。すべての光を飲み込むような闇色がイーグル号の真下から伸びて、大地を犯していく。まるで絵画の上に乗せられた、黒い絵の具のようだと思う。光を反射しない黒い沼は、起伏も斜面もある大地を、まっさらな平面に変えていった。その黒い沼から、同じ闇色の腕が伸びていた。光を反射しないそれを判別できたのは、青い空の上に、巨大な腕の形が影絵のように映し出されているからだだった。

その腕はニューカッスルの手前にある小山を掴み、沼の底から這い上がろうとしていた。

やがて腕の握力に耐えきれなくなった小山は、まるで砂の塊のように崩れ去った。しかしその腕を持つ巨人にとっては瑣末ごとだった。崩れた瓦礫に手のひらをつき、腕力だけでその体を持ち上げていく。

首のない、闇色の巨人だった。

大地に降り立った彼は上体を大きくそらし、声ではない声で吠える。彼に首があるなら、空を仰ぐような動きだった。彼の発した音は大気を震わせ、水中で聞くようなくぐもった叫び声を大陸に響かせた。

「……あれ、前にフーケからわたしたちを助けてくれた」

「うん。ジャバウオック。『嘘つきの悪魔』」

フーケを捉えた際に、そんな言葉も聞いた気がする。アルレットの話によれば、あの巨人は嘘を塗り重ねた末、心を歪めて命を落としたものが成る悪魔の姿だった。

いつのまにか、大地に広がっていた闇色の沼は消えていた。

彼はアルレットの方を一瞥するような仕草を取り、イーグル号と肩を並べた。辺りの山々よりもずっと巨大な体を、緩い速度で落下していくレコン・キスタ艦隊へ向ける。

大樹を束ねたような腕を、ひとつの艦体へと伸ばした。そして、その鉄で覆われた装甲を鷲掴みにする。

どんな暴虐が始まるのかと、戦場にいる誰もが震えながら彼の行動を見守った。しかし彼は、掴んだ艦体を投げるでも握りつぶすでもなく、ゆっくり、ゆっくりと大地に向かって降ろし、船底をそつと森の木々に乗せて、手を離れた。

それから、彼は残りのレコン・キスタ艦体を同じように『撃墜』させた。ひとつ、またひとつと敵の戦艦が地へ落ちていくのを、王党派の船員は啞然としながら、言葉も忘れて見送った。

空からレコン・キスタ艦隊が消え失せ、王党派艦隊だけが残った。

人死の出ない方法で、ルイズとアルレットは、レコン・キスタ艦隊を全滅させた。そ

れは空に逃げ込んだ王党派に、レコン・キスタは一切の手だしも出来なくなったことを意味する。

騒ぎ立てるイーグル号の船員を背に、ルイズはアルレットの肩を抱いた。アルレットの切りそろえられたブロンドの前髪の下、白く透き通った額に、玉の汗が浮かんでる。

「……大丈夫」

「そんなわけないでしょ、はやく休まないと」

「あの子を、還してあげなきゃ」

アルレットがルイズの腕を離れる。そして、ふたたび天上を指差して、地上に闇色の沼を広げていく。

……あれが、召喚や移動で使うゲートのようなものなら。アルレットにかかる負担は、相当なものに違いなかった。

倒れかけるアルレットの体を支えながら、もどかしさをこらえてじっと待った。巨人は、沼の闇に吞まれるように沈んでいき、ハルケギニアから跡形もなく消え去った。

空が広くなったような錯覚を覚える。やがて闇色の沼もそこから消え去ると、今まで  
の光景が、すべて幻だったのではないかとすら感じてしまう。

「頑張ったわね、アルレット」

完全に脱力したアルレットの体を受け止めて、ルイズは汗で濡れた前髪を優しく撫で

つけた。

アルレットは赤い頬をして、目を細めて笑う。

「ふたりにで頑張った」

「……うん、ふたりにで」

強い疲労感。それを心地の良いものにしてくれる、アルレットの体温。

空の青色がこれほど清々しく感じるのは、初めてだった。しばらくアルレットの体を抱いてこのままでいたい。そんなふうに思った。

嬉々としたイーグル号の船員たちの騒ぎに、どこか不審な色が加わったのは、ちょうどその時だった。

アルレットが身を起こして、甲板の手すりから地上を見下ろす。ルイズもそれに続いた。

空を翔ける一頭のグリフォンだった。ニューカッスルの城の方角、ほとんどイーグル号の真下。ちょうど、どの艦体も大砲の経口を向けることは難しいルートを飛んで、そのグリフォンはぐんぐんとこちらへ向かっていた。

グリフォンには、何者かが騎乗している。その顔を見ようとルイズは目を凝らした。

騎乗している人間の正体がようやくわかった時、すでにグリフォンはイーグル号の間に迫って、今にも甲板に飛び込んでくるところだった。

「ワルド——」

ルイズは慌てて魔法を使おうと身構える。しかし、グリフォンのスピードは想像以上だった。何かを思考する猶予もなく、イーグル号の真横からルイズとアルレットに飛びかかってきた。

「ルイズっ！」

アルレットが叫んだ。左手にはナイフが握られて、ガンダールヴのルーンが輝きを放っている。上昇した身体能力を頼りに、ルイズの懐に飛び込んでその体を吹き飛ばした。

グリフォンは標的をひとり失ったものの、凄まじい速さで滑空してもうひとりの標的へ襲いかかった。アルレットは反射的にナイフを構えて、どうにかグリフォンの爪から身を守ろうとする。

しかし、グリフォンの爪が刃に触れた瞬間、ナイフは砕け散りながらアルレットの背後へと弾き飛ばされていった。

「あ——」

ルイズはその光景を、どこか信じきれない気持ちで見送った。

グリフォンの爪がアルレットの肩を深く突き刺す。そして滑空した勢いのまま、血の跡を残しながら甲板の上を引きずっていく。やがて向かいの手すりにアルレットの体

を叩きつけて、グリフォンはふたたびイーグル号の真横の空へと飛んでいった。

視線をアルレットに戻せば、肩口から流血しながら、手すりに体を預けてぐったりとしている。ルイズはその場から弾かれたように駆け出していた。

膝をついてアルレットの表情を覗き込む。眠りにしているような顔は、透き通るような蒼白色をしていた。

……呼吸をしていない。

ルイズは精神力を惜しみなく注ぎ込んで、水の魔法をかける。傷口は徐々に狭まっていくものの、息は戻らず、顔色は悪化する一方だった。

「たらない！ だれか、だれか治療を手伝って！」

「僕が」

ルイズの背後から現れたのは、険しい表情をしたウエールズだった。すぐに懐から杖を取り出して、ルイズとともに水の魔法をかけ始める。

見れば、すぐ傍にシエスタやアニー、マチルダの姿もあった。シエスタは涙をぼろぼろとこぼしながらも、目をそらさずにその光景を受け止めていた。

アニーとマチルダのふたりは、イーグル号の船員とともに、空のグリフォンを警戒しながら身構えている。

今すべきことは、ワールドを捕らえること。ルイズとアルレットを失えば王党派は一気

に優位を失い、敗戦は間近になる。

それこそワルドの狙いに違いない。消耗したところを強襲し、隙をついてふたりの命を奪う。残るのは、わずか300の雑兵。

人差し指を強く噛んで、ためらいなく皮膚を穿つ。そして、血が流れ出る指をアルレットの口に咥えさせた。

空いた方の手で、ふたたび水の魔法をかける。ルイズは、この先必要になるであろう力も出し切つて、アルレットの治療に当たった。さらに消耗を重ねれば、ワルドの思う壺かもしれない。それでも、ルイズは力を使い続ける。

「ねえ、お願い」

死なないで。言葉にせず、涙をこぼしながら懇願する。

彼女がいなくなつてしまったら、どうやって生きればいいのかだろう。彼女の存在に代わる「生きる目的」は、どれも見劣りしてしまうから、手に取りたくない。魔法も、名誉も、今さら欲しくない。

その傷ついた心が、どうか安らかでありますようにと。彼女の側にいて、願いながら生きる。この旅の中で、そう決意していた。だというのに。

「ルイ、ズ……？」

アルレットがルイズの指を吐き出して、うつすらと瞼を開いた。蒼白な顔は、信じら

れないほど綺麗で、作り物のような顔立ちをしていた。

金の糸を束ねたようなブロンドと、……青い、瞳。ラピスラズリの欠片。

どっと安堵感がこみ上げる。失われた血の気が戻ってくるような感覚だった。

「よかつ、た……」

「ルイズ……?」

かすれた声。焦点の合わない瞳で、アルレットは目の前に居るはずのルイズの姿を探していた。

「見えない、の?」

直前までアメジストのようだった瞳が、青色に染まっている。

あるいは、紫色がそこから抜けていた。

今まで接していたアルレットと、どこか決定的に違う。

瞳の色がそうまで印象を左右するはずがない。それ以外の何かが違うはずだった。

「聞こえる? アルレット」

「……おかあさま」

見えていないし、おそらく聞こえていない。しかし、アルレットの瞳は確かに何かを見ている。

背後を振り返れば、風の遍在で分かれた4人のワールドが、アニーとマチルダを相手に



攻防していた。羽根帽子の下に覗く血走ったワルドの瞳は、わずかの隙でも逃さずに、ふたりの首を取らんとこちらを睨みつけている。

しかし、すぐにその表情は変わった。ある一点を見つめて、動かなくなる。それはイーグル号の甲板に居るすべての人間が同じだった。

闇色のもや。煙のようにも見えるが、空気のような軽さを感じさせない。それには、重さも形もなかった。甲板の中央で、言い知れぬ気配を放ちながら、海で揺れるくらげのようにたゆたっていた。

アルレットが青色の瞳で見つめているのは、まさしくその闇色のもやだった。

静寂。誰もが我を忘れて呆然とする中、ワルドひとりが素早く動き出す。周囲の景色が、わずかに揺らいだ気がした。

## in deep darkness "Shaytan"

赤い絨毯の上、若い王の隣を歩くさまは添えられた百合の花のようだった。ふたり腕を組み、目を合わせては仲睦まじく笑う。お似合いの夫婦だと民は暖かく見守った。

この日、若くして王位を継いだヨハンと、国で最も美しいとされる町娘のアリアンヌの結婚式が行われた。薄化粧に派手な衣装で着飾ったヨハンが、宝石の指輪をアリアンヌへと捧げた。絶世の美しさを伴った笑みで、アリアンヌはそれに応えた。

ヨハンとアリアンヌが恋仲であることが表沙汰になると、貴族たちはにわかに騒然としたものだった。アリアンヌの至上の美貌は貴族たちの耳にも届いていたが、彼女は城下町に住まうただの町娘である。貴族から見れば、卑しい平民と同じだった。

しかし、ヨハンはアリアンヌの家の家系図を持ちだし、貴族らにアリアンヌが王族の落胤の子孫であることを示した。そうして貴族らはしぶしぶ引き下がり、平民から絶大の支持を持つ美女のアリアンヌとの婚約が認められることになった。

若き王であるヨハンは、貴族らの信用と引き換えに、平民からは多大な信頼を得た。そののち、有能な貴族がそうしたヨハンの先見性を説くと、貴族らの信用も蘇り、皆が

王の治世に喝采したのだった。

——これは、表の話である。ヨハンとアリアンヌは、結婚式を上げるまでにただの一度しか顔を合わせていなかった。

早朝、アリアンヌは日課の水汲みをしているところにローブの女から声をかけられ、城の裏口からヨハンの自室へと連れて行かれた。ローブの女がフードを取ると、ラピスラズリで染め上げたような青色の長髪と、つややかで若々しい美貌があらわになった。啞然とするアリアンヌを気にも止めず、ヨハンは女に寄り添いながら親しげに話す。アリアンヌは、王には誰にも知られぬ恋仲の相手がいるのだと知った。

しかし、席に着いたヨハンの口からこぼれたのは、予想外の言葉だった。

「君には私と婚約してもらおう」。それは有無をいわさない口調で、身勝手にアリアンヌの運命をねじ曲げた。

そうしてアリアンヌは強いられた演技で赤い絨毯を歩き、誓いのキスをし、ヨハンとの虚飾の関係を作り上げることになる。拒絶した先にはどんな仕打ちが待っているかも知れない。ただの町娘であるアリアンヌには王の言葉に逆らうことができず、加えて実家に多額の金銭を恵むというのだから彼女は黙っている他になかった。

アリアンヌには思春期の頃からの想い人がいた。それは、騎士団に所属するレイモンドという七つ年上の貴族の青年だった。

アリアン又は学校に通いながらも実家の店の手伝いをしており、休日の昼間に騎士団の屋舎へとパンを届けることがあった。アリアンがレイモンドと出会ったのはその時である。

レイモンドは騎士団長のノエルの一人息子であるが魔法や剣の才に恵まれず、騎士団に入団できたのも親の七光りだと嘯かれていた。対するアリアンは、何でも要領よくこなすと大人に褒められ、学校での成績は常に上位、美貌はその頃から多くの男の目を引いていた。平民の中でも裕福な生まれの元、一人娘のアリアンは両親から溺愛される。アリアンが店に顔を出せば客足も増え、あれが欲しいといえれば男たちは喜んで財布を差し出した。次第にアリアンは男というものを見下すようになり、女に対しては優越感を覚えるようになった。落ちこぼれと呼ばれるレイモンドに対してはことさらに、純朴な町娘を演じながらも内心では冷ややかな目で見下していた。

ある日の夜、アリアン又は父とともに騎士団の屋舎へパンを届けるよう言い遣わされる。天候の影響で備蓄の食材が尽き、夕食が用意されなかったのだという。アリアンは面倒に思いながらも両手に紙袋を抱えて父の後を追った。

そして、屋舎の外でひとり一心不乱に剣を振るレイモンドと出くわした。滝のように汗を流しながら屈強な体を動かし、真剣な眼差しで前を見据える。汗なんて汚らわしいもの、アリアン又はそう思っていた。しかし、その腕に巻かれた血の滲む包帯を見てア

リアンヌは顔色を変え、レイモンドの体にすがりながら剣を止めるよう懇願した。

その日からだった。どうしてだか、陰口を叩かれても暗い表情の一つもせず、何喰わぬ様子でパンにかじりつくレイモンドの顔が浮かぶ。リアンヌは生まれて初めての決心をして、彼に話しかけてみようと思った。

どうしてここまで頑張れるのでしょうか？ 血豆だらけの手を取って、リアンヌは問いかけた。その間に彼はただ、父のようにになりたい、とだけ答えた。

多くの人々を救ってきた英雄のノエルとレイモンドとでは天と地ほどの差がある。それでも彼は、真つ直ぐな眼差しで言った。実らない努力を続ける理由も、苦惱から逃げ出そうとしない姿勢も、リアンヌには分からなかった。

分からないからこそ、知りたいと思った。真つ直ぐな眼差しが心に焼き付いて、焦燥のような胸のざわめきが収まらない。彼の隣にいて、彼を理解するたびに、ざわめきが大きくなっていく。

しばらくして、あの日と同じように夜の時間にパンを届けることになった。そして、同じように汗を流しながら剣を振るレイモンドと出会う。用意してきたタオルで額の汗を拭ってやると、レイモンドはリアンヌに初めて笑みを見せた。

そのときの胸の高鳴りを、リアンヌは今でも覚えている。生涯に一度の初恋を意識した瞬間だった。

アリアン又は皮肉な話だと思った。

名もない町娘と、貴族の騎士。身分違いの恋に、アリアン又はレイモンドへ自分の気持ちを持ち打ち明けられず五年が過ぎた。どんな美男の甘い言葉もアリアン又は届かない。絶世の美しさと謳われた彼女は、ただの一度も男性との交際をしなかった。それがどうだろう。すべてをあざ笑うように、王の妃という身分がアリアン又はの元へと降りてきた。恋に懊悩したすべての時間を、ヨハンはいともたやすく踏みにじつたのだった。

城で暮らすことになったアリアン又はは、それでも騎士団の屋舎へ通い続けた。アリアン又はを身勝手に扱ったヨハンは、自室でローブの女と身を寄せ合っている。それは内にくすぶる反抗心だったかもしれない。町ではありつけなかった高級な料理を堪能し、ヨハンの持つ資産から上質なドレスやネグリジェも手に入れるなどの贅沢を尽くした。

ある日、アリアン又はは衛兵を介してヨハンの部屋へと呼びつけられる。普段は持ち前の演技力で妃らしい振る舞いをこなしていたが、ヨハンの前では慇懃無礼に、レイモンドの前では乙女のように様変わりする。その日も例外ではなく、アリアン又はは好きでもない彼から呼び立てられたことに口を尖らせ、どんな皮肉を言つてやろうかと考えを巡らせていた。

しかし、ヨハンの部屋で出迎えたのは彼との恋仲らしいローブの女だった。女はまるで部屋の主のように堂々と豪華なソファに腰掛け、アリアン又はに向かって言い放った。

「レイモンドと子を成しなさい」

「それは、いったいどういうことでしょうか？」

「王は虚無の子を悪魔に仕立て上げるつもりなのです。あなたの子が虚無であつてはなりません」

アリアンヌは信じられない思いで女の話を聞いた。ヨハンはアリアンヌと子を成し、悪魔の力を手にしようとしている。虚無の血を受け継ぐ赤子の命から、悪魔を作りだそうというものだった。これはそのための婚約であると、女は語った。

女は賢者ノエリアを名乗った。透き通るような青髪と一点の曇りもないつややかな美貌。百年以上も変わらぬ美貌で教皇の座に座り続ける、決して偽ることの許されない賢者の名前。彼女の編み出す聖具は悪魔を退け、あらゆる国で人々を悪魔の手から救った英雄として崇められる存在であり、この国の平和も彼女の聖具によつて成り立つていると言つても過言ではなかつた。

ローブの中から取り出された教会の首飾りを見ると、アリアンヌの猜疑の眼差しはまたたく間に消え去り、顔色が蒼白になる。そこには身に付ける者の教皇位を証明する紋章が刻まれていた。

「わざわざ御身を疑つてしまったわたしをどうかお許し下さい」

「かまいません。明日にもレイモンドの元へ向かうのです。婚約した王族は次のマル

「デイグラの日に子を成すしきたりがあります。それまでにあなたはレイモンドの子を身ごもっていないければなりません。忌まわしきヨハンの子と、レイモンドの子をすげかえるのです」

「わかりました、賢者さま」

「この秘薬を授けましょう。虚無の力は生命そのもの。ふたりがそれを口に含めば、神はかならずやあなたに祝福の子を授けるでしょう」

「感謝いたします」

「アリアンヌ。虚無の子を悪魔にしてはなりません」

千年を生きたといわれる賢者を前に、アリアンヌは恭しくかしずいた。

レイモンドはアリアンヌの言葉を一片たりとも疑わなかった。五年の堰が解かれたアリアンヌは、吹っ切れたようにレイモンドへ恋慕の情をぶつける。ヨハンへの恐怖がアリアンヌの心をひどくかき乱していた。

レイモンドへの恋が芽生えたあの夜は、悪魔が生み出したものといってもよかつた。食材の備蓄が切れたのは隣町で発生した半月も降り止まない大嵐のためである。戦争も紛争もないこの国で血を流すのは、暴漢か怪異によるものと決まっている。アリアンヌが夜に騎士団の屋舎へ食料を届けることになったのも、レイモンドが腕に包帯を巻いていたのも、原因はひとつしかない。



悪魔に恐怖心を抱かない人間は少ない。居るとすれば、もはや彼らと同じ類の存在か、心を病んでしまった者だろう。たとえ焦がれるような恋の原因になったとしても、アリアン又は悪魔を生み出そうと言うヨハンの企てに身を震わせずにはいられなかった。

それから謝肉祭が訪れるまで、アリアン又は毎夜レイモンドの元へと通い続けた。賢者の許しのもとで行われる不倫行為はふたりに背徳感を与えず、恐怖から目を背けるように欲望のまま互いを求め合う。抑圧され続けたアリアン又にとつて、それは熟れた桃のように甘美な日々だった。

ふと現れては消える名も知らぬ焦燥に首を傾げながらも、時は過ぎてマルデイグラの日が訪れる。賢者の話であれば、ヨハンは今日のうちに必ず子を成そうとアリアン又を部屋へ呼びつけるはずだったものの、夜がふけても一向に声がかからない。何事もなくマルデイグラの日が終わり、このまま時が経てばレイモンドの子を身ごもっていることが知られてしまう。深夜になると、焦りにかられたアリアン又は自らヨハンの部屋を訪れた。部屋からは人の声と物音がしており、扉は施錠されていない。おかしいと思ったアリアン又はドアの隙間からこっそりと部屋の中を伺うと、その光景に全身が栗立つような感覚に襲われた。そして部屋にいるヨハンへ一声もかけず、そこから漏れる嬌声を後に、震えた足で誰にも気付かれぬよう自室へと逃げ帰るのだった。

ほとんど眠れずに夜は明け、アリアンヌが隈を作りながら朝食の席につくとメイドがひっそりと気遣わしげに話しかけてきた。

「そのひどい顔、さてはヨハンさまと何かあったのでしょうか？」

「いいえ、なにも」

「婚約してから初めてのマルデイグラの日ですから、なにもないわけがございません。子を授かるのに、恥ずかしがることはいないのでですよ」

「いいえ、本当に、本当になにもなかったのです」

「まあまあ。無かったことにしたいほど、ヨハンさまにお怒りなのですわね」

同じ平民の身分だったアリアンヌに、メイドは気安く笑いかける。しかし、アリアンヌは曖昧に誤魔化すしかなかった。アリアンヌは昨晩、ヨハンからの誘いがかからなかったことに不安を覚えたが、王族がマルデイグラの日に子を成すという賢者の言葉は偽りではなかった。しかし、それがどうでもいいと思えるほどに今のアリアンヌの精神は憔悴していた。

時が経てばアリアンヌの腹部のふくらみはごまかしが利かなくなっていく。婚約の日から、アリアンヌはヨハンとキスの一度もしていない。間違はなくそれはレイモンドとの子であり、アリアンヌはヨハンに知られてしまうことを恐れ、食事が喉を通らないままでになっていた。目元に隈を作りながらうつむきがちに生活する様は城のいたると

ここで話の種にされた。これではヨハンに問い詰められてしまうとアリアンヌが怯えていたところで、ヨハンは突然、外交のために遠くの国へ遠征に繰り出すと言い出し、城からしばらく姿を消したのだった。

一度は安堵したものの、その頃にはアリアンヌの腹部のふくらみは見て取れるまでに大きくなり、城のものたちは揃ってアリアンヌを祝福した。やがてアリアンヌが身ごもった事実は城の外まで伝わり、王の子が生まれると国中が沸き立つことになる。もはや取り返しの付かない状況にアリアンヌはいっそう目元の隈を濃くして苦悩した。

アリアンヌがとうとう産気づこうかというころ、まるで示し合わせたかのようにヨハンは城へと舞い戻る。帰還の報せを聞いたアリアンヌは自室のベッドでただ震えていた。日が落ちると、ヨハンは一室の自室を訪れ、鬼気迫る表情でベッドの上のアリアンヌへ詰め寄った。

「聞いたぞ。子を身ごもったとはどういうことだ！」

「ごめんなさい、ごめんなさい」

「謝って済む問題じゃない。私にどこの誰とも知れぬ猿の子を愛せというのか、忌々しい！」

激高したヨハンは端正な顔を赤くしながら怒鳴り上げて、毛布に身を隠そうとするアリアンヌをベッドから引きずり降ろす。ヨハンは泣きながら謝罪の言葉を繰り返すア

リアンヌへ執拗に暴力を振るつた。

「これで済むとおもうなよ。汚らわしい女め」

息を荒くして部屋を後にするヨハンを、リアンヌはうつろな目で見送つた。リアンヌの顔や腕に目立つた傷はないものの、妊婦服に隠れて見えない箇所には青あざが広がっている。それは大きく膨らんだリアンヌの腹部も例外ではなかった。

そのまま起き上がることが出来ず床の上で寝入っていたリアンヌは、強烈な吐き気と腹痛に目を覚まされる。窓の外には変わらず暗い闇が広がっており、未だ夜が明けていないことを示していた。

リアンヌが視線を下にやると、ヒールの足が自身の腹部を蹴りつけていた。ヒールの主はリアンヌが目覚めたことに気付き、暗闇の中で口角を釣り上げる。そして部屋の外に向かつて何事かを叫ぶと、扉から兜と甲冑を身にまとったひとりの兵士が現れ、リアンヌの体を横抱きにした。部屋を後にするヒールの主を追つて、兵士はリアンヌの体を抱えたまま暗い城内を歩き出す。やがて月明かりも届かないじめじめとした空間でヒールの主は立ち止まり、兵士はリアンヌを冷たい石畳の上へと優しく転がした。強烈な吐き気と腹部の痛みにリアンヌはそれまでわずかも抵抗できなかった。

石造りの空間に反響するヒールや息遣いの音と、血液やカビの臭いが籠った空気に、リアンヌはここが城の地下牢であることを察する。兵士が壁がけのカンテラのひと

つに火を灯すと格子の銀色が照らされた。

アリアンヌは困惑し、青いヒールの主を見上げる。自分と同じように大きく膨らんだ腹部と、ドレスのような青色の妊婦服。そして、賢者の証である透き通った青髪がそこにあつた。

「どうして……」か細い声でアリアンヌは賢者ノエリアへ問うた。

「マルデイグラの日、ヨハンの部屋を覗いてもらえたかしら」

「あなたのせいで、あなたのせいでわたしは、お腹の子は……」

辺りに警備もなく鍵のかかかっていない扉に、廊下へと漏れる女の嬌声。王の自室というにはあまりにも不用心だった。そのような作為的な状況において、アリアンヌがヨハンの部屋を覗くのは必然の出来事だったと言つてもいい。

ノエリアは気味の悪い笑みを浮かべながら、アリアンヌの腹部を青色のヒールで踏みつける。アリアンヌの口から力ない悲鳴が漏れた。

「あなたは悪くありません。あなたはただ、賢者である私の指示を聞き入れただけなのですから」

「悪魔のようなあなたが、賢者であるものですか」

「ええ。三日前、私が生まれてちょうど三百と三十年になりましたが、どんな秘術を用いたとしても人間は三百年も生きられません」

まるで自分が人間で無いかのようなノエリアの言葉に、アリアンヌはぞつと身を震わせる。

ちやうどその時、ノエリアの背後で兵士が剣を抜いた。そして、無駄のない洗練された動きでノエリアの背に剣を振り下ろす。甲冑が擦れる音だけが無音の地下牢に響き渡った。

剣は確かにノエリアの背を切り裂いたように見えた。しかし、ノエリアは無表情のままアリアンヌを見下ろしている。蒼色の妊婦服が派手に裂けているもの、血の色はノエリアの体にも剣の刃にも見当たらなかった。

「ヨハン！」

ノエリアが叫ぶ。地下の牢獄に疾風が吹きすさんだ。アリアンヌがまぶたを開けたときには、兵士は地面へ倒れ伏していた。兵士の兜がごろごろと石畳を転がっていく。アリアンヌはうつ伏せになった兵士の髪型に見覚えがあった。

こつり、こつりと足音が近づいてくると、アリアンヌは反射的に顔を上げた。そこには杖を右手に持ったヨハンの姿があった。

「ノエルの子とはいえ、王の妃に手を出した者には極刑を与えねばならなかった。諦めてくれ、アリアンヌ」

ヨハンの言葉に、アリアンヌは絶叫した。アリアンヌは同じ目線で倒れ伏すレイモン

ドへと手を伸ばす。それも届くことはなく、ただ指先がぬめついた生暖かい液体に触れるだけだった。

「そして、君も同罪だ。しかし妃を殺めることはできない」

こつり、こつりとヨハンは歩を進める。杖の先に火を灯しながら地下牢を練り歩くようにして壁掛けのカンテラに灯火を与えていく。アリアンヌは涙で歪んだ視界の向こうに、見てはいけないものを見た。

「両親は残念だったが、君の罪を考えれば致し方ないことだ。諦めてくれ、アリアンヌよ」

アリアンヌはもはや声も発することが出来なかった。三つの亡骸から目をそらし、涙を流しながら何かを言おうと唇を動かす。

「親族が共に罪を被るのは当然のことだ。これだけでは君の罪は洗われない」

こつり、こつりという音がアリアンヌの耳朶を叩く。アリアンヌは地面に伏せたまま腹部を抱え、ただひとつ残ったものを必死で抱きしめた。

アリアンヌと同じ腹部の膨らみを撫でながら、ノエリアはおかしそうに笑い声を上げる。ヨハンの靴がアリアンヌの腹部付近を強く蹴り上げた。

「ノエリアから聞かされただろう？ 私はもうひとり虚無の子が欲しかったんだ。だから私はマルデイグラの日、虚無の家系であるノエリアと子を成した。そして君もまた、

私たちと同じ虚無の家系だ。けれど、新たに子を成す必要なんてない。

君の家系は、君こそが虚無の子だ。だから君が悪魔になつてくれればいい。ここにいる猿の子は、君を悪魔にするための工程のひとつだ」

翌日、王の生誕祭が行われた。華々しく行われた祭も、赤い絨毯を歩くのはヨハンひとりであつた。しかし、王妃の姿がないのは恒例のことでもある。王の生誕日を祝う裏には常に新たな王族の誕生があつた。

アリアンヌには、人を悪魔に仕立てあげるといふ意味がわからなかつた。どのようなして悪魔が生まれるのかも知らない。ヨハンが虚無の子を求めた意味も、今となつては知ることは叶わない。

それでも、お腹の中で息づく命を感じる。ろくに物も食はず、睡眠も取らず、体中が痣だらけになつてもそうだった。例え産むことができたとしても、健康な体を望めないだろうことはわかつている。目が見えなくても、耳が聴こえなくても、父のように真っ直ぐ前を向いていてほしい。薄暗い地下牢の中、黒く深い傷にまみれ、闇に蝕まれ続けるアリアンヌの心に、ただひとつ残つた人間の感情だつた。

in deep darkness "Shaytan"      END



## 35話 『魔王』

## 35話 『魔王』

衛士隊隊長の名の通り、ワルドは幾度とない命のやり取りで勝利を納めてきた歴戦の戦士だった。遍在のひとりが剣を下に構えながら、地を滑るようにルイズへと向かっていく。

誰ひとりとしてワルドの動きに反応ができない。グリフォンを用いての強襲と同じく、不意を突いた目にも留まらぬ早さの攻撃だった。

しまった、とウエルズは内心で舌打ちをする。

剣を抜く暇もない。瞬きの時間があれば、ワルドはルイズの首を狩るだろう。ウエルズはどうか間に合ってくれと甲板の床を強く蹴って、ルイズの前に体を滑り込ませた。

勢いそのままに、ワルドが横薙ぎに剣を振るう。風のように早い一閃だった。

——止まれ。

声ではない声を聞いた。その場にいる全員が、直接脳内に響いてくるような音を脳で

捉えていた。

ワルドの剣が、ウェールズの腹の手前でぴたりと動きを止める。

誰かが発声したものでないことは、はつきりと分かった。男の声でも、女の声でも、動物の鳴き声でもない。強いていうなら、自己が生み出した思考そのものだった。

ワルドは自分の手元を見下ろして、理解できないという表情をする。

このまま剣を振り切つてしまえば、邪魔なウェールズを退けて、ルイズの喉に切つ先を突きつけられる。だどいうのに、腕は石のようになって言うことを聞かない。

ルイズが周囲を見渡せば、誰もワルドの行動を止めようとはしていなかった。

それどころか、身一つ動かそうとしていない。ワルドに刃を向けられているウェールズですら、そこから逃れようとしていなかった。

闇色のもやだけが、その場にゆらゆらとたゆたっている。

煙のようにも見えるが、空気のような軽さを感じさせない。それには、重さも形もない。宙に浮いているはずなのに、沼のような深さを感じる。色すら失ったような、深い闇色。

「なんだというのだ……これは」

「シャイターン。『虚無の悪魔』、魔王」

修道服姿のアニーが、呻くワルドに向かって歩みを進める。

この場において、ルイズとアニー、アルレットは行動を制限されていなかった。虚無の血によるものか、あるいはシャイターンの意志によるものか。この場の人間にとつては、王党派側だけが自由を手に行っているという事実だけで十分だった。

「悪魔……」

ワルドがアルレットを見やる。意識は取り戻しているものの、とてもあの奇妙な先住魔法を扱える状態ではない。だというのに。

「生まれ」。その声が響いたときから、ルイズとアニー、アルレットを除いた全員がシャイターンの支配下にあった。

「あれは、アルレットの中に居たもの。あの子は器で、わたしは餌」

「なにを言っている——」

『生の力』を扱うことに長けた虚無の担い手が悪魔になれば、同じ『生の力』を宿した人や動物、悪魔すらも思いのまま。だから、賢者はあれを魔王と呼んでいました」

アニーはワルドを見ておらず、ルイズに対して語りかけていた。それに気付いたワルドは心外そうに表情を歪めて怒りを表そうとするものの、依然として体が動かず、ただ黙り込むしかなかった。

人が火を起こすにはある程度の労力が必要であるものの、火の精霊にかかれば、呼吸するかのとき容易さで薪を燃やしてみせる。『生の力』を扱う素質を持つものが、歪ん

だ『生の力』そのものである悪魔と化したのなら。

元来有していた虚無の力は、生きとし生けるものすべてを支配する王の力へと進化する。

「魔王っていうのは、アルレットのことじゃなくて」

「あの子の中に居た『虚無の悪魔』のこと。あの子はメイジですらないし、目も耳も自由でした。体だって、何日生きられるかわからないほど虚弱だったそうです」

「そう、だったんだ……」

アルレットは魔法を使っていたし、目も見えて音も聞こえていた。それは、悪魔の力を借りていたのだろう。

瞳のアメジスト色は……内に潜んだ悪魔の色だった。今のアルレットは、ラピスラズリで染め上げたような深い青色をしている。あれこそが、本来の瞳の色に違いない。

彼女がルイズやアニーの精力を求めのにも、何かしらの理由があった。例えば、虚弱な体に悪魔を封じ込めておくことは、多大な精力を消費するのかもしれない。

「……それで？」

今、この状況でアルレットについて話すには理由があるのだろう。

「あれは今のところ不定形をしています、やがて本来の姿に戻るはずですが、そうならば、影響はハルケギニア全体に及ぶでしょう」

「あの悪魔を、アルレットの中へ戻さなきゃいけないってことね」

「……本当に、それで納得できますか？」

「それは、どういう意味？」

「今なら、魔王を葬ることもできます」

心臓が波打つのを感ずる。はっとして、アルレットへ視線を向ける。

悪魔の力がなければ長くは生きられなかったかもしれない。しかし、悪魔の力さえなければ、アルレットは人並みに幸福な人生を送れたかもしれない。

ルイズが杖を捨てたように、アルレットも悪魔の力を捨てられれば、と思う。目や耳が不自由なものも、水の精霊が豊かなハルケギニアならきつと良い治療方法が見つかる。

……でも。

アルレットは、悪魔とすら心を通わせて、涙を流すことができる。アニーの提案を受け入れて、アルレットが喜ぶとは考えられなかった。

たとえば、悪魔がすでに命を落とした存在であつても、葬ることはできない。

「大丈夫。アルレットを、元に戻す」

「……わかりました」

アルレットの周囲にいる人間は、アルレットを受け入れてくれる。ルイズやシエスタはどんな事実を知っても裏切らない。キュルケやタバサ、イルククウとは友だちになれ

た。敵対したギーシュや女王のアンリエッタとも気持ちを通じ合わせる事が出来た。学院での生活は間違いなく幸せだった。忌むべき力を持つていたとしても、幸せになれないなんてことはない。いつもルイズが見守つて、手を取つていればいい。今まで通り、隣にいればいいだけの話。

『虚無の悪魔』がアルレットから離れたのは、極度の生命力低下と、精力の不足が原因です。いま動けるのは、わたしたちだけですから」

「さつきまでと同じように、水の魔法をかけて、血を与えればいいのね」

「はい。ただ、それで事態が収拾しても、今度はレコン・キスタ軍が待つています。消耗したところを突かれてしまえば、結果は同じです」

「なら……」

「——魔王として、利用するまでです」



日が昇ると同時に、レコン・キスタの陸兵は上層部から指示された配置に付いていた。

陽気な歌などを口ずさみながら、これから戦場に身を投じるとは思えないほど緩みきつた空気で上司の指示を待つ。中には、昨晚飲んだ酒が抜けきれず、居眠りを始める者まで現れる始末だった。

相手はわずか300。この戦も、敵の姿を見ずに終わる可能性のほうが遥かに高いものであることは、厳然たる事実だった。兵士たちの「まさか負傷することはないだろう」という心構えは、樂觀的と責められるものではない。

しかし、その厳然たる事実を、前提ごとひっくり返す出来事が起こった。

それは閃光だった。

空戦が始まったと空を見上げていた手すき陸兵たちは、ひとつのアルビオン艦体からほとぼしる光を前にして、言葉を失った。

その光はレコン・キスタ艦隊を覆い尽くし、光が晴れた頃にはすべての艦体が無力化されていた。前傾して、為す術もなく墜落へと向かっていく。あの閃光によつて操縦者を失ったことは、軍に携わるものであれば誰もが理解した。

常識に収まるものではなかった。それを陸兵の誰かが、虚無の魔法と表現した。

すると、言葉を失っていたものたちが、まさしくそれだと騒ぎ立てはじめた。あの魔法が陸にも及べば、ただでは済まない。寝こけていた者は跳ね起き、樂觀視していたものは顔を青ざめた。

楽観的な意識は、とたんに危機的な意識へと裏返った。そして、とどめを刺したのが、悪魔としか形容しようのない、闇色の巨人だった。

話が違う。誰もがそう思った。傭兵や亜人兵はその姿を認めると、真つ先に逃走を始めた。

わずか300の兵をなぶり殺すだけの戦争が、いつしか得体の知れないものへと変わっていた。

しかし、ある上官の意識は違った。

今朝の宣戦布告を告げる通達。そこには、目を疑うような内容が書かれていた。

上官は背筋の凍るような思いで、突如現れた巨人を見上げていた。半信半疑ですらない、ほとんど虚偽と見切っていた通達の内容が、現実に取り始めている。

『始祖と魔王はアルビオン王室の大義とともに有り。その奇跡を認めたのなら、降伏されたし。』

一つ、閃光の魔法はレコン・キスタ艦隊を滅ぼす。乗員の命を取らぬことは、我々の大義である。

二つ、黒い巨人はレコン・キスタ艦隊を救い出す。乗員の命を取らぬことは、我々の大義である。

三つ、それでも刃を向けるのなら、魔王はアルビオンに夜を齎し、その後、人の世を



常闇に沈めるだろう』

奇怪な通達があつたことは、部下には一切知らされていない。

知っていたとして、何ができようか。戦場に残つたものは、レコン・キスタ艦体を鷲掴みにする巨人を、ただただ見上げて立ち尽くしていた。

やがてアルビオンの太陽が陰り始める。上官は通達の内容を思い返した。

『それでも刃を向けるのなら、魔王はアルビオンに夜を齎し、その後、人の世を常闇に沈めるだろう』。

つまりは、誰かが刃を向けたのだ。あの閃光や巨人を前にしてもなお、戦意を失わずに。

陰りはじめた周囲に、うっすらと黒い霧が生まれていく。

声が、聞こえた気がした。男の声でも、女の声でも、動物の鳴き声でもない。意識の内から生まれ出て、脳髓を支配していく。

——返して。

頭が混乱する。『返さなければ』という考えが、強く意識を叩く。しかし、返すものなど持ち合わせていないし、そもそも誰に返せばいいのかすら分からない。

何らかの力によつて、逆らえない命令を下されている。しかし、その命令を遂げる手段を持ち合わせていない。

脳を左右に引っ張られるような頭痛に襲われて、地に膝を付きそうになる。しかし、ここで折れてしまうことは、命令に逆らうことに繋がってしまう。

返さなければ。返さなければ。返さなければ――

命令には逆らえない。視界の端に映る部下たちも、まったく同じく様子で苦しみ悶えている。

どれだけ思考しても、命令に従う術を見いだせない。意識を失うことも許されず、ただ狂人のように踊るしかなかった。

♪

盲目の暗がりか怖いのか、アルレットはルイズの体にしがみついて治療を受けていた。声をかけたくとも、アルレットには届かない。暗闇と無音の中、アルレットにとって確かなものは、いつも抱いていたルイズのぬくもりだけだった。

昏い色の霧が立ち込めている。

シャイターの力はスクエアメイジや歴戦の將軍ですら、ただの一言で制圧する。

『返して』……その声が戦場に響いてからというもの、イーグル号は阿鼻叫喚だった。苦しみ続ける乗員に対して手を差し伸べることもできない。シエスタやマチルダも例外ではなかった。ルイズは胸が引き裂かれるような思いで彼らに背を向けて、アルレットの治療に専念する。

徐々にアルレットの顔に生氣が戻ってくる。そろそろだろうと、ルイズはアニーの顔を見る。

「まだ……降伏する見込みは高くありません」

「でも」

「そう、ですね……」

現状では戦の趨勢は見通せないものの、この状況が長引けば相手は間違いなく降伏する。しかし、こちらにも被害を受けていることに変わりはない。切り上げるタイミングが肝要だった。

「言うとおりに、この子を返せばいいのよね」

「はい。差し出せば元に収まろうとするはずです。それですべて、終わりです」

「……求めるところは、ただそれだけなのね。悪魔なんて呼ばれてるのに」

「結局は、人が姿を変えたものですから」

どこか諦めにも似たような表情を見せる。向こうの世界の人間であり、賢者の娘を名

乗る彼女は、嫌というほど悪魔を見てきたのだろう。

ルイズはアルレットを抱き上げる。甲板の中央付近でたゆたい続ける闇色のもやへ視線を向ける。

周囲には、シャイターンの発する声によって苦しめられている乗員たちが見える。そして、シャイターン自身もまた、なにかに喘ぐように闇色をたたえて佇んでいる。

一步、歩みをすすめる。

——返して。

聞こえる。邪気のない、ただ一心に願う声。

『虚無』の悪魔。同質の存在だからこそ、ルイズとアニーはその声に対して静かに耳を傾けることができる。

ルイズは抱きかかえていたアルレットを、闇色のもやの下にそつと寝かせ、アニーの傍まで下がった。ルイズの腕から離れたアルレットは、盲目の視界の中、泣きそうな顔でルイズの姿を探している。

もやの揺らめきが穏やかになった。そして、ゆっくりと吸い寄せられるように、アルレットのもとへと降りていく。

それがアルレットの体にまわりつく様は、禍々しい呪いのようにも、子を守ろうとする母親のようにも見えた。

霧が溶けるように消えていく。アルレットを覆い尽くす闇色が、徐々に薄つすらと透け始める。

「アルレット」

「ルイズ……いるの？」

もやの中で、アルレットがルイズの方へ顔を向けたのが分かった。

「ちゃんとそばにいる。もうすぐ、治るから」

「……うん」

ルイズの声が聞こえているらしい。もう、シャイターンはアルレットの中へと戻り始めていた。

「ごめん、なさい」

アルレットはかすれた声で言う。

「どうして謝るの」

「わたしがいなかったら、ルイズに、こんな」

頭に血が上る。ルイズはほとんど反射的に、アルレットの元へと駆け寄っていた。

なにを言つてやれるかわからない。なにをしてやれるかもわからない。

闇色のもやをかき分けて、アルレットの体に手を伸ばす。

ただ、いつものようにアルレットの小さな体を抱き寄せる。

それ以外に思いつかなかった。

けれど行動に移してみれば、それが一番しつくりくるような気がした。心臓と心臓が一番近くにある距離。お互いの心臓が脈打つてることを、ふたりで証明する。

それだけでよかった。きつと、意味なんていらぬ。

気付けば、霧ももやも、どこにも見当たらなかつた。はるか遠くに蒼天が広がっている。

体を離して、アルレットの顔を見る。青色だった瞳は、今はもう、アメジストの色を奥深くにたたえていた。

「ルイズ……」

アルレットは不安げな表情でルイズの顔を見る。何もかも見透かしてしまう、その瞳で。

彼女の中には、ルイズの気持ちを知つてなお、拭うことのできぬ陰が落ちている。ルイズの気持ちがあるアルレットの心まで届くのを、邪魔している。

なら、届くまで、何度だって同じことをする。

「アルレット……!」

もう一度、強く抱きしめた。アルレットが小さく声を漏らす。

「もう二度とこんな目に合わせないから。もしあなたがいなくなつたら、どこまででも

追いかける。ずっと……ずっと、離さない。嫌がったってあなたを幸せにする」

「ルイズ……」

「どれだけ迷惑かけたっていいから、そばに居てほしいよ」

「どうして、そんな」

……好きだからに決まってる。

「……ねえ、わたしのこと、好き？」

言葉にせずとも、アルレットにはルイズの気持ちが見通せる。けれど、アルレットの気持ちは言葉にしないと伝わらない。

それでも、分かりきった答え。ルイズは知っている。それを言葉にして伝えてほしいと、促す。

「ねえ、好き？」

「……大好き」

「うん。じゃあ、これからもずっと、そばにいて」

「うん……ルイズっ」

ルイズの肩口で漏れる、嗚咽。アルレットは堰を切ったように泣き出した。

前のめりになって、寄りかかってくる。体も……心も。溜まっていた何もかもを投げ出すように。



気付けばイーグル号の甲板は騒がしくなっていた。乗員たちは身を乗り出し、覗き込むようにしてフネの下を眺めている。

ルイズたちがニューカッスルを訪れてから、一度も感じたことのないような雰囲気だった。今までの、薄氷の上で成り立っているような、まるで張り詰めた緊張と穏やかさが入り交じった、胸が苦しくなるあの空気とは違う。

乗員たちに、自然とこぼれ出たような笑顔が垣間見える。

ワルドとグリフォンの姿は消えていた。騒ぎに乗じて逃げたらしい。少なくとも、戦意は失ったようだった。

「白旗だ！ 白旗が見えるぞー！」

乗員の誰かが叫んでいる。

レコン・キスタと王党派の戦いは、終わった。じきにレコン・キスタは解体され、アルビオンには平和が訪れる。

弛緩した空気の中で、ルイズはアルレットに笑いかける。

「良かったわね。全部、解決」



「ルイズ、ワルドのことは……」

最後の最後まで、裏切られた。そして明確な殺意を向けられた。一步間違えばルイズもアルレットも、彼に命を奪われていた。

胸が痛まないといえは嘘になる。けれど。

「平気。わたしは、最初つからあなたを選んでいたから。でも……出来るなら、会って話  
がしたい」

「優しいね、ルイズは。だから好き」

「あなたも同じこと言うでしょう？ きつと、似ただけ」

「そうね。わたしも、ルイズのことを支えてくれたひとなら……助けてあげたいって思  
う」

昔、ルイズがワルドから受け取ったぬくもりは本物だった。何度も心を助けられて、  
だからこそ今のルイズがある。

ワルドも、人に与えられるような暖かなぬくもりを持っていたはずだった。

……人は、心を歪めてしまう。

アルレットの居た世界では、その歪みが悪魔という現象を引き起こした。けれど、ハ  
ルケギニアでは、どれほど嘆こうとも人知れず消えていくだけ。

彼らにとって、どちらが救われるかは分からない。けれど、どうしようもない嘆きを

抱えたまま、人知れず命の灯火を燃やし尽くしてしまうことは、寂しいことに違いなかった。

「ワルドは……母親を亡くしてからだと思う」

「母親……」

「なんのために生きるのか、分からなくなった。きっと、そういう人」

その瞳がある限り、アルレットは人の悲しみを覗き続ける。

見て見ぬふりができるほど強くないから、今回のように、危険に身を投じてまで助けしてしまう。

マチルダの件もそうだった。一度は盗賊に身をやつし、ルイズらの命を奪おうとした彼女を、アルレットは救った。

「わたしね、たくさん勉強して、ヴァリエール家を継ぐから」

「ルイズが、公爵？」

「うん。アルレットにはそれを手伝ってほしい。まずは自分のところの、ヴァリエール領から……悲しみのない場所にしていく。いつかは、姫さまの隣に立って、トリスティンを、それからハルケギニアを」

もう、アルレットを危ない目には合わせない。そう約束した。

見て見ぬふりが出来ないなら。力を持つ責任がつきまとうなら。

原因から取り除くことに力を注げばいい。例えば、アルレットが元の世界でしてきたことのように。

レコン・キスタとアルビオンには、虚無と魔王の力が知れ渡っている。追い詰められていた王党派が勝利したのは奇跡以外の何物でもなく、ふたつの力は他国に対しても一定以上の信憑性を発揮するだろう。

ふたつの奇跡を抑止力として他国と平和な外交を築くことを、アンリエッタとウエルズは承諾してくれている。抑止力が「脅し」と取られてしまうかどうかは、女王のアンリエッタと次期国王のウエルズに掛かっている。しばらくは、ふたりを信頼するしかない。

王党派・レコン・キスタ双方に人死を出さずに戦争を納めたことは、ふたつの奇跡が与した『大義』が民衆の味方であることを示した。

やりようはいくらでもある。少なくとも、戦争が起こってから直接止めにかかるよりもずっと簡単で、傷つかない。

「ルイズなら、きつとなれる。わたしも頑張つて勉強する」

「そう？ 抜かされないようにしなくちゃ」

「わたしがルイズを守つてもいいのよ？」

「だーめ」

「……どうして?」

アルレットは頬を染めながら、ルイズに尋ねる。答えは聞かずとも、その瞳に映っているはずだった。

「好きだから」

唇が、そつと触れ合った。